
暗黒大陸-成り上がり系VRMMOトリップ物

なつみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒大陸 - 成り上がり系VRMMOトリップ物

【Nコード】

N9597T

【作者名】

なつみかん

【あらすじ】

新作VRMMO『暗黒大陸』で、チート、BOT、マクロなどの違反行為で他の人を出し抜こうと画策していた男がいた。なんとかマクロの起動に成功したが、暗黒大陸の世界に飛ばれさせてしまう。

正道なにそれおいしいの、世の中狡賢い奴が一番得をするを地で行く物語となっています。

主に主人公的補正を持っている人間の手柄を横取りする形で成長

してはあげます。

感想でよく聞かれる物をまとめてみました。
たまにうつかりでネタばれが入りますが、たぶん重要なことはネタばれしないと思うので読み流してください。

一番下の概要は、ネタばれな現在まで情報まとめ。煩雑で申し訳ない

5話のラストを修正しました。確かにちょっと唐突過ぎました。
暗黒大陸ってなに？

文明が未開だったり謎が多い地域につけられる名称です。
ヨーロッパ人がアフリカ大陸のことを別称暗黒大陸と呼んでいました。
拙作に登場する大陸も未開の大陸ということで、暗黒大陸としました。

人物

凄いざつくりで申し訳ない。ほぼ設定メモそのままです。

スタイル 茶髪普通の流し髪、やや褐色肌 178cm 15歳
オクラ がっちり肉男、熊男。健康的な色黒 196cm 28歳

オリシユ 黒髪肩まで色白、中性的な顔立ち。元センター孤児。 175cm 15歳

ニユウ 緑髪肩甲骨まで艶髪、元役場のドジ奴隷。童顔巨乳148cm 18歳

レイツエン 金髪肩さらさら日に映えるスレンダーで無い胸。元センター孤児。 169cm 15歳

クーシヤ 茶髪肩につかない程度、前髪は軽いウェーブ。委員長的な仕切り屋 157cm 17歳
ナイト 赤髪短髪ツンツン 爽やか天然笑顔筋肉質 185cm
17歳

ユージ 茶髪、肩までの男にしては長髪 優男風な顔立ち 180cm 15歳
マキ 緑の混じった茶髪、肩まで、前髪ぱつっん 並み程度の顔
160cm 15歳

通貨について

銀貨＝1000G

金貨＝10000G

1G＝10～20円程度と考えています。

その内本文でも出ますが、「レベルがある」＝誰でもチャンスがある。

つまり戦わない、若しくは生まれつき体が弱かったり、欠損がある人間は野垂れ死に一直線。身売り 奴隷 下働き、最前線で困など。弱い遺伝子残さないでねって感じで使い潰されます。

非戦闘員 年収5～万G

前線以外の一般的な兵士 年収30～50万G

前線兵士 年収30～100万G

最前線兵士 年収100万G～

冒険者は迷宮は戦闘＝稼ぎと直結しているので、1年戦えば強くなるので大きく変動。よって日稼ぎで……下の方にある「迷宮っていくらくらい稼げるの！」をご覧ください。

戦闘＝稼ぎなので、適正階層に週に半分も潜ればかなりのもの。格下の場合でも普通は週に半分。罨もあるので油断したら格下でも即死です。

スイーパーは1〜10階層という、罨の少なくだっぴろいマップと魔物の沸きの早さを利用して稼ぐ勤労労働者です！

コネや統率力がないとできないので、かなり人気ながら絶対数は少ないです。多くても儲け減るので。ローリスクローリターンをローリスクミドルリターンに代えた上に迷宮内の魔物の成長を停滞させる素晴らしい人たち。

武器の素材について

とりあえず出ている分だけ載せます。

銅<青銅<鉄<鋼鉄<羽鋼

铸铁は硬いが脆く、加工が難しい、武器向き。

錬鉄は加工しやすいが硬度に難あり、防具向き。

鋼鉄は硬くて加工がしやすく、武器防具両方に向いている。

羽鋼は鋼鉄の上位版。硬度は大差無いが比重が非常に優れており、とても軽い。元の素材は羽鉄と呼ばれるがこの状態では脆いため、これを加工したものを羽鋼と呼ぶ。

黒鉄<隕鉄

すごく重い代わりに硬い。加工が非常に難しく、扱える人間は貴重。

値段的には黒鉄<羽鋼<隕鉄

銀<ミスリル銀

硬度自体は低い。普通に打ち合ったら脆い。魔力が低い人は鋼鉄や隕鉄を持った方がいい。

その代り魔力がとても通りやすく、魔力が強い人間が持つと比類なき強さを誇る。魔力を通すと魔的加護が得られ硬度などにも補正がかかる。

属性付きの魔力を通せば万能な使い方ができるが、使い手の熟練度が求められる。属性武器の方が威力自体は高い。

火石雷石水石風石地石闇石光石

属性武器を作る際、鉄やら銀やらに溶かしこむもの。

融け込ませた素材はその属性に染まる。

この石を掘りだすことのできる鉱山も存在するが、闇石と光石が掘りだせる鉱山は見つかっていないため高価。

鉱山から掘りだされる物は質が悪いものが多いので、ほとんどは鉄に溶かされ量産されている。

属性武器

火のナイフなど安価な物は属性石と鉄でできた物が多く、鉄に火石が溶け込んでおり、火属性の鉄になっている。人工的に作ることも可能。

魔法について

雷>水(氷)>火>風>地の五属性+闇光で七属性。

ファイア、フレイム

ウォータ、アクア

ウィンド、ゲイル

ロック、アース

サンダー、ライトニング

闇光は色々

基本的に呪文では主にこうなる。
亜種や特殊な名前の物があるので一概には言えない。それらは基本的なものより高価なことが多い。

主人公補正が現状で曖昧すぎる。補正の定義がイマイチ理解できません。

申し訳ありませんが、もろネタばれなんです……。
簡単に言うと、普通のトラブル体質では片づけられない、確率を捻じ曲げる程のトラブル体質。
これ以上は本編で。

マクロの設定がおかしくないかという疑問

マクロで模倣できるのは、あくまで「動きのみ」。
簡単に言うと、マウスジェスチャーのマクロです。
ゲームで2段突きがダメージ無視で出せたのは、『xダメージを消した』
『厳密に言うとスキルを発動していない。2度連続でついた動きを記録したマクロで同じ動きをした』ということなんです。
ゲーム上でダメージを消して発動で来ていたのは、ぶっちゃけネットゲのシステムの穴をついただけです。

ゲームだから、システムの穴を突かれた。ただそれが現実になつたらどうでしょう？一般人が腕に機械をはめ、強引にプロボクサー級のパンチを打つたら？下手したら骨折れますよね？それによってダメージを受けます。

スキルで出す技は、出したらディレイがあるなどの縛りがあること

からわかるように、ゲームシステムのアシストがあるので一定量が減りません。そこら辺はゲーム世界アシストクオリティ。そもそもVRMMO自体が無いので、マクロがどういった形になるかわかりませんが、私が設定として作ったのは、「入力した動作を行う」というものなので、ゲームのプログラムはいじりません。

迷宮っていくら稼げるの！

高額なドロップ品と財宝を抜きで考えると

30階層で1日命がけで戦って、20000～50000G

50階層で1～2万G

60階層2～3万G

100階層から跳ね上がって10万G越えるくらいの稼ぎです。

10階層以下のスイーパーは腕次第ですが10000～1万G。安全で畏も少ないため必要経費や薬なども安上がりなので、結構人気です。

上の階層に行くほど冒険者は減り、迷宮で発生する財宝や、力を蓄えた魔物のドロップ品、ユニークモンスター（狩れる人のみおしい）が増えるので皆上を目指します。

上に行けばいくほど畏が数、質共に増え、状態異常攻撃を連発する魔物が増えるので必要経費がうなぎ上りに……。

1G10～20円相当なので、結構な稼ぎですね。

命がけなのに少くない？って思われるかもしれませんが、戦乱の大陸なので、戦う人口が多いんです。

50階層まではレベル+10くらいが基本的な適性レベルです。それ以降は畏と魔物の種類がうなぎ上りだし、変則的に迷宮内部が入れ替わって厄介なので100レベルでも嵌れば容赦なく死にます。階層によっては出る魔物に偏りが出る場合があるので、特殊な称号や持っている属性魔法武器によっては背伸びもできますが。

オクラは67レベルで50階層レベルなので、正規の値段の50万Gなら、30日分を見た値段になっています。

描写が薄い、無い。

基本的に描写が無い人はほとんど出ないキャラです。

主人公が興味が無いキャラはほぼ描写無いです。

描写が薄いのは、完全に作者の筆力不足です……申し訳ない。

設定の妄想はしてましたが、小説を形にするのは今回が初めてなので、うまく形にならないんですね。

今回のこの小説をばねに、腕を上げたいと思っていますので是非お付き合いください。

概要 最新話まで読んでない人はネタバレ注意！

・ステイルその他の現実からきたトリツパーは、基本的な容姿の醜は元のまま。西洋風に鼻が高くなったり肌や髪の色は変わっている。

・ステイルはマクロを持っている。マクロでゲーム時代に、完璧な攻撃のモーションを登録しており、他の人間より圧倒的に高効率で熟練度が貯まる。

・マクロでスキルの模倣は動きだけ。波動を飛ばせたりはしない。かまいたちくらいなら体に負担をかければいける。

・スキルの模倣は、スキルによる世界の保護がないためか、連発するとめっちゃ体に負担がかかる。

・トリツパーはゲーム基準で始まる。ニューゲームは孤児院から始まり、10歳か15歳で独り立ちの選択。また行き先も軍かサウスタウンで選択。

・レベルと称号は引継ぎだが開始して二日しか経っていないためそこまで差はない。

・ステイルはある日、11歳くらいの頃急に”物語の主人公”が憎くなる。

・後にわかるが、50レベルになった現代人は皆”主人公”に気づき、強烈に意識する。愛憎のどちらかにめっちゃ偏る。

・50レベルで起こる覚醒称号（タイプ別の世界からの恩恵、職業の選択みたいな）で、トリッパーはかなりの確率で特殊覚醒称号という特殊な職業につける。基本的には今ある覚醒称号の強化版だが、様々タイプがありその種類は定かでない。

・特殊覚醒称号は非常に希少だが、別にトリッパーだけのものではない。が、たぶんトリッパーしか存在していない称号がその内いくつか出てくるかも。ちなみに現時点ではユージの”吟遊詩人”が一番珍しい。

・”主人公補正”がこの世界には存在している。トリップした現代人はその原因はさておき、補正など無い所から来たが、この世界の全物質は補正に影響されるといふ法則があるため、新たにこの世に降り立った彼らもその法則の因子が埋め込まれる。とステイルは考えている。はつきりとした描写はまだしてないけれど。

0話 とある日の潜む狩人

0話

とある日の潜む狩人

じっ……と息を潜める。 隠密、潜伏は得意分野だ。

得意分野といっても、呼吸量を最小限にして『動かないで静止している動作』のマクロを起動するだけなのだが。

足音。

標的がやってきたようだ。 弾んだ4つの声が聞こえる。

今しがたこの迷宮のボスを倒し、迷宮生成の要となっていたコアアイテムを入手したのである。

ホームに戻るまでが迷宮探索です……と言いたいところだが、気持ちわからないでもない。

ランクの高い小迷宮が発生しやすい前線から離れた、『センタータウン』の区域の人目につかない僻地で、沸きたてほやほやの『ラン

ク3の小迷宮』。

激戦区の前線では、できたばかりの小迷宮は奪い合いだ。大して成長していないダンジョンを攻略するだけでその迷宮を形成するコアアイテムを獲得できる。

攻略するだけの能力があっても、突破力に優れた高レベルのチームが出てくれば先を越されてしまうのだ。

こんな僻地では滅多に迷宮など発生しないし、精々出来てランク1〜2。

ギリギリ沸きたてのランク3を制覇できるかできないか、というレベルの彼らにとってこれは得難い幸運だろう。

さらに都合のいいことに、格下のPTパーティーでも運だよりで突破可能な”爆岩男”出現MAPときたものだ。その分リスクは増すが、上手く立ち回れば戦闘はぐっと楽になる。

一定以上ダメージを受けるとその場で固まり、数秒後大ダメージを伴う爆発を起こす怪物モンスター。

遠距離からちまちま削ってやれば周りのモンスターもるとも吹き飛んでくれる。

入り組んだ迷宮内では厄介極まりない、下手に気を抜けば上級冒険者ですら命を奪われることのあるこのモンスターだが……。

沸きたてなだけあって単純で見通しが非常によろしいこの迷宮、冒険者達には追い風にしかならなかったようだ。

「ちよろい働きてばる儲け、俺達にもツキが回ってきたな」

「それもこれも、姐さんが里帰りしたいって言い出してくれたおかげでっすね！」

「だろう？感謝しなよ、これは配当割増してもらえないとね」

「まあそれが妥当でしょうね。いやはや、よもやこんな辺境で魔法書を手取できるとは」

魔法書、確かにそうだった。心のなかで高笑いをする。顔は動かない、動かさないではない、動かない。

この世界では魔法を会得するには、魔法書が必須となる。

書に宿る魔力を、書に記された内容を読みながら体になじませることによって魔法を覚えるのだ。

一度魔力をとりだされ、会得に使われた魔法書は使い捨て。よって魔法書は非常に高価な代物だ。

「おいまぬけのウゴト、ためえ間違ってもその罫に引っかかるなよ。大成功にケチがついちまうからな」

「ちよ、流石に俺でも忘れてませんよ！わざわざ目印までつけてんすよ？」

「でもあんたなら引つかかってもおかしくないわよねえ。この間も行きで避けた罠に、帰り引つかかっていたし」

「爆岩男が多数出現するMAP、おそらくは爆発系の罠でしょう。下手すれば全滅もあり得る……ひっかかるなら巻き込まないで下さいね」

4人組の目の前、足元にワイヤーが張られた見え見えの罠。行きで発見したその罠に、さらに念を入れて目印までつけている。

慎重すぎると笑う事なかれ、冒険者は臆病でいるべきなのだ。

「ひ、ひでえなあ、ちゃんと避けますよ………」と

先頭の軽薄そうな男が口をひくつかせながらワイヤーをまたぎ、次にいかにもリーダーな偉そうな男がまたごととした瞬間。

どこからか飛んできた矢が、正確にワイヤーを断ち切った。

「は？」

そんな声が聞こえたか、聞こえなかったか。

リーダー格の男の足元から爆発が起きた。

凄まじい爆音の後、辺りを爆煙が覆い尽くす。

「い、いつたいなにが……そ、そうだ、皆！無事ですか！」

礼儀正しい口調の優男が、全身を負傷しながらも声を荒げる。

「が……かひゅ……」

しかし返ってきた返事は、声にならない掠れた、辛うじて女とわかるものが一つだけ。

先頭を歩いていた軽薄男とリーダーは即死していた。

「なにが……くっ、確か、なにか、とんでき……」

スココン、と。後頭部に2本の矢が突き刺さり、言葉の続きを発することはなかった。

「ふう……」

矢を放った残心をときつつ、その身に怒濤の勢いで流れ込んでくる魂の力（経験値）を感じ、身をゆだねる。

相手はそこまでの実力者ではないとはいえ、真つ当に冒険者をして
いるPTである。今の自分からしてみれば、圧倒的強者。

LV（魂の力）が段違いに違う、圧倒的格上を屠ったことにより、
通常の狩りでは考えられないほどの充足感（経験値）が得られる。

その時、”ぴーん”と頭の中に音が響いた。

称号『下剋上：格上を倒すと入手することがある。格上相手だと』
全ステ+」「クリティカル+」を得ました。

さらに、”ぽーん”と彼らを屠るのに使った罠のスキルが急成長す
るのが感じられる。

こんなにうまくことが運ぶとは、笑いが隠せない。

この称号はLVが上がれば上がる程取得がシビアになる。この時点
で取れて、幸運だった。
ステータスを開く。

熟練度

ナイフ熟練度（1000）MAX ナイフスキル3：ナイフに補正。
短剣装備で「力+」「敏捷++」「器用さ++」
刀剣熟練度（1000）MAX 刀剣スキル3：刀剣に補正。刀剣
装備で「力+++」「敏捷+」「器用さ+」

長柄熟練度(1000)MAX 長柄スキル3:長柄武器(棍、棒など)に補正。長柄武器装備で「力+++」「器用さ++」
槍熟練度(1000)MAX 槍スキル3:槍武器に補正。槍武器装備で「力++」「器用さ+++」
射手熟練度(1000)MAX 射手スキル3:射撃に補正。射撃武器装備で「器用さ+++」「敏捷+」
鈍器熟練度(1000)MAX 鈍器スキル3:鈍器に補正。鈍器装備で「力++++」
斧熟練度(1000)MAX 斧スキル3:斧に補正。斧装備で「力++++」「器用さ+」
鞭熟練度(1000)MAX 鞭スキル3:鞭に補正。鞭装備で「力+++」「器用さ++」
爪熟練度(1000)MAX 爪スキル3:爪に補正。爪装備で「力++」「敏捷++」「器用さ++」
素手熟練度(1000)MAX 素手スキル3:素手に補正。素手で「力++」「敏捷++」「器用さ++」
盾熟練度(1000)MAX 盾スキル3:盾に補正。盾装備で「器用さ++」「耐久+++」

称号

隠密3:まじスネーク。もはや壁の染み。「隠密行動補正」「敏捷++」「器用さ+」
筋トレマニア3:何年筋トレしたらこうなるのだろうか。「力+++」
歩行距離3:凄い歩行距離。どこまでいくの?歩行速度補正。「耐久+++」「敏捷++」
鍵開け名人3:針金一つでお邪魔します。「解錠補正」「器用さ+++」

武芸多芸3:全武器項目が3以上「全ステ+++」
達人3:短剣、刀剣、長柄、射手、鈍器、素手が熟練度3(全て)

「全ステ+++」

詠唱3：唇がめくれるほど詠唱を繰り返した証。「詠唱速度+++」
暗記3：膨大な数の呪文を暗唱できる。「知力+++」「魔力+」
重装鎧3：重装の鎧が体に馴染む。もはや体の一部。重装装備補正。
軽装鎧3：軽装の鎧が体に馴染む。もはや体の一部。軽装装備補正。

基礎の塊：基礎が異常に整っている。「熟練度、習熟度の成長率が上昇」「全ステ++」

努力の鬼：自分の体をいじめ抜いている。もはやマゾ？「熟練度、習熟度の成長率上昇」「耐久+++」

英才教育：幼少時から厳しい訓練を受けている。「熟練度、技の習熟の成長率が上昇」「全ステ+」

精密機械：同じ動作を繰り返し行う。「器用さ++」

才能を覆す者：適性の低い武器の熟練度、技を一定以上上げた。「最低適性値、熟練度成長率が上昇」

魔法知識人：一定以上魔法の知識がある。「魔法会得の時間短縮」

眠り魔人：どんな辛い状態、場所でも眠りにつける。「睡眠での体力回復増加」

超回復：幾度となく体を壊しながら回復してきた。「耐久++」「体力回復速度上昇」

New！下剋上：格上を倒すと入手することがある。格上相手だと「全ステ+」「クリティカル+」

おっと、ぼつっとしている暇はない。魔物が来る前に戦利品（遺品ともいう）を剥ぎ取らねば。

今の自分ではこのランクの迷宮は沸きたてとはいえきつすぎる。

熟練度や称号は数多く持っているが、レベル自体は低いのだ。

だからわざわざ、付近の村で丁度いいレベル帯、高すぎず低すぎないレベルのパーティを探して、さりげなくこの迷宮の情報を流したのだから。

自分でこの迷宮を、確実に攻略できる確信があれば、こんな遠回りをする必要もなく、賞金首になる可能性のあるリスクを冒す必要もなかったのだが……。

ボーナスでこのパーティから戦利品を得られたのだから文句は言うまい。

それに、仕方がないだろう。

なにしろ、俺は『この世界』に誕生してまだ、5年ぼっちしかたっていないのだから。

戦利品

・魔法書：地図念写（その地域、階層の地図を念写することができ、その広さや階層によって消費MPが上がる。隠し通路や罠など

は表記されない)

・縮小の柄頭(弱) x 4 (武器に装着することにより、その武器の大きさを半分程度に縮めることができる。ねじることでもON・OFFが切り替えられる、中級以上の冒険者の必需品。)

・怪力のリング 「力+」
・回復のリング 「時間回復微上昇」「軽傷回復 x 5」 (軽傷回復の魔法が5回分もっている。ノーリスクで使用可能)
・敏捷のアンクレット「敏捷+」

- ・良質な鉄の両手剣(中破)
- ・鉄のプレートメイル(大破)
- ・良質な鋼鉄の短槍
- ・鉄のバックラー(小破) x 2
- ・練鉄のリングメイル(小破)
- ・鋼鉄のナイフ x 2
- ・硬皮の軽鎧 x 2 (大破)
- ・鋼鉄のメイス
- ・ポーション(小) x 4
- ・出血毒薬 x 2
- ・麻痺毒消し薬 x 2
- ・火炎瓶 x 5
- ・出血毒消し x 1
- ・火傷治し x 4
- ・聖水 x 2
- ・回復薬弱 x 4
- ・回復薬中 x 1
- ・その他食料水

98000G

1話 始まりの10歳

1話

始まりの10歳

目が覚めると、そこは古びた木の臭いのする一室。見上げると
年季を感じる木の天井。粗末な布にくるまれ、寒さにブルリと震え
た。

上半身を起こしあたりを見回す。

自分の周りに同じように粗末な布にくるまれた少年少女たちがごろ
ごろと転がっている。

「おや、もう目が覚めたのかい」

こちらもまた古びた扉が開き、比較的身綺麗な老婆が言う。

「ああ、うん………?」

「目が覚めたなら院長室へおいで。あんたも今日、この年から10
歳だからね」

「は、はい」

思わず返事をしてしまった。

その反応に満足したのか、うなずいた老婆はその場を後にした。

しばし呆然としてしていると、水がしみ出るようにじわじわと情報が頭の中に染み出してくる。

”この世界での”自分の名前、所属、現在の状況、年齢。

今日が新年の始まりのめでたい日であり、自分が生まれて10年目であること。

そして今日が自分にとって大きな転換である日ということだ。

扉をノックする。記憶が正しければここが院長室だ。

「お入り」

「失礼します」

老婆は軽く目を見開いた。

「驚いた……そうだね、あんたも今日で10歳だ。自覚が出てきたということだろうね。いいことだ」

なにか感心しているようだ。確かに、10歳にしてはしっかりとした受け答えだっただろう。

自分の記憶の中の自分　　言っていて変な気分になってくるが
はどちらかといえばやんちゃ、悪く言えばあまり礼儀を知らなかつ
たようだ。

「それで、決めたいか？これからどうするか」

そう、今日この日、決断せねばならない。

この中央都市『センタータウン（中央）』の孤児院から出て4大都
市『ノースタウン（北）』『イーストタウン（東）』『サウスタウ
ン（南）』『ウエストタウン（西）』の内、侵略戦の最前線である
『サウスタウン』へ移住するか、15歳までこの孤児院に残るか
決めねばならないのだ。

とはいっても、サウスタウンがいくら最前線とはいっても、10歳
の子供に戦いを強いるつもりは勿論ない。

しかし同じ小間使いでも、安全なセンタータウンと最前線であるサ
ウスタウンでは需要が違うのだ。

サウスタウンではいつでも人出が欲しいのである。

10歳でサウスタウン行きを決めた場合、孤児が国に払う義務があ
る50000Gの借金が免除され、国から補助金として10000
Gが下りる。

この50000Gは今までの養育費、という扱いだ。

15歳までセンターにいる期間を延ばすなら、5万Gの借金を負う

ことになる。

その金は、15歳になり『サウスタウン』へ行ってから返還すればよいことになっている。

また、有料で孤児院を拠点にすることはできるが、衣食住の金は自分で稼がねばならない。勿論自分で宿をとってもよい。

そしてそのどちらを選ぼうが、国に育てられた孤児には15歳から戦役が課せられる。

軍隊での3年の徴兵、もしくは巨大迷宮『ビッグ1』での一定以上の功績を求められるのだ。

迷宮行きを選び三年以内に一定以上の功績を上げられなかったものは、勿論三年の徴兵を受ける。

その場合の徴兵は、当然最初の徴兵よりも死ぬ危険性の高い地域でのものだ。

「俺は……残ります。15歳までここに居させてください」

「ほう、意外だね。あんたのことだ、すぐに飛び出していくかと思っただが。まあいいだろう、慎重にことを運ぶのもありだろうね」

良かった。ここまでの展開はクエストのままだ。

おそらくここで、『サウスタウンへ行く』と答えていれば、補助金

を受け取って選んだ都市まで馬車で揺られることになったはずだ。

そもそもこの展開は、『暗黒大陸』ではチュートリアルクエストなのである。

10歳でサウスタウンへ行く場合、チュートリアルという名の訓練をうけることが出来なくなるのだ。すなわちLv1からのスタートである。

その代り、サブクエストを行えば無償で『称号『独り立ち』』：あなたは独り立ちした。「全ステータス+」』を得ることができる。

称号を得た後は自動で15歳までスキップしてしまうのだが。

15歳になるまで『センタータウン』に残る方を選んだ場合、チュートリアル訓練を受けることで自動的にLv5が5まで上がる。

こちらもチュートリアルが終わり次第15歳までスキップする。

こちらを選んだ場合も、15歳になって返還義務のある5万Gを国に納めれば『独り立ち』を得られる。

初回プレイの場合はチュートリアルを受けた方がよいが、2キャラ目を作成する場合など操作に慣れている場合、10歳で独り立ちをした方がお金も得られるしチュートリアルも飛ばせて手っ取り早いのだ。

「それじゃあ、街へ行って仕事を探しておいで。見つからなかった

らここで雇ってもいいが、仕事があつた割に最低限しか賃金は出ないからね。大抵の仕事は孤児にやらせるんだから」

「わかりました。失礼します」

しかし、これが現実だったとしよう。ありえないかもしれない。夢を見ているのかもしれない。

だがもしこれが現実ならば、自動で15歳までスキップするなどあり得ないのだ。

こんなわけのわからない状況でいきなり動くわけにはいかない。とにかく状況の整理が必要だ。

水面を覗き込み自分の姿をじっと見つめる。

茶色い髪と茶色い目と白い肌、以外は自分の顔だ。

髪、目、肌の色素はこの世界の標準の範囲に改変されたのだろうか。

恐慌しそうな心情をなんとか押さえつけ、そんな他愛もないことを考えていた。

1話 始まりの10歳(後書き)

ぐだぐだ、SEKKYOU、なでぽにこほ好きじゃないんですが、その要素を排除すると会話って大変ですね。

2話 全ての始まり

2話

全ての始まり

俺は必死だった。丸2日PCの前に張り付き、VRダイブのヘルメットをかぶりありとあらゆるチートやマクロ、BOTを試していたのだ。

「くそつ、固すぎるぞこのセキュリティ！」

つい2日前に始動したVRMMO『暗黒大陸』で、スタートダッシュでチートやマクロやBOTでゲーム内通貨を荒稼ぎし、それを^{リアル}MTで現金に変え懐を潤そうと画策していたのだ。

チートとは、あり得ない筈の攻撃力やステータスを得たり、アイテムを無限増殖したり、何倍もの経験値を得たり……つまりゲームのシステムを書き換えることだ。

マクロとは、キャラを自動で単純な動きを繰り返させるものだ。ひたすら熟練度を上げたり、生産職で単純作業を延々と繰り返させることが可能だ。

BOTとは、ロボットが操縦しているような複雑な作業を行うもの

で、自動で狩りをさせ、24時間操作も無しにLv上げや資金・アイテムの収集をさせることができるプログラムだ。

こういうのは初めにやりだした奴が一番儲かるのだ。一度チートが対策されればそのチートや似たようなチートは通じなくなる。

もうサービス開始から2日、まだこのセキュリティを突破したという話は聞かないが、いつ誰が突破するかわからない。

こまめにWikiにも目を通し、一通りチュートリアルを済ませある程度ゲームの実地データをとってからはずっとプログラムを組み直している。

「おっ、これは……いけるか？いけた！やった！やったぞ！」

生憎とチートとBOTは起動できなかったが、マクロは起動できた。

これでとりあえずひたすら熟練度稼ぎをすることができる。

そしてその間にチートとBOTのプログラムを組みばいい。

もしセキュリティを突破できなくても、その間にマクロで稼ぐのだから無駄にはならない。

確実に動作テストを行うため、VRダイブヘルメットをかぶりゲームを起動。

前回チュートリアルクエストを終え、ログアウトした都市「センタ

「タウン」の練習場で目を覚ます。

さっそくマクロを起動させ、初期装備で選択した剣を装備し動作を記録させる。

上段斬り、中段突き、薙ぎ払い、記録終了。

記録させたファイルを起動、上段斬り、中段突き、薙ぎ払い。先ほどと寸分の狂いもなく行動する。

よし！と飛び上がりたい気持ちを抑え、テストを続行する。

チュートリアルで習得した剣の初期スキル、「連続突き」。

HPを消費させスキルを発動。スキルLv1なので2回攻撃だ。これもまたマクロに記録する。

そしてそのマクロのデータを開くと、今行った「二段突き」の動作ログが書き込まれている。

『HPを消費してスキルを発動』 『素早い動作で1回目の突き』

『2回目の突き』

このログの内、『HPを消費させ発動したスキル発動』の部分を削除し、『スキルを発動して行った動作部分だけ』起動。

HPを消費させることなく2段突きが発動した。

(これで、属性攻撃や麻痺などの特殊な効果を伴わない、肉体的な動作のスキルはHPMPの消費無しに発動させることができる。

ふふ、まさか成功するとは思わなかった)

さらに、マクロでスキルを模倣した『偽二段突き』は、スキル特有のデレイ(遅れ)という、1度発動したら 秒間発動できないという制限もない。

『偽二段突き』 システムアシストを利用した「二段突き」 『偽二段突き』

という実質「四段突き」を放つことも可能だ。にやけが止まらなかった。

ぴこーん

「剣の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で 刀剣スキル1 を習得します」

ぴこーん

「槍の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で 長柄スキル1 を習得します」

ぴこーん

「長柄の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で 長柄スキル1 を習得します」

ぴこーん

「ナイフの熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98でナイフスキル1 を習得します」

ぴこーん

「鈍器の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で鈍器スキル1 を習得します」

ぴこーん

「斧の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で斧スキル1 を習得します」

ぴこーん

「鞭の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で鞭スキル1 を習得します」

ぴこーん

「爪の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で爪スキル1 を習得します」

ぴこーん

「素手の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で素手スキル1 を習得します」

システムボイスが脳裏に流れる。

wikiで調べた、『熟練度が最も上がりやすい』素振りパターンを、100Gで貸し出される練習用の武器で行い、それをマクロで記録。

無現ループ起動をして自動で動作するかチェックをした。

勿論武道の経験なぞない自分は、ゲームのシステムアシストに身を任せ理想的な動作で素振りをしている。

システムアシストが無ければさぞ不格好な素振りしかできないだろう。

びーん

「射手の熟練度が上がりました。現在熟練度2。あと98で 射手スキル1 を習得します」

弓や投石の練習場で弓と矢を20本を100Gでレンタル。

剣は初期に貰ったものを装備したためレンタルしておらず、これで最初に孤児院で貰った1000Gは残り1000Gだ。

矢を放ち、命中したときの動作を記録。

それを20回繰り返し、矢を回収。所定の位置に戻る。

ここまでするまでをマクロに起動すればあとは自動でスキル上げだ。達成感に胸がいっぱいになる。

”ぼーん”

スキル『武芸一通り素人：素人ながら一通り素振り程度は行える』
全ステ微+』』を得ました

ふらり、とする。睡魔が限界のようだ。

一通りマクロの登録は済ませた。今日はこのまま寝てしまおう。

剣を振り回せる練習場に戻り、剣を装備。剣の熟練度上げ用のマクロを起動し、ヘルメットも外すのももどかしく、勝手に動くキャラに身を任せたまま眠りに就いた。

3話 新たな世界での目覚め

3話

新たな世界での目覚め

(……俺はマクロを起動したまま寝たはずだ。どうして初めからスタートしているだ？

というか、なんだこの違和感は。肌寒いし、手はひりひりするし、足はこすれて痛い)

もうほとんど気付いていた。だが気付きたくなかった。

(……ゲームに、トリップ……ってか？ そんな馬鹿な)

実は何度もシステムウィンドウを開こうとしているのだ。

右手を四角に動かす動作を繰り返すが、やはりウィンドウは出ない。

ばかな。ばかな。

ありえない、ありえないだろ。

ログアウト所かアイテムウィンドウすら開けない。ゲーム会社側のミスでログアウトできないってことだろ？

誰かそう言ってくれ！

自分の手を撫で、壁に触れる。

余りにリアルな質感、こんなもの、現状の技術では表現できない。

目の前が、真つ暗になった。

いつまでも錯乱してられない。

（兎に角、現状を調べなければ、自分の持ち物と、”ステータスは
どうなっている”）

そう考えた瞬間、脳裏に自分のステータス画面が浮かんだ。

スタイル

LV:2

武器熟練度

刀剣スキル0	熟練度75	刀剣スキル1まであと25
長柄スキル0	熟練度2	長柄スキル1まであと98
短剣スキル0	熟練度2	短剣スキル1まであと98
鈍器スキル0	熟練度2	鈍器スキル1まであと98
斧スキル0	熟練度2	斧スキル1まであと98
鞭スキル0	熟練度2	鞭スキル1まであと98
爪スキル0	熟練度2	爪スキル1まであと98

射手スキル0 熟練度2 射手スキル1まであと98
素手スキル0 熟練度2 素手スキル1まであと98

称号

武芸一通り素人：素人ながら一通り素振り程度は行える「全ステ微
+」

（とりあえず、レベルと称号と熟練度は持ち越しか……しかし意味
が無い！

俺称号獲得もレベル上げも熟練度上げもほとんどしてない！

こんなことなら普通にプレイしておくべきだった……ん、そういえ
ば）

はたと気付いた。マクロはどうなっているのだろうと。

マクロ出る、開けプログラムと念じていると、開いてしまったのだ。
マクロ画面。

（まじか……システムウィンドウは開かないのにマクロは開くのか）
兎に角、ないよりいいだろうと頭を切り替え、雑魚寝していた部屋
で自分の荷物の入った と記憶にある ずた袋を取りに行く。

穴の空いた壁に、不用意に手を通つ込むと針が突き出るような罫を
仕掛けた奥にずた袋が入っていた。

盗難対策だ。

ここは孤児院であり、無防備に放置すれば1分後にはその場から消えていると記憶が言っている。

(中身は……84G。

記憶の中のステイル君(自分)がこつこつと貯めたものだという記憶がある。

アイテムまで引き継がれることはなかったようだ。

しかしレベルと熟練度とスキルは引き継がれている。真面目にプレイしていたらどれだけ楽だったろうか。

……確か2日目の時点で最高Lvは20程度だった筈だ。もしも他にトリップしている奴がいたら、大きく引き離されているな。つとと、まだゲーム脳が残っているようだ。

今この状況で、引き離されようがされまいがどうでもいいことだ(今できることをしよう、と行動を開始する。

とりあえず、貰えるものを貰っておこう。

院長室の扉をノックする。

「お入りなさい」

「失礼します。準備ができたので一度街に出ますが、孤児院の雑魚寝部屋で寝泊まりをしたいのですが」

「ええ、構いません。家賃は月5000G、食事は1回につき50Gです。……卒院祝いです。先立つものが必要でしょう。」

「1000G 餞別にあげましょう。それから、この中からどれか1つ選びなさい」

ずらつと揃えられる武器、初心者用の各種武器だ。

ゲームでは剣を貰い、熟練度も一番高いが、正直まともに戦闘が行える気がしない。とりあえず、剣なんかで戦うよりもリーチの長い槍を貰うべきだろうと思い、槍を手を取った。

「槍ですね、意外でした。あなたは剣が好きだったように思えたのですが。」

「この証明書をもって訓練施設へ行きなさい。一通り武器の基礎を学べるでしょう」

「はい、ありがとうございます」

「……本当に、成長したのね。見違えたわ」

そんな言葉を背に受け部屋を出る。NPCはAIで動いているわけではないようだ、と思いながら。

ひとまず、自分の記憶とスタイルの記憶を整理するために、街の広場へ行った。

通貨のこと、センタータウンのこと、仕事のこと、武器のこと、世界のこと。

そして自分のこと。

これからどうなるのか、これからどうするのか。

悶々と思い悩んでいると、同じ孤児院出身らしき少女が、肉屋の店先で必死に頭を下げている。

「仕方ねえな。」

とりあえず、一週間使ってみて、使えそうなら使うことにするぞ」

「……！ はい！ありがとうございます！ 頑張ります！」

成程、記憶では俺と同じ年。

彼女も15まで残ることにしたのであろう。

そして残る場合、ああやって働かねばならないということか。

街を何となしに歩く。

手をにぎにぎと握りしめ、無意味に体をなでる。

ああ、間違いなくこの体は自分の物だ。

ログアウトなんて当てになるものか。

俺はこれからどうなる、どうすればいいんだ、一生このまま……？

また頭が恐慌に捕われようとしたそんな時だ。

「おい、ふざけるな！ 運営っ、でてこいやあー！」

がしゃん、と武器屋の店先の看板を蹴飛ばす、今の自分と同じくらいの背格好の少年。

「おい、お前何してやがるっ」

「うるせえっ、NPCは黙ってる！ ぶっ殺すぞー！」

「ちっ、この餓鬼……どこの孤児院のやつだ！ クソガキがっ」

武器屋の店員に思いつきり殴り飛ばされる少年。

「い、いてえ！ 行ってええよ！ なんだよこれ……なんだよ……」。

てつめえふざげんなよ！ 運営！なんだよおおおこれえええあ
ああっあああ……うあああ

地に伏せた少年は、そのままぼろぼろ泣き始めた。

「ちっ、なにいつてやがるんだこいつあ？

さっきも同じようなガキがぎゃあぎゃあ騒いでやがったし……気
でも狂ってんのか？」

こんな境遇に立っているのは俺だけではないのかもしれない。

同じ境遇で取りみだしている人間を見ると、なんだか妙に落ちついてきた。

しばらく街を歩いてみると、同じような境遇なのだろう少年少女
女達が一固まりになって話し合っているところがちらほら見られた。
周りをNPCとでも割り切っているのだろう。

俺はチートなどの制作に忙しく、攻略wikiなどは目を通して
いたが、まともにプレイなんかしていなかった。

そこが彼らと違う視点も持っている原因なのかもしれない。

（人の目をまったく気にしてないな、あれに近づいたらこれからこの
街に溶け込むのが大変そうだ……）

と、ひとまず遠巻きに、関わり合いにならないことにした。

とりあえず中世レベルの世界なら、あちらの世界で身につけた計算能力や書類の整理の慣れで食っていけるかもしれない。

この世界の通貨や文字をスタイルの記憶から掘り起こしながら、大きい店から順番に雇用先を探そうと歩きだした。

4話 下積み時代

4話

下積み時代

棍棒を大きく振りかぶり走ってくる醜い小人……ゴブリンだ。

ハナから射程内に入る気はない。ちくちくと槍で足を突く。

足を止め、棍棒を槍に向け叩きつけた所で素早く槍を引き、マクロを起動。『偽二段突き』を発動する。

(くっ……)

2度突き終わった後、両手に鈍い痛みが走る。通常発動する「二段突き」より数割増しでHPが減っているだろう。

そのまま勢いに任せて、スキル「二段突き」を発動。

また痛みとともにHPが減るが、しかし先程の痛みほどではない。

しめて「四段突き」だ。

ゴブリンは体中を貫かれて崩れ落ちた。

（ゲームではノーリスクで出せたマクロによる『偽二段突き』、現実ではむしろ割増しでHPが減ってしまう……。

まあ考えてみれば当然か。

スキルは普通は不可能な動きで動くからHPが減るって設定だし、システムアシストを通さずに強引に出せば体に負担がかかるんだろう。むしろできるだけで儲けもんだな。

ある意味俺だけにしかできないレアスキルみたいなものだし）

ゴブリンの死骸の心臓部位をえぐると『魔石』が転がり落ちてくる。

魔石は人間の生活には欠かせないエネルギー物質であり、『魔道兵器』の燃料でもある。

加工は個人には困難なので基本的に国有のギルドに売ってしまうことになる。

「おう、ご苦労さん。ほれ、お給金だ。やるなあ坊主」

「ありがとうございます。また狩りがあるときは是非声をかけて下さい」

「おーおー、怪我すんなよ」

（もう慣れたものだな。慣れないと、生きていけないわけだけど）

魔物の命に手をかけるのに、馴染んでしまった。

勿論人の命は奪ったことはない。こちらの世界でも普通に犯罪だ。

賞金首になってしまふ。

命の重さは、あちらと比べるまでもなく軽いものではあるのだけども。

魔物相手と言っても、最初は怖かった。

殴る蹴るなどの暴力程度なら、経験がないことはない。

ただそれは、住んでいたのはあまり治安の良い場所ではなく、通っていたのはぼっちゃんおじょうちゃんの学校でもなかった。

ただそれだけのことだった。

しかしここは違う。

相手は最初からこちらの命を狙ってくる。

肉を食らおうと、臓器を抉りだそうとしてくるのだ。

迫力が、覚悟が、気迫が、何もかも違つて当然だ。

始めは、同じように孤児出身の子供たちと並んで槍を構え、涙目になりながら動揺する心を抑えつけ、ただ前に槍を突き出し無我夢中で突きだしていた。

漫画やアニメの主人公とは違い、独りで華麗に剣を振るつて敵を倒すなど出来ようはずもない。

必死に槍を前に突き出し、無我夢中にスキルを発動して気付いた。

スキルなら、システムアシストに任せて勢いで攻撃できる。

マクロでも同じだ。何も考える必要なんてない。

気付いたら叫んでいた。

「おい！スキルだ！2段突き使える奴、囲んで一斉に使い！

使えないやつはとにかく突け！おい込め！かこめええええ！」

恐慌状態の人間には、ただ指示に従うというのが楽だったのだろう。

槍を突き出したままろくに動けなかったやつらも一斉に雄叫びを上げ始めた。

突き、追い込み、2段突き、突き、突き、スキル発動のデイレイ（スキル発動制限）が終わったらずくに2段突き、突き。

終わってみるとそこには、ぼろクズになった魔物の死骸と、息を切らした子供に、少し離れた位置から満足そうに頷くまとめ役の戦士がいた。

そして次の討伐隊から、少年兵のまとめ役として、小隊長役を押し付けられた。

もしかしたら、自分と同じようにあちらの世界からこちらの世界に来た者も、槍を振るった子供の中にいたのかもしれない。

そんなことは知ったことではなかったし、余裕なんて自分にもあちらにもなかったであろうが。

孤児院を卒院してから早二ヶ月。俺は日々の生計を立てるのに大忙しだった。

いや、食べて行くだけなら、なんとかなるのだ。

しかしどういわけか快適な現代からこんな中世崩れなファンタジー世界に飛ばされて、現代人が満足できる水準の生活をしようとす

れば……。

そして、自分は15になれば軍属となって魔物との戦闘に明け暮れるか、迷宮で名を上げねばならない立場なのだ。

俺は兵士になるつもりなど微塵も無い。

生きるか死ぬかの戦闘を、他人に完全に委ねてしまう状況になるのはごめんだった。

同じ命を賭けるなら、自分でベッドする時と状況を選びたい。

そのために、今のうちから金を貯めて装備を揃えなければならないのだ。

……正直いくら稼いでも足りないのが現状だった。

初めは、もしかしたらログアウトできるかもしれない。

目が覚めたら自宅の自分の部屋にいるかもしれない。

そう考えていたが、待てど暮らせどそんなことは起こらず。すでに諦めている。

そんなことよりも今は、いかにして生きていく糧を稼ぐか。

いずれ戦いの場に行かねばならないのだ。

どうせならその過程である程度の強さを身につけよう。それが当面の目標だった。

『暗黒大陸』は、迷宮攻略と戦争の2大看板を掲げていたゲームだ。この『暗黒大陸』というゲームの中の世界は、生きるということとは戦闘行為と切っても切り離せない関係にある。

大陸の大半が危険な魔物に支配されているのだ。

実はこの暗黒大陸以外に人間の住むもつと平和な大陸が存在するであつたりとか。

この大陸の人間の祖先は元々犯罪者を寄せ集めて、新地開拓という名の下で島流し（大陸流し？）という死刑と同等の扱いであるとか。

そういう隠し設定的なものも存在するのだが……この際どうでもよかった。

祖先の祖先……何百年、下手したら千年単位で昔のことであるから、今からどうこうした所で安全な大陸にいけるでもなし。

そもそも海にも危険な魔物が徘徊しており、この大陸近郊ならまだしも遠洋に船で出るなど自殺行為以外の何物でもないからだ。

人間域には5つの地域、4大都市と中央都市の5つの都市がある。国は1つしかない。国同士が争っている暇も余裕もないからだ。そんな余裕のない中争い合う人間もいるわけだが……それは置いてお

こう。

有体な話。この世界には複数の特色を持った都市があり、迷宮があり、戦争があり、ギルドや宗教組織が存在する。

ギルドにはランク付けがあり、クランも作られる。

異世界ゲームのテンプレートだ。

最も安全で、富豪や成功者がこぞって集まる『センタータウン（中央都市）』。

四方を4大都市に囲まれており、散発的に魔物が発生する程度。気候も低いもののノースタウンに比べれば過こしやすい。

4大都市で成功して隠居したものや金持ち、高位聖職者が住民権得た地域だ。

トキリス大教会という宗教家の本拠地もここにある。

孤児院はそのほとんどがセンタータウンにあり、ここで育てた子供を最前線の『サウスタウン』へ送り込む。

ノースマウンテン大陸の北端にある山脈に接した、厳しい気候にある『北地域のノースタウン（北都市）』。

住み辛くはあるものの、4大都市の中では最も安全な地域だ。

大陸の端であるので、内陸から侵入してくる魔物の数が少なく、専らノースマウンテンから降りてくる魔物を相手取ることが大半だからだ。

ノースマウンテンの攻略が悲願だが、到底達成できそうにない。

とても住み辛いし、農作物も育ちにくいし、できれば行きたくない場所である。

海と巨大湖に接している、水の都市『東地域のイーストタウン（東都市）』。

魚介類がよくとれ、渡航技術がもっとも発達している。

湖と川に接していて、これ以上侵略地を増やすのは厳しい現状だ。

山脈と森の地域『西地域のウエストタウン（西都市）』。

潤沢な木材と薬草などがとれる地域だ。

森が地域内にたくさんあるため、散発的な魔物との戦闘が多い。

天然の要塞とも言えるウエストマウンテンを含む山脈地帯と接しているため、これ以上の侵攻は非常に厳しい。

エルフなど会話の通じる亜人種が山脈に生息しているため接する機会が最も多く、貴重なアイテムを得る機会もあるだろう。

そして最前線、激戦区であり、『暗黒大陸』のメインシナリオ
攻略地域『南地域のサウスタウン（南都市）』。

両側にあるウエストタウンとイーストタウンから突出して支配地
域を増やしている。

平地続きであるため、サウスタウンを切り口に西山脈と東の湖地帯
を大きく囲み人間域を一回り広げようと画策している。

また、ランク10の巨大迷宮『ビッグ1』が存在している。現状完
全攻略は誰も成し得ておらず、この迷宮のコアアイテムは神話級で
あるに違いないというのが専らな噂だ。

魔物と戦争をする過程で人間が目をつけたのが「迷宮」だ。

この世界では相手を殺すことで生命力という魂の力の一部を奪うこ
とができる。

これが経験値であり、一定以上たまるとレベルが上がり飛躍的に強
くなることができる。

その経験値が、迷宮の中での戦闘で従来の数倍の効率で貯まるのだ。
というのも、そもそも迷宮とは優れた能力を持った魔物を生みだす
「蟲毒」という、魔物を殺し合わせて能力を上げ、より優れた個体
を生みだすための『現象』なのだ。

迷宮の心臓部分で、コアアイテムというマジックアイテムや魔法書、魔法武器など優れたアイテムの力を増幅し魔物を生みだす。

その魔物を殺し合わせて、一定以上に進化した上位個体を迷宮の一段奥へいれ、そこでまた殺し合わせて……というループ。

迷宮を放置しておく、迷宮はだんだんと複雑化し、階層が深くなり、魔物は強化される。

そして魔物のレベルと数が一定以上たまると放出される。放って置くと害しかない。

だがこのシステムを逆手にとれば、人間の戦力強化が可能になるのだ。

迷宮には2種類ある。「大迷宮」と「小迷宮」だ。

ランク1〜5までが「小迷宮」。腕があれば1パーティー、または優れた個人でも落とすことができる迷宮だ。

ランク6〜7が「大迷宮」。これらは階層も深く、まともな個人や1パーティーでは厳しい。

発見されるとギルド単位で動いたり、下手をすれば軍隊が動く。

ランク8、9、10「巨大迷宮」と呼ばれている。

ランク8と9は過去に少数確認されており、攻略が困難と見なされ

たら「コアアイテム」は諦め、『魔道兵器』で焼き払われる。

ランク10は今のところ「ビッグ1」しか確認されていないため、一番でかいのでビッグ1だ。安直だな。

高ランクの迷宮は多くの魔物がいる場所に出現する傾向があるので、前線以外では低ランク迷宮が稀に出る程度だ。

沸きたての小迷宮は階層が浅く中も単純な作りなため、前線で小迷宮が沸くと皆こぞって向かう。

早ければ早いほどいいからだ。

全ての迷宮の出現地域は予測不可能。

地震が多発するなど前兆がある場合もあるし、まったく前兆が無くいきなり現れることもある。

人間域で見つけたら基本的には即座に潰すのが基本になっている。

サウスタウンにある「ビッグ1」はメインシナリオに大きく関わる迷宮で、現状攻略は不可能と言われている。

侵攻中に発見されたこの「ビッグ1」、放置しておけばどんどん高位の魔物が出現する。

しかし攻略は軍隊や魔石を利用した『魔道兵器』をもってしても不可能だった。

人間はあえてこの手に負えない大迷宮の上に都市を開くことによって、定期的に魔物を減らしレベルを上げて侵攻を進めることにしたのだ。

事実上の封殺である。

また国営で迷宮ギルドを開き、冒険者に便宜を図ることによって魔物の数を減らし、定期的に軍隊で攻め込む手間を減らした。

魔石を買いとり人間全体のレベルも上がり一石で何鳥もお得だ。

また、親を亡くした孤児や国から義援金を受け取っているものは15になるとここで一定の働きをする義務がある。

ここでレベルを上げて、迷宮攻略に勤しんだり、軍隊に入って侵攻なり防衛なりをするのだ。

おかげで「ビッグ1」は冒険者のメツカとも言われていて、ここで名を上げ騎士や將軍になった孤児までいる。

長々となが言いたいかというと、15にはその危険な迷宮に行かねばならないということ。

そのために自分を強化せねばならないのだ。

最初の1カ月、街で店番や配達などの作業を繰り返し金を貯め、防具を購入した。

それからは街で募集されている定期討伐隊で槍を奮っていた。

実入りはなかなか良い。少なくとも街での小間使いに比べたら雲泥の差だ。

センタータウンでは戦闘要員は少ないため、俺のように15歳までセンタータウンに残るのを選択した孤児も仕事の機会が与えられる。街に戻るとすぐに教会に駆け込んだ。

住人なら自由に閲覧することができる、『魔法図鑑』を見て、呪文一つ一つを間違えないようにゆっくり読み上げてその声帯と口の動作を登録する。

この『魔法図鑑』の存在は、先日討伐隊あがりの打ち上げで聞いたのだ。

この世界では呪文をいくら詠唱した所で、『魔法書』を使わなければ魔法を覚えることはできないのだが今は関係ない。

大量の呪文の詠唱をマスターすることと、ひたすら詠唱を繰り返すことで手に入る称号目当ての行動だ。

また、表記こそされないが、呪文にも熟練度に近いものがあるらしい、と前の世界のゲームのwikiで目にしていた。

きつと威力なり発動速度なりが上るのだろつ。生憎と魔法など一つも身につけていないのでわかりようがないのだが。

今の努力は、これから先手に入るかもしれない『魔法書』の熟練度を先行投資で上げることにもつながらる。

無駄は一つもないのだ。

「おや、今日もですか。毎日毎日感心ですね」

にこやかな笑みを浮かべる司祭。

表情こそおだやかだが、そこから除く手にはやけどの跡があり、司祭服越しにでもわかるような筋骨隆々な肉体。

この世界では聖職者さえ戦士なのだ。

「ああ、はい。どんな呪文があるのか知っておくことは無駄にはならない、ですよね？」

10歳がしゃべってもおかしくないように、話す内容には気を使っているのだが……やはり、どうもしっくりこない。

「良いことです。魔法は強力です。しかし、魔法にもそれぞれ弱点があります。」

インターバルや連射性、軌道や射程など、知っておけばどんな状況でも落ちついて対応できるでしょう」

元々この司祭も、モンクとして回復役兼前衛で前線にいた人物なのだ。

今は怪我の後遺症で現役を引退しているが、今でも新人の教育をしており、聖書や前の世界の坊主の言葉なんかよりよっぽど説得力がある。

「あなたはとても利発な子だ。義務戦役を終え、何もすることが見つからなかったら私のところに来なさい。

聖職者としても、のし上がる力があると私は見ている。あなたの目は闘争に魅せられているくらいがあるが、こんな時代だ。

いきすぎなければそれはプラスにしかないでしょう」

「はい、ありがとうございます、司祭さま」

困った時の就職先は助かるが、俺が宗教家だって……余りに柄でなく、ぶるり、と鳥肌が立った。

魔法図鑑に載せられている魔法を全て登録するまで、閉館ギリギリまで教会で過ごす日々は続いた。

魔法の登録も終わり、仕事終わりは全て鍛練にあてていた。

マクロを起動し、まだゲームがゲームだったころ登録していた「最も理想的なフォームの素振り」を自動で行う。

武器の熟練度を上げるには狩り、または素振りをすれば良いのだが、ゲームのようにシステムアシストが無いため自分の力で素振りをする必要があるので。

その際、不格好に素振りをした場合と、気持ちのこもった綺麗な素振りをした場合、熟練度の貯まり方が雲泥の差なのだ。

まあ当然だろう。この世界はゲームかもしれないが、現実でもあるのだ。

このマクロ、速度の倍速もできるのだが、下手に倍速を上げ過ぎると体を痛めてしまう。

というか骨が折れてしまう。

体を壊さない速度で最も効率よく、武器の熟練度上げと体の鍛練を自動で行う。マクロ様様である。

さらに、マクロを起動している間は疲れを感じない。

メリットしかないように感じるが、あまり長く放置しすぎると、解除したとき地獄のような筋肉痛に襲われるので注意が必要だ。

そこに注意さえすれば、非常に優れた鍛練ツールといえる。

さらに並行して、「超高速で呪文を詠唱する」マクロを起動する。勿論これもマクロだ。

そして倍率を上げて再生しているのだ。

半日であごがたがたになってしまいがそこは我慢するしかない。

なぜ練兵場を使わないのか？

超高速で詠唱しながら異常に綺麗なフォームでまったく同じ動きの素振りをする少年、どう考えても奇異の目で見られるだろう。

これでもシャイなのだ。あまり注目されてもいいことはない。

5話 転機（前書き）

やっと戦闘シーン

書き貯めが貯まって来たので予定より早めに投下。

5話 転機

5話

転機

ひたむきに強さを求めていた。

自分は生前こんなにも頑張れる人間だっただろうか、答えは否である。

ゲームの世界においてでさえ、チートやBOTを嬉々として使い人を出し抜くことに喜びを覚えていた。

何かを利用してのし上がれるのなら倫理観など無視することになんの躊躇も覚えなかった。

だが、この世界は前の世界とは明確に違うのだ。

努力はしなければ結果は出ず、前の世界では卑劣な手口でかすめ取っていた、莫大な資産を持つものは皆押し並べて強者ばかりである。

常に争いが生活の傍らにあり、剣を持たずに栄光を掴むものはほとんど皆無と聞いていい。

聖職者でさえ血を浴び肉を潰しながらその命の冥福を祈るのだ。

そしてもう一つ、この世界にはレベルがあった。熟練度があり、称号、スキル、ステータスがあった。

数値化された強さが、数値化された努力値が自分の行いの全てを映してくれるのだ。

ステータスの上げ方は、レベルアップで上げる方法以外に、普通に努力することでも上げることができた。

本を読むなどインテリな行動で知力が上がり、呪文を詠唱することでもほんの少しずつ上げることができる。

その際呪文が発動する必要はない。ただ勤勉な、たゆまぬ努力が知力に反映される。

筋トレをすれば力が上るし、素振りをすれば武器の熟練度を上げながら力、耐久力も上がる。

走れば持久力や敏捷が上がり、パズルをするなり鍵の解錠をすれば器用さが上がる。

勿論人間の枠内での話なので、無限に上がるわけではないが、これらが数値化されることで鍛練が飛躍的に楽しいものになった。

力が上がれば筋力が上がり、見た目によらぬ力が発揮できた。

大量の荷物を運べるし、鈍器の一撃で魔物の頭蓋を陥没させることもできる。

知力が上がれば頭の回転が速くなり、本の内容もすんなり頭に入ってきた。

根本的におつむが良くなるかと言われればそうではないのだが……。

木彫りの人形など器用さが上がればあつという間にできる。

ステータスは生活に密着していた。日々実感することができ力。

俺は強さの魅力に取りつかれていたといってもいいだろう。

毎日素振り（をすするマクロを起動）をしながら呪文の詠唱を行う（マクロを起動する）。

走り込み（理想的なフォームのマクロを起動、方向転換をするときは一時的に停止）をしながら詠唱を（するマクロを起動）行いながら両手で南京錠のピッキング（するマクロを起動する）。

筋トレをしながら詠唱を行う（マクロを起動する）。

寝るときに全身の痛みで眠れないため、熟睡したときの寝がえりなどをマクロで記録し、マクロを起動。

マクロ起動中は痛みなど感じないので快適に眠ることができる。

努力といっても、自動なのだが……。そこには目を瞑って欲し

い。

そんなこんなで、この世界に立って”1年”が経っていた。

熟練度や称号もぼちぼち獲得し、ステータスの底上げは進んでいた……が。

時間が足りなかった。

生きていくにはお金が必要なのだ。

訓練の合間に命の危険が無い範囲で魔物の討伐隊に参加し、金払いが良ければ小間使いの真似ごとだってやった。

しかし、こんな煩わしいことなどせず、手っ取り早く稼いで15になるまでとにかく鍛えたかったのだ。

転機はある日突然転がり込んできた。

装備品

青銅の短槍

錬鉄のナイフ

粗末な木の弓

皮の軽鎧

皮の手袋

皮の足甲

3500G

その日、槍スキルが鍛練で上げることが出来る最大の3に到達した。マクロを利用することにより、理想的なフォームで最高効率での熟練度貯めができたため、たった1年で槍スキルを3まで上げているが、実はこれは尋常な努力では得られないものだ。

鍛練で上げられる最大値であるスキルレベル3とは、前の世界では世界に名の知れる達人の技と同義だ。

この世界ではレベルアップの恩恵があるのでそこまで目立ちはしないが、前線で10年戦い続けた戦士でやっと、1つの武器スキルが3になる程度である。

11歳で、しかも生活費を稼ぎながらものの1年でスキルレベル3になるなど本来ありえないのだ。

ランク3の槍術で適当な魔物を試し切りしようと、ランニングがてら街から少し離れた盆地に行くと、そこには小迷宮が出現していた。

遠目に入口の紋章を見れば、おそらくランク1小迷宮。

余り大した強さの敵はいないであろうが、迷宮は迷宮。

11歳で体が育ち切っておらず、それが故HPが高くない自分には、敵に囲まれることを前提とした迷宮は例えランクが1でも荷が重いものだった。

（ちっ、あと2年……せめてあと1年は経たないと、迷宮に潜れるだけのHPには成長しないか。

……いやどちらにしろ、単独で潜るなど正気の沙汰じゃない。
これはゲームじゃないんだ。死んだら、終わりだ。

惜しいが仕方ない。ランク1程度のアイテムに命を賭けるわけにもいかないしな。ギルドに報告して報奨金を頂こう……ん、あれは）
その時、3人組の冒険者が迷宮に近づくのが見え、そつと身を隠した。

装備を見る限り駆け出しの冒険者であろう。

質の悪い鑄鉄製の剣やメイスと皮の鎧を装備して、その内一人は薬草の入った小筒を背負っていた。

（質の悪い鑄鉄製……って言っても、俺の槍は青銅製だからあれ以下なんだけどな。）

鑄鉄とは、炭素含有量が多い鉄のことである。その質は固い、が脆く折れやすい性質を持っている。

他におおざっぱにいうと錬鉄、鋼鉄があるのだが、錬鉄は柔らかく加工がしやすいので主に防具や装飾品。また建築資材。

鋼鉄は硬く壊れにくい、最も武器に向いている鉄だ。

人間が鉄鉱石から作るものは、当然鋼鉄製に加工する。

しかし絶対数が追いつかないのでなかなか高値だ。

迷宮内で拾うことができる鉄製の武器は鑄鉄のものが多く、依然市場で出回るこれを所持するものは多い。

ちなみに青銅製の武器はもっと多い。鉄製の物に比べれば、重く、鈍く使いづらい。当然安価で手に入る。

(うわ、やめやめ。悲しくなってきた)

ランクの低い薬草採集の依頼でも受けていたら、ランク1迷宮を偶然発見といったところか。

くそ、これではギルドに報告しても報奨金は出ない。

腹立たしい感情を押さえ、彼らが迷宮に入るのを見送った、その時である。ふとした考えが浮かんだ。

(迷宮でコアアイテムを回収したら、低ランクの小迷宮なら1日も経てば迷宮は閉じる。)

ランク1なら半日で閉じてしまうだろう。)

(その際中に取り残されれば、アイテムも、そして死骸も閉じる地面に取り込まれてしまう。)

(死体や死んだ現場から、死んだ際の記憶や映像を見る魔法もあるが、それは死体や現場が無ければ意味がない……これは、一気に金を稼げるチャンス、か？)

逸る心を抑え、静かに冒険者たちの後をつけた。

「おい、ここ完全ほやほやの沸きたてだな！ たぶん沸いて2時間もたつてねえよ」

「 ついてるぜ相棒。 薬草拾いなんて、俺にふさわしくないしけた依頼を持ってきたときあいらついたが、行ってみるもんだな！ おい！」

「 ひひ、なんか知らんけど、ラッキー？ ひひ」

(冒険者というより、チンピラ崩れだなこりゃ……)

一人は薬中か、酔っぱらいか。いかにも言動がおかしい。

いかにランク1とはいえど、あの装備を見る限りレベルも10代、よくて20前半だろう。

駆け出しがギャーギャー騒ぎながら無傷で落とせるほど、迷宮は甘くない。

これなら俺の思惑通り行くかもしれない。

彼らが入口付近の敵をあらかじめ倒して奥へ進んだのを見送ってから、静かに行動を開始した。

出口の扉に仕掛けをして、見えづらい位置に訓練用の南京錠を2つ設置。これでもし逃げようとしても壊すまで多少の時間を稼げる。

動物の罾用のワイヤーに、コガラヘビの牙から絞りとった麻痺毒を塗りつけ、丁度岩の陰になったところから目立たないように仕掛ける。

そこら辺に散らばっていた樽や木材の残骸を、行き止まりの斜面の上に適当に集めて盾兼遮蔽物とする。

矢数本と槍の穂先にも麻痺毒を塗り付けじつと機会を待った。

「けけ、沸きたただけあってぜんぜん成長してない敵ばっか。ちよろかったなあ！おい！」

「そんなこといってさああ、盾ぼろぼろじゃん。利き手もボスのネズミにがつつり噛まれてやんの、ぷぷぷ」

「うるせえ黙ってる！てめえこそ傷こそ大してねえが、弓ぶっ壊されやがって……弓代報酬から天引きすんぞ！」

「ひひ、しらんけど、いてえよ足。俺盾にしゃがって、ひひ」

「ああ、帰ったら追加でクスリやるからよ、黙って盾しとけ」

「やった！兄貴流石！ひひ！」

満身創痍というほどではないが、二人は軽くない手傷を負って、弓も壊れてしまっているようだ。

遠距離攻撃の能力が残っていないとは、僥倖だ。

口が緊張でぱりぱりになって、手が痙攣している。

ぎゅ、ぎゅっと手握りしめ、口をそっと舐め、息をひそめる。

「にしてもよ、いかしてんなこのリング。敏捷+だつてよ。」

「いくらで売れっかなあ、ひひ、クスリなんこぶんだあ？」

「ばかなこといってんじゃねえよ、てかきたねえ手で装備してんじやねえよ、売り値下がるだろ、ポケット」

「ああ？誰の手がきたねえだと？ぶっ殺すぞ手前！」

「てめえのマスかいてイカクセ工手がきたねえっていつてんだよ、やんのかコラ」

「ひひ、いかくせえ、ひひ」

おいおい、なんか知らんが仲間割れしてるぞ。

迷路の中でギヤーギヤーと、死にたいのかこいつら……まあ、好都合極まりないんだが。いいのかこれ。

「てめえもう我慢ならねえ。1発殴らねえと気が済まねえ」

「うぜえ野郎だな、やるなら後にしろ、仮にも迷路だ……でえっ」

うすらバカから距離を取ろうとバックステップしたうすらバカが、ワイヤーでざっくりアキレス腱を切った。

なんか知らんが大チャンスだなこれ。

『スナイプショット』

素早く麻痺毒をたっぷり塗り込んだ矢を放った。

「お、おいどうしたんだよ兄貴」

「ひひ、こけてぎゃっ、いてえ、いてえええ」

キチガイの左肩に命中。

二本三本と連続で放った。

「ぎっ、ひぎい、いてええええ」

「っ、てめええ、だれだこら、しねえええ！」

キチガイの右足の付け根にもう一本刺さり、一本は外れ、リングを装備したまだ元気なうすらバカーが剣を持って走り込んでくる。

ちっ、全員無力化はできなかったか。

遮蔽物の木材と樽を蹴り落とし、うすらバカを怯ませたところにマク口技と槍スキルを連続発動する。

「うわ、て、てめ」

「くらええええええええええ！」

『偽・5段突き』『5段突き』

「あゝ、が、しえ」

(ぐぐぐ……)

毎度おなじみの、スキルによる二重のHP消費で体が軋む。

その甲斐あつて、うすらバカは体中に10の突きが襲いかかりずたぼろになった。

麻痺毒、槍に塗る必要なかったな。これなら即死だろう。

この瞬間、俺は戦場で言う人殺しの童貞を失ったわけだけど。

少し手が震えた。それくらい。

その震えも、マクロとスキルの勢いで押し殺した。

アニメみたいに異常にショックを受けることも、吐くことも、誰かに情けなく泣き言をはきたくなることもなかった。

「てめえ、こんなことしてタダで済むと思ってるのかっ!」

啞然と倒れ落ちる仲間を見ていたうすらバカ2は、使えない左足をひきずりながら立ちあがった。

キチガイは痛みで転がっている。当分復帰することはないだろう。

「そうだね、済まないかもねえ。ばれたら、だけどな」

弓に矢をつがえる。

麻痺毒のついた矢で、右足の皮鎧の隙間を撃つ。これで、近寄られることもないだろう。

「ぐあ、つてめ、卑怯」

「わるいね、念には念を入れるタイプなんだ、俺。ばいばい」

話しながらも手を止めることはない。

無駄に話す悪役がアクシデントに襲われるのが宿命なんて、わかりきってる。

確実に頭に3発矢を撃ちこみ終了。

毒が体に回ったのか、ひくひくとしか動かないキチガイにも頭に矢を撃ち、念のため全員槍でとどめを差していく。

「ふう……ふう、はぁっ」

口が、ふるふると震えている。

手がびくびくと震えている。

足もかくかくと震えている。

人を始めて殺して、落ちついて、実感した感想は、怖い、だった。

人ってこんな簡単に死ぬんだ。

3対1なのに、こんなになにもできないんだ。

もし自分が逆の立場だったら

毒で動けなかったら

手の届かないところから一方的に殺されたら。

ひどく恐ろしかった。

こんなに簡単に、人を殺せる牙を、人間が持っているのが。

もしこの牙が自分に向けられたらと考えたら。

なんで漫画やアニメの主人公たちは、人を殺して落ち込むのだろう。
落ち込めるのだろう。

勢いで、誤って殺した主人公など、特にそうだ。

どうして、誰かの手で、自分の命が、『誤って』『落とされる』
とが、あるかもしれない、ということが、恐ろしいと、思わないの
だろう

硬皮の鎧 x 2

青銅のプレートメイル

硬皮の籠手 x 2

錬鉄の籠手

硬皮の足甲 x 2

錬鉄の足甲

木の弓

木矢 20本

薬草 x 12

回復薬弱 x 1

敏捷のリング「敏捷+」

12000G

6話　そして0話に至る（前書き）

次の次、8話にはサウスタウンの迷宮都市につきます。

やっと女の子成分が出ましたが、残念ながらこのキャラは当分出ません。たぶんヒロインでもありません。感想次第ではどうにかなるかもしれませんけど。

女に振り回される主人公ってあまり好きじゃないんですね。

6話 そして0話に至る

6話

そして0話に至る

（大量大量……小破程度なら修理もできるし、大破した武器や防具も材料として鍛冶屋に持ち込めば売れる。

なによりも、魔法書だ。しかも地図系の魔法書、大迷宮では必需品、さらに侵略戦では斥候としても大活躍。本当に彼らには感謝感謝だな。

サウスタウンに向かう3日前にこんな幸運に恵まれるとは、ついでる）

ランク3の迷宮で、そこそこのレベルの冒険者の身ぐるみを剥いで街に戻った俺は、目立たないようにそそくさと自分の拠点ホームにしていく住居兼倉庫へ向かった。

迷宮内部での戦闘行為は国では罰則はないものの、派手にやり過ぎれば冒険者ギルド、迷宮ギルドで賞金首にされてしまう。

いまだ孤児の自分だ。即刻死刑か、最前線で捨て駒にされるのがオチだろう。

まだビッグ1にも行ってないのに、そんなことはごめん被る。

（サウスタウンに行ったら、速攻で国務館に走って5万G返済しよう。社会的弱者でいるなんてまっぴらごめんだ。）

そう、国に借金を負ったままの孤児は所詮社会的弱者。

争いや争いがあつたら、余程善悪が明確でない限りまず間違いなく罪を被らされてしまう。

戦利品を部屋の片隅に放り投げ、魔法書を開く。

先に破損した武具を鍛冶屋に持っていった方が時間の節約になりはするのだが、高価な魔法書を持ち歩く気にはなれない。

……5年間の訓練漬けという名のマクロ生活と称号の効果で、俺はこのレベルでは驚くほどの非常に優れたステータスを持っている。

この5年間、生活の9割はマクロを起動していたのではないだろうか……もはやマクロは体の機能の一つと言っても過言ではない。

このひたむきな訓練の過程で、鍛練により獲得できる称号のほとんどを獲得してきた。

生憎と格下以外との戦闘は数えるほどしかなかったので、レベルはたったの21でしかない。

せいぜい新人冒険者か一兵卒程度のレベルでしかないが、ステータスはおそらくレベル40程度はあるだろう。

ああ、しかしHPとMPは訓練された人間の物程度しかないのだから、無茶はできない。

この魔法書を会得するのに約2日はかかるだろう。丁度サウスタウンに向かう前日だ、体を休める意味でも丁度良かった。

そしてその日がやって来た。

新年が明けた日。

15歳になった日。

サウスタウンへ向かう日。

「ステイル、いるか」

「はい、ステイルです」

「では証明の入れ墨をかざしたまえ」

この世界は入れ墨で自己を証明する。

一般人は主に腕にするが、冒険者や兵士は腕を失うことも多い。

よって胴体や首につけることが専らとなっている。

首や胴が無くなったら、ほとんど死んじゃうしね。

……まあそれでも死ななかつたり蘇らせたりすることもあるんだけど、まだその次元に至るまでは遠過ぎて関係ないね。

「確認した。兵士と冒険者どちら希望か」

「冒険者で、お願いします」

「本当にそれでいいんだな。お前は優れた能力を持っていると聞いている。」

確かに迷宮で功績を立てて兵役を免れるのも手だが、この書類通りの能力なら、兵士でものし上がれるだろう。

兵役を受ければ順当に成り上がることができる。それは知っているな？」

「はい、構いません。もし軍に所属するとしても、叩き上げで即戦力として入ることを希望しています」

「ほう、まあよいだろう。では迷宮行きの車に乗れ」

「わかりました。それで、少し相談があるのですが……」

「ちやりん、と数枚の銀貨を握らせる。

「荷物を別口で詰め込みたいのです。中袋2つ分、融通して頂けませんか？」

「サウスタウンまで数日かかる。狭い車内だが、手癖の悪い者も勿論いるだろう。」

「盗られたことを騒ぎたてても、もし兵士の気分を損ねればもっと事態は悪化しかねない。」

「ふむ、まあ、私の荷物スペースが空いていないこともないな」

「ありがとうございます。それでこちらなのですが、なかなか良質な鋼鉄でできた長剣でございます。」

「しかし少々荷物が多いので、是非あなたのような立派な戦士の方の、予備の武器にでも加えて頂ければ、と」

「良質な鋼鉄というのは本当だ。」

「俺の集めた武器の中でも、最上品の一つだろう。」

もったいなくはあるが、これは必要物資だ。

もし預けた武器を、これは私の物である。と言われれば、孤児の身分である自分がどうこうできる問題ではなくなってしまう。

同じように、中身を漁られて目ぼしい物を持っていかれても文句は言える立場にないのだ。

ならば先んじて、最も良い装備の1つを与えておけばこれ以上の損害を被る確率はぐっと減るだろう。

「ふむ、ほうほう、なかなか良い剣ではないか。どこで手に入れたなど野暮なことは言うまい。

お前の荷物は一欠けもなく戻ってくることだろう。……お前、なかなか見どころのあるな。

普段はサウスタウンでは北区域の兵役所で中隊長をしているナタイカだ。もしなにか面倒なことがあったら話を聞いてもいいぞ」

よし、金払いのいい奴とでも思われたのだろう。

向こうからコネを作らせて貰えるとはありがたい。

「ありがとうございます。お酒でも交えながら相談させて頂くことがあるかもしれません。

お酒と言えば、良質な蒸留酒をこの間手に入れまして、是非ご賞味頂ければと。

では、よろしく願います」

「うむ、うむ、任せておけ。馬車は揺れるぞ、この毛布を持っていくがよい。

飯だがな、育ち盛りには少々少ないだろう。精のつく物を別口で用意させておこう。配給では私の名前を出すがいい」

兵士の満面の笑みで送りだされる。

予想以上に気に入られたようだ、俺も笑みを隠せない。

横一列に十数台の馬車が並んでおり、孤児が全員集まり次第出発する様だ。

といつてもこの馬車すべてが孤児が乗るものではない。

安全のため、貴重な”人手”を無駄にしないために兵士が護衛に付いており、その兵士を最大限有効に使うために物資の輸送も兼ねているため、おそらく半分ほどは物資を詰め込んだ馬車だろう。

20人ほどが肩を触れ合うほどに押し込められた大型の馬車に乗り込む。

すでに18人は乗りこんであり、俺と後一人乗りこむと満員になる。

今日この日、センタータウンの各街から一斉に孤児達がサウスタウンに送られる。

その数、数百人……正確な数は知らない。

数百人と入っても一斉に到着するわけではなく、1000人規模の集団が次々到着し、あまり時間をかけず即時解散するのだろうか、さっさと動けばそこまで混雑はしないだろう。

ちなみにこの車、ウォーホースという軍用の馬が引いている。

『隷属の首輪』というアイテムをつけた魔物を利用した高速車両や飛行手段もあるようだが、孤児戦士の輸送にそんなものを使うわけもない。

ちなみに、人間版の隷属の首輪も存在する。

犯罪者や口減らしに売られた子供、食べていけなくて身売りをした者が奴隷階級として存在するのだ。

その中には国の保護を洩れた孤児、はたまた誘拐……所謂犯罪行為で奴隷階級に墮とされた者もいる。

と思考をあらぬところに飛ばしていると、こちらを見てひそひそと話している奴らがいた。

確かあいつらは、センタータウンの同じ区内の孤児だったはずだ。

その内何人かは、定期討伐隊でも幾度か顔を合わせたこともある。

奇抜な言動や行動が多く、1人になるのを恐れるようにいつも複数人数で行動している15人ほどのグループだ。

そのくせ周りに仲間がいると態度がでかく横柄になる、典型的な群れだ。

排他的な空気を醸し出してはいるものの、雰囲気は生ぬるい。

下手に近づくと絶対に割を食うと、なるべく距離を取っていたので実態はよくわからないが、遠目に見る限り、この集団は現実世界からトリップした者のグループの1つかもしれないと睨んでいた。

「なあ、お前ステイルってやつだろ。お前も迷宮行きか。同士キタコレ」

「確か、なかなかの強者だった。討伐隊でも小隊長しておったしな。……もしや拙者の獅子爆散琥桜拳にも耐えられるかもしれないな」

「はいはい厨二病乙。なあなあちよつと装備見してくれよ、しつづれーい」

一番軽薄そうな、剃り込みをいれた坊主頭の男が、何の断りも無しでかいコートみたいなものに外套をめぐり上げてくる。

「うわでも、強いつて言う割に装備しよっぽくね？武器は鑄鉄にしても、防具しよぼ皮だぜしよぼ皮。これじゃやばいっしょ、常識的に考えて」

あちらについたら二束三文で売り払うつもりのカモフラージュの装備だ。

念のため、3日前手に入れたばかりの良質な鋼鉄の短槍に縮小の柄頭をつけて隠し持っている。

「なあなあ、そんなことよりさ、ネットゲってわかるか？あと、Wikiとかさ」

……………決定だ。こいつら向こうの世界からのトリッパー、だな。

いやまあ、先程の会話だけでもろわかりだったわけだが。

にしても、稼ぐ手段の少ないセンタータウン出身にしてはそこそこいい装備を揃えているな。まあ、現時点では、という注釈はつくが。

数人は鋼鉄の剣を持っているが、その他は鑄鉄の武器などを所持している。

随分と質に開きがあるな。

おそらく、多少レベルを上げていた奴がでかい顔をして良い装備を独占しているのだろう。

主に稼ぐのは高レベルの奴だろうから文句も言えまい。

「ああ、そんなに装備をそろえる余裕がなくてね。君たちは凄いな、いい武器だ。」

それと、ねとげ？う……なんだって？

聞き覚えがないな。冒険者の専門用語か？」

数組の冒険者から強奪した鋼鉄の各種武具に、一つだけ、火属性のエンチャントされたナイフも持っているが勿論言うはずがない。

これ見よがしに装備を見せびらかしているが、こいつらの場合徒党を組んでいるから、装備をちよるまかされることはほぼないだろう。

ネトゲね。wikiにもたびたびお世話になっていたよ。

だが、正直こいつらに関わってもろくなことになりそうにない。迂闊な行動が多すぎるし、言動がこの世界を舐め切っている。

「なんだMOBかよ……」

「おいつ、いやなんでもない、知らないならいいんだ。すまないね」

いい具合に、俺をNPCと誤解してくれたようだ。
ノンプレイヤーキャラクター

わざわざ嘘をついたのは、正直プレイヤーとして生きる利点が少ないからだ。

確かに先行でレベルを上げた奴もいるだろうが、この世界で見ればたかが2〜3日で上げたレベルもゲーム知識も、大した影響力はない。

第一、軟弱な精神の現代人より、こちらの世界の戦士の方がよっぽど頼りになる。

それにしても居心地が悪い。なにしろ、20人乗りの馬車の内15人がグループを組んでいるのだ。

俺を含め4人は居づらそうにしていた。

その時、馬車の幌がめくれ、最後の一人が乗りこんできた。

絶世の、と言うほどではないが、かなりの存在感を放つ美少女だった。

美しい金髪に、差しこむ日光が綺麗に映えている。

「狭いわね。もうちょっと詰めなさいよ」

ふてぶてしい、傲慢な態度。

腹立たしい気持ちが始まるが、力が乗った強制力のある声に、現代人15人は思わず場所を空けていた。

その光景を見ながら、確信を得ていた。

ああ、やっぱりいた。

主人公補正を持った、選ばれし者。

俺の 憎悪の 羨望の 対象。

7話 補正持ちとの出会い

7話

補正持ちとの出会い

「20人乗ったな。では出発する」

その声とともに、馬車が出発した。

ひそひそ、から、ざわざわへと変わる周りの喧噪。

「めっちゃ美人」「やばい、ヒロインきたこれ」「おい誰か声掛けろよ」

「ふっ、俺のパートナーにふさわしいものがやっと現れたようだな……」「ばか、ありえねーよ」

隠せていないだけなのか、隠す気が無いのか、肩まで伸ばした金髪の美少女のこめかみにしわが寄せ口を開く。

「「そこそこするさいわね。うっとおしいんだけど」

当然好印象なわけがない。

慌てて挽回しようと、15人の中でそこそ顔がいい男を皮きりに、続々と弁解を始めた。

「いや、申し訳ない。美人過ぎて、びっくりしたんだ」

「そうそう！噂せすにはいられないって！こっちきて、話しようぜ」

「これ、干し肉食わない？結構いいやつだぜこれ」

それほど女性慣れしているように見受けられない面子だが……まあネットゲームをしていた種類の人間であるし。

やはり多人数ということに気が大きくなっているのだろうか。

「結構よ。そろそろ群れて粹がっている人種に興味はないの」

一刀両断。

彼女、あの性格じゃ敵作りまくりだったろうに。

「は？なにいつてんだお前」

「まーまー、落ちつけって。旅は道連れっていうし、皆仲良くしても、いいんじゃないかな？」

「そうそう、向こうでパーティ組むことだってできるよ！これでも腕前には自信があるやつらばかりさ、君もどうだい？」

いらだちながらも、これ程の美少女相手だ。

プライドも何もあつたものじゃないのだろう。

そんな態度が気に入られていないということに気付けないものなのだろうか。

「余計なお世話。あなた達みたいな雑魚に背中を任せられるわけがないでしょう」

「なっ」

「こいつ……」

一気に剣呑な空気になる車内。数人は剣に手をかけている。

関係のない残り3人が、こちらを見てくる。

どうやら最初の会話から、ある程度の実力者と思っているのだろう。

はあ、仕方ない。

「そろそろやめとけよ。飯抜き程度ならいいけど、魔物の出る地域の街道でほっぽりだされたら目も当てられないぞ」

はっとしたようにこちらを見る面々。

「ちっ」

「ふんっ」

どうやら収まったようだ。

変に目立ちたくなかったんだが……。案の定、金髪の女が近寄って来た。

「あなたは、大分マシみたいね」

「そりゃどーも」

引力のような魅力だ、今にも、媚びへつらいたくなる欲望を感じる。

同時に反発したくなる、攻撃的な感情も沸き上がってくる。

なんでもいい、なにか彼女に対して積極的にアクションを取りたい
と思ってしまう。

人が寄ってくるのも、争いが起こるのも、この魅力故だろう。

彼女達”主人公補正”を持っている人間、補正持ちが行動するたびに”イベント”が起きないと話が進まないから……なのだろうか。

そして、彼ら彼女らは常に激しく動く周りの状況、事件を経験し心
も体も進化していくのだろう……周りを巻き込み、踏み台にするこ
とで。

(くそっ、くそくそくそくそくそくそ)

がちりがちりと口内の肉を噛み締める。

(食い潰れさせてたまるか。踏みつぶされてたまるか。俺は捕
食する側の人間だ。踏みつける側の人間だ)

補正持ちだ、登場人物だなどと、実際あるかどうかわからない、む
しろ胡散臭い話だとも思うが……目の前で見てみると、これは普通
じゃない。

そういうものがあるという前提で動かないと、足をすくわれそうな気がしていた。

「まだ名乗ってなかったわね。私はレイツェンよ。よろしく」

「ステイルという。よろしく」

「あら？その毛布、凄い柔らかそうね」

「ああ、これね」

あの兵士さんから借りた毛布を、座布団代わりにしていた。

馬車ってひどく揺れ、慣れていなければ容易く尻を傷めるからだ。

「懇意にしている兵士さんからの借り物なんだよ」

「いいわね、外套をクッションにするより良さそう」

凄く物欲しそうな目で見てくる金髪。

「ああ、凄く快適だよ。君もまた馬車に乗る機会があれば、用意するわいい」

当然貸すなどしない。

別に尻の硬さを鍛える趣味も必要性もないし、なにより余りこの補正持ちらしき人物と交友を結ぶと、間違いなく厄介事イベントを引き寄せそうだからだ。

「……そうね。じゃあ、また」

恋愛シミュレーションでいうなら、今好感度が1下がった、といったところだろうか。

もし好感度を上げていけば、勇者PTに参戦、ただし勇敢な犠牲者枠として。なんてフラグが立ちかねなかったわけだが。

金髪が壁際によって外套に包まれるのを確認していると、緑色の髪をした、ひよろりとした蛇のような印象をしている男が寄ってきた。

先程のあからさまな現代人ではない。その他三人のうち一人だ。

「懇意にしている兵士、ねえ。失礼、ヘネークという者だ。

先程のスムーズな仲裁、感謝しているよ」

「盗み聞きとはお行儀が悪いことだな。その分だと名乗る必要はないかな」

「いやすまないね。狭い車内だ、勘弁して欲しいな」

謝っているのにその表情は全く悪びれていない。
くい、と顎で先を促す。

「その分だと、その場で兵士さんと懇意になつて融通を利かせてもらっているようだけど、何かしらコネでもあつたのかい？」

「さあどうだろうな」

頼みごとをしたついでで、なんて気軽に答えてなどやらない。
ましてや、サウスタウンの兵士中隊長と偶然わたりをつけることができたなど、言つてやらない。

情報は扱う者次第で、金貨にも鉄屑にもなりうるものだ。
例え大したことない情報だからと言つて不必要にばら撒くのは、持っているほかの情報の質まで下げてしまう恐れがある。

相手もそれがわかつているのだろう。

にやりとして、抱えていたずた袋から刺激的な香りのする干し肉と果実酒を取り出した。

ぶわっ、と暴力的に食欲をくすぐる匂いが辺りに立ち込める。

「お、その肉」

「わかるかい？ ロック鳥の燻製肉さ。サウスタウンまでの旅路は長い。」

一人寂しくつまむより、頭のいい人間と話しながらのほうが、建設的だと思ってね」

人間おいしいものには弱いものである。交渉の鉄則だ。

成長したロック鳥は象を持ちあげることができるほどの巨大さの獰猛な鳥だ。

その肉は非常に美味。1匹からとれる量が多いが、なかなか討伐できる機会は少ない貴重品だ。

勿論その分値段は張る。

「じゃあ、是非ご相伴に預らせて貰おうかな。その分だと、懇意になるための分の肉は別口にとつてあるんだろっ？」

「ふふ、敵わないな。とりあえずこの場の肉は全て食べても問題ないよ。」

……サウスタウンについてしまえば、僕たち孤児は格好の餌といつてもいい。

サウスタウンまでの旅路の内に、下っ端以外の兵士さんと仲良く

なっておきたいものなんだけど……君はどう思う？」

「実にその通りだな。俺たちは明らかに身分が低い。実力も財力もだ。」

身を守るためには全力を尽くす必要があるな。

……ちなみにだけど、懇意の兵士さんは北区の中隊長らしいんだけどね」

「……っ、へえ、中隊長か、とりあえずあわよくば小隊長と、思っていたが……。」

物は相談なんだけどね」

一瞬目を見開き、すぐに平静を取り戻したヘネークは、ちらり、と銀貨が俺の手元に置いた。

随分と出したな。そこまで必死か。荷物を頼んだ際の銀貨はこれで取り戻せた。

「ああ、皆まで言わなくてもいい。晩飯の時にでも話を通しに行つてこよう」

ぱっ、とヘネークの顔が明るくなる。

「いやありがたい、これからも仲良くしていきたいものだね」

「センタータウンはぬるいからな。お互い、^{サウス}南の先輩方に食われな
いよう、仲良くしようじゃないか」

『乾杯』

8話 サウスタウン

8話

サウスタウン

「お疲れです。飯貰いに来ました」

「おおステイルじゃねえか。ほれ、飯と、こいつも持ってけ！」

今日街道で野生の豚仕留めてよお、おすそ分けだ」

「おお実につまそうだ、頂きます。

ルーンさんの槍捌きは見事ですからね！ さらにそつなく弓まで扱っし、参考にその狩りを生で見たかったなあ」

ルーンの槍スキルはおそらく1の上位。

基本的なスキルはだいたい網羅しているため、もうすぐで2に到達できるか……といったところか。

この若さでスキルレベル2になればかなりの腕前と言われるから、

下っ端の兵士にはなかなか研鑽を積んでいる方だろう。

(……今つなぎを付けておけば、将来万が一栄達した時にはいいコネになる)

勿論スキルレベルが武器の扱いの全てではなく、間合いの取り方、技の選択は経験に基づいたものになる。

武器の攻撃速度や威力はステータス 力、器用、敏捷など とスキルの熟練度と掛け算のような形になる。

よってスキルレベルが高ければレベルを上げれば上げただけ飛躍的にに実力が上がって行く。

きっと現実にあったRPGの主人公達は、レベルを上げる前に鬼のような訓練で体の基礎の固まりを築き上げていたに違いない。

「へっへ、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか！」

「おいおい、ルースの槍捌きが見事ってんなら、俺の剣捌きはサウスタウンーになっちまうぜ！」

「なあにいつてやがるへっぴり腰が！ てめえのは剣捌きじゃなくて魔法剣だろ！」

今野次を飛ばした男は魔力適性値が高く、銀製の武器に魔法文字ルインで

加工した魔力を通しやすい、人工物ではなかなか良い魔法剣を持っている。

そのためスキルレベル自体は1の下位だが、魔力でブーストした近距離攻撃から、魔力を込めた魔強化スキルでの中距離攻撃などの、多彩な攻撃手段を持っているのだ。

サウスタウンにつくまでの10日程の道のりで、中隊長以外にそこそこの人数の兵士と交流を交わすことができた。

魔物の襲撃で馬車に積んでいたお酒がおじゃんになったときに、賄賂用として多めに持っていた酒を出し惜しみせず兵士達に振るまっただのだ。

俺以外にも他に酒を多めに持っていて、出し惜しみしていた奴も勿論いた。

結局その出し惜しんでいた酒も、兵士に騒いだなどと難癖をつけられ、罰だと奪われていたのだが。

おかげで俺とヘネークは、将来有望な（賄賂的な意味で）孤児戦士としてコネを一気に増やすことができていた。

「ステイル、明日の早朝にはサウスに着くようだよ」

「ああ、いよいよか」

「孤児戦士は一応安い宿が貸しだされるみたいだけど、そこに入るの？ それとも行くあてでもあるのかい？」

「孤児宿なんぞに入る気はないな。狭いし不衛生、治安も最悪……多少割高でも宿を取る」

孤児戦士の宿舎とはいうが、そこは稼げないやつが入るものだ。

50階を突破し、さらに一定額のお金を払うか一定以上の魔石を国に納めなければ、より過酷な兵役が課せられるから皆必死なのだ。

無計画に装備新調などをした新人孤児戦士はもれなくこの宿舎にお世話になることになる。

そしてそのうち何割かは、窃盗、強奪等のいずれかで財産を失うことになるだろう。

この宿舎に住んでいるというだけで他の冒険者たちには舐められるので、より稼ぎ辛くなる……悪循環のスパイラルだな。

「そっか、僕は同じ孤児院出身の身内がいるからそつちを頼るつもりだよ」

「そっか、ではここでお別れだな。お互い無事に落ちついたら飲みに行こうか」

といっても、元々連れだって行くつもりはなかったのだが。

確かに新人が一人にいるのも危険かもしれないが、足を引っ張られるのはごめんだ。

落ちつくまでヘネークが無事である保証はないが……交渉の末だとしても酒を飲み交わした仲だ。

情をかけ過ぎないレベルでなら、無事を祈ってやるのは無料だしな。

「諸君、諸君らは国に育てられた。つまり祖国こそが父であり、母である。

両親のために、そう、国のために働いてくれることを期待している」

俺みたいなプレイヤーには、しっかり両親がいるわけだけけれど。

……あちらの世界に、だが。

「なお、ここにいる諸君は巨大迷宮ビッグ1の探索、敵の間引きを選んだ者のみだろう。」

「今から2年間で50階に到達することが、兵役免除の最低条件だ」

輝かしい未来でも夢見ているのか、明るい面がほとんどだ。

この内何人が、一月後にも同じ表情をしていられるのだろうか。

「しかし、もし50階に到達できなかった場合だが……通常より過酷な兵役を課せられるだろう。」

言わずとも分かると思うが、より危険な地域での兵役となる。心にとめておきたまえ」

暗い未来を想像したのか、さつと青ざめる面々……表情豊かだな、こいつら。

表情を代えないのはごく数名だ。

当然、あの主人公補正持ちだと思われるあのレイツェンも平然とした顔をしている。

「孤児宿所に滞在するものは、手続きを済ませておくように。」

それと迷宮に潜る前に迷宮ギルドには顔を出しておけ。

それでは各人、検討を祈る………解散!」

顔見知りになった兵士に軽く頭を下げ、親交を深めた見どころのある孤児に手を軽く振り、荷物を抱えて人込みに紛れた。

今現在、孤児の集まりは衆人環視下にある。

下手に顔を覚えられれば、新人ですカモですと宣伝してしまうようなものだ。

顔を俯け人目を避けて歩きながら、年季の入った外套をを羽織る。年期は入っているものの、材質自体はなかなかよい品だ。

これで少なくとも新人には見えないだろう。

親しくなった兵士の一人に聞いた、値段が手頃で治安も悪くない、そしてなにより飯がうまい宿に入る。

食は人間のモチベーションを握る……人は何かの生きがいのために働く。そして上手いものを食うために働ける人間は多いと思う。

「いらっしやい、泊まりかい？それとも飯？」

「泊まり、とりあえず2週間分。飯は食う時に払って食うよ」

じやらりと銀貨を7枚置く。

値段は前もって聞いている。1泊500G、14日で7000Gだ。

飯代込みにすれば割り引かれるが、毎食ここで食べるわけではないので泊まり分だけにする。

ちなみに1G〓約10〓20円が目安だが、現代とは価値基準が違いすぎるので大して当てにならない数字だ。

ここで値段を聞かず、さっさと済ませるのには訳がある。

どこかの漫画やアニメにありがちな、施設に入った時に受付で行われる懇切丁寧な説明。

これが行われることで、店主、店員には勿論、周りの客にも注目される可能性が上がる。

時期が時期 新人が大量に流入してくる なので、会話の流れ次第では初心者だな、と睨まれることだろう。

そしてもう一つ、装備を整えて先程の孤児宿舍周辺を見に行きたいのだ。

第三者として見ることで、ここでの初心者狩りのやり方を把握しておきたいのだ。

「はいよ、2階の一番奥の部屋だ。案内はいるかい？」

「いや、急ぎなんで……結構だ」

カウンターの奥にちらりと、素朴だが見てくれは悪くない娘が見えた。

所謂こういう物語的に見るなら、間違いなく鼻の下を伸ばしながら案内して貰い、フラグを立てるなり玉砕するなりするのだろうが……。

勘違いしてはいけない。

これは甘い少女漫画でも、異世界ライトノベルでもない。

血と臓物が飛び散るデスゲームなんだ。

部屋に入ると、なかなか広めの部屋だ。

冒険者は鎧や武器を置くので多少広い部屋でないと辛いのだ。

手早く擬装用の弱い装備を脱ぎ捨てると、練鉄製のリングメイルを着こみ、その上に硬皮製のクロスアーマーという防具兼衣服のようなものを着る。

膝に筒状の金属のブーツをはいて完成だ。

本格的に迷宮に行く場合は、クロスアーマーを脱ぎ代わりに鋼鉄製のプレートメイルを装備する予定だ。

今日は、というよりこれから数日は迷宮に行かないのでこれは別にいいだろう。

リングメイルとは、チェインメイルの劣化版である。

金属製の輪っかを組み合わせで作った、西洋版鎖帷子といったところか。

チェインメイルはリングメイルより、より輪っかが小さく密度が高い。つまり値段が高いというわけだ。

プレートメイルはそのままの意味、板金装甲の鎧である。

クロス（服）アーマー（鎧）は、嵩張らない鎧の上に着る防御能力のある服、ドラ エでいうなら皮の服の強化版みたいなものだ。

あとは、火のエンチャントされた最下級の位置する魔法武器、ファイアナイフを懐に隠し、防具の機構やそでぐちに普通のナイフ、針を数本仕込む。

身体能力やスキルに補正がある魔法装飾品を各種身につける。

効果は弱いものばかりだが、装備できるだけすれば大分能力が底上げされる。

小迷宮のコアアイテムで手に入ることが多く、効果はピンキリだが、魔法武器からすればまだ手が届く価値だ。

駆け出しには厳しいが、中級者の冒険者なら、低級の魔法装飾品を装備できるだけ装備するのが普通だ。

リング2つ、腕輪2つ、アンクレット（足）2つ、ネックレス1つにピアスが1つまでしか効果は発揮されない。

が、余裕がある者は、一か所に複数の装飾品を付けて、状況によって効果を発揮する装飾品を切り替えることもできる。

とはいっても高価であることに変わりはない。
念のため長めの手袋をして隠しておく。

縮小の柄頭（武器をある程度小さくすることができる装着アイテム）で小さくした良質鋼鉄の短槍を足につける。これがメインウェポンだ。

そして見栄えを重視するために、柄にまあまあ綺麗な装飾の施された鋼鉄の剣を腰に差す。咄嗟に引き抜くためのサブウェポンだ。

本当にとっさのときにはナイフを抜くからあまり出番はないであろうが……戦士の誇りの要素が強いのか、剣はなぜか示威効果が高いのだ。

剣の適性は低い者が少なく、スキルレベルが低いころから使い勝手の良いスキルがあることから、普及率が高いのもその理由の一つだろう。

（槍の方が武器としては絶対に優れていると思うんだが……）

まあ、この世界では前の世界ほど

槍>剣

という方式は成り立たないのだが。

それというのも、スキルの存在だ。

これが結構めちゃくちゃで、射程距離も手数も向こうの世界では考えられない攻撃が出せる。

さらに、“レベル”、“ステータス”、そしてなにより“スキル”が存在するので、跳躍力や敏捷さが段違いなのだ。

レベルが上がれば槍の間合いを飛び越せるし、スキルによっては中距離以上の距離に攻撃も可能だ。

となると単純にリーチの問題だけでは片づけられないだろう。

だが、扱いが難しく、狭い空間では使い辛いが、こちらの世界でもやはり安定した強さを出せるのは槍なわけだ。

全ての熟練度が平等に高い俺は、あらゆる武器を使いこなしそのネックを容易く解消できるわけだ。

また、迷宮内でドロップする”刀”という武装、引いて切るという使い方をする日本産の武器。

これはあまりに作るのが非効率的すぎて、現実的には可能だが刀鍛冶師の人間はほとんどいない。

ドワーフの鍛冶師から買うか迷宮で拾うしかないので希少価値が高い……のだが、使い手が少ないので値段はなかなか高い、程度にと

どまっている。

これもスキルが充実しているので強いのだが……ちょっと趣味じゃない。

というかこの世界ではガチガチの防具や、ソードブレイカ など特殊な用途の武器、そしてなにより硬い表皮を持つ敵が多いので、切る武器はスキルが相当高くないと実用性が薄い。

……まあ、俺なら使いこなせるんだが。

その加工の難しさゆえに、整備にさええらばうな費用がかかる。

戦闘中にそこまで気を使って戦うなど、気疲れしてしまうのはごめんである。

と、手に入れてもいないタヌキの皮算用はこれくらいにしておこう。

「さて、搾取される同輩を見に行くか。君たちは無駄死になどではない。その無念は俺が引き継ぐからな……」

装備品

- ・良質な鋼鉄の短槍（通常品より威力＋耐久＋）

- ・華美な鋼鉄の長剣（通常品より魅力+）
- ・火のナイフ（火属性+）
- ・鋼鉄のナイフ×3
- ・鋼鉄の針×8

- ・鋼鉄のリングメイル
- ・硬皮と絹のクローク（上）
- ・硬皮と絹のクローク（下） 上下で魅力+
- ・硬皮の鋏付きブーツ
- ・土蜥蜴の皮手袋

- ・力のリング「力+」
- ・毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」
- ・敏捷のアンクレット「敏捷+」「防御微増」
- ・隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」
- ・力の腕輪「力+」
- ・知力の腕輪「知力+」

「off」回復のリング 「時間回復微上昇」「軽傷回復×5」（軽傷回復の魔法が5回分こもっている。ノーリスクで使用可能）（つけているだけで、効果は発揮していない）

「off」火のガードリング 「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」（つけているだけで、効果は発揮していない）

「off」器用さのアンクレット「器用+」

280000G

9話 サウスタウン、開幕

9話

サウスタウン、開幕

案の定、広場では予測していた通りの展開が繰り広げられていた。

領土拡大の侵攻戦、その最前線。

人と物が最も集うその地は、栄光を目指す者にとって光りに満ち溢れた場所だ。

煌びやかな剣を携え、磨き抜かれた鎧を纏った騎士。

無骨ながらも、実戦を幾多も乗り越えた鈍い光を放つ装備を身につけ、強烈な存在感を放つ歴戦の戦士。

行き交う目を引く人間の姿は、少年少女達が思い描いた夢物語の姿そのものだ。

惹きつけるような魅力を持った魔法装飾品や、希少な鉱石製の武器。

そして武器を使いこなすだけの技量が無いと本来の力を発揮できない、持ち主を選ぶ魔法武器が、この迷宮都市から続々と発掘され各地に送り出される。

物珍しそうにきよろきよろとあたりを見回し、好奇心に目をキラキラさせている、今だ新米未満の冒険者達にはここは宝島のように感じられているのだろう。

そしてそんな無邪気な 無防備な 彼らは、周りからさぞ格好の鴨に見えていることだろう。

「へい、兄ちゃん達強そうだな！だが装備がいけねえ、サウスで実力者必需品の魔法武器！安くしとくよ！」

「おおつ、見どころのありそうな連中だな！俺達のクランに入らないか？ 経験値稼ぎにいい所で育成の手伝いしてやるぜ！」

「おおつ見てけよ、貴重なクスリがたっぷりあるぜえ」

「おいてめえどこ見て歩いてんだああ？ 鎧が汚れちまったじゃねえか木っ端共があ！弁償だ！金だしな！」

「装備するだけでステータスが上がる魔法装飾品はいらないか！セクターなんかじゃ売ってねえ高品質だぞ！」

この一角だけ一段と活気に溢れている。

(……………暑苦しい)

ただでさえ少ない蓄えでさえ掠め取るうとする人間が無駄に放つエネルギーに辟易としてしまう。

ここいらで見られるのは、せいぜい質の悪いチンピラの手口程度か。賢い奴らや、事前調査をしっかりとしている孤児達はさっさとこの場を退散している。

絡まれたり、露店で詐欺紛いの交渉や値段をふっかけられているのは、どんくさい連中か空気に流されたバカだけだ。

チンピラの因縁の付け方は見ていてもしょうがない。

露店での言葉巧みな売りつけ方に耳を傾けながら、注意すべき人物の目星をつける。

同じように辺りを窺っていたのであろう、こちらに気付いたヘネークが寄って来た。

「やあ……………偽装装備だとは思っていたけど、随分豪華な装備だね」

まあ当然だろう。

中級の、そこそこの冒険者レベルの装備は揃えているからな。

少なくとも孤児出身でいきなりこんな武装が、普通のやり方で手に入るわけがない。

「おう、ヘネークか。お前の武器もなかなかいいものじゃないか」

ヘネークもなかなかいい装備をしている。

この装備を揃えるのに、犯罪を一つも犯さなかったとは言わせない。

………というか、孤児出身で綺麗な経歴な奴なんて数えるほどしかないだろうが。

「……色々言いたいことはあるけど、まあいいか。

それよりあれ、群がりっぷりが凄いな」

そういつて、香ばしい匂いのする串焼きを差しだしてくる。

ほんとに要領のいい奴だ。

情報料が食べ物に偏っている気はするが、急いで来たので丁度腹が減っている。

「ああ、それだけじゃない。きよろきよろすんなよ、目立たないように広場の外周を見てみる」

「……ん？あの分厚い外套でこそしてるのは、兵士？」

「それとその一周り遠巻きに、観察してるやつや、メモをとってる奴らがいるだろう」

「ああ、あれは……情報屋、かな？」

「そうだ。」

……鴨になる方も鴨になるほうだが、さっそくこの広場で騒ぎを起こしているチンピラ共は気付いていないようだな。

自分たちの特徴と人相書きを、兵士達が遠巻きに記録してリストに加えていつていることを。

ああいった浅慮な輩は普段からすぐに騒ぎを起こすから、普段から目をつけておくためにああしてるんだ」

「なるほどね……ということとは、今小銭を巻き上げているチンピラは情報収集の面でも経験の面でも雑魚つてことか」

「そういうことだ。ただまあ、商人の方は別だな。特になにも悪いことはやっちゃいない。」

それと、新人を観察している奴らはなにも情報屋だけじゃない。

目端の利く奴やタチの悪いはみ出し者も、新人の人相や装備から割れる経済状況だけをメモしている。

目ぼしいやつに目をつけておいて損はないし、狩ってつまそうなのは後々巻き上げるってわけだ。」

「なるほどね、そして君は、その目端の利く奴らや情報屋を把握しているってわけか」

にやりと笑う。

「そつだ、お前も顔だけでいいから覚えておけ。」

奴らが後で、にこやかな顔をしながら新人に酒でも奢っていたら間違いない」

「……いや、参考になったよ。串焼きじゃ足りないくらいだ。今度飲むときは一杯奢らせてくれよ」

「ああ、楽しみにしてるよ」

「参考までに聞きたいんだけど、きみはこれからどうするつもりだい?」

「随分と漠然とした聞き方だな」

「先程、さっそくビッグ1に駆け出していく冒険者たちがいたからね。」

勿論それが愚かな行為だというのはわかるんだけど、実際これからどうしたものかな、とね」

「お前、身内がいるんじゃないのか？」

「その身内は、兵役は終えてるけど、余り才能がなかったらしくくてね。」

知り合いづてに中規模商会の用心棒をしてるんだけど。余り腹の探り合いが得意じゃないんだ。

「というかおつむは弱いと言わざるをえないね」

「なるほど、頼りにならないわけだな……まあいいだろう、これからも付き合いはありそうだしな」

正直そこまで大した内容でもないのだが、こちらが譲って置く形にしておけば貸し一つだ。

ヘネークは頭はいいが、積み上げた経験がまだまだだな。

……といっても、現実の世界で積み上げてきた経験量がある。

この世界とあちらの世界とじゃ経験の密度が違うが、さすがに生まれて15年しか経ってないヘネークに負けることはない……と信じた。

「まず……金があるならさっさと50000Gを返済しておけ。まあきついだろうが。」

それと、今から数日は迷宮に入るのはよしておけ」

「いきなりそんな金があるやつはそうそういないだろう。」

……情報収集も無しにいきなり迷宮に入るのがよくないのはわかるんだけど、これから数日かい？」

「ああ、やめておけ。」

知っていると思うが、この『ビッグ1』の1～10階層はほとんど常に人が大量にいる。

少しでも手間取っていると、完全に邪魔もの扱いだ。速攻で目を付けられる。

序盤で怖いのは魔物よりも冒険者同士のトラブルだ」

「トラブルね……確かに怖そうだ」

「10階層までを専門にしている掃除人^{スイーパー}を敵に回したら本当に厄介だからな」

「スイーパー？10階層までしかいけない冒険者なんて、正直弱いんじゃない？」

「それは間違つたとらえ方だ。その場の地形、罠の配置の傾向、魔物の出現状況を知り尽くしているエキスパートだぞ。」

自分のレベルにあった階層で魔物と戦闘していたら、魔物の大群が引つ張られてきたら？」

「うっ」

「戦闘していたらいつの間にか罠に囲まれた部屋に誘導されたら？」

罠にかかっているときに魔物をすりつけられたら？」

罠の解除中に横やりを入れられたら？」

「あっ、ああ……なるほどね、はめ放題ってわけね」

「その通り。真面目に戦闘しても、この時期じゃあ新人って見られるだけでちよっかいかけられるぞ。」

向こうさんも狩り場荒らされてイライラしているだろうしな」

「そうだね、別に今急いで稼がないといけないわけでもない。」

とりあえず街をめぐるなり、探索するなりしてみることにするよ」

「ちなみにだが、サウスタウン周辺で小迷宮を探すのもやめておけ。」

同じ魂胆の新人が溢れているのは自明の理だ……トラブルにあう確率が高い」

「わかったよ。それで話は戻るけど、君はどうするつもりなんだい？」

「ああ、まずは酒でも飲むかな」

「情報収集に、知り合いでも作るのかい？」

「……ああ、その後迷宮にでも行くつもりだ」

「は？」

硬直するへネーク。

くく、予想通りのリアクション。わかりやすいやつだな。

「いやいや、君が数日は入るなって……」

「それは10階層までの探索、狩りする場合だ。」

俺は10階層まではさっさと抜けて11階層以降を見てくるつもりだからな」

「え？いや……いきなり？ いや、そうか、それだけのレベルがあるってことか」

「そう思われるだろうな、いや、そう思ってもらって構わない」

武器の熟練度MAX。武器スキルレベルがa1113だからな。

多少レベルが低くても問題ない。

これより上げる方法もあるようだが、隠しイベントでもあるんだろうか。

生憎ゲームで、2日でそこまでいけた人間はいなかったようだし。

「……煮え切らないなあ」

「そうだな、全部知りたいなら、1000万G持つてきな」

元の世界で1〜2億円相当。

こちらの世界でなら、超高級一品物の魔法装備が買えるな。

「ふふ、底が知れないなあ君は」

「それじゃあ俺はもう行く。今度酒でも奢れよ」

「ああ、次は酒場で」

10話 一方的な出会い

10話

一方的な出会い

(さてどれにするか。新人の人相と装備をメモってた情報屋の数は数多。

あまり腕が良すぎる相手だとペースを持って行かれっぱなしになるからな。

能力はあるが経験が薄そうな……あれでいいか)

「やあお兄さん、いい鴨はいた？」

「あつ、ああ？……見覚えがねえな。客か？」

急に声をかけられ挙動不審になっている若い情報屋らしき男。

まあ盗み見だし、どちらかと言えば後ろ暗いことではあるから気持ちにはわかるが……それで情報屋として大丈夫か？

「そう、客だよ」

「……売る方が、買う方が」

「とりあえず買う方で。10階層から20階層までの魔物のデータもらえるかな。希少種^{レア}含めて」

「……あ？希少種含めても、50階層までなら迷宮ギルドでほぼ完璧なデータが買えるだろう。20階層までならはした金だ」

情報屋は困惑した顔をしている。

わざわざ情報屋で買う情報ではない。

「優しいねお兄さん、わざわざ教えてくれるなんて」

「っ、ああてめえ、駆け出しか？」

「御明察。この時期に序盤階層の敵データなんてギルドで買ったたら、初心者ですって宣伝してるみたいなものじゃないか」

「……なるほどな。でもな坊主、この情報を俺が売ることまでできるんだぜ？」

「別に調べればすぐにでもわかるでしょ、その程度のこと。目立たなきゃいいんだよ。」

「とうかむしろ、油断ならない新人って思われるならそれはそれでお得だと思うけど」

「ははは、違いねえ。いいだろう、10〜20なら5000Gでいいぜ。」

ちなみに迷宮ギルドなら2倍の値段で魔物データを冊子でくれる。俺の場合は紙がもったいねえから口頭だ。メモリな」

「いいよ、記憶力には自信がある」

称号：暗記3：膨大な数の呪文を暗唱できる。「知力++++」
魔力+」持ちだからね。

暗記には補正がつくのさ。

「へえ、値引きも無しか。まあいい、言っぞ」

早口で言われていく魔物の生息状況、サービスなのか冊子に載っていないような詳しい情報から、おおまかな罫の種類まで言ってくれている。

情報屋にはお人好しというか……。

ゲームの頃 Wiki で見た情報と細部は違うものの、大差は無いよ
うだ。

と言っても細部は違うわけで、これからも密な情報収集が必要だな。

「といったところだ。どうだ、覚えたか？」

「ああ、問題ない。ところで売る方の話だけだ」

「ああ、といってもあまりでかいネタは買っただけの現金がねえから
な」

「大丈夫、小粒のネタだよ。」

さっきまでお兄さんが観察してた孤児新人で、15人という大所
帯のコミュニティができてるのは知ってるかな？」

「っはあ。お前さん孤児出身がまさか、てか、今日来た……でその
装備か!？」

「ノーコメントで……。調べればわかることだしね」

「ははは、ほんと、得体のしれない野郎だ。まあいい、続きを」

「彼ら凄く生ぬるい割に経済状況自体は悪くないよ。彼らの装備と
おおまかなレベル、性格と序列までの情報を売ろうかな」

馬車で同乗したトリッパー集団だ。

申し訳ないが、彼らには俺の小遣い稼ぎになって貰おう。

「へえ……随分と調べてるな」

「たまたま機会があつてね」

「15人分の情報はでかいな。2000Gなら買おう」

「装備はそこそこのレベルもまあまあ高めだ。」

「まとめて借金でも背負わせれば奴隷軍団出来上がりだよ？8000G」

「馬鹿野郎、新人には皆目つけてる。その内すぐに性格からなにからまで出回る。3000G」

「だからこそ現時点で詳細が分かるのが大きいんじゃないか。どんな情報も鮮度が命でしょ。7000G」

「たかが新人の話だ。チンピラ以外買わねえよ。4000G」

「6000Gと1〜10階層の魔物生息情報と、1〜10階層のスイーパーについての情報」

「……つてめ、最初からその情報聞くつもりだったな。その情報だけで5000G貰ってもいいくらいだぞ」

「スイーパーの詳細なんて酒場ではビール1杯で聞けるでしょ。それじゃあ、サウスタウンに着くまでに兵士とコネを作っていた将来有望な孤児新人のリストもつけようかな」

「つかあ、お前が一番有望じゃねえのかよ……。5000Gと情報だ」

「そりゃ光栄だ。……それで手を打とう。これからもよろしく頼むよ。ステイルだ」

「ヨージだ。お前さんは敵に回したくねえなあ」

これで、なんの金もかけずに1〜20階層までの敵情報と1〜10階層のスイーパーの情報をゲットだ。

この情報を新人共に又売りしてもいいんだが、来ていきなり情報屋の領分を侵すのもあれだから、やめておくことにする。

情報収集はこんなところでいいだろうと、50000G返済すべく役場に向かうことにした。

サウスタウンの街役場の中に入ると、外気から比べると大分温かかった。

空調用の魔法アイテムでも使っているのだろう。

俺も自分ホームを持って、空調アイテムを買える程稼ぎたいものだ。

この街役場は国営で、サウスタウンの冒険者ギルドと迷宮ギルドの統括をしている。

つまり冒険者、迷宮とギルドをわけてはいるが、どちらもお役所どころの地方部署の一つにすぎない。

役場で働いている事務員だが、あちらの世界のようにもやしはいない。

皆力強いオーラを感じる。流石にサウスタウンの住民だ。

中に入って数秒、ざっと事務員たちの様相を見回し、カウンターへ赴く。

中には、ぼてぼてとした天然ボケしていそうな巨乳の事務員がいたが、絶対に近寄らない。

俺の直感が、というか見た感じ……漠然とした違和感を感じるのだ。この世界の人間から浮いている感覚。

あれ”補正持ち”……だろ。

あくまで見た目だけの話だが、手続き中に書類ひっくり返したり、人の個人情報を「ええーっ！　ですかーっ!?」とか叫んで公開しちゃうまめけなタイプに違いない。

俺は女も巨乳も好きだが、色気につられて百害あって一利（体）しかないやつに迂闊に近寄るつもりはない。

「手続きをお願いしたい」

俺が選んだのはがちりとした肩幅のむさいおっさん。

一番無難だろう。

「はい、どちらの手続きですか？」

ぐっと声をひそめる。

到着早々に50000G返済するのだ。目立たないに越したことはない。

正直、目立たないように時間を置いてから返済したかったのだが、地位が孤児だとトラブルが起こったとき損する可能性が高いのだ。

いくらある程度の兵士にコネがあるといっても限界がある。

「孤児育成支援金の返済だ」

「ほう、お早い。2つ隣に美人がいるのになぜこちらの受け付けに来るのかと思えば……将来有望ですな。」

書類を準備してきます」

この仕事をして長いのだろう。

声ひそめた意味もしっかりと読みとっていた。

「よろしく」

「えええー！！今日来たばかりなのに、もう孤児基金の返済ですか！？」

がたんつ、と膝を受付にぶつけてしまっ。

おいまさかわざわざこっちの書類を見に来たのかこいつ!?

……と思ったら、2つ隣の受け付けで50000G支払おうとして
いる孤児新人がいた。

「ああ、色んな人と縁があってね……。

センタータウンで地主の家の友人に、さっさと孤児から抜けるっ
てまとまったお金を押しつけられちゃったんだ」

おうおうおう、3人目か。

顔はかなりの美形で、中性的な顔つき。なのにどことなく惹かれる、
ほっとけない感じ……おそらく補正持ち、登場人物だな。

というか、属性的に主人公クラスじゃないか？

ヒーローが主に引き付けるのは異性……その中でも格段に個性が強
い異性が中心だ。

男の俺にはいまいちわからないものがあるのかもしれない。

……というか、地主の家の友人って絶対お嬢様とかだろうな、想像

できる。

というか、色気につられてあっちに並んでたら、天然巨乳だけじゃなく主人公クラスともフラグが立っていたわけか。

色気出さなくてよかった、怖い怖い。

それからの会話のダイジェスト

「そういう人との縁をつなげるあなたも凄いです！私はニユウといいます」

「ありがとう。僕はオリシユというんだ。よろしく。君もなにかの縁があつてここに？」

「……いえ、私実は、国保有の奴隷なんです……」

「奴隷！？なんだって!?!」

「見た目と事務能力を、国家所属の奴隷人材の能力チェックをする方に目をとめられたらしくて、国が私を買い上げ、国保有の奴隷に

国保有になった奴隷は教育や礼儀、職種によっては戦闘訓練を受けて、色んな所で働くことになるんです。

それで、私のようなお役所勤めの奴隷は、一般の方でも手続きしただいで買い上げることができるんです」

「な、なんだって！ほんとかい、それは!？」

「……はい。勿論普通の奴隷よりは高いんですが、買うことができます。

ここは冒険者の方が多くいらっしゃる所なので、結構高い確率で買われると同僚から聞きました。

仕方ないことだとは思ってるんですけど、知らない人に買われるかもと思うと、不安で……」

……… 凄いな、これがテンプレ展開か。

テンプレ通りならこの後は……。

「あなたみたい人だったら　なんて、ごめんなさい」

「いいよ、待ってて。すぐお金を貯めて君を買い戻しに来る。すぐに奴隷から解放するからね」

「えっ」ズキユン

「キラン」「バキュン

「いゃん!」「ズギャン

.....ひどい茶番を見た。

あまりの茶番っぷりに呆然としていたら、受付のおっさんが戻って来た。

「お待たせしました.....こちらが証明書になります。ご確認を」

称号『独り立ち』：あなたは独り立ちした。「全ステータス+」を得ました。

「おや、あなた以外にも返済者が。今日は6人ですか。今年はなかなか豊作ですね」

「他に4人もいたか」

「ええ、あなたとあの方を含め、有望そうな方が多いですね」

人数までは言うが、返済者の名前や経歴を明かすことはまずないだろう。

役所勤めの人間が情報を迂闊に漏らすと罰があることもある。

……あの天然巨乳ならありそうだが。

ちなみにだが、このおっさんは奴隷ではない。

「ついでに迷宮探索の許可証も発行してくれ。」

わざわざ迷宮ギルドに行かなくても、ここでも申請は可能なんだろう？ 申請書類は、この通り作成済みだ」

「おや、良くご存じですね。確かにここでも発行は可能ですが、ここで許可証を発行された場合諸注意や解説を聞けませんでしょうか？」

「構わない。下手にギルドで手続きして、『新人講習』なんてまとめてやられたら目もあてられない。」

飲み代や小遣いが欲しい『自称先輩』に顔でも覚えられたら面倒極まらない」

「確かにそうですね。その様子だとある程度のごことは調べてきているようですし、構わないでしょう。」

「そういえば知っていましたか？」

「……こちらでも冒険者申請手続きが可能なのを公にしていない理由は、新人冒険者に諸注意をするためだけじゃないんです」

「ほう、初耳だな。ご教授願えるかな？」

「それはですね、『仕事が増えるから』という人間味あふれた理由ですよ」

「そういつて、にやりと笑う受付の男。」

「……なるほどな。頑張ってる職員を見ると、酒の一杯でも奢りたくなるな」

「そういつて、料金分にプラスして半銀貨を置く。これは銀貨の半分の価値の貨幣だ。」

「いやあ、ありがたいですな。催促したようで心苦しいですなあ、はっはっはっ。」

「心付けを頂くとやる気が出て仕事が捗るというものです。」

ささつと用意してきますのでそのままお待ちを。

ああ、先にこちらの針を指に刺して、血液を付着させて頂けませんか？個人登録が必要ですので」

指を刺し針を渡すと、また書類を取りに別室へ行つた。

ここでチップを出さないか、ケチると、待合室でお待ち下さいと追いやられ、仕事を後に回されていた所だつただろう。

別に急ぎの用事があるわけではなかったが、金払いがいいと思われればあちらから融通を図ってくれるようになるだろう。

先行投資的に考えて無駄にならない。

そして特に不備も無く書類の手続きを終え、長々と主人公達が話を軽く盗み聞き、オリシユのこれからの大雑把な予定を把握した所ですとつとその場を後にした。

これで身分は一般市民。

大手を振って外を歩けるな。

11話 初迷宮1

11話

初迷宮1

装備品

- ・ 良質な鋼鉄の短槍
- ・ コンポジットボウ（縮小の輪装着）
- ・ 火のナイフ（火属性+）
- ・ 鋼鉄のナイフx3
- ・ 鋼鉄の針x8
- ・ 鋼鉄のサレットヘルム
- ・ 鋼鉄のリングメイル
- ・ 鋼鉄のプレートメイル
- ・ 鋼鉄のガントレット（籠手）
- ・ 鋼鉄のグリーブ（足・すね防具）
- ・ 火のガードリング 「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」
- ・ 毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」

- ・敏捷のアンクレット「敏捷+」「防御微増」
- ・隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」
- ・力の腕輪「力+」
- ・知力の腕輪「知力+」
- 「off」回復のリング 「時間回復微上昇」「軽傷回復×5」
- 「off」力のリング「力+」
- 「off」器用さのアンクレット「器用+」

迷宮内に入ると、頭上から血飛沫が飛び散ってきた。

記念すべき迷宮の一步目が洞窟コウモリのスプラッターまみれなど目が当てられない。

称号と鍛練で極限にまで底上げした敏捷と、素手熟練度という名の体術の向上で、一滴もかぶることなく避けきる。

地に塗れた死骸は、じゅくじゅくと音を立てながら魔石を残して迷宮の床と壁に取り込まれた。

「おいおい、張り切りすぎだろ……」

「ははは、悪いな。さっきから入ってくる奴皆、最低限のマナーもわかってないやつばかりで気が立っていたんだ」

「まあ気持ちはわかるけどな……巻き込まないでくれよ」

「お前さん見ない顔だな。装備的に新人って感じはしないが」

ほう、人の出入りの激しい迷宮で人相を把握しているのか。

こついったところが人間の恐ろしさだよな。

「さあどうだろうな。俺はとっとと先に行かせて貰うぜ。掃除人さん」

「俺のことがわかるならずぶの新人じゃねえだろうが……例え新人だとしても目端の利く奴なら文句はねえ。」

迷惑掛けちまったな。ほれ、詫び料だ」

回復薬と軟膏、出血毒消しを放り投げてくる。

「へえ、太っ腹だねえ。毒消しなんか結構するでしょ」

「かかか、新人の遺産ってやつよ。存外金持ってんのかねえ孤児つてのも。薬持ち多いぜ」

「怖い怖い。巻き込まないようにしてくれよ」

「かか、誰に向かって言ってるやがる。」

引っ張って一纏めにした魔物共をこつそり突っ込んで持って行き

やがる新人小僧が多くてな。そういった奴しか手は出してねえよ」

やはり名前が知られていると、大義名分がないと下手に手が出せないのだから。

あまり殺し過ぎる奴や私利私欲に走るやつは、賞金首だからな。

ちなみに、1～10階層は敵の沸く（出現する）速度が段違いに早い。

だから10階層専門の掃除人が成立するのだ。

「そりゃ良かった。ああ詫びついでに教えて欲しいんだけど。

今月の1～10階層の階段だけど、A9、C4、I5、D2、H4、G5、J6、E2、B6、F0で間違いなかったかな」

迷宮内の区域をおおざっぱに0～9、A～Jの10：10等分に区切った場合の、次の階層への階段の位置を聞いた。

迷宮は1～2月に一度地形が変化するので、定期的に情報を更新しないと次来た時手間なのだ。

10階層までの狩りが専門の人間にしてみても、11階層以降で狩る人間が階段を探してうろつろされるやと邪魔なので、意外と親切に教えてくれる。

「ああ間違いなえ。8階層のE2だがな、岩場の影にあるから見づかりにくい。注意しろよ」

「ありがと。酒場であつたら一杯奢るよ」

「おお、面覚えたからな！ 会つてとぼけんなよ！」

「わかつてるつて。じゃあな」

迷宮内は、特殊なエリアは変わってくるのだが、基本的に薄暗い洞窟の様な構造になっている。

魔物の住処、拠点という意味では地下構造と建造物の様に上るものどちらもあるが、迷宮と名を冠するものは確認されている全てが地下構造式だ。

階段のあるであろう位置まで駆ける。

床は多少でこぼこがありやや歩きにくいが、おおよそ平坦だ。

魔物同士が戦いやすく、蟲毒として効率よく機能するためのものではないかと言われている。

そこそこに重い装備をしているのだが全く問題ない。

多重で称号持ちで力と持久は高く、防具の隠し熟練度も軽装甲、重装甲共に3の称号も持っているため体の一部のようにだ。

そして1〜10階層では大した畏もない。

そして掃除人達がしきっているので、余程下手を打つか暗黙の了解をすつとばさなければ他人にはめられることもほぼ無い。

そしてほとんどの箇所がひらけた洞窟のようになっていたため、下手に何か所に留まるとあつという間に魔物に囲まれる。

寄って来た洞窟コウモリを短槍で薙ぎ、洞窟ネズミを突き殺し、走り寄ってくる下っ端ゴブリンの頭蓋を抉り取りながら前へ前へと進む。

殺して数秒で迷宮に融けていく魔物達。

蟲毒であり、魔物を生みだす迷宮では、魔物の死体は迷宮に吸収され還元される。

そしてその材料（肉）を再利用し、コアアイテムから命を吹き込まれ、新たな魔物が生まれるのだ。

いたちごっこで、永久機関じゃないかと思われるが、その通りである。

もつとも、そのいたちごっこをこちらが終わらせてしまうと、増えすぎた魔物が街に排出される運命が待っているわけだが。

殺し合って力を蓄えた魔物の場合、蓄えた部位がドロップ品のように残ることがある。

がしかし、ここら辺の魔物では、力を蓄えることができない速

度で狩られるため、体の一部がドロップすることもなく魔石だけが落ちている。

魔石は全スルー。回収していない。

こんなところでちまちまする狩るほど金には困っていないし、礼儀をわきまえているとはいえ新人だ。

他の木っ端の新人と一緒にたにして覚えられたらたまったものじゃない……さつさと通り過ぎてしまつに限る。

さつくりとショートカットを繰り返し11階へ。

特に苦戦することもなく階段を下る。

「ようやく迷宮って感じになって来たな」

1〜10階層はほとんど開けたMAPばかりなのだが、11階層か

ら通路が多くなってくる。

迷宮物につきものなワープポイント、ショートカットは一応存在するのだが、ゲームや漫画のように簡単なものではない。

何しろ作成するのに3日3晩かかるし、モンスターに破壊されればまた作り直し。

膨大な魔力の持ち主と、貴重なレアスキル持ち主、それに希少な物質が必要で、一度壊されたらおいそれと治せるものではない。

せっかくゲートを設置しても魔物に壊されれば意味がない。

つまり常に戦える人間を配置していなければならないのだ。

よって、ゲートの周りには堀を掘り、塀を築き、簡易基地を作り、兵士を配置している。

さらにはほぼ常にギルドでは警備員を募集している。

この依頼、言うまでもなく非常に過酷だ。

探索するでもなく、常に気を張り詰めなければならないし、迷宮内なのでまともな飯も出ない。

ゲートの魔力につられて、魔物が絶えず散発的に襲ってくるので精神的にも苦痛だ。

その代りなかなかの高給で、なによりもギルドの評価が非常に上がりやすい……のだがやはり非常に人気がない。

戦闘力の高い国保有の奴隷はここに回されることが多いという。

現在は30階層、50階層、70階層、80階層、90階層までワープゲート、通称ゲートが設置されている。

この数字からわかるかもしれないが、30階層まで行って初めて冒険者と認められ、50階層で中堅と見られる。

100階層以上を行ける人間は軍でもクラン（冒険者の独自の集まり）でも引っ張りだこだ。

100階層からはゲートが無いため、さらにすすむ冒険者達は迷宮内でキャンプを張りながら進むしかない。

迷宮内では魔物は魔石となって消えてしまうので食料と水の調達が困難で、非常に険しい道となっている。

非常に、超非常に高価なマジックアイテムや消費アイテムならワープもできるらしいのだが、本当に上級も上級クラスの人間の話である。

この事実が、迷宮の攻略速度が大きく遅くなる主要原因といえるだろう。

ではなぜ90階層までしかワープゲートを設置しないかというと、

ゲートを保持するだけの人材を確保するのが困難だからだ。

100階層レベルで防衛可能なレベルの人間を一か所に、しかも長期間拘束しておける人材的余裕も、この国にはない。

このゲート利用したければ、自分がその階まで到達し、そのゲートと契約をしなければならぬ。

そしてさらに、ゲート登録はごく一部の例外を除いて、二ヶ月毎に更新しなければ効力が失われてしまう。

おかげで迷宮を主な戦場に行っている冒険者は、余り長期間の遠出ができないのだ。

このビッグ1、現在確認されている最深の階層が『201階層』だ。

最強の冒険者と、人類の最終兵器とまで言われた軍人、その他優れた人間が所属を問わず6人集まり201階層までは確認してきている。

201階層までしか行けなかったかというそうではない。

だが、物資に限りがあり、実力があろうと補給が困難な迷宮をただ進むわけにはいかないのだ。

さらにこの大陸の人間で10の指に数えられる人間を6人も、長期間一か所に拘束するだけの余裕が人類にはなかった。

(いつか俺も行ってみたいものだ。というかこのビッグ1のコアアイテムってなんなんだろうな。

尋常じゃない力を持っているのはわかりきっているが……。

ゲームの設定では、恐らく複数のコアアイテムでこの迷宮は維持されているはず。

このコアアイテムの数を減らせば迷宮は弱体化する……はずだ、きつと)

そんな他愛もない考え事をしながら、淡々と敵の攻撃を捌いて行く。

『足払い』

時間差でこちらに向かってきている4体のゴブリンの内、前2体の噛みつきゴブリンに槍スキル『足払い』を仕掛け転ばせる。

ゲーム内で言う「スタン」状態だ。

『疾風突き』

動いている2体の内、外側のゴブリンの眼窩をえぐり飛ばし無力化し、もう1体のハンマーの一撃を槍の柄で逸らす。

この程度の攻撃なら、『受け流し』スキルを使うまでもない。

この際、わざと疾風突きの威力をを落とすし、限りなく隙を少なくしている。

「まとめてくたばれ」

『ヘヴィスイング』

長柄スキルヘヴィスイング。

これが槍、ハルバードなどの面白いところで、その形状によっては複数種類の武器スキルを使うことができる。

柄の部分が長めの槍なら、槍のスキルと一部の長柄（棍など）スキルを使い、ハルバードや戟など槍＋斧のような形状なら槍スキルと斧スキルも一部使用が可能になる。

武器を装備していても素手スキルはある程度使えるし、形状によっては剣で斧スキルを使うこともできる。

その代り、やはり威力は本来の武器を使った時よりも下がるし、体にかかる負担も大きくなる……が、利点から考えればその不満は小さいものだろう。

この、スキルで兵器バランスが崩れそうな世界においても、完成された強さと呼ばれるハルバード、早く手にしたいものである。

へヴィスイングで吹き飛んだ3体の内、2体がクッションになって辛うじて息のある1体にとどめを刺し、魔石を回収する。

（格は上がったても所詮はゴブリンか……この階層はまだコウモリ系が目立つ。

あまり多く矢は持ち歩いていないし探索を進めるとしよう。

今日は本気の狩りではなく、あくまで肩慣らしだからな）

12話

初迷宮2

慎重に身の安全を最重視しながら15階まで進んだあたりで、状況に変化が生じた。

「やばいやばい、あんな手に負えるかよ。とつととギルドに報告して、排除して貰うぞ」

「なんでこんなところにナイトクラスが出るの!？」

「……あのチームいつまで持つかな？」

「馬鹿、余計なこと考えるな。巻き込み事故でも起こされたらまたもんじゃねえ。」

上手く倒せりゃぼろ儲けだろうが……レベル30台の俺達が勝て

る相手じゃねえよ」

進んで行く方向から、鋼鉄製の装備品で身を固めた三人組の冒険者が声を響めながら怒鳴るといふ器用な真似をしながらこちらに駆けてくる。

その様子は明らかに焦燥としており、走る以上の動悸の激しさが窺えた。

冒険者狩りをしていた頃の習性で思わず身を隠してしまったが、これは自然に情報を貰う方が良さそうである。

身を潜めていた岩陰からわざと足音を立てながら姿を表した。

「うおっ、脅かすなよ人間かよ」

「……ちっ」

「はぁ……」

瞬時に戦闘態勢に入った彼らは、こちらの姿をはっきり目にするに構えた武器を納めた……が、各々柄に手をかけており警戒を解いた様子はない。

当然のように人間同士での強盗行為もあり得るので、当然の心構えである。

今回はそういった目的ではないため、両手を上に上げ呼びかける。

「敵対する意思はない。基本的に冒険者同士は不干渉というのはわかっているが、なにやら物騒な単語が聞こえてきたものでな」

少なくとも即座に攻撃されることはないと思ったのだろう。

三人組の内一番背の高い男が一步前に出る。

その陰に隠れるように、やや小柄な女冒険者が身を屈め辺りをくまなく観察している。

レベル自体は先程聞こえてきた通り低いようだが、冒険者としての基本はできているようだ。

魔物を警戒すると同時に、俺の仲間が近くに潜んでいないか警戒しているのだろう。

「ちつ、ああ……時間がねえから手短かに言つとだな、ナイトオークが出た。しかも色違いのユニーク種みてえだ。」

悪いことは言わねえ、お前さんもさっさと逃げな」

「他にも何組がこの階層にいたみたいだがほとんどは逃げた。」

私達も他の冒険者に聞いて、雑兵オークと見間違えたんじゃないって

半信半疑だったんだけど……。

「この通路の奥を右に曲がったところで新人パーティが捕まっちゃってるのを見かけてね」

長身の冒険者の後を引き継ぐように、今まで辺りの様子を窺っていた女が話し出した。

がっちりとした兜をかぶっているため表情は見えづらいが、話す様子から興奮状態であることがわかった。

「なんで下層まで来てるかはしつたこつちゃねえが、奴は本来50階層以降に出る魔物の中でもかなりの上位だ。」

奴を倒せる可能性がある冒険者はゲートを使って50階層からスタートするからね、悪いことは言わない、今日は狩りは諦めて帰るな。

信用できないって言うんなら、ちよつくら様子を見てくると良い。自分の命をベットする覚悟があるならね」

見た感じ嘘をついている様子はない。

これで演技なら、彼女は是非詐欺師になるべきだ。

「モーリア、無駄口が過ぎるぞ。」

「というわけだ、俺たちはもう行く」

「そうか、感謝する……流石にそんな上位種を相手にする自信はないからね。」

「随分息が上がっている。これ、使ってくれ」

疲労回復飲料の中でも、眠気や虚脱感の副作用が小さく効果も高いお値段お高めの物を女冒険者に渡す。

出し惜しまず素直に教えてくれた感謝の気持ちを込めて、である。

冒険者にとって情報は命だが、常に出し惜しみるものではない。

出し惜しんで逆恨みされたのでは割に合わない、そのさじ加減が難しいのだ。

どうやらそれが好意的にとられたのか、帰る道中一緒にどうだと気を使って貰ったが、魔物からドロップした重量のあるアイテムを置いているため、別のルートを通る必要があると丁重にお断りした。

隠密行動には自信があるのだ、死体から所持品を剥ぎ取るなり、上手くいけば漁夫の利が得られるかもしれない……。

最悪見つかっても、このレベルではあり得ないステータスがあるのだ。

ナイト種は重量のある装備を身につけているため、逃げるだけなら容易い物である。

「あれは……確かに間違いない。騎士^{ナイト}オークか。

剣スキルレベル2の技も出しているし、表皮の色も通常より赤い……ユニークモンスターだな」

そこには、鋼鉄製の全身鎧に身を包み、兜の下から醜悪な豚面を覗かせる、2 m程のナイトオークに蹴散らされている4人組がいた。

ユニークモンスターとは、その種の中でも特殊な成長をしたものだ。非常に強力なスキルを身につけていたり、特殊な効果の毒を使ったりする。

ナイトオークは、オーク本来の強力な膂力に加え、様々な武器スキ

ルを身につけた強力な魔物だ。

今回のあの騎士^{ナイト}オークは、本来のナイトオークに比べて遥かに高い武器スキルを操っている。

それに加えて体格に優れ、それに見合ったステータスを持っているのだろう。

ユニークモンスターは、その同一個体種と異なる点がある場合が多い。

大抵の場合皮膚の色や大きさが違ったり、本来あり得ない器官がついているため、魔物の特徴をきちんと把握してさえいれば不用意に近づくことはない。

駆け出しや、不勉強な冒険者が知らずに挑んで殺されるなど良くある話だ。

「称号の下剋上があるし相性的にはかなりいいんだが、今のレベルじゃあHP的にリスクが高いな」

少し高くなった岩棚に登り、出っ張った部分に身を伏せ、辺りを念入りに警戒。

不意打ちや隠密中の者が不意打ちに晒されるなど、三流の手管だ。

”補正持ち”のような人間、正義感に溢れた人間ならここで叫びながら突入するのだろうか……。

俺は利が大好きな一般人であり、そんな御立派な思想は持っていないので観察に徹する。

俺の持っている魔法装飾品中では結構な値うち物の隠密のアンクレットと、称号：隠密が本領を發揮する。

装備とスキルと相乗効果が可能にする、高レベルの存在隠蔽が観察を容易にする。

（やはり、かなり上の層からの迷子みたいだな。いや、どっかの馬鹿が逃げ回るなりしてここまで引っ張って来たとか？

通常なら考えられない事態だな、これは）

視界の4人組は今にも崩壊しそうだが、その内1人の、まだ若干幼さが残る顔立ちの、赤毛短髪で盾持ちの前衛の戦士がが果敢に時間を稼ぎなんとか戦線を維持している。

べこべこに歪な形になった兜と装甲の一部が傍らに転がっており、ナイトオークの攻撃の熾烈さが見受けられる。

もう1人の、肩で切りそろえた茶髪で、要所を防具で固めてロープを羽織ったいかにも魔法使いルツクな女……。

おそらく聖職者が的確な支援魔法を使っているようだが、いかんせん残り2人が腰が引け、まともな戦力になっておらず足を引っ張っ

ている。

このままでは戦線は維持できないだろう。

「GOOOOOOOOO」

「くそ、これ以上持たねえぞ！ スイッチだ！ 一旦二人がかりで抑えて……」

「ひいい、なんでこんなところに騎士種が出るんだよ！」

「勝てないって、逃げようって！ せつかく伸ばしてた髪も引きちぎれちゃったし最悪だよもお！」

「おい！そんなこと言ってる場合じゃねえだろ！」

赤毛の戦士が叫ぶが、腰がひけたクローズヘルムで顔が見えない男は錯乱しており、ひたすら槍を振りまわしている。

短刀二刀流の一風変わった髪型の女は、逃走することしか頭に無い。会話を聞くに、ナイトオークの剣技に巻き込まれて、あのような斬新な髪形と相成ったようだ。

「そんなことを言ってる場合じゃないでしょう！ 詠唱する時間を

稼いでください！ 今走つても、逃げるに逃げられません！」

「ならお前が出るよ！ もうやだ！ 私は女の子なんだぞあ……………」

なにやら不穏な空気が流れているな。

半泣きの女冒険者が、ちらちらと辺りを窺っている。

あの女……………やらかす気か。

「じ、ごめんねっ、恨まないでねっ！」

「わっ、馬鹿誰が引けとிட்டた！」

あ……………あーあ、前衛芸術のような髪型の女が、髪を乱しながら仲間を囿に逃走。

気弱そうな長柄持ちは腰が抜けそう。

あの盾戦士と聖職者、終わったかなあ。

何気に逃げた女が一番装備が豪華だな。

……………あのまま殺されてくれれば装備が回収できたのに。

「GUGAAA」

「ひい！やめ、やめて」

（あ、あ、あああ！ あのオークが持つてるバスタードソード、まさか羽鋼製か！？

ナイトオークの標準装備じゃないってことは……上層の宝箱から魔物が拾ったもの、だな。

欲しい！あれは欲しい！

倒すか、ああいや、倒した後あいつらに所有権主張とかされたら面倒だな。あいつらが死ぬのを待つか？）

思案に明け暮れていると、いつの間にか戦況に変化があったようだ。

「ゲロン！」

「ぎゃあああああ！手がてが、あぐ、が、僕の手が」

不用意に動いた槍持ちの戦士　ゲロンというらしい、の右肺から先を、ナイトオークの剣技『ハードスラッシュ』が引きちぎったようだ。

「……げ、ゲロ」

「 ナイト、もうあの人はだめです！今のうちに引きましょう！」
「……つくう、すまないゲロン……っ行くぞ！」

（引くなら槍持ちがやられた瞬間すぐに引けよ……。

ああだめだな、あの様子じゃ聖職者の方は足を負傷してる。

逃げきれそうにない が、これ以上待っていたらギルドから依頼を受けた冒険者が来るか。

依頼や報酬無しでも、ナイトオークのユニーク種が単独でこんな浅い層にいるなんて、ある程度のレベルの冒険者からすれば垂涎の獲物だからな。

それに、あの男女二人から薄っすらと感じるこの感じ……まさかとは思うが）

案の定逃げようとした聖職者の女が、ナイトオークの剣+素手スキル『シヨックウェーブ』で吹き飛ばされ壁に激突する。

「GYAUGUA！」

「きゃあっ」

「くっ、クーシャ！ちいっ、このままじゃ……」

コンボジッドボウの縮小を解き、弓スキル『急所射ち』と隠密スキル『サイレントキル』を併用させ……撃つ！

「GUGAAYAAAAA」

斜め向かいから放たれた矢が左目を眼窩から吹き飛ばし、突然の暗闇と激痛に剣を振り回しながら錯乱するナイトオーク。

「ちっ、目から脳を撃ちぬくつもりだったんだが、そう都合よくはいかないか」

「な、なんだ！誰かいるのか!？」

「おいお前、この場のアイテムの所有権と、PT全員の全財産を譲渡しろ。」

手持ち分だけでいい。5秒で決めろ」

『五月雨射ち』

『パワーショット』

『パワーショット』

しゃべりながらも手を休めない。

熟練の弓の腕前で、ばら撒くように速射する五月雨射ちも狙いが付けづらいパワーショットも、的確に弱い部位に当てていく。

ああもつたいない、敵が固いから矢がの穂先が潰れていく……再利用は絶望的か。

「あっ、ああ、俺のも、こいつのも持ってっけてくれていいから！助けてくれ！」

さすがに自分の立場が分かっているのだろう。

別に承諾を得ずとも、放置しておけば自分達は死に、自動的に俺の懐にその装備や財産が入ってくるのだと。

そう、これはあくまで、何か含んでいることがあるうがなかるうがあくまで親切心なのだ。

「いいだろう、その女を連れてなるべく離れる」

「恩に着るっ！」

わざわざ親切に命を救っているのは、微弱にだが、あの2人から不思議な魅力と引力を感じたのだ。

この感じだと、”補正”があまり高くはないのかもしれない、となぜか俺は奴らが”補正持ち”だと確信を持っていた。

そもそも冷静に理屈だけで考えても、こんな浅い層で50階層レベルを超えるユニークモンスターとエンカウント。

しかも相手は羽鋼製の武器持ちなど、普通どう考えてもあり得ない。

きつと彼らは、その中途半端に感じる”補正”が呼び寄せる、イベントという名の試練に打ち勝つだけの力が無かったのだろう。

もしかしたら、こうして自分が介入して助けることまでイベントのシナリオに含まれてやしないだろうな……と薄ら寒い想像をしながら矢を放ち続ける。

「ああくそ、矢切れ……大して持ってこなかったからな」

顔に2本、庇っていた両手に8本、両足の関節部分を中心に5本。ハリネズミのようになっている。

鋼鉄の防具でガチガチに固めていた相手なら上等だろう。

レベルがある程度あれば、力や器用さのステータスが上がりもつと刺さっていたのかもしれないが、今そんなことを考えても仕方あるまい。

『ダブルスロー』

投げナイフを2本顔面めがけて投げつけながら、ひらりと岩場から飛び降り、突っ込む。

「うおおおおあああ！」

槍スキル『フルチャージ』

一気に加速したその速度をそのまま威力に変え、渾身の力で突きを放つ。

「GUJAAAAA!!」

「ははっ、漲るぞ……」『下剋上』のプラス補正

のけ反りノックバック状態の内に追撃を図る。

素早い足さばきでオークの側面に回り込み、

『足払い』

すねの骨を避け、人間で言うアキレス腱の辺りをばっさり切りながら転倒させる。

「よし、し……くっおっ」

転倒した状態から『薙ぎ払い』を放たれ、なんとか重装スキル『部位受け』で、装甲の厚い部分で受け流す。

「ち、しぶとい……！」

1歩半下がり、投げナイフスキル発動。

『パワースロー』

鋼鉄のナイフが、剣を持っている右腕手首の、やや薄めな装甲の上から強引に突き刺さった。

「GU、GA」

「ふん、それで思ったように振れまい。これでっ」

『サイクロンスラスト』

手の中で高速で乱回転した槍が、ナイトオークの残った左手を中心に上半身をずたばろにする。

「GU、GYA……」

「これで……トドメだ！」

倒れているナイトオークの上に飛び乗り火のナイフに魔力を、発動に必要な量を超過してぐいぐい注ぐ。

(燃費は悪いがこれで終わりだ、喰らうとけ！)

過剰に魔力を注がれた火のナイフの刀身が白熱し、高温の熱を持つ……！

「ああああー！」

『シャープエッジ』 ”属性変化” 『フレイムシャープエッジ』

シャープエッジにより鋭さを増したナイフスキルが、火属性の付加されたナイフによってフレイムシャープエッジとなる。

属性付加で鋭さを増し、さらに強化スキル発動によって瞬間的に一気に温度を増したナイフが、ナイトオークの兜ごと頭蓋から肩までを真っ二つに寸断した。

魔法武器を使う場合、属性攻撃を発動するだけなら魔力だけで発動できる。

だが、魔法効果を伴った強化スキル技は、魔力だけでなく武器スキルを上げないと発動できないのだ。

火のナイフは魔法武器の中でも最下位レベルの力しかない。

このような弱い魔法武器で強化スキルを放つには、膨大な魔力に、その武器を完璧に使いこなし、武器の力を限界まで引き出すだけの能力。

そう、熟練度レベルを3まで上げないと発動できないのだ。

「ぜえっ、はあっ、かってえこいつ……疲れた……」

ずるりと座りこんでしまう。

短時間にスキルを連発しすぎた。

せっかく武器熟練度がMAXなのだから、スキルばかりでなく普通の通常攻撃もうまく使って行かないと速攻でガス欠になりそうだ。

その際、火のナイフを見えないように布で覆い隠し荷物袋にしまっ
てしまう。

火のナイフで強化スキルを発動できるとばれるよりも、高価な装
備を持っていると思われた方がマシだからだ。

獲得品

羽鋼のバスタードソード

力の指輪？「力++」

騎士の心臓

おおう、魔法装飾品ドロップまで出た。

騎士の心臓は騎士系魔物からしかドロップせず、薬の材料になるた
め結構な高値で売れる。

これはほんとに、主人公補正持ちの運を横取りした感じだな。

「す、すげえ……あの騎士ナイトオークを、補助なしでソロで倒した……すげえ！」

てか全然見たことねえスキル連発！ す、すっげえっ」

「……つつつつ、あなたはすげえしか言えないの？ それはともかく、助かりました。恩に着ます」

「ああ、いいよ。ちゃんと報酬は貰うからね」

にこにこで羽鋼のバスタードソードを眺める。

通常の鋼より遥かに軽いが強度が落ちない羽鋼。

攻撃速度、攻撃回数は勿論増え、スキル使用時の消費HPが5割は減るだろう。

「えっと、報酬？」

「ああ、クーシャは気絶してたんだっけ」

「この場のアイテムの所有権と、あんたとこいつの手持ち分の全財産の譲渡。

それが契約内容だ」

「全部……装備も!？」

「そう、全部だ」

驚いてる驚いてる。

まあ寝ている間にこんな契約結ばれてたら驚くか。

「す、すまんクーシャ……あの時すぐに返事しなきゃ、俺らどっちも死んでたかもしれないんだ」

「ぐっ、あ、あの、ムシのいいお願いだとわかってるんですが……」

懇願するように見上げてくる、クーシャという、長柄武器である棍術を納めた聖職者。

茶色の目に茶髪を結わえて、今はポニーテールにしている、やや小さな女だ。

「ちなみにだ、あの時奴隷契約を結べと言ってもよかつたんだぞ」

目は大きく小顔、顔立ちも整っていて、胸もなかなかある。

あの役所の巨乳のニューウとか言う奴ほどではないが。

しかしこの顔ならさぞ高値で売れるだろう。

さらに現役冒険者で複数の魔法を所持。

金持ちに売りこめば、目が飛び出るほどの値段になりそうだ。

「それは、重々承知です。1つだけ、どうしても譲れないものがあるんです。お願いします！それだけは……」

お願いします、という割には殺気が漏れている。

下手に断ると戦闘も辞さない……ってか？

この様子に、この性格キャラ、物語の展開的に考えるならば、形見の何かだろうか。

なんとなくだが、アンクレットから良品のオーラがぶんぶんしてやがる。

「そのアンクレットか」

「あ、いえ、確かにこのアンクレットは高いものですが……この指輪なんです」

「クーシャ、この指輪大切そうに持ってたもんな、大事なもんなのか？」

「母の……形見なの」

やっぱり、という顔を押し隠す俺と、愕然とした表情をするナイトという赤毛ツンツン男。

特徴でかい、筋肉、頭ツンツン。以上。

「俺は、なんて契約を……すまん！クーシャ！」

あの、ほんと助けてもらっておいて申し訳ないんだけど、指輪だけは勘弁してくれないか？いや、もらえませんか？」

ぱっと見た感じ、指輪の方からは大した能力の増加値は感じない。

おそらく本当にただの形見か、後々パワーアップイベントでも起こる鍵なのかもしれない。

付与能力は平凡でも魔法装飾品だ、売ればいい値段にはなるだろうが……ここで戦闘にでもなったら目も当てられない。

せつかく穩便に他の装備を引き取れるんだ。というか正直儲け過ぎて怖いんだ。

それに、ここで補正持ち候補に恩を売っておくのは悪くはない。

「それでは契約と違う……といたい所だが、そんなに大事なものなら強引に取るわけにはいかないな」

あからさまにほっとする2人。

「とりあえず、迷宮出るぞ。流石にここで装備を譲渡するわけにもいくまい」

とって、とりあえずさつき死んだ気弱な冒険者から装備と所持品を剥ぎ取る。

2人は気まずそうにしているが関係ない。

というかこれが迷宮内での常識だ。

それがわかっているから文句を言って来ないのだろう。

”補正持ち”……というより、漫画やアニメにありそうなキャラクターのように文句の一つも出るんじゃないかと思っていたので、正直意外だった。

死体を持って帰りたいなどと言われたらどうしようかと思っていたほどだ。

……そういえば、オークから逃げようとした時この男のことを見捨てようとしていたな。

”補正”が低い程、性格が常識人に近づくのだろうか……？

「っふう、やはり地上が落ち着くな」

迷宮から出て、すっかり日が暮れた地上で、夕焼けの赤を浴びながら伸びをしていると、

「あの、約束の装備と所持品です」

「俺の分も、受け取ってくれ」

「ああ、ありがたく頂くよ」

赤毛のナイトは、名残惜しそうに剣を見ていた。

材質はそこそこ良い鋼鉄で、剣の形状は半月に近い程曲線を描い幅広い剣。

種別的にはファルシオンか。

曲刃で幅広重厚、その重量を生かした振り下ろしが強力な武器である。

癖が強いし俺の好みではない……珍しいので買うときは高いだろうが、いざ売るとなるとなかなか売れないので安値で買い叩かれそうだ。

「お前ら、予備の装備くらいはあるんだろ？」

「はい、ランクは下がりますが、一通りあります」

「ああ、なら大丈夫だな……この形状の剣は？」

「……ない。ファルシオンは余り一般的な剣じゃあないからな」

「ふうん、そうか」

一度刀身を撫で、派手な音を立てながらファルシオンを鞘に戻し、ナイトに放り渡す。

「あっ？」

「そいつはお前が使うといい。余り盾越しに攻撃するのに向いてるとは思えないが、こだわりか、愛着があるんだろ？」

どうせ買いかかれるなら、恩に着せておくのがいいだろう。

俺の感通りこいつらが”補正持ち”だった場合、ここで印象に残しておけば、イベントが起きた際うまく介入できるかもしれない。

そのためにわざわざ、慣れない格好をつけた仕草で大物感を出しているのだ。

「ああ……ああ！そんなんだ！ でも……いいのか？

クーシャも俺のも、契約とは大分違う」

「気にすんな。

そうだな、変に目立ちたくないからな、騎士^{ナイト}オークを倒したのが俺ということは口外しないでくれ。お前らはなんとか逃げ切った。

その剣と装飾品は口止め料ということでもいい。

……じゃあ俺はいくよ」

「あ、なあ、名前教えてくれよ！」

「ステイルだ。クーシャにナイトだったか。また縁があれば……つてやつだ」

余りにわざとらしいその仕草は、娯楽小説でさえ乏しい世界の少年

少女の心をつかんだようだ。

命を救ってもらい、報酬まで減らしてくれた……それ以上の憧れの様な視線を感じる。

下手に頼られるようになるのも、纏わりつかれるのもごめんなので、突き放すような空気も忘れてはいけない。

どうせある程度の実力者とも思っているのだろうが、こっちは君達より新参者の若造なんだけどね……。

（それにしても、本当に儲かった。あの気弱君も大分持ってたし、羽鋼に魔法装飾品までゲット！

補正持ち狩りをしたくなるほど好調だな。いや、調子に乗るな俺、補正を甘く見たらいけない。

「万全の準備をした状況さえ覆されかねない。

……適度に距離を置くのが一番だ）

獲得品

- ・羽鋼のバスタードソード
- ・力の指輪？「力++」
- ・騎士の心臓

- ・ 錬鉄の長槍
- ・ 鉄棍
- ・ 鋼鉄のスプリントメイル
- ・ 錬鉄のリングメイル
- ・ 錬鉄のチェインメイル
- ・ 錬鉄のクローズヘルム
- ・ レザーヘルム
- ・ 錬鉄のガントレット×2
- ・ レザーグリーブ
- ・ 鋼鉄のグリーブ

- ・ 術者のアングレット? 「魔力++」 「知力+」
- ・ 力の指輪×3 「力+」
- ・ 魔力の指輪 「魔力+」
- ・ 敏捷の腕輪 「敏捷+」
- ・ 器用のアングレット 「器用+」
- ・ 出血毒消し
- ・ 麻痺毒消し
- ・ 出血毒消し
- ・ 聖水
- ・ 回復薬弱×3

48000G

レベル 2 1 2 3

12話 初迷宮2 8/1改訂 物語の大筋には関係ありませんのでスルー可。

8/1 結構いっぱい改定。

補正持ちは都合のいいことが起こるっていうけど、ステイルも結構ご都合主義だよな。

ということとその階層（15階層）にいた冒険者が複数人気付いていたということにしました。

50階層以下のレベルではこのオークに勝てる人はいないし、そのレベルの人はゲート使ってこの階層通らないよ！大分時間があつた、やったね！

と考えていたのですが書くのが面倒でカットしてしまいました！

まあその日に出くわしたのは偶然ですけど、そこまで書き加えちゃうと物語全体の改定ががが状態になるのでご勘弁を。

ちなみにもうちよつと詳しい内容を活動報告に書いてますが、もし見てやるうかなという方がいましたら、ネタばれなので最新話まで読んでからご覧下さい。

13話 奴隷

13話

奴隷

装備品

羽鋼のバスタードソード

良質な鋼鉄の短槍（縮小）

鋼鉄のラウンドシールド

胴：鋼鉄のスプリントメイル

手：鋼鉄のガントレット

足：鋼鉄のグリーブ

頭：鋼鉄のチェインフード

指：力の指輪？「力++」

：毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」

手：敏捷の腕輪「敏捷+」

：力の腕輪「力+」

足：隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」

：敏捷のアンクレット「敏捷+」「防御微増」

首：

耳：

所持金 281000G

レベル 23

（昨日の探索でわかったが、1人で攻略していくのは限界がある）

他の地方では知らないが、サウスタウンの迷宮区域で一匹狼というのは、思った以上に厄介なものだということを実感した。

良い装備に良いアイテムを持っていればそれを欲しいと思うのが人間だ。

その相手が常に1人とあれば、隙あらば……と考えるのが当然だろう。

それに、迷宮というのは1人で攻略していけるほど簡単なものではない。

ふと油断した瞬間、複数の敵に囲まれたら……罨で体が動かなくなったら……。

そう考えると、格下しか出ないエリアでもまだ不安が残る。

しかし、別に孤高の戦士を気取っているわけではないのだが、仲間

というのはそう簡単に作れるものではない。

徒党をあらかじめ組んで迷宮区域に来る者は問題ないのだろうが、孤児出身の者達で、全幅の信頼のおける者などそうはいない。

というかそもそも、ド新人と組んでも足を引つ張られるだけであるし、他人のレベル上げに尽力するつもりも無い。

(……実はレベル自体は周りの孤児と大差ないんだけどね。

昨日助けたクーシャとナイトだっけ？ 彼らは誤解していたけど、レベルはおそらく彼らの半分もないし。

称号のステータス補正と、5年間マクロで鍛え上げた圧倒的な技量が他人との差を歴然にしているってだけでね)

基本的に、ノウハウの無い新人というのは、最初に先輩冒険者たちに手荒い歓迎 という名のなけなしの財産の強奪 を受ける。

その過程で自分のやられたやり方を学び、徐々に顔見知りを増やし徒党を組むりするのだ。

生き延び、さらに五体満足だったものに限った話だが。

ある程度の実力があって、多少なりとも賢い連中は、早々に組織という名の強者に取り入ろうとする。

新人を食い潰す程飢えた者のいない程度の規模の、『クラン』という冒険者の相互協力組織に入れてもらうのだ。

新人だけあって、当然報酬は割を食うし、危険であったり人がやりたがらない仕事は押し付けられるが、まだ恵まれた地位だ。

問題はこの「相互協力」という所にあり、つまるところ協力し合えるだけの実力。

もしくはそれだけの将来性を見せなければならぬのだ。

大き過ぎる所には、まずほとんどの者が入れない。

小さすぎるところでは、食べ物にされ体の好い道具として搾取される。

それらのクランのいずれにも参加できなかったものが、自然と所属することになるのが、孤児宿舎の寄せ集まりである。

所詮食い物にされるものの寄せ集め。

多少実力が付いて来たものは勝手に顔見知りを作り出ていくので、実力は無い……が、手荒い歓迎を受けた経験値のある先輩孤児達がいる。

搾取される側の中でも搾取される日々を送ることになるのだが、失

敗を避けるだけの知識だけは得られるだろう。

しかしステイルは、現時点ではそのいずれにも参加する気になれなかった。

どこの組織に入ろうと、まず間違いなく、悪い意味で目をつけられるからだ。

新人で孤児なのに恵まれた装備。

有力者とのコネでも作らない限り、クラン入団と引き換えに装備を要求されることすらありえそうだ。

（クランには入りたい。凄く入りたい。

俺には主人公補正なんて無いんだから、個人でやれることなんて限界がある。

もう少し時間をおいて、ある程度名を上げて、顔見知りでも作ってからどっかのクランに入るのが得策かな。

で、それまでの不安を解消するために……）

やってきたのが、奴隷売買場というわけだ。

ちなみにこの奴隷売買場、国営である。

国が直接国民を切り売りしているようで外聞が悪いため、正確には民間委託してあるのだが、国が関わっていることなど周知の事実である。

（ま、下手に民間人が違法でやってるより安全で裏も無くていいけどね）

国営というだけあって、奴隷制度はあるものの、そのほとんどが民間人の身売りであったり、国が引き取り損ねた孤児であったりだ。

拉致や脅迫など力技で無理矢理奴隷にして、それが露呈した場合、最悪死罪だ。

よって、奴隷市場に戦闘要員はほとんどいない。

その例外が迷宮都市や、戦闘の多い地域だ。

騙されて契約を結ばされたり、命の危険から救ってもらったために契約アイテムに承認してしまったりして、戦闘要員が奴隷になることがある。

といっても、あまりに非人道的であったり、派手にやりすぎると、ギルドを通して国から罰則が下る。

さらに、命を救うのに相手に奴隷契約を強制すると、同じ冒険者内で睨まれ孤立することもある。

明日は我が身かもしれないし、冒険者は職業柄危険に陥ることが多いからだ。

下手をすれば嵌められて自分が奴隷にされることさえあるから、よっぽどのが無いとする者はいない。

……勿論そういう者もいるからこそ、戦闘要員になりうる奴隷がいるわけだが。

先日クーシャとナイトを奴隷にしなかったのもそのリスクを避けるためだ。

奴隷市場には、老若男女様々な人間がござの上に座っている。

驚くべきことに、そこには人型の魔物や亜人種の奴隷までいた。

一応柵の中にいるが、厳重な檻などに入れられてはいない。

なぜなら、『隷属の首輪』を付けられているため、逆らうことができないからだ。

この柵も、どちらかというと顧客側が奴隷に危害を加えないために存在しているのだろう。

「いらっしやいませお客様。どういった奴隷をお求めでしょうか？」

小綺麗な服を着た、張り付けたような笑顔を浮かべた男が寄ってくる。

「ああ……そこそこ戦える元冒険者の壁戦士に、サポーターで荷物運びに屈強な男が欲しいな。」

荷物運びの方は筋力さえあれば冒険者じゃなくてもいい」

本当のことを言えば、女の奴隷も欲しかった。

勿論目的は下種なこと、性交目的だが。

色街に言ってもよいのだが、性病が怖いのだ。

さらに言えば、昔から遊郭、色街はスパイや情報屋と繋がっているものと相場は決まっている。

その内そちらの大手の情報屋とも繋がりをもちたいが、今はまだ早い。

というより、財政的な問題でまだ厳しいのだ。

「冒険者とサポーターですね。」

こちらの方におりますのが戦士やら肉体労働に使えそうな男です。

女の冒険者はあちらの区域にいますがいかがしますか？」

当然ながら女の奴隷の方が値が張る。

ただでさえ高価な女の奴隷だが、元冒険者や元兵士など、戦闘能力のある女奴隷は特に値が張る。

娼婦に、メイドに、護衛なんでもござれと使い道がたくさんあるからだ。

……ただし、少なくとも崩れていない顔の者に限るが。

「男女は問わない。

といつても女なら割高だろうが……別に顔は求めているない。

魔法持ちが欲しいが、値も張るだろうな」

その中でも魔法持ちは特に値が張る。

魔法書を手にできるのは戦闘能力が高いか、家が裕福かであるため、まず奴隷になることが無いからだ。

さらに言うなら、高レベルや素質が高い者、称号をたくさん持って

いる者、武器熟練度が高い者は国が先に引き取ってしまうことが多い。

この国は常時戦争中と言ってもよいので、人がつきたがらない任務や斥候などをやらせるためだ。

魔力に適性があったり、見目麗しい者は教会が好んで買って魔法覚えさせることが多い。

教会には消費式では無い『魔道書』とやらがあるらしいのだ。

時間、労力、素質など色々必要で、かかる労力の割にあまり強力な魔法は手に入らないが、非常にレアで実用性があるアイテムだ。

すなわち、この市場にいる奴隷はこの2つの買い手から漏れた余り物なのだ。

なので、余り良質な奴隷は存在しない。

大規模な戦闘で人手が足りない時などは混乱に紛れて高い戦闘力がある者がいることもあるが、それくらいだ。

だがここは数ある迷宮都市の中でも最も大きなビッグ1傘下の奴隷市場だ。

直近で売られてまだ国などの査定が入っていない、良質な奴隷が買えることもある。

できればちよくちよく見に來たいものである。

「いえ、実はいるんですよ……。」

レベルは40ですが、戦闘魔法3に補佐魔法1を持った女奴隷……しかも、エルフ種が」

俺は目を見張った。

そんな好条件の奴隷が出ているなど、通常ではありえない。

「なっ、それは本当か」

「ええ勿論。あちらにあります。」

今朝持ち込まれたばかりの、目が眩まんばかりに見目麗しく、さらに非常に優良な人材ですよ」

尋常じゃない美貌を持った、天使と見間違える程の気品を持ったエルフがそこにいた。

日の光に映える銀髪が心を激しく揺さぶる。

その顔には疲労した様子が窺えるが、毅然とした表情を崩さない。

（ またいた。この求心力、補正持ちか、それに準じた”補正”
を持っているな。

（ おそらく、彼女より強い”補正”を持った者が買っていくのだろ
う）

なるほど、辺りを見れば見惚れている客が大勢いる。

……値段を聞くと顔を青くしているようだ。

（こいつを買う、もしくは解放しようとなんらかの行動を起こす”
補正”持ちが出てくるはずだ。

（昨日のクーシャとナイトのように、イベントの成果のおいしい所
取りができるかもしれない。こまめに見に来ることにしよう）

「ウエストマウンテンの金髪のエルフとは、同盟を結んでいるため
奴隷にするのは違法行為ですが……。」

（こやつはウエスト山脈地域のロックマウンテンからの流れ者のよ
うですな。あちらの山脈のエルフは一切交渉に応じようとはしませ
るので、討伐を許可されています」

「……値段は、当然凄いだろっな」

「ええ、500万Gでございます」

空を仰いだ。

高いとかいう値段ではない。

というかこの商人も、俺が買うなど思っていなかっただろう。

先に目が飛び出るほど高い商品を見せて、金銭感覚でも麻痺させたかったのか、はたまた驚いた反応を楽しみたかったのか。

……俺は後者だと踏んでいるが。

「……………わかっていいるだろうが、他の奴隷を見せて貰おう」

こいつ、笑いをこらえ切れてないぞ。

やっぱり後者だったか。

「ごほんっ、失礼。かしこまりました。

……………おっと、入荷したばかりと言えはこちらの奴隷など如何でしょうか。

お客様の要望にぴったりだと思えますが」

案内された先にいたのは、大男だった。

身長は、座っているため見えないが、2mはあるだろう。

そして何より、醜悪な顔面をしており、悪臭が漂っていた。

「こちらの奴隷もつい先日入荷したばかりのものでしてな。

レベルは67とかなりのものです。武器スキルもなかなかで、斧スキルはなんと2。鈍器スキルも1あります。

顔は……少々崩れておりますがどうでしょう?」

顔の崩れ方が少々どころの話ではない。

そして臭い。アンモニア臭が漂っている。

豚男は醜悪な顔を歪め、にたあつと笑って言った。

「よおほっそいにいちゃん。俺を買うつつもりかあ?

がっはは、いいぞ買ってくれよ。隙があればそのかわいいケツにオレのをつつこんでやるよ!」

「ふうん。お前、買われたくないんだ」

びくんと反応する豚男。

多少の腹芸はできるようだが、演技力が伴ってないな。

「いつ、いくらなの？」

「お、おい小僧、お前買うつも……」

豚男は激しくとりみだした。

「命令、『黙りなさい』」

「ぐ、あっ……」

店員が、隷属の首輪で強制的に黙らせた。

この『命令』に逆らおうとすると、抗いがたい苦痛が襲う……らしい。

「奴隷が失礼しました。」

こちらの奴隷ですが、本来ならば50万G程で売りたい所なのですが……」

「この面に、匂い、そしてなにより、首輪で傷めつけても反抗的な態度を変えないのだろうか？」

「御察しの通りでございます。」

勿論首輪の効果は絶対ですので、問題無く使えるのですが……なかなか売れないものでしてな。

それですね、とりあえずは25万程……」

「ふうん。こいつ、出戻りか？」

店員の表情筋がびくりと動く。

冒険者なんて馬鹿ばっかとも思っていた面だなあこりゃ。

「……おお！確かに確かに、見落としていました！」

仰る通り、1度売られ、売り戻されて来たものです。いやはやお客様は聡明な方でいらっしやいますな。」

出戻りとは、一度売られたが使い物にならない、もしくは気に食わないと売られてしまうことだ。

奴隷と言っても、故意に殺すのは犯罪だし、殺すくらいなら売った方がいくらか取り戻せる。

「……で、それを知った上での値段はいくらなのかな？」

おそらく聞かなければ、出戻りという情報を伏せたまま、出戻りである分の値引きをせずに売るつもりだったのだろう。

欺こうとした部分を軽く攻めながら、暗に値引けよと言葉に込める。

「え、ええ、20万程と……」

「奴隷を黙らせるのが早すぎたな。こいつは売られたがっていないようだ。」

勿論客に暴言を吐かせないようにという意図もあるだろうが……。

こいつが自分で出戻りだと、発言させたくなかったのだろうか？

がその発言を聞けるのはあんたらから命令権が消えた後、つまり売約契約を結んだあとというわけだ」

店員は顔に脂汗をびっしょりかいている。

経験不足か、俺の歳が若いことからの油断か……まあお互いいい勉強になったということだ。

「改めて聞こう。それを知った上での値段は、いくらなのかな？」

「……………ギリギリいっぱいです……………12万Gでございます」

「了承した。買おう」

出戻りで無ければ25万、相手が最初からすべてを告げていたら15〜20万といったところかな。

大分浮いたと考えた俺は、内心にんまりだった。

それから、適当にサポーターという名の荷物持ちを適当に買ってしまおうと、比較的低レベルな男手の区域を見て回る。

「ああ、ああ……………いるいる、早速奴隷に身を落としてしまった孤児達」

「ああ……………そうですねあ、この時期は特に多いですからな、年若い新人の奴隷達が」

早速毒牙にかかったであろう元孤児達が、さらに下位の地位に身をやつしていた。

内心で嘲笑いながら辺りを見回していると、そこに15人のトリックパー集団の一部がいた。

「お、おい！お前、スタイルだろ！」

「助けてくれよ！俺を買ってくれ！頼む！」

「俺たち騙されたんだ！お願いだ解放してくれえええ」

「俺結構レベル上がってるんだぜ！従うからよ、解放してくれ！お願いだ！」

「あちゃー、面倒だなやつらに出会ったなあ。」

「お客様、如何なさいますか？」

「買うわけ無いでしょ。黙らせてよ」

「畏まりました。命令『黙れ、座れ』」

恨めしそうに、仇を見るような目でこちらを見る同郷達。

「おいおい、逆恨みはやめてくれよ。」

「思った俺は、そのまま口に出すことにした」

「おいおい、逆恨みはやめてくれよ。」

「今みたいなこと繰り返してたら、首輪だけじゃなく肉体指導され」

るぞ。俺は客として親切な方だろう？

それに、頼るならつるんでた15人組に頼ってくれ。

……早々のドロップアウト、お疲れ様」

ああはなりたくないものだ。

その場で適当に、30過ぎくらいの元炭鉱労働者らしき人物を20000Gで買う。

ちなみにだが、あの孤児達のように若い、将来性がある人間は高い。

ならば、即使えて安い中年を買うのは当然の選択肢である。

奴隷委託の手続きを踏んで、宿へ戻った。

醜悪な見た目と臭いの奴隷に道行くひとは眉をひそめていたため、宿に戻り次第すぐ水を用意させて、洗うように『命令』した。

臭いがとれ、髪も整え、顔の汚れも取れた大男は大分マシな面になっていた。

……といっても、最初に比べれば、だが。

「命令『座って動くな』『自由にしゃべることを許可する』」

「……おい、ガキ、どうするつもりだ」

「どうするもなにも、奴隷として迷宮に潜る手伝いでもしてもらおうよ」

「ぐ、がっはは、肝がでえのはいいことだがなあ。

オレはお前の命令に極力従わねえ。

文句も言つし、少しでも隙を見せたら食い殺してやるからなああ」

殺気を垂れ流す大男に、すっかりびびって小さくなってしまっている炭鉱男。

「おいおい、あまり騒ぐなよ。

かわいそうに、こっちの男がすっかり小さくなってしまってるじゃないか」

「オレの知ったこつちやねえなあ」

「どうせあれだろ、お前、このまま売り戻され続けて、なし崩し的に国持ちの奴隷になりたいんだろっ?」

びくんと反応する大男。

その動きにびくんと驚く炭鉱男。

「さつきも思ったが、腹芸するなら演技力も磨くんだな。」

冒険者の奴隷として厳しい労働をさせられ、最後には囷やらで殺されたりするくらいなら、多少は自由がある国保有の奴隷で激戦地で戦った方がマシ……てか？」

「ふん！オレだって何人も奴隷を傷めつけてきたし、囷やら壁にして殺してきた！」

悲惨さは一番知ってるんだよ！ あんな扱いなら、まだ戦場で死んだ方がマシだ！」

「安心しろよ。確かに囷にも壁にもするが、使い潰すつもりはない。」

存外頭は回るようだし……最初汚れて悪臭がしていたのもわざとだろう？

本当という保証は何もないが、無駄に傷めつけないし、飯も国保有の奴隷よりはマシな物を出してやるさ」

「……………」

押し黙り、考えたこんだ様に押し黙る。

様々な打算と、これから取るべき行動を考えているのだろう。

「とりあえず名前を教えるよ。お互い死ななきゃ、長い付き合いになるんだ」

「……ぐふ、がっはっはははは。」

おもしろえなあおまえ、オレあオクラだ。

使い潰さねえで、飯もまともなもんが出てくれるんならまあ、当分は従ってやるよ。

たまには女も抱かせてくれや」

「ふん、贅沢な奴だな。」

オクラ、お前、俺が実はお人好しだったら儲けものとも思っ
て油断させようとしているんだろう？

飯と安全で満足するような目してねえよお前」

「ぐっふふ、わかるよなあ、お前も腐った目してやがるぜえ。」

甘くはないが優しい……って態度見せて、万が一懐けば儲けもの
って思ってたんだろう？」

「く、あっははは、やっぱりわかつちまうもんか。」

俺も演技力、磨かないとなあ。……まあ、これから悪いことも
たんまりする予定だからよ。

きちんと従うなら、お前にもいい目みさせてやるよ。お前も大好きだろ?」

「ぐふははあがっはっはっ。

散々働かせて、絞りとつてた手下に足元掬われた時は終わったと思っただが……。

まだツキは尽きてなかったみてえだなあ。

お前の、ステイルつつたか、ステイル様のお役に立つよう自発的に働くからよ。いい目え見させてくれや」

存外使えそうな奴を拾ったものだ。

これは本当にいい買い物だったかもしれない。

ははは、がっはっはっはと笑い合う小悪党2人。

炭鉱男は、不気味に高笑いする俺たちに完全にひいた様子で顔を青くしていた。

……こいつ、わざと魔物の方に蹴りこんでやるうか。

14話 閑話 同郷の戦士達

14話

閑話 同郷の戦士達

地球から来た、ステイルと同郷の15人は揉めに揉めていた。

サウスタウンに降り立ったその日、早速15人揃って迷宮に挑んだ。

元々ゲームである程度まで攻略していて、おおよその地形や魔物の習性、罠の解除法などわかっているのだ。

魔物との戦いも、センタータウンでの討伐隊で経験済みだ。

高揚はあっても不安はなかった。

なにもかも上手くいくと幻視していたのだ……。

「……散々じゃねえかよ。くそっ」

「うるせえな、てめえらが黙って言うこと聞いとけばよかつたんだよー！」

卑屈な暗そうな男に対し、偉そうにしている茶短髪の、体格の良いいリーダー格の男がわめき散らす。

「いつも思ってたんだがよお、バスカ、なんでそんな偉そうなの？

ゲームでただレベル上げてただけだろ？

だいたいさ、最初から20レベルもあったのに、5年間で12しかレベル上がらないってなんなの？」

「センターには雑魚しか沸かないんだから仕方ねえだろ！ 20にもなっていないやつが生意気な口きいてんじゃねえよ！」

場の雰囲気は荒れている。

酒場の一角は彼らの放つどんよりとした空気で包まれていた。

「やめい、今はそんなことを言いあっている場合ではなかつた。まずは皆が拙者の獅子爆散琥桜拳を会得さえすれば……」

「っ、ああうぜえよお前、いつまでロールプレイ（なりきり）してやがんだでめえ！」

レベルが高いから我慢してたけどよ、気持ちわりいんだよ!」

「むむむっ、聞き捨てならんぞっ今の言葉取り消し……」

「だああちよつとストップ!!」

今は置いておこう、とりあえず、今話し合うべきことは、こんなことじゃないだろう!」

今にも掴みあいになりそうな2人の間に、比較的大人しそうな顔をした、青い髪の痩身の少年が間に割って入った。

「……ちっ」

「じゃあねえ。テリンの言うとおりだ。

というかそもそもだ、あんな下位の魔物程度問題無かつたんだ。

なんで冒険者が、たかがNPCが俺らの妨害してくるわけ?」

「……NPCとかMOBキャラとかいう考えはやめようと言っただろっ。

それで何度もトラブルが起きてるんだ。

こっちの世界に来てもう5年も経ってる。いい加減考え直しなよ」

「NPCはNPC……わかったよ、そんな目で見るなって。」

なんか、ルールを破ったみたいなこと言ってたな」

「……そうそう、俺らが狩ってた連携の間に強引に入ってきて、俺らを分断して」

「んで毒系の魔物のモンスターハウスに追いやられて……」

「なんとか全部魔物倒したら、モンスターハウスの入り口に大量の魔物を引っ張って来やがって……！」

あれじゃMPKじゃねえか！
モンスタープレイヤーキル

故意に冒険者を攻撃するのは違反なんじゃねえのかよ！」

「ゲームの物価と違って、薬系統の値段がかなり高かったからケチって少ししか用意しなかったのがいけなかったね。」

ただでさえ高い毒治療薬を10倍の値段でボラれて、すつからかんだ」

「最悪だよなあいつら……ギルドに文句言いに行ってもてんで相手にしやがらねえし！」

おい、今度あいつら全員迷宮内でぶつ殺そうぜ！

あつちから仕掛けてきてんだ、ギルドもまともに対応しねえし、いけんだろ！」

「もついい加減にしてくれ！」

先程一旦争いを納めたテリンが机を叩きながら立ち上がる。

「君たちは不用意すぎるんだ！ これは現実なんだと、何度も言っているだろう！」

最初から何度も言っただろう、装備につき込むんじゃないで、多少お金をプールしておく必要があると！

ゲームじゃないんだ！ 装備だって消耗するから、買い替えだっている！

いつ誰が瀕死になるかわからないから、いざという時の治療費を取って置くのは当然だろう！

今回だって、下調べをしてから行くことと進言したのに……」

「ああ？テリンお前、いつも口だけじゃねえか！」

レベル15の癖にいつもギャーギャーうるせえなー」

その彼に対し、バスカを中心に、レベルフリークな面々が冷たい目を向ける。

「いつもそつだ。君たちはレベル志向主義過ぎるんだ。」

ゲームの時みたいに死に戻り（デスペナルティー）じゃ済まない

のに、戦略はゲーム自体のまま。

この世界の暗黙の了解すら守ろうとする所か調べようともしない。スキルやステータスやレベルがあっても、結局は現実なんだ。いつまでのそのやり方が通用するなんて、思わないことだね。

……僕はここで抜けさせてもらおうよ」

「はっ、勝手にしろよ。口だけのためえ1人でなにができる！」

そのバスカの言葉に否を唱えるものがいた。

「俺も抜けることにする。テリンに着いて行くぜ。前々から気に食わなかったんだよ、バスカのやり方」

「俺も、ここのやり方には限界を感じていた。抜けさせてもらおう」

「拙者もここにいるわけにはいかな。我が武技を侮辱した者の下にいるつもりはない。」

本来ならば斬って捨てる所だが、同郷のよしみだ。勘弁しておいてやるさう」

「じゃ俺っちも抜けよっかなー」

結局、抜けると宣言したのは、レベルが余り高い方とは言えない4人に、この中でバスカの次にレベルの高い、武士風のしゃべり方を
する1人で5人。

「糞っ、勝手にしやがれ！ 低レベル組に、頭が沸いた侍が1人、
数日中には死ぬだろうさ！」

「どうだろうね、僕に声をかけてくれているクランの人がいるとは、
考えないのかな？」

「はっ、いつもの口からでまかせだろ！ もういい、失せやがれ！」

（最後まで思考を放棄して、どうするつもりなんだろうね。

もしこれが、裏がある話なら、狙いは。

……これは早いうちに離れられて、正解だったかもしれないな）

こうして、15人の少年達は二分されたのだった。

「くそつくそつ、なんでこんなことに……」

「おいバスカ！さつさと壁になれやボケ！ てめえにはその無駄な
図体しか取り柄がねえだろうが！」

「おら、孤児共さつさと囷になって走りまわれ！敵を集める！」

俺様のファイアレインに巻き込まれないようにしろよ！ひゃはあ
あああ

「ひいっ、無理だって、はやく、たすけっ」

「てめえらが25階層でもいけるって言ったんだろっが！はっはっ、
おらいくぞファイアレイン！」

「あちい、あずぢいいい」

「やめっ、まだ逃げきれて、がああああ！」

「ちっ、もっダウンかよ」

「まあいいんじゃないの？ 上出来だろ、今の一網打尽でユニークモンスターも狩れたし。」

うひょお、ついてるぜ！ 見るよ、魔法書だ！」

「ラピッドファイアか、下の上くらいの呪文だが、20万Gは硬いな」

希望の光が見えた。

大量に魔物を狩ったし、魔法書を買った金と合わせれば一人頭24000G程入るだろう。

こっちが格下ということを取り分を半分にされても、一人頭12,000G。

10人で12万Gだ！

「ま、まじか……！きた、きたこれ、火傷しまくった甲斐があった……！」

「よし、よし！これで薬と、低級の魔法書でも買えば……！」

「へっ、壁をし続けた甲斐があったぜ！」

しかし、

「は？何言つてんだお前ら」

彼らの喜びは容易く打ち碎かれる。

「ちゃんと契約したときに言ったよなあ？報酬は撃墜数出来高払い
つてよお。」

つまりは殺した分量で決めるつてことだよ。

そしてその判断は俺に一任されるつて話になってただろ？

あっはっはあ。お前らは聞き流していたけどなあ！」

「そしてえ、わかってると思うが、壁と罟と削りしかしてないお
前らの殺害数は？」

俺達3人とお前ら10人で、20：1つて所か？

お疲れ様だなあ。一人頭1700Gがいい所だ！くはっはっは！」

「んでもって、狩り終了次第現地解散、つてわけだ。これにて解散
っ！つてな。」

ほんとよお、お前ら交渉のこと何も知らないのな？

P Tも形式上のもので、俺ら3人は別P Tにしてるから経験値も大して入ってないだろうし」

バスカら10人とP Tを組んでいた、平均45レベルの3人組が、冷酷に事実を述べる。

「くそっ、でめえらっ、騙したのがあつ」

火傷を負い、うまくしゃべることができない男が、悲鳴ともとれるような声で弾劾するも。

「人聞きが悪いなあ。俺達は契約通りにしてたんだぜえ？」

その追及もさらりとかわされる。

「くそ、くそくそくそくそっ、いいもついい！」

報酬はいいから、こいつらの火傷と傷を治す薬を寄せよ！

薬の支給は、お前らの担当で、契約に入っていただろ！」

せめて傷ついた仲間を、このまま放っておけば、間違いなく致命傷になってしまふ仲間を救おうとした言葉も。

「はあい残念。」

契約では、『PTを組んでいる間、戦闘に支障が出るレベルのけがをした場合薬を支給する』だったよなあ。

もうPTは組んでないし？ PT解散のタイミングも、俺に一任されてるしねえ」

愕然とし、凍りつく10人。

「ふっ、ふふふざけんじゃねえぞ！ふざけんじゃねえぞおおおおお おおおおおお」

バスカが愛用の剣を握りしめる。

「お？やる？こっちの平均レベル、そっちの2倍だけど。

君ら大半半死半生だしねえ。正当防衛なら殺しても罪にならないし、大歓迎だよ」

「まーまー、あんまいじめてやるなつて。

いいよ、火傷治療薬に傷薬、売ってあげる……君らの装備全部と、有り金全部と、奴隷契約承認と引き換えにねえ」

にやにやと、嫌らしい笑みを浮かべる3人組。

バスカは怒りのあまり血管が浮かび上がり、視野が酷く狭窄していた。

「な、ふ、ふざけんじゃねえぞ！ 奴隷契約の強制は、冒険者のルール違反だろ！

しかも今回は完全に嵌めてるじゃねえか！ 言い逃れなんか出来ねえぞ！」

「そうだねえ、普通ならこんなことしたら、まともにギルドでPT組めなくなっちゃうんだけどねえ。」

君ら、新人の癖に暴れすぎたんだよ。

今回のこれもね、ギルド内での最大派閥で暗黙の了解が出ることになってるんだ」

「そーそ。これは間違いなく君らの同輩だろうけど、君らの情報を売った人がいてね。」

御親切に、君達の装備とおおまかなレベル、性格と集まりの序列までこと細かく……ね。」

お陰で君達の仲間の交渉を一手に引き受けていた、頭の回る子達は引き抜いて、内部分裂させるのは簡単だったよ」

「いやあでもまさか、いくら交渉役じゃないにしても、甘すぎですよ。」

自分達の生命線の薬を、いくらこっちが用意するって言っても丸々信用して持ってこないなんて」

呆然とする10人。

その静寂をバス力が破った。

「……くそふざけんな！ 俺は装備も渡さないし奴隷にもならない！ まだ動けるんだからな！」

「なっ、ふざけんなよ！ お前が考え無しに飛びついて、薬代まで武器につき込むからこんなことに……！」

「うるせえうるっせえ！」

動ける奴、さっさと行くぞ！……覚えてるよ、いつか絶対殺してやる……！」

「お、おい、見捨てるのかよ」

「じゃあお前、奴隷になりたいのか！」

比較的軽症な男が慌てたように問うが、その返された問いに是と答えることはできなかった。

「……わかった」

「っ、み、見捨てるのかよ！ まってくれよ！」

そうして、動ける6人を引き連れてバス力はそそくさとその場を後にした。

残された4人は。

「冷たい奴らだねえあいつら。」

仕方ないから、所有物全部と君らの奴隷権でいいよ。はい、この契約書に血判押したら、命は助かるよー」

奴隷に身を落とした。

14話 閑話 同郷の戦士達（後書き）

25階層での出来事。魔石と通常ドロップ品で30000〜80000程度の稼ぎを見越しています。

バスカ君達の捨て身の壁、釣りとファイアレインで13万Gと多めに稼ぎ、魔法書で20万G合計33万Gを、20：1でわけて、バスカ君達の稼ぎは16500G。一人頭16500Gです。お疲れ様
っ！

15話 ゲート

15話

ゲート

装備品

スタイル

レベル23

羽鋼のバスタードソード

良質な鋼鉄の短槍（縮小）

鋼鉄のラウンドシールド

火のナイフ

胴：鋼鉄のスプリントメイル

手：鋼鉄のガントレット

足：鋼鉄のグリーブ

頭：鋼鉄のチエインフード

指：火のガードリング 「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」

：毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」

手：敏捷の腕輪「敏捷+」

：知力の腕輪「知力+」

足：隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」

：敏捷のアンクレット「敏捷+」「防御微増」

首：

耳：

所持金 141000G

オクラ

レベル 67

良質な鋼鉄のアクセス

鋼鉄のナイフ×2

胴：鋼鉄のプレートメイル

手：鋼鉄のガントレット

足：鋼鉄のグリーブ

頭：鋼鉄のグレートヘルム

指：力の指輪？「力++」

：回復のリング 「時間回復上昇」「軽傷回復×5」

手：

：

足：器用のアンクレット「器用+」

:

首：

耳：

「よし、今日は真面目に迷宮探索だ。基本的に寄り道、悪だくみは無し。目標は30階でゲート登録だ」

スタイルはフル装備を終え、そう告げた。

「ああ、しかしおでれーたな。まさか数日前に来たばかりの孤児だったとは……」

「人は見掛けによらないものさ。いやしかし自発的に協力してくれて本当に助かるよ。」

今までは、基本的な知識がないことを悟られないように遠回りに情報屋とやり取りしたり、酒場で噂話を盗み聞いたり。

あとははったりで誤魔化してきたからな」

「胸張っていうことじゃ……いや、確かに胸張って言うていいかもしれねえな」

干し肉を食いちぎりながら、くっちゃくっちゃと汚らしくしゃべるオクラ。

呆れながらも、どこか頼もしげに見つめてくる。

まあ、狡賢くはあってもあまり腹芸は得意ではなさそうであったし、そこら辺は一任できることの安心感があるのだろう。

「しっかし、ランクが低いとは言ってもよくこれだけ魔法装飾品やら武器防具を持ってやがるな」

「その辺は略奪品だな。ぶっ壊れた物以外はできる限り売るのは避けている。」

大抵買い叩かれるのがオチだからな」

「がっはは、違いねえ」

「さて、10階層までは駆け抜けてきたけど、ここからは慎重にいかないとな」

「ああ、こっから先は分かりにくい罠が多いからな」

とは言っても、この階層レベルなら大した問題はない。

称号：隠密、鍵開け名人など盗賊系の補正があるため、専門の称号が無くても多少の補正を受けることができるのだ。

「GARUAAA」

「ゴブリンお出まし」

「がっはは、久々の戦闘だ。オレにやらせる」

『スマツシュ』

斧スキルスマツシュ。スキルの力を借りた無造作に振りぬくだけの一撃だ。

基本技であるスマツシュも、67レベルという中級冒険者でも上位であるオクラのものを、ただの洞窟ゴブリン風情が防げるはずも無く、頭から肩まで綺麗に吹き飛んだ。

「汚いな」

「おいおい、オレの豪快な技を見て言うことかあそれ？」

「わあすごい。おじさん、ゴブリンの魔石……ああ、飛び散りすぎてどこにあるかわかんないね。やっぱりいいよ、進もうか」

「……いや、正直すまんかった」

『隼斬り』

羽鋼の軽さから放たれる隼斬りは、4つの刃となって突出していた斧オークに襲いかかる。

「GUGYAAAAA」

先頭の斧オークの頭をばらばらにしたところで、後続のオーク4体が斧やメイスを振りかぶって襲いかかってくる。

「スイッチ」

「ぐはは、任せろ、いざ必殺の……!!」

『ドラムクラッシュ』

体中の筋肉をみちみちとを引絞り、頭上から斜めに叩きつけるように振りおろす。

先頭のオークが弾けるようにして絶命し、その勢いのまま他2体の手足を巻き添えに吹き飛ばした。

「GYAGUAAAAA」

ドラムクラッシュの範囲外にいたオークが、怒りにまかせて襲いかかるものの、

『真空斬り』

届かない。

高速で振られた羽鋼の剣から放たれたかまいたちで利き手から頭までずたばろに刻まれ、その命を終えた。

「おいおい……真空斬りでその威力ってどういことだよ」

「そこら辺は気にするな。あ、おじさん、魔石とドロップ品回収よろしく」

「は、はい……」

「お前のスキル、尋常じゃないな。いくら羽鋼っていつても、隼斬りで4連攻撃なんて出せるもんじゃねえよ」

「まあ、趣味が鍛練だった時期があつてな。大抵の武器は使いこなせる」

「底が知れねえな……。それでレベルが23……ああ上がったんだつたか、24レベルだったのが信じられねえよ」

「さっきも一つ上がったから25だね。それと余り人がいる所でしゃべるなよ。」

お前にレベルを教えたのも、首輪つけてるからだからな」

「ああ、わかってるさ。見えたぞ、あそこがゲートポイントだ」

魔物がゲートエリア内に入らないように見張りが数人巡回していた。

ゲートは冒険者の命綱と言ってもいい存在だ、その分求められる腕前も高いが、給料はいい。

「いらっしやい。あんた、初めて？」

特に個性の無い顔立ちの女が、ゲート横の小屋で受付をしていた。

「ああ、登録を頼む」

「ギルドカードを出して、こっちの石に血を垂らして」

言われるがままにカードを出し、血を垂らす。

「っ！あんた、ギルドランク最下級じゃないか。」

「っていつか登録してから数日、入場記録はあるのに魔石提出も到達階層報告もなしって……あんたなにしてたんだい」

「ああ、面倒だったしまだ金には困ってないからな。まあある程度貯まったらまとめて持っていくことにするよ」

「というのは建前で、最低1人は従者なりPTなりを作るまではギルドに近づくつもりが無かったただけだが。」

「はあん。しかしなんでまたいきなり……」

「詮索が趣味なのか？ それとも俺の思い違いで、ゲート登録にはインタビューなんて儀式があったのかな」

「ちっ、生意気なガキだね。……まあいいさ。

で、そっちの大男さんはどうすんだい？」

「延長手続きは割と最近にしてるから、今は別にしなくていいぞ」

「だそうだよ。俺だけで結構だ」

「はいはい、新規登録だから2万G頂くよ」

庶民からすれば非常に高い　　が、冒険者からすれば必要経費だ。

「ほら、2万Gだ。　　所で、最近新人は登録に来たか？」

「新人ねえ……どうだったかね、最近忘れっぽくてね」

銀貨を放ってやる。

「ああ、思い出したよ。女っぽい顔をした孤児出身のガキが女連れで来てたね」

ぴんときた。

「まさか、そいつの名前はオリシュっていうんじゃない」

「ああ、そんな名前だったね」

「そして、その連れの女は美人だったろう」

「……なんだい、知ってるのかい。そうだね、美形の剣士って感じだったかな」

「なるほど、なるほど……参考になったよ、ありがとう」

そう言い残してその場を後にした。

「オリシュだったか？ありや何の話だ。楽しいネタか？」

オクラがにやつきながら話しかけてくる。

どうせ、一儲けできるか、いい思いができる話だとも思っているんだらう。

「残念だが、お前の思っているような話と直結しているわけじゃない。

……ただ、そいつらの周りには常にイベントが起きるんだ」

「イベント？祭りかなんかか？」

「いいや。例えば、その階層にふさわしくないレベルの敵がまぎれこんでいたり。」

例えば、たまたまひっかつた罠に落ちた先にボスがいて、倒したらレアな武器を手にしたり。

例えば、いつの間にか大規模な陰謀に巻き込まれていたり」

「……なんだそりゃあ。近づきたくねえ奴らがいるもんだな」

「その通り……普通に考えれば、だがな。そういった大きな事件が起こると、人間も、お金も、物も激しく動き出すんだよ。」

彼らが引き寄せる強敵っていうのは、倒すと、驚くほどの経験値や称号、アイテムが手に入ることがほとんどだ」

「ぐっはは、なんだか絵本の物語みたいな話だな」

「はっははは。まさにその通りだな。主人公ヒーローが持っている、事件を引き寄せる力。」

”主人公補正”っていうのは確かに存在する、俺はそう思っている」

(そういえば、いつからだっただかな。俺が”補正持ち”が憎くなっただのは)

「はあん。なんだかよくわかんねえ話だな。占いかなんかか？」

（憎くなったのは……？　なんで俺はまず”補正持ち”やイベント、シナリオなんて与太話を信じ込んでいるだ？

というより俺はどこでそんな知識を　　）

「おい、おーいスタイル。どうした？」

「ん、ああいやなんでもない。

別に信じなくてもいいさ、ジnkクスみたいなものだ。

しかしだ、もしジnkクスが当たって、うまいことつかず離れず距離を保ち、絶妙なタイミングで介入できれば……」

ひゅひゅひゅん、と羽鋼の剣を振る。

「こんな風に、分不相応な物を手に入れることができるのさ」

「そのバスタードソード、まさか……」

「”補正持ち”が15階層で騎士^{ナイト}オークのユニークと戦っていてね。うまいこと介入して手に入れたのさ」

「15階でナイト種のユニーク……？　くっ、がっはっはははは！
なるほど、なるほどなあ！

それが本当ならあながちありえねえ話でもねえなあ！」

「一度覚えれば忘れないよ、奴らの気配は。」

強い求心力。引力のような魅力だ。お前と同時期に奴隷商に入っ
た奴隷のエルフがいただろう」

「ああ、500万Gとかいうふざけた額の女だな……まあ確かに、
嫌に目というか、気が惹かれる感じはしたけどよ」

「漠然とでいい。もしかして、と思ったら言ってくれ。なにかつま
い話でも横取りできるかもしれない。」

……今日はとりあえず、いけるところまで行ってみるか」

（　　）　　そうだ、普通じゃありえない。15階層でユニークが出るな
んて。　　あんな圧力や魅力を感じるなんて、あり得ない。そうだろ
う。

シナリオってというのはあれだろう。所謂普通のアニメや漫画なら
こうなるだろうな、っていうテンプレートみたいなものだろう。

普通じゃあり得ない。あいつらは普通じゃない。そうだ、憎たら
しい奴らめ　　（　　）

「おいステイルー？」

「いや、今行く。すまん」

40階層

「くつ、『隼斬り』『偽疾風突き』」

みちみちつと腕の筋肉が悲鳴をあげる。

隼斬りでホーンウルフの顎から先を斬り落とす。

スキル発動直後の硬直を、マクロで無理矢理発動した偽疾風突きで強引に埋め、オークの横から忍び寄っていたアシッドスライム（酸性流動体）の核を貫いた。

「GUOAAAAA」

後ろから襲いかかる剣闘虫ブレイドビートルの一撃　避けきれないかッ。

「ちいつ、『見切り』『金剛身』『シールドバツシュ』」

攻撃の軌道見切って芯を外し、素手スキル金剛身でダメージを抑え、盾スキルシールドバツシュでビートルの攻撃を弾き、体勢を崩し素早くスイッチ。

数々の熟練度をMAXに上げた者でないと出来ない芸当　複数スキルの組み合わせ　だ。

もうそろそろ呼吸を合わせるのにも慣れ、阿吽の呼吸とまでは言わないが、無言でスイッチ（攻守、位置交代）ができるようになったのはでかい。

命がけなので、お互い必死なのだ。

「がああああ、くたばっれえええええ」

『兜割り』

オクラが素早く前に出て、ブレイドビートルを真っ二つに斬り落としました。

「くそっ、キリがないな……オクラ、一旦下がるぞ」

「だあ、やっぱり2人じゃ無理があるなあ。壁するから体勢立て直してくれ」

剣をしまい弓を構える。

『五月雨射ち』 『偽五月雨射ち』

追撃を仕掛けてくるニードルバット（針蝙蝠）や亜種ゴブリン、ウルフ、スライムなどの魔物に雨あられと矢を浴びせてやる。

「おいステイル、エレメンタル族が来やがった！ 火の奴だなんとかしてくれ！」

「ちっ……」

エレメンタル族は物理攻撃が非常に効きづらい。

それはスライムも同じだが、スライムならば俺くらいのスキルがあれば核を正確に狙いつてるから問題ない。

エレメンタル族相手に戦う場合、魔法か属性武器で戦うのがいいのだが、手持ちの火属性のナイフでは火のエレメンタルに有効なダメージが入りにくい。

「俺から行く、後に続け！」

『シヨックウエーブ』 『偽真空斬り』

ああくそ今日で何回目だ？

偽真空斬り 肉体の動きの模倣のみでスキルを再現するために、通常の真空斬りよりさらに出力（倍率）を上げた筋肉の動きに、腕の筋肉が悲鳴をあげる。

無茶なスキル発動が多すぎて、HPは回復しても筋肉疲労の方は厳しい。

2連続の 대기ごと攻撃するスキルが それもスキルランクMAX状態のものが 余波で周りの雑魚魔物を巻き込みながら吹き荒れる。

本来1体、精々2体程度を攻撃するスキルだが、スキルレベルの高さによって生じる、副次的攻撃であるかまいたちや広範囲に広がる衝撃波で、レッドエレメンタルが揺らいで小さくなっている。

「今だ！」

「おつさー！」

『ドラムクラッシュ』

大上段からの斧の一撃が、質量の嵐となり揺らいでいたレッドエレメンタルをちりじりに吹き飛ばした。

「ぜつ、はああ……しんど」

一旦敵の少ない地点に引いた俺達は、武器の整備と体の休息をとっていた。

おっさんに手伝わせ、特に疲労の激しい右腕に回復薬を塗り込んでいく。

ああ糞、こんな時綺麗どころの女だったら回復力が　精神的な
段違いなのに。

「がっはは、だが、たった2人でしかも魔法無しで40階層を戦えるなんて、あるもんじゃねえぞ。」

お前がどういいう手品か、スキル連発でそれだけ蹴散らせるからで
きる芸当だな」

「おかげでまた2つレベル上がって27だぞ」

「敵が50レベル付近ばかりだからな。格上補正で経験値が割り増しになってるんだろう」

「……今日中に50階はさすがに無理か。というか、レッドエレメンタルが厄介だ。」

火属性じゃ手持ちの武器じゃ辛いし、魔力をいくら込めても火のナイフのランクじゃ出力が足りない。

理想は無属性のランクの高い魔法武器……だが予算が足りる筈もない。

せめて魔力が通りやすい銀製の武器を買ってくるべきか」

「そりゃあなあ。

属性付きの魔法武器の方が同じ予算でも威力が上だが、一つしか武器を持たないなら属性は無い方がいいな。

というか、20レベルでサウスタウンに来て数日で40階層なんて、普通あり得ねえぞ。

そんなに先に進むことを考えるより、ここいらでレベルを上げること考えた方がいいんじゃないか？」

「普通なら、な。

”補正持ち”の奴らは驚くべき短期間で成長する。

ああ、お前にはまだわからないんだっただな。……異常にトラブルにあつ代わりに成長する機会が多いと思えばいい。

オーバーかもしれないが、”補正”が強い奴なら、迷宮に行くと毎回ユニークモンスターが複数出るレベルだと予想している」

「ぐふ、ぐっはっはっは。おいおい、そんなことありえたらユニーク狩りを中心にしてる奴らから闇討ちされるぞ」

「だから理解しなくてもいいと言っているだろう。」

俺も自分で言ってる、なんでこんな与太話を……って困惑するところがあるんだ。

まあ兎に角だ。どういったわけか俺の同世代には”補正持ち”が大量にいるみたいなんだ……。

オリシユって奴はごく最近30階層まで来てる、ってことはだ、イベントが起きるはずなんだ。初ゲート登録なんていう切りのいい物語の節目的に考えて。

手柄を横取りするチャンスがあるかもしれない。

もしチャンスがあっても、その時にそいつらを超越した、最低限ついていけるだけの強さを持っていないと後悔する羽目になるだろう

「まだイベントってのは見た事ねえし、フラグ？なんかよくわかんねけどよお。」

お前がそこまで言うなら……がっはは、あながち虚言ってわけでもねえだろ。楽しみだな、ぐふ、ぐははっはは

獲得品

レベル23 27

魔石、換金ドロップ品 2万G相当

鋼鉄のレイピア 売却

15話 ゲート(後書き)

16話 略奪

16話

略奪

オーバーワークで疲れた俺達は30階層まで降り、迷宮入口付近のゲートに転移した。

ゲートから離れ、人気も魔物気も少ない隅に移動する。

内密に話をするなら、下手な所よりも、広大な面積の迷宮内の人も魔物も気配の薄い所の方が良い。

「オクラ、お前は奴隷になる前の、冒険者時代のツテ、まだあるだろうか？」

ギルドで中級冒険者レベルの奴らに声掛けておいてくれ。気のい

いご主人様ができたってな」

「ああ、そろそろ名前広めていく気か。

孤児出身の駆け出しでも、30階層に登録済みならある程度のレベルはあるって思われるもんな。

……実際は、まだ20代なわけだが」

「そういつことだ。これで酒でも飲みながら話してる。後で合流する。

……可能な限り、”補正持ち”の噂も集めておいてくれ。さりげなく、話の流れで構わない」

銀貨を数枚放り投げる。

「ぐっはは、任せとけ！ オレが認めたご主人様つつたら、舐められることあねえからよ！」

「荷物持ちのおっさんにも1杯位飲ませてやれよ。俺はこの、下位層の掃除人スワイパーと交渉せねばならん」

「ああん？交渉？」

「そろそろ「掃除人」……格下の戦闘が有利になる称号も欲しい頃合いだ。あいつらに引っ張ってきて貰った雑魚を掃討しまくればその内とれそうだろ？」

褒章は払った上で、狩りで出た魔石とアイテムはあっちに全部渡すという契約で……だめでも、まあ顔見せと挨拶をしておくさ」

「おうわかった、んじゃあ、後でな」

そう言って別れ、ステイルは単身掃除人^{スイーパー}を探す。

夜も近いためか人も減ってきている。

もうスイーパーの面々は引き揚げていてもおかしくないな……無駄手間だったか？

夜になると魔物は獰猛性を増すため、機械的に格下の魔物を挑発し集め、一気に掃討するという繰り返し^{の指揮を取るスイーパーと、その取り巻き達にとっては割に合わない戦闘になるのだ。}

よって今からの時間は、スイーパー達の中に加えて貰えなかったはぐれものや、上の階層に進むことのできない新人達が割に合わないながらも入れ替わりで戦うのだ。

(丁度入れ替わりの時間で人数がぐくくとへるこの時間 嫌な予感がするな)

丁度魔物が出現しにくく、それ故冒険者も少ないスポットにいる。

ここはまずいな、さつさと離れるか……。

その時後ろから走り寄ってくる人間がいた。

「よお、誰を探してんだよ」

茶髪で短髪、ラグビーでもやっていそうな体格　冒険者ではあり
ふれているが　をしている男。

同郷の15人組のリーダー格をしていた、バスカ……だったか。

隣に見たことの無い、いかにも悪いことが好きそうな人相の男が、
にやにやとこつちを見て笑っている。

「……この階層の掃除人スイーパーの指揮とってる人に用があつてね」

「おお奇遇だな、そいつなら居る場所を知ってる。案内してやる、
ついてこいよ」

嫌な予感的中。

1階層で狩りをしないため、地形をあまり把握してないことが仇と
なつたか。

……あれか？　俺がこいつらの情報売ったのがどっかから漏れたの
か？

「いや結構だ。日を改めることに……」

「おいバスカだめだ、そんなに馬鹿じゃねえよこいつ」

「ちっ、黙ってさっさと着いて来いよ！ 逃がしやしねえぞ！」

さりげなく散っていたのだろう。

見覚えのある、同郷の孤児戦士が1人と、こちらは見覚えの無い男が3m程後ろについた。

見覚えの無い2人は、俺を狩るために雇ったのだろう。

「へっへへ、下手に逃げようとすんじゃねえぞ。

どんな手品使ったか知らねえが、早々に羽鋼製の武器なんざ手に入れやがって生意気なんだよ！

こっちはお前が新人つて知ってるんだ。精々あつてレベル20だろ……この人たちはな、30階のゲートに登録してる面子なんだ。

羽鋼持つてようが、お前が敵う相手じゃねえんだよ」

「ってか、まず4対1だしなあ。げっへっへへへ」

「装備、アイテムに有り金全部、置いてけば命だけは助けてやるぜ。

おっと、迷宮の方のギルドカードもだな。

そいつを割つちまえば俺達が襲ったって証拠は残らねえしな」

迷宮ギルドカードには、迷宮という犯罪に打つてつけの場所での冒険者同士の不当な略奪の防止のため、効果は迷宮のみだが、記録魔法がかかっているのだ。

明らかな違法行為や略奪があつた場合、被害者側がギルドカードを提出することで被害を訴え出ることができる。

ただし、逃げきれずにカードを壊れてしまえば証拠は残らない。

奴隷の売買の場合は、売られる奴隷側の記憶を一通りチェックするため、暴力で強引に奴隷にすることはできないが、略奪のみならば逃げられさえしなければ問題無いのだ。

基本的に襲われた側は、逃げるか返り討ちにするしかない。

争いが絶えぬこの世界で、人間同士の争いはなるべく防止せねばならないが、いちいち弱者にまで万全の身の安全を保証する余裕はないのだ。

襲う側は、疲れ切った相手に万全を期して襲うのだから、基本的に逃げの一手しかないのだ……あくまで、基本的には。

（はあ、こういうことがないように、30階層登録つてのを喧伝してもらおうとしていたのに……。タイミング最悪だなこいつら。

おそらく俺がこの数日で30階層に到達したのを知ったら、こいつらも手を出さなかっただろうし)

「それにしてもどうしたんだい、バスカ。15人もいたのに、お前を入れてもう2人か。随分と減ってるじゃないか」

にやにやと、余裕の笑みを作りながら挑発してやる

「う、うるせえ！」

「半分は離反、4人奴隷になって2人は離れていつちまって散々らしいじゃないか。

はっははは、哀れだなあお前」

「……………まさか、お前か!? 俺達の情報を買ったのは! 同じ馬車だったよなあ!」

(4対1……………装備と立ち姿を見るからに2人は40レベル相当かな。30階層登録済みつてのは間違いじゃなさそうだ。

伊達にセンタータウン時代から冒険者狩りはしてないよ。

60レベル以上がいるか、もっと人数が多ければまずかった。…

…「こつも都合よく『倒せて、尚且つひん剥いたらおいしいレベル帯』の冒険者を連れてきてくれるなんてな。

「歩行距離」の称号補正で逃げるだけなら容易い……しかしうまくやれば大儲けだな」

「おい、聞いてんのか!」

「言いがかりはよしてくれよ。つくはは……まあ、情報を買ったのは俺だけどね」

「て、でめええええ!」

「おい待て、こじじゃまずい!」

バスカを隣の冒険者が止めに入ったのを確認した瞬間、持ち前の敏捷と「歩行距離」の称号に物を言わせたダッシュで、囲まれた状況から離脱する。

「て、てめえ待ちやがれ!」

「くそつ、絶対逃がすな、賞金首なんて勘弁だぞ、俺あつ」

(囲まれないように、追いつけるぐらいの速度で、奴らが人気の無い所に俺を誘導しやすいように走ってやればいい)

1階層は人が多いが、それ以上に広い。

魔物の沸きにくい場所もある程度は決まっているので、意外と人が少ない場所が多いのだ。

ついに1階層の端の壁が見えてきた。

ここから先は逃げ場が無い……まずいつ、という顔を見せながら、武器で牽制しつつ、振り向いてやる。

「へっへへ、馬鹿め、情報通り背伸びして上の階層に行ってるから、地形を知らねえんだな」

「逃げ場はないぜえ……手こずらせやがって。こいつ命は取らないでおいてやろうと思ったが、もうやめだ」

「ぜえっ、ぜっ、こいつ足はええ……」

もうすでに勝ったつもりで強奪後の相談をしてやがる。

後ろを取らせないよう、囲まれないようにじわじわと少しずつ動きながら、剣から槍へと持ちかえ、邪魔になった盾を後ろに放る。

……準備は整った。囲まれない内に、一番単純かつ30階層の2人組ほど攻撃力の無いバスカを挑発する。

「……っていうか、1階層でこんな強引な強奪するのも大概馬鹿のすることだろ。」

リスク高すぎっていったらこっちが上だっつーの。

おっと悪い、そんなこともわからないから、今じゃたった二人になっちまったんだっついな」

「うるせえっ、脅されたらさっさと差しだしやいいんだよ！」スラッ
ッシユ』！」

激高したバスカが、周りが止める間も無く、絡め手も無しに大振りに剣を振りおろしてくる。

迂闊な馬鹿が、1人突出しやがって……。

受け流すまでもない。

素手スキルを磨いてMAXレベルに達した『見切り』で、わざと紙一重でかわし、隙だらけになった所に

『スマツシユ』

槍の石突きで、バスカの頭を長柄基本スキルのスマツシユで打ち据える。

長柄スキルは体勢を崩させる（スタン属性）スキルが多く、基本技であるスマツシユもまた例外ではない。

この一撃で脳震盪を起こし気絶したようだ。

「なっ、はええ！」

「おい一瞬かよっ」

「ばっ、バスカあああ！」

40代の2人は驚き慌てて攻撃しようとしてくる。

同郷の1人は……いい的だな、腰が引けてやがる。

スキル後のほんの僅かな硬直だが、油断せずバスカの体を盾にして万全の態勢を保つ。

「おるああっ」

「しっ」

腰が引けて動けない足手まといは放っておかれ、40代2人は同時に攻撃を仕掛けてくる。

あえて僅かだが隙の生まれるスキルは使わず、お互いの際をカバーし合う、対人戦に特化したなかなかのコンビネーションだが……。

「くっ、こいつなんだ！？ 槍さばきが半端じゃねえぞ！」

「っ、……まともに攻撃が通らねえ！」

H P M Pなどのステータス以外は称号と鍛練で伸びているため、単純な力などのステータスは俺の方が上だろう。

さらにこちらとあちらでは、技術に差があり過ぎる……2対1でも圧倒できる。

槍とメイスでタイミング良く攻撃してきているが、疲れが見え始めて、攻撃に精彩が欠けている。

思わず大振りになったのであろう、勢いよく繰り出される槍を卓越したポールウエポン（棒状の武器）の技術で受け流し、槍持ちの体勢がぐっくと崩れる。

「くっ、まずっ」

「ちいつ、くらええええ！ 『ハードラッシュ』」

メイス持ちが限界を悟ったのか、一か八かスキルを放つ。

『ハードラッシュ』、体のスペックに応じた力で振りまわされる質量の嵐……しかしスキルレベルが低いのか、2連撃で終わってしま

う。

まともに牽制もできてないのにそんな大振りな攻撃に当たるはずもなく、ラッシュをサイドステップでかわし、

『足払い』

上手く並んだ2人まとめて強烈な足払いを仕掛けた。

「がっ」

「ぐあぐっ、くそ」

「沈めっ」

『大車輪』

槍を乱回転させながら縦横無尽に打ち据える。

といっても片方は槍の刃がついているので、致命傷を与えないように注意しながら、だが。

「あっ、ぐ……かほっ」

「ぐ、づええ……」

「ひ、ひ……」

「ふう……終わったか」

油断なく構え、薬が入っているであろう荷物袋を槍で切り離し手元に引き寄せる。

そうして縄を取り出し、腰が抜けて逃げることにすらできなかった、情けない同郷に縄を投げ渡す。

「死にたくなかったら、武装解除して荷物をこっちに寄こして、この3人を縄で縛れ。ほらさっさと動けっ！」

「ひ、はひいつ、はい、はいやりますっ」

手が震えて非常に手際が悪く、何度か体を打ち据えながら、ぐずぐずしている間に回復されてはかなわないと、結局俺が全員を縛った。

「ちっ、手間掛けさせやがって。おら、全員ついて来い」

腰を抜かしていた腑抜けと、気絶状態から文字通り叩き起こしたバズカに、動けそうにない冒険者2人を担がせ迷宮を出る。

1階層で狩りをしていた面々が一斉にこちらを見ていたが……そろそろ名を売りたいと思っていた所だ、丁度いいだろうとほくそ笑んだ。

獲得品

錬鉄の剣

錬鉄の剣

良質な鋼鉄の剣

良質な鋼鉄の槍

鋼鉄のメイス

錬鉄のフルプレートアーマー

鋼鉄の軽装セット

硬皮の鎧セット

錬鉄の重装セット

風のナイフ

力の腕輪 x 2

敏捷の腕輪 ?

敏捷の腕輪

力の指輪 x 2

敏捷の指輪 x 2

力のアンクレット x 2

敏捷のアンクレット ?

敏捷のアンクレット

消費アイテム諸々

180000G

17話 罪人、罪人を嘲笑う

17話

罪人、罪人を嘲笑う

迷宮ギルドの扉を勢いよく開く。

壁にぶつかり、予想以上の音を立ててしまった。

「建付け悪いなこの扉、騒がせて申し訳ない」

「しょうがないでしょう、丁度今のあなたみたいに乱暴に扱ってくれちゃう荒くれ者ばかりなんだもの。」

「いちいち替えてたらいくらお金があっても足りないわ」

アッシュブロンドの長髪の、切れ長な目をした女が不満そうな目付きでこちらを睨んでくる。

この人が噂に聞く、美人ギルド長ってやつだろう。

「おお、ステイルおせえぞ！

貰った金分もう飲んじゃった！がっはっは……は？ なんだその
フン縛った奴ら」

「あら、あんたが噂のオクラのご主人様？

オクラが自発的に動くななんてどんないかついおっさんかと思っ
たら、随分かわいい子じゃない」

流石に冒険者の中でもとびきり荒くれ者の多い、迷宮ギルドの経営
を任されているだけある。

表情一つ変えないどころか、反応すらせずこちらからの報告を待っ
ている。

「1階層で待ち伏せされていたらしく、襲われたから叩きのめして
やったんだ。

はい、全員分のギルドカード。記憶読みとりよろしく」

「1階層でだなんて大胆だねえ。あんたらそれだけ度胸があるなら
真っ当に迷宮に潜りなさいよ」

「人間は怖いね。魔物なんかよりずっと怖い。

……ギルド規約では、強奪、殺傷を返り討ちにして捕獲したら、相手の財産全没収に加害者を奴隷化できるんだろっ？」

そう、相手が人間に害をなす存在でも、魔物と戦うこの国にとって無駄にして良い命はない。

もし被害者が加害者を返り討ちにしても、普通なら皆殺しにする。

漫画やアニメのように情けを掛けて命を助けても、後で逆襲される可能性がある、というより限り無く高いからだ。

そこで利点を設けることで、手間をかけてでもできるだけ生かしてもらおうというのだ。

「ぐ、くそっ……いやだ、奴隷はいやだ」

「……………」

「す、すまなかった、ごめんなさい、ステイルさん、勘弁してくださいー！」

俺達同じ孤児仲間なんだ！ 生きるのに精いっぱい、わかるだろ！？」

「だ、だすげで……」
「べんだぞ……」
「めんなさい……」

30階層の2人は俯き沈んでおり、同郷の2人は必死に哀願している。

「こう言ってるみたいだけどどうするんだい？」

……あつはは、その顔じゃあ聞くまでもなかったかね」

にやにやと嫌な笑顔で問いかけてくるギルド長。

「当然だろう。とつとと首輪をつけて貰っても？ 雑音が耳障りだ」

「ぐは、がっはっはっはっはっ！ 見たかお前ら！こいつがオレのいかしたご主人だ！」

「うははっは、おいおいまじで元孤児かよそいつ！すげえなおい！」

「いかしたガキじゃねえか！」

「最近のガキはこええなあ……」

「おいお前なんつったか……まあいい来いよ！一杯奢ってやるぜ！」

オクラが予想以上に盛り上げておいてくれたようだ。

自発的にここまでしてくれるとは、2倍の額を出してもまったく惜しくないいい買い物だった……今夜は娼婦でも呼んでやるか。

「ああ、ご相伴に預かるうかな」

「しんごい」

散々浴びる様に飲まされて、その場にいた全員が大方潰れるか解散すると、ギルド長がいるカウンターに座った。

「で、あの奴隷はどうするつもりだい？」

「つぶあ、ああ……失礼ギルド長」

「オーサよ。ステイル君。」

散々飲まされていたものね……でもあんた、強烈な酔い覚まし飲んでから酒飲んだでしょ」

「ああ、やっぱり分かる人には誤魔化せないもんだね。っていつても、あれだけ飲めば酔いも回るよ」

「ふーん、どうだか」

「まあそれはいいじゃないか。あいつらだけど、全員売るよ。手続きと仲介よろしく」

「へえ、あなたのPTって2人だろ？ 使い勝手のいい奴隷を手放しちまっていいのかい？」

40レベル代が二人追加されたら随分稼げるだろうに」

「足手まといはいらないね」

ギラリと、オーサの目が鋭く光る。

「ふうん、どうにかする手段があるのね。人手か、火力か」

「……………」

あそこに寝てるやつらのツケで、一杯頼むよ」

見た感じ若く見えるが、全てを見透かされているかのような、百戦錬磨の風格を感じる。

俺程度の小物の小細工など意味をなさない、絶対的な格差。

やはり経験というものだけは誤魔化しようがなく、自らの手で積み上げるしかないだろう。

「……はい、手続き終了。」

奴隷販売の手数料に代理手続き代金を抜いて、奴隷市場で実際に売れた値段の6割か、即金がいいなら予想売り値の5割ね。

どっちがいいかしら？」

丁度いい、セクタータウンの倉庫にぶち込んである、うかつな冒険者達のなれの果てから剥ぎ取った、大量の装備品をまとめて整理するいい機会だな。

大量の装備品を持っていることで目をつけられるのを避けるため、極力装備を売るのを避け隠し持っていたが、このどさくさに紛れておくか。

……しかし、普通ならばつきり言ってこんな出所の怪しい大量の装備を売るうとすれば色んな所から難癖がつくだろう。

今回はギルドと交渉をして、気のきく相手として認識してもらいたい機会だ。

そのために、儲け分の一部はギルドに流れるように譲歩した交渉を行わねばならない。

私はギルドに利益をもたらします、というパフォーマンスの様なものだ。

「相談ごとに乗ってくれるなら、即金で5割の方でいい」

「予想売り値自体が実際より低め出し、前者から見たら累計で2〜3割は損しそうだけど、いいの？」

「随分と優しいじゃないか、そんなことをわざわざ教えてくれるなんて」

「ふふ、あなた面白いんだもの……気に入ったの。」

「そうね、正式な値段は明日にでも通知されるけど。」

……私の見立てだと、40代の2人が20万と18万G、新人2人が7万と3万Gってところね。

半値で24万」

「あんたの見立てなら信用できるだろう。」

それとこいつらの持ってた装備品、良質な物以外全て下取り、いくらになる？」

武器は摩耗する。良質な鋼鉄を使った武器は予備の武器として極力取って置くことにしている。

「そうねえ、割と状態はいいから、ひいふうみい、6万とちょっとってところね」

「……随分と買い叩くな。フルプレート（全身鎧）があるんだぞ」
全身を隙なく覆うことのできるフルプレートメイルは大変高価だ。
装着した際の隙の無さと、生存率を考えれば当然である。

その分非常に重いが、ステータスのあるこの世界ではその価値はよ
り増している。

「わかって言ってるでしょ？ 迷宮じゃフルプレートを着ていける
のは精々50階層までよ。」

侵略戦前線なら喜んで使うでしょうけど、輸送費を考えなさい。

中古だし、これ一つで2万Gってとこね」

「原価10万以上はするんじゃないかこの鎧……つかあ、世知辛
いな。」

まあいい、とりあえずはそれでいい」

「あーら、全部売っちゃうのね、豪気ねー。」

自分で売りに出したら3割は増して儲かるんじゃない？」

「ふん、その分ギルドの貢献ポイントにでも入れておいてくれ。」

それで相談なんだが、支部に連絡して、センタータウンの倉庫に

ぶち込んでる装備の査定もしてくれ……そちらの言い値で構わない」

この場合の言い値とは、先程仮売約契約を口で結んだ、4人分の装備品の値段を基準に値段を付けてくれ、ということだ。

先に取り手をちらかせたため随分と買いたたいた値段であったし、向こうも文句はないだろう。

正確に言えば、輸送費や調査費等で大分また差し引かれるだろうがそこは仕方がない。

どう考えて後ろ暗い物がある装備品なのだし。

「あらあら、随分気がいいと思ったら、そういうこと」

「錬鉄に質のあまりよくない鋼鉄製の武具防具ばかりだが、15人分程度の武装一式程度はある。

出所は、そうだな、俺を襲ってきた奴らが貯め込んでいた、恐らく略奪品であるう装備……ということにしておいてくれ」

「うふふ、あっはははは。どれだけ貯め込んでるのよ。

まあ、それだけ大量の中古の装備なんてなかなか捌く機会がないものね。

いいわ、ギルドに儲け分をばら撒いてるしね。

「ちゃあんと分は弁えている子は好きなの」

「……ちっ、ぼられた感が否めないが」

「ふふ、あなたかわいいし、後で個人的にご褒美をあげましょうか？」

カウンター上に置いた手に、指をからませてくる。

ぞくりとした快感に襲われ、思わず頷きそうになる顎を理性で抑え込む。

ここで頷こうものなら、一気に話を向こうのペースに持って行かれて利益を絞りとられ、ご褒美はお預けよ、なんてことになりかねん。もう片方の手でゆっくりと拘束する指を解く。

「それとまだ用事があるんだ。いくつも済まないな」

「……はあ、失礼しちゃうわ。」

まあ、必死で動揺を隠そうとしちゃってかわいいから、許してあげる。

まったく、ギルド登録の時点でギルドに来ないで、初めてきたと思ったら一気に仕事持ってきて……」

「俺の立場を考えたら仕方ないだろう。一杯奢るから、勘弁してく

れよ。

そんな手間はかからない。魔法装飾品の互換交換を頼む」

迷宮ギルドには豊富なアイテムが集まるため、ギルドに登録した冒険者は、魔法装飾品の上位互換交換を行ってくれるサービスが受けられることができる。

例えば、力の指輪×3　力の指輪？、力の指輪+魔力の指輪×2
敏捷の指輪？。

このように低ランク装飾品なら3：1の比率で一つ上位の装飾品との交換をすることが可能だ。

迷宮ギルドはそうして得た3倍の数の装飾品を捌き、利幅で財を得ているというのが定説だが……。

現実世界での情報では、国所属の魔道師の秘術やらレアスキルやらで、装飾品の魔力を取り出す技術やらなんやらがあるという設定があったと思う。

非常に不鮮明な情報だが、まず間違いないだろうと踏んでいる。

なぜなら、下位複数　上位の変換は可能だが、上位　下位複数の取引が不可能だからだ。

ただ利益が欲しいなら、？1つで　？2つなどといった交換を、する人が少なからうと形式的に作っていても損はない。

……まあ兎にも角にも、冒険者は面倒な交渉をこなすことも、騙されるリスクを冒すことも無く気軽に上位互換の交換が可能、この事実が今一番大事なことだ。

所持装飾品

力の指輪×5「力+」
魔力の指輪「魔力+」
火のガードリング「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」
毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」
回復のリング「時間回復微上昇」「軽傷回復×5」
敏捷の指輪×2「敏捷+」
力の指輪？「力++」
知力の腕輪「知力+」
敏捷の腕輪×2「敏捷+」
力の腕輪×2「力+」
敏捷の腕輪？「敏捷++」

器用のアンクレット「器用+」
術者のアンクレット？「魔力++」「知力+」
敏捷のアンクレット*「敏捷+」「防御微増」
隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」
力のアンクレット×2「力+」
敏捷のアンクレット？「敏捷++」
敏捷のアンクレット「敏捷+」

「装飾品の交換も頼む、力の指輪を5、敏捷の指輪を1で魔力の指

輪？を2つ。

敏捷の腕輪1と力の腕輪1と知力の腕輪1で魔力の腕輪？。

敏捷のアンクレット、力のアンクレット、器用のアンクレットで魔力のアンクレット？を頼む」

これだけ揃えば、此度稼いだ大量の金と合わせて、一気に己を強化することが可能だ。

「あらら、魔力尽くし……」

「……………」

無言で睨みつけてやる。

気を許してもらえたのはプラスだが、あまり踏み込み過ぎるのは褒められた行為ではない。

俺の隠している特異性 武器スキルレベルのことは、本当にいざという時まで黙っておきたいのだ。

ネタの割れた能力など攻略されるためにあるようなものだ。

「はいはい、わかってるわよ、いいじゃない少しくらい」

「……あのな」

いい年して口を尖らせ……といっても年齢は不詳、詳しく知る者はほとんどおらず、知っていると思われる人間も決して口を割ろうとはしないらしい。

などと考えていると、絶対零度の視線を浴びせられる。

「い、いやなんでもない。俺は少しあちらで飲み直してくることにする。」

て、手続きをしておいてくれ」

「……ちっ」

慌てて誤魔化しカウンターを離れる。

……危なかった。尋常じゃない圧力を感じた。

まさか自分がこてこてのコメディのような会話をするとは……。

彼女なら”補正持ち”のような特殊な人間を普通より数多く見てきているだろうし、話を聞くには打ってつけだと思ったが……話の持つて行き方が難しそうだ。

収支

装飾品整理

魔力の指輪「魔力+」
火のガードリング 「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」
毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」
回復のリング 「時間回復微上昇」「軽傷回復×5」
敏捷の指輪「敏捷+」
力の指輪? 「力++」
New! 魔力の指輪? ×2

敏捷の腕輪「敏捷+」
力の腕輪「力+」
敏捷の腕輪? 「敏捷++」
New! 魔力の腕輪?

術者のアンクレット? 「魔力++」「知力+」
敏捷のアンクレット* 「敏捷+」「防御微増」
隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」
力のアンクレット「力+」
敏捷のアンクレット? 「敏捷++」
New! 魔力のアンクレット?

+ 31万G
センタータウンの略奪品 15万G
薬代経費等 - 1万G
合計691000G

18話 買い物

18話

買い物

ギルドでのバカ騒ぎの翌日。

酒も完全に抜け、買い物へ行こうと簡単な装備を身につける。

街へ買い物に行くのに装備とは現代では考えられないことだが、俺の様な冒険者はまず間違いなく大金を持っている。

強き者、戦う者である俺達は、ひとたび気を抜けば襲う格好の的に成り得るのだ。

「おいスタイル」

「なんだ」

「お前のことだから考えがあるんだろぅがよぉ……魔法装飾品、全部魔力の変えちまっただって？」

「ああ、そのことか」

「そのことか……って、ランク？でも相当助けになるんだぞ？」

「なんだ、そのスキルに加えて、他にまだ魔法でも隠し持ってんのか」

「いいや、生憎俺はマッピングの魔法しか持ってない」

「ここで初めて、オクラが不審気な目が変わった。」

「それ程に装飾品というのは大事なものだ。」

「冒険者は、稼いだほとんどの金を装備に変える。」

「なぜなら、装備はそのまま力となり、命となり、そしてより過酷な戦場へ行くことで、金になるからだ。」

「って、どうすんだよそりゃ！なんだ？腐るほど貯まった金使って、魔法書でも買いあさるのか？」

「いいや、考えがあるのさ。まあ黙って俺を信じてな」

街へ出て奴隷市場へ直行する。

「なんだ、また奴隷を買い足すのか？ この間4人も売り払ったばっかりだったのに」

奴隷市場の入り口横に立っていた男が、こちらに歩いてくるのが見えた。

この大陸では一般的な茶髪で、特に特徴の無い顔立ちをしている。

「いや……お、いたな。情報屋に話を聞く。ここからは黙ってる」

自分と奴隷市場の間付近にあるこじんまりとした酒場に足を踏み入れると、後ろからその男がついてくるのが見えた。

端のテーブル席へと移動し座ると、あちらも違和感なく、始めから連れだったようについてくる。

「エール二つ。おたくは何を飲む？」

「では私も同じものを」

「エール三つだ」

十秒と待たずに入れずにエールがテーブルの上に並べられる。

詳しい話を聞けずに不機嫌になっていたオクラが、急ににこやかになる。

「おっ、いいねえ。昼間っから飲む酒は格別だ！」

さっきの「黙っている」という言葉は『命令』したわけではないので、普通にしゃべりだしてしまった。

軽く睨むと首をすくめて黙り込む。

「それで、頼んでいた話は？」

「ええ、あのエルフですが、この街で5年前から冒険者をしているユージという方が買って行かれました」

「……………」

予想外だ、予定外と言ってもいい。

俺の中で、あのエルフを買うのはオリシュと決まっていたからだ。

それとも、あのオリシュより強い補正を持った者がいたとでもいうのだろうか。

「それと、頼まれていた話の二つ目に重複するのですが、オリシユという新人がどこからか特大のルビーを持って来まして」

「あ、ああ」

思わず表情が崩れそうになってしまつ。

「それも鑑定額500万G超の非常に良質な魔力を帯びた物だとか。

それであるエルフを買うつもりだったようですが」

「買えなかった。いや、ユージとやらが先に買ったのか」

「ええ。」

「なんだか、いやに焦らしていたというか、わざわざオリシユが来てから売約契約を結んだとか」

（なんだそれは？ オリシユに恨みでもあつたのか？ 自分の恋人を持って行かれた、とか凄くありそうな話だが）

「妙な話だな。……オクラ、わかるか？」

「名前と顔と、若いくせにいやに強えてことははわかるが、詳し

くは知らねえな」

「そいつの経歴などはわかるか？」

「そうですねえ……」

情報屋はそういって、テーブルをトントンと二度叩いた。

舌打ちしそうになる衝動を抑え、銀貨を二枚放ってやる。

「ユージ、五年前にこちらにやってきた現在15歳の元孤児の冒険者ですね。」

くすんだ金髪を長めに伸ばした優男って風貌です」

「15歳……」

(世代は同じだ。……トリッパーの可能性も、あるな)

「レベルは正確なものはわかりませんが、間違いなく80はいつています。」

到達迷宮階数は85階層。愛用している武器は水属性の高ランクの槍、サブウェポンで地属性の短刀です。

なかなかの有名人ですよ。15歳でこのレベルに階層……そして

なにより、特殊な覚醒称号持ちですから「

「……特殊な覚醒称号?」

覚醒称号とは、50レベルになると得られる称号……他のゲームで言えば職業に近い。

力強きもの「戦士」。

力が増し、武器がよく手に馴染む。

知多きもの「司祭」。

知力が増し、魔法会得スピードが上がる。教会が求める称号。

魔を使いこなすもの「魔術師」。

魔力が増し、魔力を操るのがうまくなる。

手先良く動く「射手」

器用さが増し、指先の動きが繊細になる。

より早く駆ける「疾駆者」。

敏捷が増し、体がよく動く。

耐え忍ぶ者「忍者」。

耐久が増し、状態異常に強くなる。

そして全てが高水準だった場合「世界」となる。

世界についてはいまいちよくわかっていない……らしい。

「覚醒称号の効果なんて、大した効果はないんじゃないのか？

教会で魔法を学びたい金持ちか、教会で養われた子供が司祭を目指すくらいの意味しかないと聞いていたが」

そう、別に特に頭に入れておくべきことは「司祭」以外ない。

ステータスが増すといっても＋1つ分だし、まああつた方がいいが、「覚醒」などと呼ばれる程大したものではない。

別に「魔術師」だから魔術師にならなければならぬわけではないわけではなく、「魔術師」で魔法剣士もいる。

もつと言えば、「射手」で近接系戦士もいれば、「忍者」で魔術師もいるのだ。

ステータスよりも、その人の「生き方」が称号になって現れるというのが定説だ。

「戦士」になった戦士が弓使いに転向し、「射手」にならないかなと思っていると、ある日「射手」になっていたなど良くある話のよ

うだ。

ただ、普通に育てば「司祭」には成りにくいだろう。

これは教会が求める称号だ。

教会には、使い捨てではない代わりに会得に時間のかかる特殊な魔法書があるので、「司祭」を持つものは挙ってこれを求める。

これが俺の知る全てで、ゲーム時代は特殊覚醒称号など聞いた覚えもなかったし、そもそも50レベルに到達した者がいなかったため、公式ホームページの情報しか知らない。

「ええ、特殊覚醒称号。

非常に珍しいので、センター出身なら聞いたことが無いのもまあ無理はないのかな……？」

私知知っているだけで、『賢者』、『治癒師』、『食の求道者』、『調教師』、『考古学者』そして件のユージの『吟遊詩人』」

ちらりとオクラを見る。

首を竦めている……詳しくは知らないようだ。

「なんだそれは？」

情報屋がテーブルを叩こうとする仕草を見せたので、先んじてもう一枚銀貨を放る。

「吟遊詩人とは、歌を歌ったり、楽器を奏でて味方に補助魔法のよ
うな効果を与えることができるそうです。」

逆に下げることでもできるとか

「戦場で呑気に歌うのか？」

「いえ、短いフレーズ、2〜3秒喋るように歌うとか。長いものも
あるようですが。」

楽器も数秒奏でる程度でいいそうです

「なんだそりゃ……他のは？」

「賢者は魔法の会得スピードがとても速い……司祭の上位版ではな
いかと。」

治療師は回復の専用スペルを覚えるそうです。

後は魔術師と大差ないようですね。

食の求道者は……いまいち分からないんですが、この称号持ちの

作る食事はとてもおいしく、ステータスが一時的に上がるとか。

調教師は、なんと魔物を隷属の首輪無しで従えることが可能なんだそうです。その際のレベルなどの詳細は、余り詳しくわかりませんが。

考古学者は、古い場所や遺跡などで様々なことがわかるそうです。

ビッグ1は文句なしに古いと言えるので、中ではトラップや階段の位置のありそうな場所など様々なことが断片的にわかると、酒場で話していましたね」

「わからないことだらけだな」

「仕方ありませんよ。謎が多く人数が少ないもので……ただ、なぜか今の若い世代。

それも今年15歳の孤児に多いというのが情報屋の間で囁かれていますね。

といっても数える程度ですし、普通有名になるまでは特殊称号など隠すものなので……。

奴隷にしたら値段がいくらつくか……速攻で狙われるでしょうしね。

今年は只単に言いふらす馬鹿が多かっただけかもしれませんが」

「成程……な」

「そして驚くことに……ユージのPTは5人組なのですが、5人中3人が特殊覚醒持ちなんだとか。」

ユージの吟遊詩人に、賢者の男と考古学者の女、後2人は普通に戦士と忍者だそうですが」

「……それで、全員が全員自分らで言いふらしてしまったわけか」

「ええ。その後すぐに迂闊だったと気付いたのか口を閉ざしましたが、ある程度の古株なら大抵は知っています」

「……他におかしな言動はなかったか？」

例えば、そう……意味のわからない単語を使ったり、そういうこととは」

「特にそういった話は聞いた覚えはないですね。とは言っても、さすがに5年前の言動まではわからないので、最近は、ですが」

「10歳の頃の様子とかそういうものはわかるか？」

「その頃は特に注意して見ていませんでしたので、詳しいことはわかりませんが……。」

10歳で来ていきなり迷宮に入って、普通に戦闘をこなしていたようですよ。

スキルの選択や、戦略眼は子供の頃から熟練のようだと感心されていたようです」

（「補正持ち」とも思ったが……いくら”補正”でも実年齢以上の判断は難しいんじゃないだろうか。

もし、仮にだ、そいつらがトリッパーだとすれば、トリッパーは50レベルで特殊な能力が得られる、もしくは得られる可能性が高い……ということか？

センター時代から遠目に他のトリッパーを見ていたが、マクロの様な特殊なものを持っているのは俺だけだった。

トリッパーが特別扱いされることはない、可能性を除外していた……。

くそっ、情報が少な過ぎるっ。本人に上手いこと自然にアポが取れれば……）

「……そのユージ達が、他に奴隷を買ったという情報はあるか？

それと、集めている情報とかはわかるか？」

銀貨を一枚放りながら聞く。

「ええ、二日に一回ほど奴隷市場に顔を出しては、今年15になった孤児で奴隷に成ったものを買っているそうです。」

情報屋に聞いた情報は……知りませんな。申し訳ない」

この場合の知らないとは、おそらく売った情報の内容を漏らすつもりはないということだろう。

下手に漏らして彼らに恨まれれば、戦闘力の無い情報屋はおちおち眠れやしない。

或いはもっと金を積めば別かもしれないが……。

「……いや、こちらこそ、踏み行ったことを聞き過ぎた。」

酒場でよく話す、聞く内容でいい。あるか？」

「それでしたら、最近よく、今年の孤児について聞いていることが多いそうですよ。性格や、言動について」

(……これでトリッパーは、特殊な力に目覚める可能性が高い、という線が濃厚になった……。

ちっ、失態だ。分かっていた筈じゃないか、十分ありえた、むしろいない方がおかしいじゃないか！

この迷宮都市で成功している現代人が他にいることなんて……。

まず現代人がここにいることすらイレギュラーなのに、なにか後天的にイレギュラーが起きるなんて考えておくことが当然だったのに、あっさりと安値で現代人の奴隷を手放してしまった……)

「どうかなさいましたか？」

はっと我に返る。

こちらにきて五年と少し、失態と言える失態は無く、回収できる利益は最低限はきっちり回収してきて、増長していたのかもしれない。

なにもかも上手くいくなど、俺の様な小悪党にはありえないことだし、しかし逃した魚は大きかったかもしれないと思うと、胸をかきむしりたくなる。

……この小市民な性格がいつか己を滅ぼすかもしれない、と自分を落ちつけることに専念する。

「……………いや、なんでもない。」

では最後に、オリシユが最近回った店舗、訪ねた人のリストをくれ

ユージ達のよくいく酒場なども聞こうと思ったが、有名人らしいし

そこから聞いてもわかるだろう。

予定外に出費し過ぎた……自重しないと。

「こちらです」

「助かった。その詮索しない所も気にいった……ほら」

正規の報酬の金貨を一枚に、おまけして銀貨を追加で二枚投げ遣る。

ここでご機嫌を取っておけば、金払いのいい上客と見られてサービ
スもよくなる……これは例の中隊長の時も使った手だ。

金貨は銀貨の10倍　1万Gの価値がある。

オリシユ一人の動向と、奴隷エルフの様子数日調べるだけで、危険
も無く16000G……ぼろい商売だな。

しかも、こいつがわざわざ動いたわけではなく、もっと下っ端の食
い詰めた奴らを動かして小遣いをやっているんだろうし。

……まあ仕方が無い出費だ。

情報というのはいつでも重要なものだし、『俺が調べ回っていた』
という情報を封鎖できるなら安いものだ。

話も聞き終わっ
たし出るか
と席を立とうとする

「これはまだ未確認で、不鮮明な情報なのですが

殺人鬼^{マールダー}という称号もあるそうですよ。

……知るものは皆口を閉ざすか、この世にいませんが」

19話 買い物と特異性

19話

買い物と特異性

情報屋と別れた後、そのまま商店街へと行った。

石盤で杜撰に舗装をされているが、所々土が剥き出しでぼけっとしてたら躓きそうな道に、屋台がずらりと軒を連ねる。

通りを一つ移れば、きちんとした建物を構えた店が並んでいるが、あちらは後回しだ。

情報屋から買った、オリシユが回った店のリストを見て、載ってい

る店舗を回るのだ。

「そのオリシユって奴の動向を調べてたのって、なんだっけか、補正？って奴と関係あんのか？」

「ああ、俺の感が正しければ、穴場だったり掘り出し物がある店で立ち寄っているはずだ」

「ふうん……なんだ、”補正”ってのは鑑定眼効果でもあんのか？」

「似たようなもんだな。」

「だいたい物語の主人公ってのは優れた武器をどっかから手に入れるもんだろ。」

「あいつが主人公みたいなものなら、知る人ぞ知る……なんて店に当たる気がする」

「その為に金ばらまいて……あれだけあつたら浴びるほど飲めるぜ」

「この間女呼んでやつたら、ぎゃあぎゃああやかましい……ここだな」

「ひげをもさもさと生やしたおっさんが魔法装飾品を売っている。」

「んー、パチ物が多いな。」

魔法装飾品の真贋は、魔力を扱う技術がないと非常に分かり辛い。それっぽい形だけ作って、強引に魔力を浴びせるなり、本物の魔法装飾品の近くに置いておくと、しばらくの間ほんのり魔力を感じるからだ。

が、純粹にレベルがそこそこあつて魔力はあるが、扱いなれていない者は、なまじ魔力を感じてしまうため余計に騙されやすいのだ。

しかしある程度色々な種類の装飾品を装備した経験があれば、試しに装着すれば体感である程度読みとれるため、まず騙されない。

騙されるのは魔法装飾品にあまり触れることの無かったものがほとんどだが、ギルドやちゃんとしたでかい店よりも露店で買った方がマージン分割安なので、騙される初心者は絶えない。

「いらつしゃい。何をお求めだい？」

(……大したものがないな。属性耐性系の装飾品や、？レベル以降の装飾品はなかなか出回らないから期待していたが……。

まあ当然といえば当然か？いい物があつたから”補正持ち”が引き寄せられる。

引き寄せられたなら買うだろ。残ってるわけ無いな)

ギルドで下位装飾品と上位装飾品を交換できるが、あれは換金性だ

けで見ると大分損をする。

まああれだけの量の魔力？ 装飾品を揃えようと思っても、なかなか集まるものではないから仕方が無いのだが。

「いやいい、邪魔したな」

ささっと離れてしまう。

冷やかしかよ、と後ろからあからさまな舌打ちの音が聞こえてくるが気にしない。

「次は魔法書店だが……正直期待できないな」

「魔法書はたっかいからなあ。

昔は何冊か手に入れたんだけどよ、結局売って武器に変えちまうか、豪遊しちまうんだよな！ がつはっは！」

「前線で活躍して大金を稼いだ冒険者でも、一定以上のレベルの魔法書は少数しか手に入らないからな。

逆に低レベル書は割と拾うらしいが……今のところ一冊しか縁がない。

その割と手に入りやすい低レベル書も、金持ちが買って、部下や子供に与えちまうからな」

「この迷宫都市なら割と揃うけどよ、その分パチモンは多いぜえ。半分以上パチモンだな。」

なにしろ読ませるわけにやいかねえから触れても表紙だけだ、真贋がわかりにくい」

「マッピングの魔法書を読む前に、念入りに持った感覚を手に馴染ませておいたから、低ランクの魔法書だったらある程度わかると思うけど」

「……………手に馴染ませたからわかる？ 何言ってるんだ？」

「いやだから、漏れる魔力量とか、質とかをなんとなく掌で覚える様にだな」

「いやいやいや、なんだそりゃ？ そんな斬新な覚え方聞いた事ねえよ。」

普通魔法書ってのは、余程強力じゃなきゃ読むまでほとんど魔力は漏れない。

複数冊読んで、装丁や材質の知識とを付けてく内に、だんだんわかってくるものって聞いている」

「は？あー、まあそれは聞いたことはあるが……………気配ってというのが魔力じゃないのか？」

「いや、よっぽど魔力に長けてれば別かもしれないねえが、レベル8とか100とかの上級者の世界だ。」

さすがにそこまでのステータスはねえだろう」

「……………とりあえず試してみようか」

今まで感じていなかったが、この感覚は人とは違うのかもしれない。気になるが、試してみた方が早いだろう……………会話をしている内に魔法書を並べた露店が見える。

ここは兵士の見回りが多い区域だ。

見回りの密度で安全度が変わるといっても過言ではないので、高級物品を出す店は多めに金を出して安全を買う。

「……………いらっしやい」

「ああ、掘り出し物がないかなと思ってな」

「……………自由にごどうぞ」

体をゆったりとした服で覆い、頭から顔をベールで隠した女が店番をしている。

シルエットが服でよくわからず、顔も見えない。

渋々といった声色で愛想が無い。

良く見れば、オクラと同じ隷属の首輪をしている。

おそらく冒険者が奴隷に代理で販売させているのだろう。

顔のベールは、美人故のトラブルを避けるためにわざわざ隠しているのだろうか、まあ俺にはどちらでも良いことだった。

ここは露店と言っても、地べたにござをしいて並べているのではなく、客から少し離れた位置に長い箱を置き、客が来たら開いて見せるようにしている。

なるべく安全性を高めるためだろう。

「随分と安い……そして数が多いな」

「ああ、うちは良品安価がモットー……だよ」

魔法書は、国認定の魔法書店に持ちこむと、当然中間マージンが取られる。

店先で30万Gで売る物なら、客からの買い取り価格は、需要次第だが15〜24万、5〜8割なことがほとんどだ。

希少な物ほどマージンは減るが、よく手に入るものはマージンが高い。

その際マージンを取られるのを嫌う者は自分なり奴隷なりが露店で売りに出すのだが、信用が無いとなかなか売れないのだ。

そこで二種類の人間が出てくる。

認定店に売れる値段と大差ない値段で並べる代わりに、偽物も一緒に並べる者と、自信満々に店売りと適正価格の間くらいで並べる者だ。

店売りと大差ない値段で売れても損はないし、偽物が売れたら得なので混ぜて売るのが”流行”のようになっている。

ちゃんとした鑑定眼があれば得だが、リスクが高い……が、騙される可能性があっても、うまく本物が安く買えたら……とこちらも騙されるものは後を絶えないのだ。

ちなみに偽物ばかり並べる物もたまにいたのだが、もし一定以上の鑑定眼がある者にその事を言い触らされれば、村八分になってこの街では生きていけなくなる可能性が高い。

この店は偽物も多い代わりに安価にしてあるのだろう。

「お、これは……軽傷治癒の魔法書、15万か」

手に持つと、じんわりと魔力が手に染み込んでくるのを感じる。

……この感覚だと、きちんと書自体から魔力を感じられているな、本物だろう。

軽傷治癒の魔法書は、国の認定店で買うと30万G程度する。

期待していた掘り出し物は無かったが、まあ店で買うの半値、つまりどう見積もっても店売りの値段がそれより安く買えただけでも満足すべきか。

もし軽傷治癒の魔法書をこの先拾って、認定店で売っても損することは無い。

「これ、貰うよ」

「一発かよ。」

……そんなにあっさりすることは、鑑定系の称号持ちか、魔力隠蔽をかけたマジックアイテムでもあんの？」

「どうかな、想像にお任せするよ」

なんとなく探るような気配を感じたため、即答してさっと金を払う。

なるべく嫌味に見えないように笑顔を見せ、さっさと離れることにした。

「どうやら、本物のようだが」

「……………」補正持ち”が特殊つてのは聞いたがよ、俺から見ればお前も十分特殊だよ」

「なんだ、そこまで大袈裟な話……………」

「確認しておくが、鑑定系の称号とかマジックアイテムとかは持ってないんだよな？」

魔法書に触れる機会が沢山あったわけでもない？」

「……………ああ、一冊だけだ」

「スキルが連発できることはお前も特殊だと理解していたようだが……………」

俺は20余年生きてきて、そんなことを言う奴は見たことがない。一度もだ。

お前のでたらめなところは何度も見てきた。

今さらこの程度のことできやあぎやあ騒ぐつもりはないが、事実
は正しくは認識しておくべきだ」

「……………そうだな。わかった、肝に銘じておく」

（ 先刻情報屋に聞いた、現代人である可能性があるPTの特異性と繋がる所があるのだろうか。

……………特殊覚醒称号”鑑定士”ってのがあったらそれかもな。まあまだ決め付けるには早すぎるか。

特異性、俺の普通じゃない所……）

あれから数か所回ったが目ぼしいものはなかった。

「大当たりは無かったみたいだな」

「どうかな。まだ本命が残ってる。裏路地の方にある武器屋らしいぞ。」

まあそれが外れでも、……………自分のことを再認識できただけでも儲けもんだ」

そう言ってメモを見せる。

「ああ？ああ！」

「ここ知ってるぜ、偏屈爺さんがやってるんだけどよ、客に暴言吐くわ品物は売らねえわで有名な所だ！」

「またありがちな設定って感じだな……」

「設定？」

「ああなんでもない。失言だ、忘れる」

「こついつた目線で物事を見過ぎるのも良くないのかもしれない。」

「自分はいつからこんな考え方をしていたのだったか。」

「ぼろい扉にすすけた壁。」

「武器屋のマークは付いているが、色がくすんで壊れそうだ。」

「ここで刀を買って行ったらしいな」

「刀あ？ あの無駄に高い上に手入れもめんどくせえっていうあれか」

「まあ入るぞ」

どれほど油を差してないのか、異常に抵抗を返してくる扉を押し開けると、外見からはまったく感じられない程清潔感のある店内。

どれほど雑多とした店内か……と身構えていたのだが、綺麗に整頓された武具が丁寧に置かれていた。

その奥のカウンターには、つるつぱげで、白くなったひげだけちよろんと顎から生えている小柄な爺さんが座っている。

「なんじゃ、客か……と思ったら、また餓鬼んちよか」

「また？」

「昨日もお前の様な餓鬼が来たんじゃよ。」

餓鬼に売るもんはない……と言いたいところだが、昨日売ったばかりだからな、とりあえず見るくらい勘弁してやろう」

「がっはは、すげえなこの爺！客に偉い態度だ！」

小柄だがやけに迫力のある爺さんだ。

下品に笑うオクラを、爺さんはじろりと一睨みするだけで何も言わなかった。

「魔法武器で、長物を探してる。希望はハルバードだが、次点で槍でも構わない」

「……………笑わせるなよ餓鬼、お前みたいなのがハルバードじゃと？」

大きく目を見開きながら怒気を発する爺さん。

だが、その様子はどこか怒り切れていないようだった。

「……………これでももうすぐ180？なんだけどね。」

それより、その餓鬼が、昨日は珍しい物を買っていったんじゃないの？」

そう、それはきつと、昨日オリシュが、絶対使いこなせないと決め付けた刀を使いこなし買っていったからだろう。

使いこなしたうんぬんは知らないが、この様子からみておそらく間違いない。

ちなみにだが、180cmといっても、この国の男性平均身長は175〜180cmとでかい。

つまりこれでも平均だ。

「……ちつ、あれの知り合いか」

「いいや、たまたま耳にしてね。まあいいじゃないか、あるの？
ないの？」

「……………これ、振ってみろ」

そうやってカウンターの奥から俺の身長よりやや長い、2m程のハルバードを抱えてきた。

ハルバードは、Halbm（棒）Berthe（斧）という意味で、別名ハルベルト、ドイツ語だ。

が、なぜこの世界でもドイツ語……？という疑問はきつと野暮に違いない。

槍の穂先に斧、反対側の柄頭にピックがついていて、文字通り槍斧長柄の全ての用途に使用できる。

突き、斬撃、棒術、引っかけて使うこともでき、地球では最強のポールウエポンと言われていた。

ガチンコ勝負なら近接武器はリーチが長いものが強い、これが一般的な意見だと俺は信じているため、つまり最強の近接武器と言うことだ。

当然それだけの物をつければ、オプション全装備で重量は比例して大きくなっていくわけだ。

さらにこのハルバードは、所々に隕鉄という、驚異的な硬度だが非常に重い鉱石で加工してあり、見た目よりも遥かに重さがあった。

「随分重いね」

「ほら、振れるもんなら振って見せろ」

「容赦ねえなあこの爺！がっはっはっ」

ため息一つ。

爺さんはどうせ振れない、という態度をしながらも、その目には少しだけ期待の色が浮かんでいた。

「ふっつ」

『五段突き』

一瞬で前方に五つの斜線が奔る。

スキルのデイレイを極力無くすように、前に出していた左半身を、意図的に崩しながら半歩引く。

その勢いで薙ぎ、振り上げ、斧部分で引っかけ引き倒し、斜め前方

に踏みこみながら渾身の振りおろし。

重力に引かれる腕を強引にかつ負担を最小限に押しとどめ、隙を完全に消すようにスキル発動。

『大車輪』

本来長柄スキルのこの技だが、斧の重さをうまく流して振り子のように振りまわす。

その尋常じゃない重さと俺の卓越した長柄、槍、斧のスキルが競合し、空気の震える重低音と共に縦横無尽に振るわれるハルバード。

嵐を彷彿させるその様相に、爺さんとオクラはぼかんとこちらを見ていた。

「……っはあ、流石に重いな、腕の筋肉が痛い。

出来ればもう少し軽いのがいい」

「……………おい、餓鬼、お前槍と長柄と斧のスキルレベル……いや、いい、聞くまでも無かったな」

冒険者にとってステータス情報はまさに命。

例え鍛冶師にでさえ軽々しく口に出す物ではないが、この爺さんになら言ってもいいと思えていたが……必要無かったようだ。

「お前、魔法武器が欲しいといっていたな。希望属性と、……魔力は潤沢にあるか？」

「魔力量には自信があるよ。人間が鍛練で身につけられるレベルで言うなら、ね」

「……昨日今日と、へんな連中ばかりじゃ。

ハルバードだが、お前の能力に釣り合いそうなものが手元に無い。

というよりその特異なスキルを活かすなら、一から作った方がいい。

わしに全部任せてみんか」

「……ああ、任せる。」

これ、羽鋼製の剣だ。軽量化するなら使えないかと思ったんだが。

ああそれと予算だが、50万くらいで済ませたい」

「……ふん、いいじゃろ。この量の羽鋼があるなら、できる」

「ありがたいね。いつ頃？」

「……一週間後また来い、わしは作業に入る。表の看板、ひっくり

返しておけ」

そういうとさっさと奥に引っ込んでしまった。

「客に店じまいさせんなよ……」

「嵐みたいな爺だったな。お前の乱舞も嵐みたいだったが」

「褒めても駄目だぞ、酒の量は増やさない」

「……………ちっ」

2万1000G（69万 - 15万 - 50万 - 16000 - 諸経費）

20話 一般人の生活は平凡極まりない

20話

一般人の生活は平凡極まりない

装備品

ステイルLV31

良質な鋼鉄の短槍

鋼鉄のラウンドシールド

胴：鋼鉄のスプリントメイル

手：鋼鉄のガントレット

足：鋼鉄のグリーブ

頭：鋼鉄のチェインフード

指：力の指輪？「力++」

：毒耐性のリング「出血毒耐性+」「神経毒耐性+」

手：敏捷の腕輪？「敏捷++」

：魔力の腕輪？

足：隠密のアンクレット「敏捷+」「足音隠蔽+」

：術者のアンクレット？「魔力++」「知力+」

首：

耳：

オクラLv67

良質な鋼鉄のアクス

鋼鉄のラウンドシールド

胴：鋼鉄のプレートメイル

手：鋼鉄のガントレット

足：鋼鉄のグリーブ

頭：鋼鉄のグレートヘルム

指：火のガードリング 「守備力微+」「器用微+」「火耐性+」

：敏捷の指輪「敏捷+」

手：敏捷の腕輪「敏捷+」

：力の腕輪「力+」

足：敏捷のアンクレット？「敏捷++」

：力のアンクレット「力+」

首：

耳：

軽傷治癒の魔法書を、買った翌日から1日かけて読み取り込んだ。

いくら知力が高いからと言って、前回の半分しか時間がかかっていない……普通より早過ぎる。

そしてさらに前回から時間が短縮され過ぎている……。

よくわからないが、本から引き出す魔力がよりスムーズに、即座に体に馴染む。

何と言えば良いのか、前回よりも魔力を取り込むこと自体に適應している……能力をより効率よく使いこなしているような気分。

先日は鑑定系の才能かなにかでもあるのでは、と思ったが、魔法系の才能でもあるのだろうか……。

誰かに聞いてみたいとは思うものの、いくらオクラとはいえど、異世界ゲームトリップ？

こんな馬鹿げた話をするつもりはないし、してなにか意味があるとも思えない。

「まあとりあえずは考えても仕方がない……これからのことを考えよう。」

あの羽鋼やハルバードを使った後に、いくら業物（良質な）とはいえ鋼鉄製の武器とは……といかん、また気分が降下してきた」

「贅沢な野郎だな、俺だって60代になるまでは鋼鉄だったぞ！」

「60代からは？」

「黒鉄つつつてな、重くて硬い金属があるんだ。隕鉄の劣化版みたいなもんだな。」

最初は黒鉄のメイスを拾ったから使ってたんだが、後で別のところから手に入った、ベースが黒鉄刃先に少量隕鉄をあしらった斧を使ってた。

斧ならスキルレベル2あれば、大抵の重さのも使いこなせるからな！がっはははは！」

「……入手先は？」

「メイスはちゃんとした戦利品だぞ………斧はな、外周り、所謂普通の冒険者ギルドの依頼でな、商人の護衛任務してたんだよ。」

俺らともう1グループいたんだが……その内黒鉄製武器を持った一人がな、ぐはは、たまたま瀕死になったんだよ」

「たまたまねえ……」

「そう！たまたま！そこで命を救った俺に、向こうから！あくまで向こうから献上してくれたってわけさ！」

「……まあ警沢言っても仕方ない。」

風属性のナイフも手に入ったことだし、武器が出来るまでは無理せず40階付近で稼ごう」

それから3日ほど、特にこれと言った事件も出来事も無く、ちよくちよく”補正”を感じられる人間に探りをいれながら金稼ぎをしていた。

特にこれと言った入手品も無く、粗悪なレベルの鋼鉄武器や換金アイテムしか手に入らない。

やはり普通に地力のみで動けばこんなものか……最近は何か新しいものが手に入るということに、慣れていたからな。

全て換金。 57000G。

消費アイテムをまとめて購入200000G

宿代飲み代娼婦代120000G。

収入25000G

レベル27 31

特に高い物や貴重な物を手に入れることも無く、何か事件が起こる

でもなく、ユニークモンスターとも一度も出会えていない。

風の噂によると、同じ日同じ階層でオリッシュ達がユニークモンスターを二日続けて倒したとか……。

武器がまだだから念のため関わらないようにしていたが、ここまで差があるとは。

どうにかして介入できれば儲かったのに……と獲らぬ狸の儲けの額を妄想してしまうのは、俺が小市民かつ小さい人間な証拠なのだろう。

軽傷治癒の魔法を得たため薬代がぐつと浮く……と言って消費アイテムを買い渋るのは馬鹿のやることだ。

マナポイントがその瞬間足りなければ？

治癒の魔法を使うのに割く集中力は？タイムラグは？その日そのマナポイントを攻撃に回すことは本当に無いか？

二人と言う少人数で、緊急を要する傷以外に魔法を使うなど愚の骨頂だ。

よって、ゲームのようにMPを使いきるまで頑張るなんてことはない。

安全マージンをしっかり取って、全てにおいて余裕を持っておく。

なによりMPの使い過ぎは疲れるから、心情的にもしたくないのだ

……体の傷を癒して精神的に疲労するのは、あまり好きではない。

しかし、塗り薬＋飲み薬＋治癒魔法で三方向からの治癒の速度には目を見張るものがある。

これに疲労回復の薬も一緒に摂取すれば、激しい戦闘直後でもすぐに戦える……経済的にそうそうできることもないが。

「あと二日で装備ができると思うと、もう気分が上がる上がる。」

最近はこちらと遊び代に金を使い過ぎたな。まあ今は俺のレベル上げが先決だから金は二の次だが……」

鋼鉄製の槍を軽く振りまわし手に馴染ませる。

今日も今日とて、翌日体に疲れを残さない程度に稼ぐとしますか。

迷宮『ビッグ1』近辺

迷宮まで歩いて向かう途中、分厚い外套着込んだ5人組が歩いているのが見えた。

「おいスタイル、ありゃユージってやつじゃねえか」

「へえ……あれがね。しかし、なんか様子が変だな」

ユージとそのPTらしき6人の人間は、フードを被ったりふちの広い帽子をかぶったりして顔を隠して、こそこそと移動している。

ユージらしき人物は、くすんだ金髪を肩まで伸ばした、男にしては長髪の優男のようだ。

あれじゃ尾行でもしているよう……と前を見ると、オリシユを先頭にした5人組が見えた。

(うわ全部見覚えある。……まあ色んな意味で派手な奴らばかりだからな)

オリシユ、ニユウ、レイツェン、クーシャ、ナイト。

皆揃って美男美女、若さとその活力から周囲の空気がきらめきを持っているように感じる。

黒髪で中性的な顔立ち、やや小柄でパツと見女に見えるオリシユ。

艶のある茶髪で童顔、幼げな顔立ちに似合わぬ巨乳を抱えたニユウ。

切れ長の目にすらつとしたシルエット、肩までの金髪が太陽に映えるレイツェン。

さらりとした茶髪を風になびかせながら、はきはきとした笑顔が似合う、どこことなくツツコミの気配がするクーシャ。

赤髪短髪で爽やかな笑顔が絶えない、どこことなく天然ボケな気配がするナイト。

(……浮きすぎだろこいつら。で、なんだ……ユージ一行はあいつらをつけてんのか?)

「おいスタイル、どうすんだ」

「……うーん、ついてってみるか。さりげなくな」

「おつ任せとけ、さり気なくな!」

さり気なくなら大声出すな。

30階層

迷宮1階層でゲートに乗り30階層に移動する。

オリシュー一行、ユージー一行が移動後、二組あけてゲートに乗ると。

「やあ、ステイル君」

件のユージが、今まさに俺達が立っているゲートの目の前に立っていた。

「ちょっと話いいかな？ ……君も僕に用があつたんだろ？」

……お見通しですか。

「これでも気配を消すことには自信があつただけだね。

オクラの図体がでかすぎたことが敗因かな？」

「あっはは、そうだね、君の想像通りだ」

ひきつった表情をしているオクラのすねを蹴たぐった。

「他のお仲間は尾行中？」

「そうだね。来て一月も経ってない人間に、そこまで調べられているとは驚きだ……それとも、偶然かな？」

「さてどうかな」

完全に偶然です……と言いたいところだが、こういう言い方になる
ということは、尾行をしていたのは今回だけではないのだろう。

そしてオリシユ達を尾行するということはだ、俺と同じ”補正持ち
”がわかる……という可能性が非常に高い。

確かにオリシユ達は、レベルに見合わない装備をしているが、最低
でも80レベル代のこいつらがリスクを冒してまで欲する程のもの
ではない。

「それはまあいい。君にもわかるんだろう？」

いやその前に聞くことがあったな。君も来訪者……外からこの世
界に来たんだろう？」

「なにを言って」

「いいんだよ、明言してくれなくても。こちらは勝手に確信させて
貰っている。」

ステイル、センタータウンの孤児出身。いつの間にか5万G返済
済みみたいだね。

どういう手品か、30階層以下で羽鋼の剣を手に入れたみたいだ
が、今は持っていないようだね。

……僕の読みだと、クーシャとナイトだったかな？ 彼らと接触したときに手に入れたのだろうか？」

「……随分と詳しいね。」

その様子だと、そんなに俺に興味がいいや、この年の孤児に興味があったのか？

少なくともお前のPTの3人は、お前らで言う来訪者だろうしな」

情報戦ではぼろ負けだな。

そりゃあ情報網では勝てる筈もないが、気を使って目立たないようにしていたのだが……。

こいつが来訪者なら、少なくとも同じ希少性を持った残り二人は、まず間違いなく同じ存在だろうとカマをかけてみたが……間違いではなかったようだ。

「あつはは、君も時間が無い割によく調べてるみたいだね。」

……口元、ひきつってるよ。来た頃の情報を隠蔽している自信があつたんだろう？」

「そつだな。さすが5年も先輩なだけある。」

尾けていることに気付いたのもあるんだろうが、わざわざあんた本人がこうして話しかけてくれていているんだ。

元々俺に興味はないでもなかったんだろう？」

話しこんでいると、ユージの背後から、ゲートの魔力の香りに惹かれて来たのであろうウルフ族が視界に入ってきた。

「……………そうだね、ちょっと人気の無い所にどうだい？ そのでっかい奴隷君……………オクラだったかな。」

彼がいれば僕が不意打ちしても、時間稼ぎにはなるだろう？」

ユージが言葉終わりに、歌うように短く呟く。

魔法発動の魔力の動きを感じた後、ユージ腕にまとわりつくようにつむじ風が発生する。

振り向き様に無造作に手を振りおろす。

『ゲイルアロー』

結構な距離があったのにも関わらず、忍び寄っていたウルフ族は体中から血飛沫を上げながら吹き飛び、死体が床に取り込まれた。

風魔法であるウィンド系の一つ上の威力の魔法、ゲイル系。

恐るべき射程距離、威力、そしてなにより……

「おいおい、なんて早え詠唱だよ……」

そう、上位魔法のゲイルアローをあその速度で詠唱できるのは普通ではない。ないのだが……。

(これから駆け引きなのに調子に乗らせてどうするこの馬鹿……)

「ぐえっ」

再教育が必要だなと、一段と強く、甲冑の隙間を指で突いてやる。

21話 先達との会話

21話

先達との会話

「返事はどちらでもいい。君は来訪者だという前提で話を進めさせてもらおうよ。」

駆け引きをする時間が惜しいからね」

それは言うまでも無い……が、わざわざ確認することで底の浅さが見えてきたな。

黙っていると勝手に話を始めた。

「こちらから、先んじてレベルを上げた立場から情報を多少与えて

もいいと思っている。

勿論、素直に問答に応じてくれたらと言つ前提はあるがね……そちらのオクラ君は、どうする？」

随分と上から目線だな。

まあ今現在俺が下の立場にいることは明白だが。

「オクラ、少し外せ。ゲート付近にいる」

「おい、でもお前……」

「ふん。随分と舐められているようだが、俺も軽く見られたものだ。

まあどちらにしろだ、こいつに俺への害意は無い。まああっても、即座にやられる程落ちぶれちゃいないさ」

「……わかった」

オクラが、ちらちらとこちらを気にしながらゲートへ向かって歩き出す。

即座にやられないというのは、なにも完全にブラフというわけではない。

初撃にさえ反応できれば、歩行称号と武器スキルで距離を取るくら

いはできるつもりだ。

「続ける」

「ふうん、隠し玉でもあるのかな？……まあいい。」

まず始めにこれだけは聞いておかなければならない。現実には
頃の国籍と、生業……職業はなんだった？」

その質問をした瞬間、ユージの体が緊張感で溢れたように感じた。

なんだ、こいつは何にこんなに過敏に反応している。警戒している？

「質問の意図を聞いてもいいか？」

「だめだ。先に答えて貰おう。」

その後無条件にある程度まとめて話をしよう。その話にどれだけの価値があるかはわかるだろう？

だから今は素直に答えてくれ……僕たちと本格的に敵対したくなければね」

ぞわりと肌を殺気が舐める。

目が本気だ。

刺すような視線が、こちらの僅かな動きすら見逃すまいとしていた。

「……日本なら、問題ないんだろう。」

職業も自衛隊などには属していなかった。一般職だ」

「そ、そうかい。……その回答に」

「嘘は無い。言いたいことはわかった。」

殺人鬼^{マード}だな」

ごくり、生唾を飲み込む音。

ユージは目を白黒させながら、脂汗をびっしょりとかいている。

「き、君は、どこからその話を」

「おいおい、早々に余裕の化けの皮が剥がれているぞ。」

推測に推測を重ねただけだ。

特殊覚醒称号は……現代人の経験から、能力が与えられる……と
いったところか？」

間。

沈黙。

しかしその静寂が解答と同義だった。

「そもそも、5年前、10歳時点でサウスタウンに来た人間の数が少な過ぎると思っていた。

勿論安全策を取って軍隊に行ったものも大勢いるだろうが、それにしたって話を聞かな過ぎる。

それで警戒しながらする質問が、まず国籍。それに殺人鬼の噂を聞いていれば、頭が回る奴なら大抵気付くぞ。

……気張り過ぎだ」

「う、うるさい！ 念のためだ、日本の高校生までの常識的な問題を出す。答えてくれ」

それから、有名な都道府県の県庁所在地や、独特な伝統文化の質問をいくつかされ、そつなく淡々と答える。

十数回程やり取りを繰り返すと、ほっと脱力したように気を抜いた。

「はあ、良かった、本当みただな」

「暗黒大陸は日本産MMOだった筈だが……」。

「なんだ、軍属だったり大量殺戮犯だったら殺人鬼の称号を得るとか、そういうことでもあったのか？」

「そう、そうなんだ！ 詳しい話は聞いてない……聞いた奴はいたみたいだが、死んだ。」

「そいつに、正気を失った殺人鬼に殺された」

「正気を失う？ バーサクモードってか？」

「かもしれない……。50レベルになって、自分の称号の名前を、殺人鬼と言つて、急に僕らに襲いかかりましたから。」

「僕らは20人近くいて、全員で徒党を組んでレベルを上げていたんだ。」

「20人だぞ！？ 50レベル以上は13人、その内5人は70レベル代だった……その大半を殺されながらなんとか殺した。」

「とどめを刺した、僕が、この手で」

「落ちつけ。深呼吸をしろ」

目をぎよろりとさせ、錯乱しているのか、吐き捨てるように喋り方だ。

そのまま錯乱気味で居てくれた方が情報を引き出せそうではあった

が、この調子だと身に危険を感じる。

一旦落ち付いてもらわねば。

「だいじょうぶだ、だいじょうぶ。」

…… 兎に角だ、50レベルに到達していない現代人で、不審な経歴な者には十分に注意が必要だ」

「そいつの、殺人鬼の経歴はどうだったんだ？」

問題はそこだ。

「アメリカから、仕事を引退して移住してきたとか言っていたのを聞いた人間がいる。」

軍隊で、ミサイル発射のボタンを押したやら、戦闘機に乗っていたあのぼやいていたらしい。

真偽はわからないが、関連性を鑑みるに、大量に殺したことには変わりが無さそうだろうか？

それで、軍隊に所属していたものには兎に角無条件に警戒をするように、場合によっては50レベルになる前に、戦闘も辞さないつもりだ」

「なるほど、な。」

お前は吟遊詩人と聞いた。歌関係の仕事でもしていたのか？」

「ん、ああ、仕事ということでもないが、バンドをしていたんだ」

少し表情が明るくなった。

きつと好きだったんだろう、歌が。

「他に、旅行が趣味で、観光地や遺跡……といってもピラミッドなどだが、に行つてたやつは考古学者になっていた。

医者や看護師など、医療関係の仕事をしていた奴は、治癒師。

読書が好きな奴は賢者になっていたな。というか、特に何もしてなかった奴は大抵が賢者だった。

ああでも、本当にニートみたいなやつは一般の職業……戦士だったり、魔術師だったりしたやつもいたな」

「随分と軽い条件だな。読書好きで賢者？」

「ああ、おそらくだが、この世界からすれば現代は相当本など読みやすい環境にあるだろう？」

「こちらの世界基準で決まるようだ、というのが僕たちの中での定説。」

知り合いの、創作料理を出していた居酒屋の料理長をしていたやつは、食の求道者という変わり種もいたな」

「……なるほど、な。それなら納得できる」

「ちなみにだが、50レベルになる前でも前兆はある。

例えば僕だが、明らかに歌が上手くなっていた。

幼いころから、といってもこちらに来てからの幼少期だが、僕の歌は魅力があつたみたいでね、それで小金を稼いだこともあつたな」

照れたように顔を赤らめながら、聞いてもいないことを語りだした。

「他にも、魔法書を読むのが明らかに早かったり、読むたび時間が短縮されたり……これは賢者だね。

治癒師になつた人間は、元から応急手当が異常にスムーズだったり、手当てされた場所の治りが異様に早かったりね。

といつても十分常人の範疇だから余り当てにはならないけど」

二冊目の魔法書を読むスピードがいきなり上がったということは賢者だろうか。

いやそれでは魔法書を感じ取れるのは……これも賢者の効果？

「賢者と言うのは、マジックアイテムや、魔法書の判別は得意になったりするの？」

「……ん、いや聞いたことが無いな。今のPTに賢者がいるけど、純粹に司祭の上位版といった感じだ。」

特殊覚醒といっても、確かに使いようによっては強力だけど、そんなにたくさん効果があたり、圧倒的な力があるわけではないよ。

期待させ過ぎたならすまないが」

どうやら賢者ではないらしい。

「いやいい」

「大分まとめて話したろう。そろそろこちらから聞かせて貰おうかな。」

君は、今オリシユのPTにいる、クーシャとナイトの二人に接触していたね。

偶然？ 故意に？

……情報屋から集めた君の情報を統括すると、どうも故意に接触、もしくは接触後はある程度の目的を持って対応をした感じがするん

だよね」

表情筋が反応しないように、理性を全力で働かせる。

こちらに来てから、ポーカーフェイスが随分と上手くなった気がするな。

やはり気付いているのか、こいつも。

センタータウン出身の馬車に乗った同郷の15人も、容姿には釣られたものの、”補正持ち”と気付いた様子はなかった。

そのことが、俺の周りで完全に”補正持ち”に気付いているのは俺だけだという誤認識を生んでいたのだろう。

いつも自分に、「自分は特別ではない凡庸な存在だ、調子に乗ってはいけない」と言い聞かせていた割に、無意識に随分と特別扱いしていたようだ。

「僕たちは主人公やら、登場人物と呼んでいるんだけれどね。

明らかに不自然な、ステータスの域を越えた力を発揮する人間や、やたらと事件に巻き込まれる奴がいた。

しかし周りは特にそのこと自体に強い違和感を覚えていなかった。

それは僕たちも同じで、最初は何も感じていなかった……が、5

0レベルになった時点から違和感を覚え始めたんだ」

最初は、何も感じていなかった？

「ちょっと待て、最初は何も感じていなかった？」

思わず聞き返してしまう。

ユージはにやりと笑った……くそ、不用意だった。

「その様子だと、やっぱり気付いていたようだね」

「ちっ、それで、どうなんだ」

「……ああ、魅力は凄く感じていた。

僕は魅力的な人間だなと、なんとなく目が惹かれてはいた。

PTメンバーには、鼻持ちならない気にいらない、と言ってる人間もいたけどね。

それはまだ常識の範疇というか、なんとなく気になる程度でしかなかった。

だが、50レベルになって特殊覚醒称号を得てから変わったんだ。

感覚が濃くなったというか、感度が上がったというか……。とにかく、違和感があると感じるようになった」

どういふことだ？

始めから違和感を抱いていた俺はおかしい、のか？

魔法書の早期習得に、判別、そして”補正持ち”への気付きの速さ……。

だめだ、共通点が無さ過ぎる。

「だが君は、明らかに50レベルに達する前から、登場人物達に気付いて行動していたように感じた。

15歳のセンタータウンから来た孤児について、情報屋から情報を買っていたんだけど、たまたま君の状況に気がついてね。

だから詳しく調べさせていたんだよ、情報屋に。

君はまた特殊な職業なのかもしれないと思って、念のため接触を控えていたんだけど。

今日君達がついてくるのに気が付いて、どうせなら今の内に接触しておこうと思ってね。50レベルになる前に一度は接触してみようと思っていたし。

どうだい？ さっきの感覚であったり、人と違うことの原因にな

る様な心当たりはある？」

「……なんとなく行動していたが、違和感があった。

原因は思い当たらないな」

心当たりはなかったが、”補正持ち”についてはかなりはつきりと気付いていた。

だがそのことをわざわざ教えてやるつもりはない。

「これは確認だが、お前らが奴隷市場で孤児を良く買っていたというのは、特殊称号狙いか。

殺人鬼みたいな異質な者が怖いから、味方に引きこむようなことはせずに、奴隷としてなら……といったところか」

「確認ねえ、まあ今回はサービスってことで、それでいいよ。

概ねその通りかな。普通に味方に引き込むのはリスクが高過ぎるからね。

奴隷なら隷属の力で封じ込めることができるという話だし。

その場で殺したから詳しくはわからなかったが、殺人鬼を発動した奴は尋常じゃなかった。

動き自体はレベル相応なのに、傷口は広がるし防御を付きぬけて

急所に当たるし……。

もう二度とやり合いたくないね」

「……ん？ その言いぐさだと殺人鬼つてのは他にもいたのか？」

「ああ、言ってなかったっけ。特殊覚醒称号つてのは一応この世界の住人にも発生するんだよ。

ただ、尋常じゃ無い下積みと、才能……といっても何が必要なのかすらわかってないけどね。

サウスタウン最前線で有名な、『戦う料理人』は食の求道者らしいしね」

なんだその漫画に出て来そうな肩書は……。

思わずげんなりした顔をしてしまう。

「……これだけ話して確認で済まされるのも癪だけど、約束は約束だしね。

次の質問は？ ちなみにこれでラストだ。

勝手に悪いけど、情提供量はこちらの方が多いんだから勘弁してよ」

「ああ、こちらでも聞きたいことはあと一つだけだ。

お前らは主人公とかいう、特殊な存在と気付いた上で、エルフを買ったり、オリシュ達を尾行したり……目的はなんなんだ？

主人公とやらのイベントを利用したいのか？ そんな簡単に奴らを手中に収められると思っているのか？」

そう、元々気になっていたのはこれなのだ。

22話 先達の陰謀

22話

先達の陰謀

「ああ、こちらにも聞きたいことはあと一つだけだ。

お前らはエルフを買ったり、尾行したり、なにがしたいんだ。

主人公とやらのイベントを利用したいのか？ そんな簡単に奴らを手中に収められると思っっているのか？」

そう、元々気になっていたのはこれなのだ。

「そうだね、簡単なこととは思っていない。

一度顔も武装も変えた状態で、物盗りに見せ掛けて襲ってみたことがある。

驚いたね、相手はよくても30〜40代レベルでこちらは平均80レベルなのに、倒しきれなかった。

こちらの不意打ち、必殺の一撃は常になんらかのイレギュラーで阻害され、あちらの一か八かの特攻は常に成功する。

何かに、ファンタジー風に言うなら、世界にでも守られているかのようなね」

「……………」

「しかしこれは不可能ではないと思っている。

…………なぜなら、僕たちは現に手に入れているじゃあないか、あのエルフを」

口元を醜悪に歪め、欲望に染まり切った顔つきをしている。

ああ、知っている。

この顔は優越感に浸り切った顔だ。

「ああ、その通りだな…………」。

そして彼らを奴隷に、支配下に置くことができれば、畏に嵌めて奴隷に落としたという汚名を軽く雪げるほどの力が手に入るだろう」
さらに口が軽くなるように、合いの手をいれてやる。

……この様子だと別に煽てるまでも無く勝手にしゃべりそうではあるが。

きっと誰かに、外部の人間に誇り偉ぶりたかったのだろう。

そして俺は、”補正”についてわかる現代人であり、現時点でこいつらに対抗できるだけの力など有していない。

「ふ、っあはは、あっはっははは！ そう！ そうだよ！

考えても見てご覧よ！ この世界の英雄ヒーローになれる可能性を持つよ
うな存在が、僕の命令に従う様を！

命令を与えて適当に迷宮に放り込めば、勝手に強くなってアイテムもごっそりと持ってくるだろうね。

奴らが積極的に戦おうとしなくても関係ない、奴らには、勝手に強敵が群がるんだから！」

「……………」

「後はレベルが上がった彼らを使って僕たちもレベルを上げればいい。」

わざわざ最前線に飛びこむまでも無い……。

イレギュラーが起きてもなんとかなる、完全に安全マージンがとれる狩り場なら、死ぬことも無いだろう。

一度奴隷階級に堕ちれば、ご主人様が解除しない限り、奴らはその所有者が変わるだけで、ずっと奴隷のまま！

僕が死んでも所有者が変わるだけ……。

意地でも僕たちを排除しなくてはいけないような真似をしなければ、安易に僕たちが死ぬなんてイベントが起きることもあるまい！」

ユージは笑いを堪えきれないのであろう、終始口角を釣り上げたまま、興奮気味に捲し立てた。

その姿を見て、ただ滑稽だと笑うことはできなかった。

結局、俺もこいつも臆病者だということだろう。

虚勢で己を隠し、本来勝てない相手に駆け引きで勝ろうとする。

俺の方がポーカーフェイスが上手いだけで、精神的に摩耗するのは俺もこいつも同じだ。

確かに、俺も”補正持ち”を利用することは考えた。

”補正持ち”というものを嗅ぎ取ることのできる力……生憎俺だけの力などではなかったが。

これを如何に利用し、この争いの絶えない世界でのし上がり、贅を尽くした生活を送るか。

いやもつと単純な話、”力”を手に入れる、この全能感をどれだけ得られるか、人間の際限ない欲望をどれだけ満たせるか……。

”力”の象徴たる彼らを手中に収めれば、と。

しかし本当にそうなのだろうか、俺は何も確信を得られる情報など得ていない。

まず”補正”というものは御し得るものなのか。

逆に、そんなに”補正”というものは強力なのか。

ユージ……先行組の話を書くことで、「外部から操作を受けている可能性」を知ってから、今までの曖昧な基準が信じられなくなっていた。

そもそも、俺は”主人公補正”を持った人間の『圧倒的な力』とい

う物を見たことが無い。

勝手に絶対的強者として見ていたが、その確信を得るだけの出来事があったわけではないのだ。

確かに俺の心の中には、彼ら”補正持ち”は非常に強力であり、容易く人の心を動かす　愛憎は問わず　力があるということは、人間に三大欲求があるということと同じ程度に近い確信がある。

彼ら、”補正持ち”のことを考えるだけで、燃え滾るような感情のうねりに捕われそうになる半身。

しかしこれは明らかに与えられたもの、否、押しつけられた考えだ、理性的に理論的に考えると、俺の冷静な半身が囁く。

俺の頭の中にある”補正”とは、人の手に負えないものだとは思えないが、そう簡単に下せるものとは思えない。

今は冷静に様子を見るべきだ、目の前に丁度いいテストケースがいるではないか。

後手を取ることはなるが、相手（補正）の戦力分析、明確な情報を知ることが今はなにより優先すべきだ。

「……聞きたいことは終わりかい？そろそろ行かせてもらおうよ。

わかっているとは思っけど、手出しは無用だ。

君の保有する戦力は把握した上で、下手に探られてオリシユ達に

感づかれるの避けるためにこうして接触し、色々喋ってあげたということを忘れないようにね。

まあ、何もしないのは歯痒いだろうし我慢もできないだろう？

覗き見るくらいは見逃してやってもいい……僕らの、栄達への第一歩をね」

「ああ、是非参考までに拝見したいものだ」

ユージは俺の言葉が終る前に、さっと身を翻してしまった。

わざわざこうしてこちらに話しかけてくるようだし、おそらく今日は様子見、もしくは作戦のチェックだろう。

念のため、ユージ一行が去った後、今日回った階層で罾が仕掛けやすそうな箇所をチェックしておくことにしよう。

膨大な敷地面積のため気休めではないが、しないよりはマシだろう。

……できれば決行は、新しい武器が出来上がる二日後以降が望ましいのだが、そう都合よくいくかな。

翌日

ユージとの初接触の翌日、オリシユ一行が迷宮に向かったという報告を受け、先んじて30階層に侵入していた。

今日は狩りをするつもりはないので、荷物持ちのおっさんは置いてきている。

情報屋……と言ってもそんな本格的なものではなく、孤児や浮浪者十名程を小間使いにしている男にオリシユを見張らせていたのだ。

一端の偵察能力を持つ情報屋を長い時間拘束しておくのは金がかかると、むしろユージが雇っているであろう情報屋とのバッティングが怖い。

ただそこにおいて、詳しい情報を詮索せず　といつてもする能力がないのだが　外出時の装備を報告してくれるだけの存在の方が有難いこともある。

俺が監視していることをオリシユ一行に気付かれ、それが彼らの警戒に繋がれば、ユージ一行は俺を排除することを躊躇わないだろう。あくまで、さりげなく覗き見ることだけは黙認してやるということだけであるし、その言質もどこまであてになるかわからない。

極力どちらサイドにも気付かれぬのがベストだが……まあ、来るであろうと予想しているユージを誤魔化せるとは思えないが。

「オクラ、お前は隠密が下手すぎる………というか凶体がでか過ぎる」

「なんだ、じゃあ俺は待機か？」

オクラは無然とした顔をしている。

「いや、正直何があるかわからない。昨日の調査でも特に何も分かっていなかったしな。」

だからバックアップに入れ……… 『離れて潜んで様子見、もし俺が活動できない状態になったら、隙を見て俺を担いで逃げる。その後回復だ』」

服従の首輪の効力を発揮、念のため命令にしておく。

なんとなく首の下、鎖骨付近に入れられた入れ墨を撫ぜる。

個人認証などに使うこの入れ墨だが、奴隷に対する命令権や、所有物や権利などの登録も模様や文字となって組み込まれているのだ。

奴隷に刻まれる入れ墨には、『主人の命令を聞く』という魔法という名の呪いが組み込まれている。

この技術は国が保有し厳重に保管している門外不出のもので、奴隷

登録した名簿も厳密につけられている。

もし国が関与していない奴隷がもし見つければ、おそらく国を挙げ
ての一斉捜査が行われるだろう。

それだけの価値が、危険度がある技術だ。

この奴隷の所有権の譲渡や、奴隷化の解除自体は個人で行うことが
できるので、分不相応な奴隷を持つものは当然狙われる。

「おう了解だ。

任しとけ、どうせお前以外に所有されてもまともに扱われるなん
て思っ
てねえよ。

命令を婉曲的に取ったりしねえと誓おう。その代り……な？」

相変わらず自分の欲望に忠実な奴だ。

思わず口元がにやけてしまう。

オクラが言ったように、奴隷は命令に従うようになっていたのだが、
その命令内容を婉曲してとって逆ったり、持ち主の意図していない
行動をとることもできるのだ。

「は、ほんと正直な奴。

上手くいったら酒でも女でも買ってやるよ。まあ直接的に何か手に入るかは……正直望み薄だが」

今回のことは、稼ぎというよりも情報収集、もといこれからの方針を決めるための行動だ。

「それじゃあ、適当に散って様子見しとくぜ」

「ああ、頼んだ」

潤沢に買い込んだアイテムを分けて持ち、解散した。

23話 誘導

23話

誘導

前日、オリシユ

今日も迷宮での狩りを終え、仲間達と共にギルドで酒を飲んでいた。

この場にエルフのキルエも一緒にいればどれ程良かったか……。

だがしかし、キルエを買った一行の一人と交友関係を結び、聞いた話によると、そうひどい扱いは受けていないようだ。

今まで順調に進んできたので、今回のキルエ件、間に合わなかったのは非常に辛かった。

もっと金を貯めてキルエを譲って貰えるようにお願いしてみよう。

思考の海に沈んでいると、こちらに素早く近づいてくる影が一つ。

「……オリシユ」

「マキ、どうしたんだい。顔色が悪いよ」

マキは、奴隷市場でタッチの差でキルエを買っていった、ユージという男をリーダーにしたクランの一人。

キルエを譲って欲しいと話を持ちかけたときに交友関係を持つことができ、クラン内でのキルエの扱いについて教えてくれている友人だ。

そのユージという男、なぜか僕のことを睨むように見ていた気がするんだけど、マキに聞いてもわからないそうさ。

「キルエが危ないの」

「！ キルエが！？ なにがあつたつていうんだい？」

「ええ！ ど、どうしたんですか？」

「キルエって、あの奴隷市場で買おうとした子よね？」

「危ないって、一体何があつたんだ？」

「ああもう、ちょっと貴方達落ち着いて！ 話すにも話せなくなる

でしょ！」

慌てて聞いたただそうとしてしまった僕、ニユウ、レイツェン、ナイトをクーシャが宥める。

クーシャは冷静で、こんな時とても頼りになるな。

「あ、ありがとうクーシャさん。」

あのね、キルエが迷宮に慣れるように、50階層までゲート無しで行ってただけど……」

「ああ」

「キルエってエルフ、しかも人間と交友しない種なだけあってプライドが高いでしょ？」

今までも何度も命令に背こうとしてただけけれど、それでユージがキシちゃって、怪我をしたキルエをそのまま置き去りにして撤収しちゃったんだ」

さっ、と自分の顔から血の気の引く音が聞こえたような気がした。

「そ、そんな！ キルエは！」

「ご、ごめんなさい、止めようとしたんだけど、私も無理矢理連れ

出されて……。

前衛の男の人には、とてもじゃないけど力じゃ叶わなくて」

気付くとマキは顔を真っ青にして、涙目になっていた。

「いや、伝えてくれてありがとう。それで、キルエの場所は」

「38階層よ。Bの9から10らへんだと思う。」

魔法も沢山覚えてるし生還くらいできるだろうってユージは言うんだけど、怪我もしてるし不安で。

私この後すぐユージ達の所へ行かないといけなくて、ユージに逆らうとクラン追い出されちゃうから……ごめんなさい」

可哀そうに、後衛のサポート職だからあまり強く主張できないのかな。

でもこうして伝えに来てくれた。

なんていい子なんだ！

「いいんだ、伝えてくれてありがとう！

……もしどうしても我慢できなくなったら言ってくれ。僕たちと

「一緒に行く」

「オリシュ……ありがとう」

「いいんだ、伝えてくれて、重ね重ねありがとう。」

皆、一緒に行ってくれる？」

「おう、さっさと行くっぜー！」

「仕方ないわね、こんな話聞いて行かないわけにはいかないでしょ」

「はい！ いきましようー！」

皆僕に同意して……ん？ クーシャ？

「クーシャ？」

「……少し引っかかるどころもあるけど、今はそうも言っちゃ
れないか。」

行くなら早急に行きましょう。夜になったら魔物が獰猛になって
しまっわ」

そっだ、もう日が暮れそうな時間帯。

急いで駆けつけなければ！

38階層 スティル

隠密装備に隠密スキルを発動させ、冒険者狩りで磨いた尾行のノウハウをフルに生かしながら後を尾行する。

50階層まではほぼ例外なく、ごつごつとした幅の広い洞穴で、足場も岩だ。

今回のために、鋼鉄で補強した靴の足裏に魔物の毛皮を貼り、極限まで足音を殺して走っている。

「急ごう、もうすぐ聞いた座標付近だ！」

オリシユが先頭を進み、クーシャ、ニユウ、レイツエン、ナイトと続く。

派手に足音を立てるが故に寄ってくる魔物を蹴散らし進む。

ここ38階層は、状態異常の牙を持つバット（コウモリ）系の個体

数が多いため人が少ない。

バット系以外は35階層に出現する魔物の種類と大差ないので、大抵は35〜6階層か40階層以上に移動するため、最短距離で通り抜けるだけの階層となっている。

（話はよくわからないが、おそらくエルフを餌に呼び出されているか、誘き出されているのだろう）

ただでさえ人の少ない38階層の中でも、上下階段からかけ離れた地点。

これだけ遠ければ人が来ることはなかなか無いだろう。

牙に麻痺毒を持つバットが俺の近くを通る。

魔物が好まない匂いの粉袋（消耗品）を持っているとはいえ、なにがきっかけで気付かれるか、不安が隠せない。

それからしばらく走り続け、急に進行速度が遅くなる。

おそらくこの付近でなにかあるのだろう。

丁度あちらから死角になる位置に岩場があるため、そこに身を潜める。

「キル工！ キル工無事か！？」

「皆、手分けして探しましょう」

そのクーシヤの呼びかけに、皆頷く。

この階層でばらばらに行動しても問題ないということは、個々の戦闘力は中々のものだろう。

50には届かないとしても、40代であることは間違いない。

(つと、散開して探索ってことは、隠れないと危ないな)

と我に返るも、その必要はなくなったようだ。

今俺が身を潜めている、3m程の岩と岩の間と、オリシユ一行を結ぶ線の先に見える小部屋から微かに声が聞こえてくる。

「オリシユ、あの部屋から声が聞こえるぜ」

「急いで！」

「ええ！」

「ちょ、ちょっと待って、少しは冷静に……」

程無くしてオリシユ達も気付き、一斉にその部屋へと向かっていった。

畏など考慮せずその突っ込む4人に、止めようとするクーシヤ。

あの中では唯一思慮深い性格をしているようだが、つられて一緒に行ってしまった時点で手遅れだろう。

ユージが畏を仕掛けるというのは、俺の中ではほぼ決定事項だ。

案の定その小部屋の裏手からユージ達が出てきて入口に何かを放り投げる。

「マジックストーン、ディメンションウォール（次元の壁）、発動」

オリシユ

「キルエ！ 無事か!？」

小部屋に駆け込むと、ぐったりとした女　キルエがいた。

部屋の隅でうつむいていて、顔も見えないのにも関わらず美人と思わずにはいられないその姿に、僕はその人をキルエと確信し近づいた。

「う……あ……」

「……キルエ、これは!？」

「……ひどい、ね」

「い、いたそうです……」

「くっ」

キルエは手足の腱を切られ、口に布を詰められ塞がれていた。

明らかに、人為的なものだ。

なにかを訴えかけるように、激しく体を動かしている。

「すぐに治療を……」ニューウ急いで

「だめ、今すぐこの部屋を出な……」

「マジックストーン、ディメンションウォール（次元の壁）、発動」

唐突に聞こえた声とともに、唯一の出口が、次元の歪みで塞がれる。

ぞわりと背筋に冷たいものが走る　この気配、そして今まで僕たちが気付けなかった……間違いなく強敵ッ！

「　くっ、畏か！　皆戦闘態勢！」

その時、次元の歪みの向こう側から、泣きそつに顔をゆがめたマキの顔が見えた。

「な、マキ……!!」

「なんですって！　マキ!?!」

動揺に激しく心が揺さぶられる。

マキとはよく話していたレイツェンも同じく、強いショックを受けたようで、体が硬直している。

「馬鹿！ 今はそれどころじゃねえ！」

ナイトの声に我に返り……。

「そうだよ、それどころじゃないだろう……？」

次元の壁の向こう側から、ユージの厭らしいにやついた顔が不快な声を発する。

ユージ！ あの時睨んでいたと感じたのは間違いではなかったのか！

なぜこんなことをするのか、という混乱と怒りで頭が真っ白になる。

「ごめ、ごめんなさい、オリシュ……私、わたしい」

「ちっ、骨抜きにされやがって。

俺たちは主人公の毒気に影響されやすいんだから気を抜くなつてあれだけいっただろうっ！」

主人公？ 影響？ 何を言っている。

そんなことより、マキが泣いているじゃないか……！

どうして、マキ、騙されて？ 脅された？

「まあいい、もうひとつ発動だ。かなり高価なんだ、”主人公様”、しっかりレアで強いのを呼び寄せてくれよ？」

マジックストーン、ディメンションドア（次元扉）発動」

24話 魅了、暴走

24話

魅了、暴走

オリシユ

「まあいい、もうひとつ発動だ。かなり高価なんだ、”主人公様”、しっかり強いのを呼び寄せてくれよ？」

マジックストーン、ディメンションドア（次元扉）発動」

ユージの声と共に、”30m”程のやや広めの密室と化した部屋の片隅に、周りの空間を飲み込むような黒い渦 次元の扉 が開く。

「くそっ、なんなんだ！ 奴はさっきから何を言ってる!？」

「言ってる場合か馬鹿野郎！ オリシユ、早く構えろ！」

ナイトの声に我に返る。

いけない、危険な場面ばかりなのにどうしても注意が散漫になってしまつ。

皆に助けられて僕は今ここにいる……なんとしても皆を守り抜かないと！

「皆構えてツ！ 敵が出てくる！」

僕の一声で怯えていたニユウも我に返り、皆が武器を構える。

不安げな顔をしているが、お互い信頼し合っている仲だ。

ここにいるメンバーになら、何の躊躇もなく背中を預けることができる
ッ！

「ニユウ、キルエを回復！ クーシヤ、補助魔法を！ ナイトは前衛で壁を頼む！ レイツェン、僕は中衛から前衛で遊撃だ！」

このディメンションドアの魔石は、ペア以上の数で効力を発揮する魔法石だ。

『入口』『出口』を設定して使うため、状況的に考えて目の前にある洞は出口………ということとは、ここから敵が出てくるのは必然と言ってもいい。

これが入口ならどんなに良かったか………いや、もしこれが入口だとしたら、出口は罠の真っ只中だろう。

それなら同じことだ。

次元扉が一段と大きく開き、そこからぞくぞくと魔物が出現する。

真っ黒な絵具をぶちまけた様な、エネルギーの塊の様な風体のソウルシーカー。

動きが素早くて小さく、物理攻撃が効きにくいエレメンタル系の特性を持った非常に厄介な魔物だ。

犬に触手がついたもの、猪に触手がついたもの………様々な動物系の魔物の死体に寄生した、醜悪な触手が本体であるソウルイーター。

本体の触手自体は非常に鈍重で、自力で動き回るのも困難なのだが、寄生した魔物の能力次第では戦闘力が段違いに跳ね上がる。

この二種が続々と………現時点でざっと30体以上出てきており、まだ増えようとしている。

この次元扉が繋がっている場所次第では非常に苦戦することになるだろう。

そしてなによりの特徴が、この二種は天然の魔物ではなく、高位のアンデッドに『使役』されている存在ということだ。

殺戮と搾取に特化した個体……その搾取した力（経験値）を上位存在に献上するために作られた人形なのだ。

分散移動して効率よく経験値を集めようとするため、いつも主人のそばに侍っているわけではないので、普通に考えれば主人たる高位アンデッドはいない筈だが……。

「ひっ」

「なに？ この寒気……」

魔の力に優れたエルフであるキルエ、教会出身で幼少期から魔に触れてきたクーシャが、今まさに出てこようとしている魔物に過剰に反応する。

「FUSYURURURURURURURURURU」

「OOOOOOOOオオオオオオオイニオイガSUSUSU
スrrrr」

鳥肌が、悪寒が全身を駆け巡った。

コワイコワイコワイコワ
イコワイコワイニゲタイニゲタイニゲタイ
コワイコワイghhijapovkコワイコワ
イコワイコワイニゲタイニゲタイニゲタイ
ニゲtabigojaiイヤダイヤダイヤvnaoidaiヤ
ダイヤダダダダダ
クワレルオカサレルタベラvdaos
レルスワレ
ルキラレルムサボラレイタブラレカジラレチギ
ラレbniklgmキラレナグラレブタレキユウ
コワイコワイコワイコワ
イコワイコワイニゲタイニゲvfk;a:abタイニゲタイ
ニゲタ nkmf;kdiiヤダイヤdvnak;iヤダイヤダイ
ヤダイヤダ
クワレルオカサレルタベラ
レルsrhiflsjワレ
ルキラレルムサボラレイタブラレカジラレチギ
ラレキラレنادiapグラレブタレキユウインfjdiasaレニ
ゲラレコrohgiipadvサレルインサレニゲラレコロサレレgh
diajレレレル
ニゲタイihogira;vヤダイヤダ
イヤダイヤダイヤダイヤダクワレルオカサレルタベラ
レルスワレ
ルキラレルムサボラレイvidpajdタブラレカジラレチギ
コwdviapskイコワイacocoコワイコワ
イコwjgga.j@イコワイニゲタイニggvinr;samvゲタイ
ニゲタイ
nva;m1ゲタイイヤnnvidaダイヤダイヤnnviappダイヤ

ダイヤダイヤダ

n v f i p a r r r r r k w l e l o k a s a l e l t a b e r a
レルスワレyyyyvdja
ルキラレm1:f a l m s a b o r a i t a b u r a l e k a m b f a j i r a l e c h i g i
ラレキラレナグラレブタレキュウインサンv a ; k m v : レニゲラ
レコロサレルr r r r r r r r r r r r r r r r r r r

脳内を恐怖が、負の感情が支配する。

その圧倒的存在感が、僕たちの足を縛り、意思に反した後退を強いる。

「ひっ、ひいああ……」

「やだやだやだやだあだ」

「……………」

「おいなんだこいつは、なんなんだよ」

「こいつらは」

「ふは……ひっひはははあ！　すげえ！　すっげえおおい！

マインドフレシアに、おいまじかよ、リッチだ！

俺たちが繋いだのは、100階層だぞ……信じられねえ、100階層からリッチを引き込むんざあ、どこのどいつが可能なんだ！」

ユージかその仲間か、一人称からして仲間か　どちらでも良い、どうでもいい、ああどうすれば　。

マインドフレイアとは、人間の様な四肢を持ち、イカの頭に口からイカの足のような触手が何本も生えているグロイ魔物だ。

その触手で知的生物の脳味噌を捕食する特徴を持っており、その強さを際立てる能力である『マインドブラスト』は、広い範囲に痺、朦朧状態などの状態以上を引き起こす精神攻撃を行うことができる。

リッチは魔術を究めた魔道士が、さらに力を求めるために自身をアンデッドと化した存在。

恐るべき魔法や古の呪文を使いこなし、アンデッドの不死性を持ち、なにより人間の様なずる賢さが最も恐ろしい魔物だ。

100階層以降でも滅多にお目にかかることのない、できれば関わりたくない恐るべき魔物である。

「きやつ、たすけ」

絶望に体を強張らせ、硬直していると、ニユウの悲鳴が耳に入ってくる。

その瞬間、自分でも驚くほど自然と体が動いていた。

まるで素振りをしているように滑らかな動きで抜刀、同時に両断。

特殊な鍛造方法で魔の力を宿した刀が、ニユウに今まさに襲いかからんとしていた大型のソウルイーターを切り裂き、鮮やかな切り口を見せていた。

それはスキル『居合斬り』の動きを体で覚え実行に移した、この世界の恩恵であるスキルに頼ることのない、完璧な個人技^{ブレイヤースキル}。

スキル特有のデレイという枷も、同じスキルが連発できないという制限も無い才能と努力の結晶だ。

（ニユウを、仲間を守らないと！ 今は目の前の絶望をどうにかする……！）

そう思うだけで、眼前に佇むマインドフレシアにリッチという圧倒的存在が、その場に存在するだけで放つ精神の呪い”威圧””呪縛”なんて、容易く破って（レジスト）みせる！

「嗚呼あああああ！」

魔力を刀に流し込み、縦に横に斜めに、当たるを幸いに振り回す。

普通なら厄介極まりないエネルギー体であるソウルシーカーは、確かに素早いですが、僕の魔力と鋭い刀の太刀筋の前では無力な塊に過ぎない！

しかし油断はできない。

ソウルシーカーの攻撃をひとたび負えば、MPやHP、さらに経験値まで吸収されるのだ。

様々な魔物に寄生したソウルイーターが非常に厄介だ。

寄生した魔物の中には非常に硬い皮膚の持ち主や、甲羅に覆われた者もいる。

そしてなにより、100階層の魔物だ……寄生後は元より弱体化しているとはいえ、時折飛んでくる触手の厄介さもあって、とても手強い。

その触手に捕まると、こちらもMPやHP、経験値を吸収してくる。

それも膨大にだ。

ソウルシーカーの伸びてくる影を消し飛ばし、ソウルイーターが脅威の速度で振るう触手を斬り飛ばす。

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

調子よく振るっていた刀が、カキンと甲高い音をたてて弾かれる。

このままでは埒が明かないと、ソウルイーターが宿った魔物ごと突進して来たのだ。

アーマーワイルドボア（甲冑猪）、体長が2 m以上ある体軀をレベルに応じた硬さを持つ表皮で覆った猪、それも深層の高レベルのものだ。

「くつつ、通らないかッ！ なら！」

『斬空波』 『斬光波』

「うおおおおあああああああ！」

光を宿した空を切り裂く刃が、敵の守りを抜けその身を刻む！

光の刃がアーマーワイルドボアの首から右前脚にかけて切り裂く……が、その突進は止まらない。

「く……」

来るであろう衝撃に備え、ダメージを最小限に抑えようと体を縮こ
まらせると。

「おるあつ、『ヘヴィスラッシュ』！」

僕の後ろから、ナイトが素早く前進。

重厚なファルシオンがアーマーワイルドボアに出来た傷口を綺麗に
なぞり、その半身を切り飛ばした。

「ナイト！」

「済まない、呆けてた。もう大丈夫だ！ お前が勇気をくれたから
な！」

「私としたことが、情けない所を見せたわね。

オリシユ、あなたといると、不思議と力が湧いてくるの……体か
ら進むような何かが！

「さあいくわよ！」

「ごめんなさい、あなただけに任せてしまつて。

不思議ね、あんなに辛かった”呪縛”が、あなたを見ているとなんとかかなりそうな気がするわ”

「わ、わたしもがんばりますっ！

オリシユさんがいれば、どんな障害だって……！」

「レイツェン、クーシャ、ニユウ……！」

「くっ、私がただのお荷物だなんて、情けない……もう戦える！」

あれだけの深い傷を四肢に負って長時間放置されていたのに、もう立ち上がって戦意を見せるキルエ。

その体はどこか神々しく見え、光すら放っているようだ。

「キルエ……よし、共に戦おう！」

皆の勇気に、覇気に、僕も勇気づけられる。

僕たちが6人揃えば敵なんていない！

皆に出会えてよかった、共に戦えてよかった……。

「ありがとう皆、さあ、蹴散らすぞ！」

今僕たちは最高に輝いている　！

ユージ

「はっ、ははは……おい信じられるかよ、あいつら」

現代から同じく渡ってきた特殊覚醒称号”賢者”の仲間が、マキを拘束し剣を突き付けたまま、茫然とした様子で呟く。

凄くわかるよ、その気持ち……普通なら考えられない光景だが、僕はどこか納得していた。

これが”主人公”か……世界に愛された、世界の子か！

「すごいね、僕らじゃこそこそと逃げ回り続けて、100階層になんとか到達できる程度なのに」

「その100階層の魔物を、しかもとびきり厄介なソウルイーターにソウルシーカーを当然の如く退けてやがる」

「信じられない、あの剣に纏わりついている光は……なんだ？」

あの光はオリシユが出しているようだが、他の奴らの武器も少し発光しているよな」

僕の言葉に続くように、同じく現代から来た仲間の二人　こちら
はただの覚醒称号で、”戦士”と”忍者”だ　が話す。

そう、僕たちでは100階層の魔物とまともに渡り合うことは難しい。

ましてやユニークモンスターなど以ての外だ。

普通に襲って駄目なら、所謂イベントモンスターののような敵をぶつければいい……それが僕たちの出した結論。

”主人公”の力できつと珍しい敵が出るだろう。

”主人公”ならきつと撃退するだろう……ぼろぼろになって、半死半生になりながらも……だってそれが主人公ってものじゃないか。

大抵物語やゲームの”主人公”がやられる時っていうのは、圧倒的

強敵か、誰かを守るためか、強敵との戦闘後に捕えられる時と相場は決まっている。

例え駄目で死んだとしても、ユニークモンスターさえ呼び出してくれればいい。

この密室で完璧に閉じ込めた所を、手段は限られているが、ディメンションウォール越しに一方的に殺せる。

まして相手は”主人公”との戦いで弱っているのだ。

100階層から”主人公”に呼び出される敵だ……さぞかしレアなアイテムをドロップするだろう。

「なんか、綺麗、だな。共鳴しているような……」

「ああ、神々しい気すら……美しい」

オリシユ達の戦っている姿を見ると、本当に後光が差しているような、金色の光るオーラをまとっているように見えた。

そしてそれがあまりに自然で馴染んでおり……。

「……………ああ、本当に輝いているよう……くっ」

がじり、と唇を噛みしめ顔を逸らす。

おかしい、本当に後光が差して見えるなんて、攻撃のひとつひとつに光が迸って見えるなんてありえない！

「見るな！目を瞑るか顔をそむけろ！」

「……はっ」

「なるほど、これは」

「ちいつ、厄介な”体質”だなこれは！」

僕の声に、僕とマキを拘束している特殊覚醒称号”賢者”の男、周りを警戒している”戦士”と”忍者”の男のメンバーが目を瞑り顔を逸らす。

そう、僕たち現代人は”主人公”達を検知できる代わりに、非常に影響されやすいという体質を持っている。

現代人に付与された属性なのか、”主人公”を知覚できる故か。

蚊に刺された痕を発見することでより痒いと思うように、自分が病人だと告げられたため衰弱するように、”主人公”という存在を知覚した故に愛憎が激しく感じるのではないか。

やはり、という言葉が胸を一杯にする。

仲間である男の首……頸動脈から血が噴き出し視界が遮られる瞬間、こちらに短剣を振りかざしてくるマキの姿。

「ばっかやる……」

「オリシュ！ オリシュウウウウウウ！」

茫然としていると、握りしめていたマジックストーンが宙を舞っているのが見える。

万が一が無いようにと、渾身の力で握りしめていた、『ディメンションウォール（次元壁）』を解くための『ディスペル解除』が込められたマジックストーン。

なぜ？ なぜ宙を舞っている……今だってこんなに力を込めて、込めて……。

「づああ あああああ」

マジックストーンのすぐ下を、自分の腕が舞っている。

蚊や病気と一緒に、不思議と麻痺していた痛みが、自分の腕の所在を確認することで襲いかかってくる。

「ディスプレイ！ 発動！ 早く！ はやくはやくはやくはやく！」

霞む視界で、ディメンションウォールが空気中に溶けて消えるのが見える。

マキの声がどこか遠く感じた　後悔が、胸を一杯にする。

ああ、悪役に徹しきっていれば、マキを殺していればどうにかなったのだろうか。

いや、場所が悪かったのか、こんな遠回しな手を使わなければ、もっと直接的にエルフを人質にしていれば。

それとも、奴らに手を出さなければ……？

「くそ、薄汚い裏切り者、尻軽女ガアあつ」

鮮血が辺りを染め、手足が舞い、呪詛がその場を侵していく。

これはなんだ、なにが起こった。

俺たちの終わり、主人公たちの始まりという茶番

これは主人公の奇跡か、それとも、俺達の呪いなのか

残った仲間二人が、気が狂ったように喚き散らしながら気が狂ったように喚き散らすマキを串刺しに、気が狂ったように滅多刺しにし、気が狂ったように解体する。

デイメンションウォールが塞いでいた出口に、獲物を求めてソウルイーターにソウルシーカーが殺到する。

「は、ははっひははは」

気付けば笑いが漏れていた。

垂れ流していた。

ぼたぼたと零れ落ちて、どろどろと流出して、じわじわと染み出ていた。

「ふ、っふハハハハ、くっくっかっはははっはは」

あたまのなかを、あきらめるあきらめるとくりかえしくりかえしくりかえされるこえがきこえる。

さいしょからかてなかった、じゃまなんてしていいそんざいじゃない。

あなたはしおのみちひきをとめることができるの？
あなたはひがのぼるのをしずむをとめられるの？

おわりだ、おわりだおわりおわりおわりおわりおわりおわり。

「ああ、っ、黙れ！　終わらせない！　終わりじゃない！」

海なんて埋め立ててやる。海を煮込んで蒸発させてやる。無理なら
内陸に引きこもってやる。

屋根を造れば太陽なんて見えない。でっかいレーザーで太陽を吹き
飛ばしてやる。地下に引きこもればお前の光なんて届かない。

根本的な解決が望めない、後ろ向きな考えばかりが脳内を占めるが
どうだっていい。

い……強烈な目眩が襲ってくる。

（おかしいな、辺りには魔物が来ないように魔物除けの粉末を……
それもとびきり高価な物を撒いた筈なのに）

（散漫になった集中力でも、この階層レベルの魔物の接近なら気付
けるはずなのに）

振り返り確認しようと首を傾げるが、布の様な物を被せられ視界が
遮られる。

もがもがと口を動かすが、変に口に布が入っており呪文の詠唱もで
きない。

（え、なにが　死ぬのか、どうして）

「ぐっ、」あ……」

頭部と鳩尾もう一撃ずつ衝撃が走り、体が動かせなくなる。

混乱してもがいていると、明らかに手慣れた速度で荷物を剥ぎ取ら
れるのがわかった。

「……殺す……わけにはいかないか」

ぼそりと声が聞こえたが、布越しなので男ということくらいしかわからない。

今度こそ終わった、絶望感が胸を一杯にした。

24話 魅了、暴走（後書き）

スティル君の伝家の宝刀、マクロでスキルの模倣がオリシユのチート才能でアドバンテージがががが。

実はこの技術、超少数ですが出来る人もいるという設定です。

「実現可能」ってことはだれかが実現できてもおかしくない。

凄い鍛錬がいるんで、全てのスキルを使えたり速度まで調整するのは難しいですけどね。

25話 上位の存在

25話

上位の存在

スタイル

隠れてずっと見ていたのだが、尋常じゃなかった。

何が尋常じゃなかったかというと、すべてが尋常じゃなかった。

(ユージ達のやることがダイナミックすぎる。100階層から敵を呼び込むなんて……素晴らしく斬新で狡い発想だ。

例え奴隷に墮とすのに失敗しても、殺してしまっても元は採れそ
うな作戦だな。

そしてなんだあの光は。”補正持ち”同士の共鳴？ 目にしただ
けで心のざわつきが半端じゃなかった)

しかし不思議なことに、心がざわつくと同時に、もう半分の自分は
明らかに冷めた目線で現状を分析し。

それに引っ張られるように自分も落ち着くことができた。

「どづい理屈が知らないが、有り難いことだ」

そうこうしている内に味方同士で殺し合いを始めるユージー行。

見れば、オリシュと魔物を閉じ込めていたディメンションウォール
が解けている。

「…………殺す…………わけにはいかないか」

迂闊にも声を出してしまふ。

戦闘不能にし、布を被せているユージ相手には大丈夫かもしれないが、あの錯乱しているユージの仲間の二人に気付かれるわけにはいかない。

（ユージが死ねば、彼が所有していた奴隷の所有権は遺産扱いとなり、登録している次期継承者…………この場合おそらく、この場にいる同じクランの現代人に譲られるだろう。

その現代人が死んでいれば、奴隷は国保有の奴隷に戻る。普通に考えて奴隷階級に落ちた者が下剋上を狙える可能性を残すはずなどない。

この動きを”補正”が阻害するかもしれないからな）

その場合、また売りに出されることなどなく真っ先に国がその身柄を押さえ有効活用するだろう。

そうなるオリシユ達がエルフ…………キル工と言ったか、彼女を取り戻すのに苦戦する。

”補正”がその動きを阻害する可能性を考えて、念には念を入れて致死性のある攻撃を避けたのだ。

品。
余りにも無防備なユーザに、彼の装備している煌びやかな装備

この手の出しようのない状況に、真っ先に逃げ出すのがベストというのはわかっていたが……思わず動きだしてしまった。

リスクはあるが、最小限のリスクでかなりのリターン（利益）を得られると判断したのだ。

この場に残って様子を見ることができれば、凄まじいメリットがありそうだ。

が、“補正持ち”に対する情報が少なすぎる現状、あまり欲を出し過ぎるのは良くないだろう。

正直この“実験”ともいえる、“補正持ち”との罠を含めた戦闘の情報、“補正持ち”の出鱈目さ……。

これが知れただけでも大きな収穫だったのだ。

なにより事態が急変し過ぎている。

正直ディメンションウォールが解けた時点で逃げなかったのも冒険だった。

(……このまま何も起きないでくれ、一分でいい！)

ユージから素早く装備を剥ぎ取る。

水属性の槍に、地属性の短刀、純銀製のナイフ数本に、何やら魔法の力の込められた30〜40?程のバックラー(腕に装着する盾)。アイテムが納められた袋、金品を担ぎ、いざその場を離れようと足に力を込めた瞬間。

『ダークネスフィールド(暗黒空間)』

魔物、おそらくリッチかマインドフレイアが発動した魔法で、辺り一帯が墨汁をぶちまけた様な闇に包まれる。

ステータス、称号共に優れているが、レベルが31と低いため、余りのレベル差にほぼレジスト出来ずにまともに食らったのだ。

誇張無しに目と鼻の先さえ見えない。

（なんて密度の暗黒魔法だよつ。ちいつ、足場が）

一瞬足が止まり、全力で闇雲に逃げるか、攻撃に備えてその場に身を投げ出すか躊躇する。

その一瞬の躊躇が命取りとなった。

『マインドブラスト（精神爆破）』

『グラビティコントロール（重力制御）』

マインドブラストにより、脳内を熱した鉄の棒でかき回されるような悶絶を、痛みを、苦しみを多重に味わう。

また、リッチの手元で膨大な魔力が編みこまれた、またはぶち込まれた重力制御の魔法が、驚くべき力で辺り一帯 勿論俺の体も を引っぱり、発動者の元へ連れて行こうとする。

まだ距離が遠くてよかった、これで距離が近かったら下手すれば精神崩壊のみで死んでいたかもしれない……。

痛みを堪え、無様に手足をばたばたと振り回すが、しっかり掴まれるような突起や踏ん張りのきく壁があることもなく、容易く魔物の群れの元に引き摺られてゆく。

「くっ……はぁあ……」

「が、くそっ、欲を出すべきじゃなかった……あぐっ」

自分の持っていた荷物にユージから奪い取った荷物が体に叩きつけられる。

だが今はこの荷物の重さで少しでも引き摺られる力を抑えたい……背に腹は代えられない。

そして、リッチやマインドフレイアに近づけば近づくほど悪寒がどんどん増してくる。

デイメンションウォールが解けた今、リッチやマインドフレイアが持つ”存在の呪い”を減衰させるものはない。

「まずい、まずいまずいこのままじゃまずい」

自分が装備していた槍と、ユージから剥ぎ取った槍を両手に装備しどこかにひっかからないかと振り回す。

すると、左手に持ったユージの槍に何かにつまみ具合に引っ掛かった。

「G I G Y A G U A A A A A」

「ち、くそつたれがついてねえ!」

おそらく解放されたソウルイーターかソウルシーカー………実体があるからソウルイーターだろう、こいつに槍が刺さり引っ掛かったのだ。

視界の暗さに相手の形態すらわからない。

『ヘヴィスラスト』

右手の自前の槍をソウルイーターに引っ掛けなおし、左手の水属性の槍を使った、重く力を込めた刺突スキルがソウルイーターの胴体辺りを深く貫く。

「G U O O O O O O O O O O O O」

鍛練で両利きにしている良かった………というかこの世界、どちらの手でも武器を扱えない戦士の方が数少ないのだが。

左手をしっかりホールドし、リッチやマインドフレイアよりはこっちのほうがマシだとその場に留まる。

そして右手の普通の槍でソウルイーターの頭のありそうな……先ほ
どからでかい声が聞こえる辺りを滅多刺しにする。

このまま勢いで押し切れるか……と思った矢先、

「かつ……はあ、ああっ」

右腕と胴体に挟られるような激痛が走る。

体勢を立て直したソウルイーターの触手が突き刺さったのだ。

まともに体が動かせない……どころか、どんどん力が抜けていくで
はないか。

「ぐ、これがドレインか……」

体から精気が抜かれていく感覚……朦朧とするような速度で魂の力
(経験値)を吸われる。

ソウルイーター自体が尋常じゃないほどの格上で、さらに100階
層の魔物に憑依しているなど、そもそも不意打ち以外で倒せるはず
がなかった。

あれだけ、油断はしないと思っていたのに、事ここに至って冷静に
思考ができないとは……そもそも100階層レベルの魔物に今の段
階で太刀打ちできるはずがなかったのに。

間にあつた触手が数本千切れ飛び吸引の力が弱くなる。

『偽五段突き』 『偽五段突き』 『偽五段突き』 『五段突き』

何度も何度も、例え弾かれようと強引に体勢を立て直し突きだし続ける。

「ぐ、ギ、がぐあつこアアああ ああ

疑似スキルの合間の、正規のスキルの間はマクロでない為普通に痛覚が反応する。

左手が焼けつくように、千切れるように痛む。

まさに筋肉の筋が千の数ほどにばらばらになるような痛み、熱い熱い熱い熱い熱い。

ばちんばちんばちんと次々に鳴る何かが千切れる音。

おそらく筋肉が完全に千切れてしまったのだろう。

『偽五段突き』 『偽五段突き』 『偽五段突き』 『五段突き』 『偽五段突き』 『偽五段突き』

腕が湿っている、顔にびちゃびちゃと温かい汁がかかる。

ああ血だ、血液だ。

筋肉が千切れ肉が裂け、うまく槍が固定されず穂先はぶれ放題……
与ダメージはどんどん減っているだろう。

しかし関係ない、ダメージが通ればいいのだ、殺せばいいのだ、
死ね、死ね、死ね死ね死ねしねしねしねしねしねしねしねしね
腕が破損し過ぎて掌に力を入れることがますます不可能になり、血
に濡れた手から槍がすっぽ抜ける。

……気付けば、ソウルイーターはずたぼろに穴だらけになっていた。

それでも律儀に『偽五段突き』の動きを再生するマクロを何とか思
考で停止する。

「は、ははは、ふっくくく」

いつの間にかグラビティフィールドによる吸引は収まっているよう
だった。

途中でなにか光や戦闘音が聞こえた気もしたが、そちらに意識を向ける余裕があるはずもない。

(やった、やったやってやった……)

なんだなんなんだ、こんな化け物をさくさくと倒す40レベル代のあいつらはッ！)

怒りが沸いてくるが、今はソウルイーターを殺したことで、吸い込まれていた自分の力(経験値)が戻ってくる感覚に酔いしれる。

そして100階層のレベルが100に近い、少なくとも70レベルはあると思われる魔物を倒すことにより膨大な経験値を得、レベルが2→3一気に上がった気がする。

「ハハはははは！ やってやったぞ！」

そしてなにより！ 目の前にぐちゃぐちゃになったソウルイーターが……。

そう、ソウルイーター” たったの一体”の屍がそこにあつた。

その周りには十数体ものソウルイーター、ソウルシーカーが蠢いていたのだ。

「あ、あは、くっふははは……だ、めだこりゃ」

スタイル：L V 3 1 3 3

26話 覚醒

26話

覚醒

オリシユ

「『ブレイブハート』！これで精神異常はある程度は緩和されるわっ！」

クーシャの教会産の補助魔法　補助魔法は、消費物ではない秘伝の魔法書から身につけることができるものが多い　が僕たちの体

を優しく包み、その身に魔の力を宿らせる。

「っよし、いける!」

力が漲り、活力が沸き上がる……クーシャの心のような温かい光に、大抵の呪いなんか弾き返せる気がした。

「皆を癒して……『ネイチャーキユア（自然治癒）』。

自然治癒は、皆さんの体を徐々に回復させていきます。頑張りましょう!」

「サンキューな!」

「ありがとニユウ、これでまだまだ戦える!」

役場で国保有の奴隷になっていたニユウ。

サウスタウンで昔から有名な、特殊覚醒称号”占星術師”持ちの老婆に見てもらった所、彼女は癒し手としての能力が秀でているとのことだった。

故に迷宮で手に入れた物や、高価ではあったが購入して、回復の魔法書をいくつか買い与えた。

高いかとも思ったが、たまたま露店で運に恵まれ、相場よりだいぶ安く有意義な買い物できたためその場でも後悔などしていなかったが……。

今になって本当にいい出費だったと思う。

やはり僕は、皆に支えられて戦っている……。

彼らに出会えて、本当に良かった。

「おおっ、『シールドバツシュ』！」

恐ろしい速度と重さの触手の攻撃を、「ヒーターシールド」という凧のような逆三角形の盾で敵の攻撃を弾き、防ぎ。

「ファルシオン」という曲刃で幅広重厚、半月に近い程曲線を描い幅広い剣で、巧みにそらし斬り飛ばすナイト。

明らかに致命傷になりうる攻撃も、その技術と、持ち前の馬鹿力に、ガッツでなんとかかわしている。

「はあああっ、ふ、はっ、『疾風突き』っ！」

素早い動きで敵を翻弄し、美しい舞いの様な剣技を魅せるレイツェン。

レイピアの原型である「エペ」という細く長い武器を使いこなす。

蝶のように舞い、蜂のように刺すとは彼女のことを表しているようだ。

「吹き飛びなさいっ！ 『バーストフレア（炸裂する炎）』！」

その軽いフットワークで、遠距離からだけでなく近距離で有効な魔法も使いこなす攻撃的な魔法使いであるキル工。

潜在的に魔力が高く、魔法を自然会得する可能性すら持つ強力な種族である彼女は味方にするにとても心強い。

レベル差が大きく生半可な攻撃が効かない相手に物怖じせず、近距離〜中距離の魔法をどんどん撃って戦力を削っている。

「ああああああっ、これでッ、爆ぜろ！」

『隼斬り』 『光刃・隼』

そして皆が抑え、集め、弱らせた敵を一網打尽にするのがこの僕、オリシユだ。

3つの刃となった隼斬りが、その刃を光刃へと変貌させる。

元の刀身の優に二―三倍の長さになり、敵に合わせて婉曲、枝分かれをし無数の刃となって敵の群れを切り裂くツ！

こちらに襲いかかろうとしていたソウルイーター、ソウルシーカー合わせて十数体がこの一撃でばらばらに千切れ、その生涯を終えた。少しの時間をおいて続々と死体が迷宮内部に吸いこまれ、足場で困ることは余りないのが唯一の救いか。

ぞくりぞくりと、僕たちPT皆を、圧倒的上位を倒したことによる膨大な経験値の取得による快感が襲う……。

……この感触は、病みつきになっちゃっね。

「ん？　なんだ？」

ソウルイーター、ソウルシーカーと戦いながら、なんとか強敵を

リツチにマインドフレイア 退ける方法を探っていると、外がなにやら騒がしい。

今は宙に浮かび観察しているから良いが、気まぐれにこちらに来ればどう対処すればいいのか、ひと時も気は抜けない。

そしてなにより、新たに襲いかかってくる素早いソウルシーカーを追い散らすのに注意を向けている僕はそちらを見ることができない。

一体何が。

「ディスプレイ（解呪）！ 発動！ 早く！ はやくはやくはやくはやくー！」

「ま、マキー！」

マキの慌てた声が続いて、クーシャの喜色に満ちた声がする。

「くそ、薄汚い裏切り者、尻軽女ガアあつ」

「マキィィい……ひっ、ああ」

男の罵声のような声に続き、クーシャの絶望に塗れた声が響く。

やっとのことでソウルシーカーを消滅させ、そちらを見れば。

そこには、喚き散らしながらマキを串刺しに、滅多刺しにし、四肢と胴を解体する男たちの姿があった。

「あ、マキ、うおおああああマキiiiiiiiiiiiiiiii!!」

視界が真っ赤に染まり、次いで真っ白になった。

涙が自然とこぼれてくるのがわかる。

マキ、優しくかったマキ、笑顔が素敵だったマキ。

危険を冒してまでキルエの情報を教えてくれ、こうして最後まで僕たちを助けてくれた、マキ。

「 あああああああああああああああああああああああ、あああああ
あああああああああああああああああああああああ

ああああ ああああああああああああああああああああ

……あああああ ああああ

ああ、あああああ、あ ああああああああああ

あ ああああああ ああああああああああああああ ああ
あああああああああああああああああああああ

『ダークネスフィールド』

「……………シュ！オ……………か」

辺りが真っ暗闇になった、どうでもいい。

元から視界は真っ白だ。

白が黒になったところで何の違いがあるんだ？

「しっ……………して！オ……………ユ」

『マインドブラスト（精神爆破）』

『グラビティコントロール（重力制御）』

「が……あた……われ……」

「ひ……けて」

「ああ……ぎぐっ」

「な……これ……だめ」

頭が割れそうに痛い、体が麻痺し、悶絶し、苦しみという言葉すら生温い、精神を破壊しつくすような。

それがなんだ。

僕の心はずっと痛い、壊れそうに苦しい、マキが死んで、マキが殺されて……。

何も変わらない、へんかしていない。

零れ落ちる涙が、熱く滾る怒りのエネルギーが、体中から集まり剣に宿る　！

「AAAアアTUI……モEEEEEEEEルルルルルルル」

光と衝撃は30m程度の空間に吹き荒れ、燃やしつくし、煤に変えた。

今だ外に出ず、閉所内にいたソウルイーターやソウルシーカーはその大半が燃え尽き溶け落ち焦げ崩れた。

マインドフレイアはその半身が消し飛ばされており、息も絶え絶え。

リッチも自慢の黒衣は煤け、初めの威容、威圧感など見る影もなく弱っている。

今だ動ける程度の力はあるリッチは、今の聖炎を警戒したのか壁や死体に燻っている残炎を避けるかのように、ふらふらと空いた入口から外へ逃げるように出ていった。

「どけ、どけえッ」

茫然とする仲間達を置き去りに、入口付近で戦闘をしていたためシヨックウェーブ・フレアの衝撃で消し飛ばるか吹き飛んだ、ユージの仲間二人の荷物の残骸を蹴り飛ばし、何故か無事だったマキの遺体の元に駆け寄る。

「ああ、マキ、マキ……」

涙が溢れる。

真っ白から真っ黒に染まった視界が、段々と鮮明になっていく。

彼女と過ごした、短い時間に過ぎない思い出が脳裏を走馬灯のように流れた。

「マキ、僕は、君の死を………君のしてくれたこと、君の思いを、無駄になんてしないッ！」

千切れかけていた左腕と、足付近に斬られ落ちていた右腕を胸の上に乗せ、掌を合わせギュッと握りしめた。

「ありがとう、本当に……君と出会えてよかった。

君の分まで、精一杯生きるよ、マキ。

そっちで待っていてくれ。僕や皆が死んでそっちに行ったら、皆で
また笑おう」

27話 覚醒？

27話

覚醒？

(もうだめなのか)

魂を抜かれ続け、意識がが朦朧とした頭で考える。

今から何ができる、どうすれば助かる、死ぬわけにはいかない冷静に考える気を落ち着けるんだ俺は死なない。

まだ動く眼球であたりを見回す。

一瞬の光と爆音ののち、頭痛も暗闇も無くなっている。

……ということだ、なんらかの理由でリッチとマインドフレイア

の行動は無力化されていると考えて良い。

幸い、オリシユ達が閉じ込められていた部屋からは10m程離れているため、その”なんらか”の原因には巻き込まれずに済んだようだ。

(…………体が動かない。大きな障害は……………左腕は絶望的か)

左腕は腱が切れ筋肉が千切れ、皮が裂け、肩が根元からもげかかっている。

この傷では迅速な治療を行い、高価な触媒と高度な治療術師が必要だ…………現状では致命的か。

義手義足、または融合という裏技すら存在する世界だが、たかが一冒険者風情が受けられる施術ではない。

右腕に二本、胴体に三本、両足に一本ずつに首の側面にも一本の触手が刺さっており、触手は一本約三〜五cm…………つまり体が穴ぼこということだ。

現在進行形で力を吸われ、さらに触手から分泌される筋肉弛緩の効果を持つ毒を体内に直接注入されているため、まったく動くことができない。

例え動けて、この触手を抜くことができたとしても、すぐに治療をしなければ出血多量で死に絶えるだろう。

軽傷治癒を發動しようとするが、現在進行形で力を吸われ続けているため当然發動しない。

（動かせるのは眼球だけ……周りには手持無沙汰なソウルイーターにソウルシーカーがうろついている。

”隙を見て担いで俺を担いで逃げる”と命令していたオクラも、隙が無いため行動ができない……仮にできてもここには辿り着けないだろうが）

この吸収行為は、MPが吸いつくされHPまで致命的な域に入ってから初めて、経験値（魂の力）まで吸われることになる。

（しかし不思議な感じだ……これだけの時間力を吸われ続けているのに未だMPすら枯れ果てていないとは）

つまり未だ経験値は吸われていない……のだが、動けない現状時間の問題かと思われた。

（俺は搾取する側の人間だと、奪う側の人間になると誓ったのにこの様だ。

これ以上に搾取される側になることなんてできるものか……魂すら搾取されるといふのか俺は）

「ぐ、ほ」

声すらまともに出ない。

詰んだか、これで終わりなのか……そんな考えが脳裏を過る。

このままコノママ搾取されたまま絞りつくされて死ぬのか、精神的にも身体的にも干物みたいになって死ぬなんて耐えられないあるいはない。

「アぐ」

この”力”は俺のだ、お前らにくれてやるために貯め込んだんじゃない。

もつと効率よくたくさん”力”を奪うために貯め込んだんだ、一寸たりともくれてやらない。

ぐいぐいと吸われる力、水流のようなその流れを全力で引き留める、引き寄せて逆流させる。

最初は川に手を突っ込んでばちゃばちゃと水をたたくように、板で堰き止めるように、堤防を作り、ダムを造り。

「グおあるぁアああー!!」

力が、力が流れ込んでくるのを感じる。

今まで吸われ続けていた自分のエネルギーに加え、明らかに異質なエネルギー、これは間違いなくソウルイーターのもの。

「G I A A , Z Y O G U O O O O O O」

他者の力を自分に適応させる力や、吸い取る力など人間は持ち得ていない、そう、普通の人間には。

この感覚、味あわせてばかりで味わったことないだろう？

「せがいに愛されていなくたってなあ、俺は、おれは特別なんだ
よ」
スペシャル

そうだ、たまに忘れそうになるが、俺はスペシャルだ。

俺は、マクロなんてものが体に染みついている、融け込んでいる、半人半記号の化け物モンスターなんだ。

”ポーン”

『*****素質項目「早熟」クリア。前提条件「称号」基礎の塊」クリア。特異状況29による素質項目「吸収」クリア。特殊プロセス発生*****』

『特殊覚醒称号を獲得しました』

『“人工生命体／ホムンクルス” 造られし人外。物質を取り込み適合する』

『体質「早熟」「吸収」「適合」発現。』

能力「都合の良い半身・意識を記号の半身に移すことで、都合の悪い精神異常のみを軽減させることができる」発現』

……そうか、この半身が俺に冷静な思考をさせているのか。

そのまま勢いで、ソウルイーターから搾り取るエネルギーを強引に
”力（経験値）”に変えようとするが……。

「お、おげえええ」

内臓が裏返るような苦痛を覚える。

だめだ、俺の”適合”力じゃ、そこまで”弄れない”。

已む無くそのまま抽出することで、生命力と魔力に変えて強引に体を動かす。

「よこせ、寄越せよ、その触手と器官………」

オレガ搾取するんだ。

俺が奪うモノダ。

その機関はオレニコソ相應しい。

歯を剥き出しにしてカブリック。

ずたぼろになった左腕に触手をねじ込み、触手の根元にあるソウルイーター本体の塊に顔を埋める。

「GYOGUAAAAAA / GU / A / GI………」

”ポーン”

『*****体質項目「早熟」「適合」クリア。前提条件「称号
”超回復”」クリア。特異状況274による素質項目「融合」クリ
ア。特殊プロセス発生*****』

『特殊覚醒称号を獲得しました』

『融合生命体/キメラ” 混ざりし者。他者を取り込み融合する』

『体質「融合」「変異」発現。能力「体内操作：自分の体内の、血
流や臓器、細胞の動きを任意で操作することができる」発現』

体中に口があるような感覚に身を任せ、体表から吸収するようになり、ソウルイーターの能力の根幹となる触手と体核を喰らう。

「融合」発動。

”触手” ”吸収器官”を取り込みました。

自分の体の表皮が触手と体核を包み込んだ。

「変異」発動。

取り込んだ器官をオリジナルの体に合わせて縮小変異。

エラー。

エラー。

エラー。

エラー。

対象との細胞の類似性が皆無、変質限界。

ぐちゃぐちゃと粘土をこねくり回すように、皮膚が、肉が、臓器が変形していく。

「体内操作」発動。

体内の細胞を取り込んだ器官に適合。

エラー。

エラー。

エラー。

対象との細胞の類似性が皆無、変質限界。

体の中が、自分が自分でないように作り変えられていくような感覚に酩酊感が襲ってくる。

「とりあえず動けばそれでいい」「

「適合」発動。

体内の細胞、体液を変質適合。

エラー。

エラー。

対象器官は外部からのエネルギー供給で動いているため完全に取り込むことができません。

細胞間の反発が強く長時間の接続はできません。

「が、うえぶつ。まるで、体の機関が増えたみたい、だ、ギ……ぐ
うっ」

先程からの異変に気づいたのであるう、ソウルシーカーが俺に群がり、ソウルイーターが触手を伸ばしてくる。

「ちっ」

右腕に辛うじてひっかかっていた荷物を、薬が入った場所を下にして触手に放り投げる。

粉碎した鞆から、真下にいた自分の体に回復薬が撒き散らされる。

「吸収」を発動しながらできるだけ体に浴びるように受け止める。

称号『超回復』なども相まって、少しだけ体力に余裕ができた。

「おおつ、『金剛身』『部位受け』『真剣白羽取り』」

金剛身で衝撃を受け流し。

既に原形を保っていない左腕で部位受けを行い、ちぎれ飛ぶ肉片を引き換えに触手の威力を削ぎ。

右手一本で真剣白羽取り　当然片手では白羽取れないので、攻撃を逸らした　で肉を切らせて骨で攻撃を止める。

勢いを削いだそれらの攻撃の全てを、あえて受け入れ、敵の体を自分の体に食い込ませることで、強引にエネルギーを逆流させ奪い取った。

「GIAGAGGUU」

「GOJIIJIIJIIJIIJIIJII」

「O・O・O・O・O・E・E・E・E」

「は、ああ……これでやっと、経験値にして取り込め、る」

今まで味わうことのなかった感覚に、じたばたびくびくとのたうつソウルイーターは後回しにし、徐々に色薄くなっていくエネルギーの塊のようなソウルシーカー達を手早く取り込む。

通常、レベルが上がるだけの経験値が貯まってもその場で即座に力が急激に上がるわけではなく、少し時間をかけながら体に馴染むように上がる。

格上を倒すことによる、”経験値酔い”なるものがあるくらいだが、今はそんなものを味わっている暇はない。

経験値がごりごりと貯まっていくのを感じながら、「適合」を発動し経験値を強引に取り込む。

そうすることで自分の強さを 存在の格を 即座に上げる。

「つく、ふひはは、力が漲る……」

レベルが上がりました。 33 71

全身が快感に包まれ、今なら何でもできるといふ全能感が溢れ出す。

……が、まだ油断はできないと、冷静な半身が囁く。

こちらからも取り込んだ触手を刺し筋弛緩毒を注いではいれるものの、ソウルイーターにはまだ抵抗できるだけの体力がある。

念には念を……そしてなにより、早くこの全能感を奮い何かを破壊したかった。

「つるオあああああああああ！！」

『大車輪』 『大車輪：濁流』

右手で水属性の槍を握りなおし、痛みを噛み殺し、全身を捻りながらソウルイーター共の足元を薙ぎ払う !

莫大な魔力を注ぎ込まれた槍から、驚くべき勢いで水流が発生しその速度は止めようがない。

様々な魔物に寄生したソウルイーターの中には優れた防御力を有す

る個体もいるのだが、そんなもの関係がなかった。

硬い甲羅に覆われた亀型の魔物の甲羅を粉碎し、頑強な肉体をもつ鬼族の魔物の両足をえぐり、その他雑多とした魔物の足を、四肢を、機動力を奪っていく。

「ひ、っひひはははハハハはは」

抵抗する力を完全に失ったソウルイーターに改めて触手を伸ばし、その身に宿る魂の力を吸い取ってしまう。

レベルが上がりました。 71 84

「これだ、俺の求めていた力……」

背後から、じゃり、と土を踏む音。

「ス、スタイル……？」

27話 覚醒？（後書き）

やっと無駄にふらふらしてた伏線回収。

なんだよ小市民じゃないじゃん、結局チート？

と思われるかもしれませんが、マクロが染みついている時点で普通の人間じゃありえないというのが私の考えです。

わかりにくいけど伏線張ってたんだからね！

考えようによつては無敵じゃね？というような能力ですね。

まあそんなことはないんですけど。

どうして最低でも70の敵をドレインしたのにもっとレベル上がらないの？と思われそうなので先に書いておくと、流石に魔物の吸収器官でもまったく無駄なく吸い取ることは不可能だからです。

自分の生命力、存在の核に合わせる内にどんどんロスしていくのでこの経験値ドレインは結局あれです、めっちゃ効率よくレベル上げ、みたいなものです。

28話 一時撤退

28話

一時撤退

ステイルLv84

『 人工生命体/ホムンクルス ” 造られし人外。物質を取り込み適合する

体質「早熟」「吸収」「適合」。能力「都合の良い半身：意識を記号の半身に移すことで、都合の悪い精神異常のみを軽減させることができる」』

『 融合生命体/キメラ ” 混ぜりし者。他者を取り込み融合する体質「融合」「変異」。能力「体内操作：自分の体内の、血流や臓器、細胞の動きを任意で操作することができる」』

「ス、スティール……？」

振りかえると、呆然とした様子のオクラがいた。

吸収器官で歪に肥大した左胸と、腕から二本、胴から四本生えた触手を怯えるような眼で見ている。

「ああ、オクラか……脅かすなよ」

「いや、おま、人間離れしてるとはいえそれは……」

「うるさい黙れ。今は説明している時間はない」

「光が爆発したりスティールに触手が生えたりもうなんなんだよ……」

混乱しきっているオクラには気の毒だが、本当に説明している暇はない。

早くここを離れなければ。

「愚痴は後だ。

体に欠損が多すぎてうまく動けない……俺を抱えて隠れられる場所まで退け」

「あ、ああ……」

オクラが恐る恐る、触手や吸収器官に触れないように俺の体を抱える。

なんだそんなに怖いか？

体の違和感と拒絶する感じが拭えないが、生やしてみると意外と快適なんだが……。

「おっと、忘れるところだった」

しゅるりと触手を伸ばし、そばに落ちていた自分と元ユージの鞆を拾い上げる。

（これはもう必要ないが……どうせだ、置き土産にしてやるつ。

彼らにより多くの試練よあれ、ってな）

「ひっ」

「騒ぐな、あっちの岩場が乱立してる辺りに……」

「ああ、マキ、マキ……」

（ほら急げ馬鹿！ あいつら出てきたぞ！）

「マキ、僕は、君の死を………君のしてくれたこと、君の思いを、無駄になんてしないッ！」

（お、おお。急かすな……）

「ありがとう、本当に……君と出会えてよかった。

君の分まで、精一杯生きるよ、マキ。

そっちで待っていてくれ。僕や皆が死んでそっちに行ったら、皆でまた笑おう」

オリシユのよく響く声を背に受けながら素早く移動の準備を整える。いくら石室の入り口からは死角にある位置にいたとはいえ、いつ気まぐれに出てくるかわかったものじゃない。

オクラが俺を抱え、俺は荷物を触手に引っ掛け、なるべく音をたてないように、死角になる岩場と岩場の間を抜けながら、オリシユから離れた位置に移動する。

からからと小石が転がるたびに、オリシユ達がこちらに気づくのではないかと冷や汗ものだ。

普通に喋っても聞こえないであろう位置に何とか逃げ^{おお}させたものの、”補正持ち”相手に油断はできない。

(っておい、あっちはなんかヤバそうなのがいるぞ！)

オクラの目線の先に目を向けると、そこにはホーン(角)ゴブリンの頭を鷲掴みにし、精気を吸い尽くそうとしているリッチの姿があった。

リッチ固有の能力ではない吸奪能力といい、使い魔扱いのソウルイーター、ソウルシーカーといい……あのリッチは生前ドレイン系の

魔術をかなり修めていたのだろう。

「にげ……いや待て、よく見ろ」

ダークネスフィールドやグラビティコントロールなどの脅威に晒されてはいるものの、リッチを目の当たりにするのは初見だ……が。

「どう見ても半死半生、瀕死だろう、あれじゃあ」

右腕は根元から、右上半身と共にまとめて欠損、頭蓋骨は四分の一が欠け、身に纏う瘴気の衣も薄れている。

（いくら瀕死っていつても、リッチだぞ！ 普通にしゃべるなよ声を潜める！

120レベルより下ってことはまずない、気当たりと存在の呪いだけで戦闘不能だって！）

普通に声を出してしまったため、リッチがこちらに気づいた。

ミイラのように変質し、人間の表情が辛うじて窺えるその顔には、明らかに愉悦の表情が浮かんでいる。

瀕死の人間が一人に、明らかに格下の人間が一人……奴からみれば

体力の回復の生贄には最適な栄養だろう。

「FUSYURRRRRrrrrrr」

背筋が凍るような呪いの視線　　力ある魔の眼　　魔眼。

体に重しを寄せられたかのような濃厚な気配、存在の呪い。

種族的優位と存在の格差レベル差を武器にすれば、中級者程度の冒険者相手なら、瀕死のリッチでも容易い……。

現にオクラは膝を尽き、ガタガタと震え、今にも武器を取り落としそうである。

おそらくオリシユに撃退されたのであろうこのリッチ。

先程瀕死にされた場所から、未だ十分な距離をとったと核心に至れない距離しか離れていないため、できるだけ静かに素早く補給を済ませたいのだろう。

音もなく近づき、その黒い瘴気を放つ骨の手をこちらに伸ばす。

「GYO・GUO」

「おっと、大声を出すなよ」

がら空きになった胴に触手を四本打ち込み、痛みか驚きから、声を上げようと開いた口内に残り二本の触手をぶち込む。

「OGU・AGAU」

喉と胴の間をふらふらと彷徨う左手を、右手に持った水属性の槍で打ち据える。

……無茶な使い方をしたせいか随分とガタがきているな。

念のため、持参していた鋼鉄製の槍に持ち替えておく。

憎悪に満ちた視線をこちらに向け威圧してくるが、口に触手を突っ込んだその姿は滑稽でしかない。

「助かったよ、近づいてきてくれて。

「この足じゃ、いくら回復してもすぐ動けるようにはならなくてね」

元が人間であるため、というより知性の高い魔物は人間の言葉を理解する。

俺の皮肉が頭に來たのであろう……一層重圧感が増すが、能力「都合の良い半身：意識を記号の半身に移すこと」で、都合の悪い精神異常のみを軽減させることができる」を發動した俺にはその程度の重圧は通じない。

これが元のレベルの31であつたらさすがに辛かつただらうが、今は84レベル。

機械的な、否、記号的な半身に意識を切り替えれば精神汚染を拒絶^{レジスト}するのは容易い。

スキル『足払い』を使うまでもなく、槍で足元をすくい上げ転がし、左手と地面を槍で縫いつける。

「さあ……俺の栄養になつてくれ……」

吸収器官をフルに動かしてどくと吸い上げる経験値を、体質「吸収」でロスを減らしてできるだけ身の内に取り込む。

あまりの力の巨大さに、絶頂など霞まんばかりの愉悦感に身を震わせ、意識が飛びそうになる。

「G I G I G I G A G A G A G A G A G A G A」

「おお、おおおっ」

思わず身を乗り出し、リツチの剥き出しになった左あばら骨を踏みしめながら、左手を刺し貫いている槍をぐりぐりと捻じる捻じる捻じる。

うまい、きもちがいい。

やはり奪うのは気持ちがいい。

奪われるのは気持ちが悪い。

力を手に入れるのは気持ちがいい。

奴らだけ、”補正持ち”だけが力を手に入れるなんて不公平だ。不平等だ。

くくっふはははは、お前らみたいに全部欲しいなんて傲慢なことは言わない。

これからも少しずつすこおしずつ、力を得る機会を^{イベント}わけてねえ。

レベルが上がった。 L V 8 4 L V 1 0 3

「すて、すている……ステイルやめる落ち着け、迂闊だ、ここは迷宮内だぞ」

「くっふはは、ふふあはは。んん、ああ、ああ……大丈夫だ落ち着く」

深呼吸だ。まだ事は終わっちゃいない。

クールダウンしなければ。

「ふう、はあ、ふうふう、はああああ……」。

すまん気が昂った。オリシュー一行に気づかれてないか？

「いや、あつちはそれどころじゃないみたいだぞ。」

間違つて魔物寄せの粉でも開けちまったのか？ パラライバット

(麻痺蝙蝠) が何十匹も群がってやがる」

岩場から顔だけ突き出し、様子を窺いながら小声で話すオクラ。

興奮して考えなしに動いたことで、また傷口が開きそうだ……傷薬キュアフライトを飲み、塗り薬を塗りたくり、軽傷治癒を連続でかけていく。

「くっくくく、ごふう、いかん笑うと傷口が……」。

さつき俺が触手を使って荷物を拾ってただろう？ その時ついでに、触手で適当に投げておいたのさ」

「あつちの一行も、お前程じゃあないがぼろぼろだな。

そこにひらひらと状態異常持ちの蝙蝠がまとわりつくてえと……悲惨だなあ。

相変わらずえげつねえこと考えるぜ」

「……といっても、レベル70台の魔物を何十匹と殺したんだ。もしかすればマインドフレリアもな。

少なくともレベル60、マインドフレリアを殺したなら70になってもおかしくない。

厄介ではあるだろうが、死ぬことはまずあり得ないな」

触手の接合点と、吸収器官の埋まった左胸から、ズーンズーンと鈍い痛みが増してくる。

（そろそろ限界か……）。

まだマインドフレリアを取り込める可能性はあったが、これ以上肉体が持ちそうになかったため仕方なく諦めよう。

欲を出しすぎると失敗する……今回は酷い目にあった……。

見返りが大きすぎて、同じ轍を踏みそうで怖いな)

細胞間の反発が強く長時間の接続はできませんとかなんとか、システマチックな声が聞こえていたのを思い出す。

細胞が拒んでいる器官を強引に繋ぎとめていただけなので、縛っている感覚を緩めるだけで勝手に触手と吸収器官が体内からはじき出された。

「ぐっ、ぐふおお……」

はじき出された場所から血が吹き出た……なんてことはないものの、剥き出しの血管がグロテスクだ。

苦労して首を動かし左胸を見れば、大きく鼓動を繰り返す心臓が薄っすらと見えている……。

今の俺を殺すのには剣はいらない、指で強く左胸を押すだけで十分だろう。

「どうしたすてい……うおグロっ、どうなってんだそれ、大丈夫なのか？」

ドン引きした引き攣った表情でこちらを見るオクラ。

心配するか引くかどちらかにしろよ……。

「だ、いじょうぶだ。ん、んっ、っ……」「体内操作」

「体内操作：自分の体内の、血流や臓器、細胞の動きを任意で操作することができる」、「キメラの「変異」やホムンクルスの「適合」を使い、ソウルイーターの器官に適した肉体を、元の自分の肉体に変異させていく。

ぐちよぐちよと蠢く肉と血管、見ている気持ちのいいものではないだろうが……。

俺はそれ所ではない。体中から力が抜け、ひきつるような痛みが走る。

「うっぶ、ぎもぢわる……ぐるすぎるだろそれ……」

「……こっちはそれどころじゃねえんだよ」

ご主人様に向かって気持ち悪いってのはどうなんだ？

互いに不服を込めた眼差しを送りあう。

「しかし、その左腕は……絶望的だな」

同情と不安の籠もった眼差しで見られる。

不安は、これから腕の欠損した俺の下でどういう扱いになるかというものだろう。

「安心しろ……どうにかなる心当たりがある。まだできるか確証はないがな」

「……もうあれだな、驚きも聞きたいことも多々あるが、どこから聞けばいいかすらわからん」

驚きや呆れを通り越し、オクラのその表情には疲れしか浮いていなかった。

29話 後始末

29話

後始末

ひとまず身の安全は確保できたかとひと安心。

リッチからの戦利品を漁りオクラに放り投げる。

そしてその死骸が消えてしまわないように、その身を槍で持ち上げ地面から離れた。

「おい凄いぞこれ！ 金貨で何枚分の価値があるか……」

こうすることで、死骸を迷宮から持ち出すことは出来ないが、多少時間を稼げることが冒険者達の実験で分かっている。

「おいスティル、聞いてんのか？」

これだけの業物、売っても使っても良し。軍の重鎮に献上すればあつという間にエリート街道まっしぐら……」

もし迷宮から魔物の死骸を持ち出せ素材を集めることが出来れば、ゲートを利用して希少な素材を取り放題。

ということ、国を挙げて長年研究が繰り返されているのだ。

まあそんな都合のいい方法がそう簡単に見つかるはずもなく、しかし一部進展はあるらしい。

だが、方法が危険らしく一般公開はされていない。

いつかは知りたいものだ。

「なあスティル、これがあるってことは、そのユージから奪った地属性のナイフなんかは使わないんじゃないか？」

それでよ、へへ。俺が使ったほうがいいんじゃないかねえかなって、いや別に下心で言ってるんじゃないかねえんだぞ？

あくまで効率面での話でな……」

一度試してみたかった能力の実験をしておこう。

まあまずできないことはわかりきっているわけだが。

リッチの死骸から左腕を剥ぎとり、自らの左腕の接合部分に宛てがう。

「融合……発動」

エラー。

エラー。

エラー。

エラー。

漠然と『できない』のは感じていたが、案の定細胞は微塵も変化せず、脳裏に浮かぶエラーの嵐。

下二つのエラーに意識を集中すると、

『対象器官は外部からのエネルギー供給で動いているため完全に取り込むことができません』

『細胞間の反発が強く長時間の接続はできません。』

というシステムメッセージ。

こういうシステムティックなメッセージはゲームと変わらないんだよな……。

やはり思ったとおり、迷宮内の魔物は全て迷宮のエネルギーで発生しているためか、取り入れることが出来ても時間が限定されているようだ。

そもそも魔物の器官は、永久的には取り入れられない可能性。

人間に近い魔物の器官のみ永久融合できる可能性。

人間を含む全ての生物の器官の融合は、一定時間しかできない可能性もあるが……システムメッセージ的にこの可能性は薄い、と思いたい。

でないと、一生俺の腕はこのままである可能性が高いからだ。

一番上の仮説だった場合、迷宮から魔物が溢れ出ることがあるのはどういふことなんだろうという疑問はあるが、今は脳裏に止めておくことにしよう。

「……。なにしてんだスタイル？」

「なあオクラ、左腕、くれないか？」

「……っはあ！？ いや、ちょっと待てやっと喋ったかと思ったらなにを」

ぎよっとした顔でわたたと手足を振り乱している筋肉ダルマ。

……この野太い腕が俺の腕に……ちょっと嫌だな。

「ああ、その前に別の死体かなんかの腕で試してみるか。

鮮度が高いほうがうまくいきそうな気はするが……。

ひと通りやってみてだめだったら、オクラか荷物持ちのおっさんの腕で試してみることにしよう」

「ちょ、話が全然わかんねえし、腕！？ なにが!？」

「ああ、今は忘れてくれ」

「忘れられるか！ よくわからんが、考えなおしてくれ！

とにかく腕をとるならおっさんの腕にしてくれよ！ 俺は嫌だかなな！」

「やかましい。ほら、さっき渡した戦利品見せろ」

リッチの死骸を放り投げ、戦利品を受け取る。

数分とおかずに死体は消えるだろうが、念のため人目に付かないよ
うな岩壁の隅に蹴って詰めておく。

獲得品

魔道師の首飾り？「魔力++++」「知力++++」

ヒートクリース（熱の刺突短剣）

魔石

「これは……」

「な！　すげえレア物だろう！

この首飾り、ユニーク物を除いた一般装飾品では、ほぼ最高級品じゃねえか！」

うひょおおと奇声を上げながら首飾りにキスをしている。

「この短剣、名前付きだな。大粒の宝石に刻印魔法まで施されてる」

ヒートクリース（熱の刺突短剣）。

ミスリル製の刃渡り30？程の波刃状の刺突用短剣で、柄に大粒の真つ赤なルビーが埋め込まれている。

宝石は属性石が凝縮した物と考えられており、非常に強い魔法の力が籠っている。

その宝石に刻印を刻み、決まった魔法を呪文無しで即時発動させるのが刻印魔法だ。

この短剣に籠められた魔法は『ヒートレイ（熱光線）』。

「ヒートレイの刻印。ヒート……火の魔法を熱に特化した物だな。

宝石から直接熱線を放てるし、刃に通せば一瞬で刃を超高熱にすることができる。

応用力の高い武器だ……最低でも500万は下らないな」

おそらく魔道師の首飾り？がユニークモンスターのレアドロップで、ヒートクリースは100階層以上で出た”財宝”をリッチが所持していたものだろう。

”財宝”というと、人間が拾うためにある宝箱……のように思われるがそれは大きな間違いで、迷宮が魔物側に支給する装備なのだ。

”財宝”とは、特定のレベルや種族の魔物が開けられるように封印され、それ以外の者が開けようとすると罠が反応する……より強い魔物を生み出すためのシステムの一部なのだ。

それを、その特定の魔物が発見する前に人間が罠を解除して盗んだり、”財宝”持ちの魔物から強奪しているだけの話に過ぎない。

未恐ろしきは、なにもかもを利用する人間の悪知恵と性根だろう。

「補正だのなんだのはよくわからねえが、確かにすげえなあいつらは！」

いやまあ、俺からしてみればお前もいろんな意味でよくわからねえんだけどよ……」

オクラは不細工な顔を苦笑いで一杯にしている。

「ふん。俺は、地上に戻ったらたらふくいい肉いい酒いい女を買ってくれるご主人様だよ。」

それだけわかってれば十分だろう？」

「……くっ、ぐっふははは！ ああ十分すぎるな！ がっはっははは！」

「……あまりでかい声を出すなよ」

先程からオリシュ達の方に絶えず意識をやっていたが、そろそろ撤退を始めるようだ。

横目で見ている限り、先ほど生かしておいたユージを揺さぶり脅していたように見えた。

俺の勘が正しければ、無事エルフのキル工を奴隷から解放させられたことだろう。

「しっかしあいつ、オリシュって奴にはおでれーたぜ。」

あの年で光属性の魔力を使いこなすとはな……」

光属性と闇属性はお互いが弱点であり、純度が高ければそれは一撃必殺にもなりうるほどの可能性を秘めている。

その分、身につけるには先天的な才能が必要だと言われており……。

プレイヤーであった俺達は、おそらくなんらかのイベントで身につけることができたのではないかと思っている。

あの理不尽な対高レベル無双は、おそらくそれが原因だろう。

幸い相手のリッチ、マインドフレリア、ソウルイーター、ソウルシーカーは純闇属性と言ってもいい程の闇属性だ。

「光の爆発……だったか？

リッチをあそこまで瀕死にさせる攻撃だ。それだけとは考えにくいがな。

案外隠された能力の発露とか、特殊覚醒称号とかそういうオチが待ってそうだ」

オリシユ達が満身創痍の体を引きずり、取るものも取れず撤退していったのを確認してから、ユージ達のいる石室前に慎重に足を運んだ。

マキの死体は持ち去られているため三人分の死体と、今にも死にそうなユージが転がっている。

（死体のマキを持って行って、生きているユージを置き去りとは……。

まあ普通に考えれば、自分を嵌めようとした相手は助けないか）

マインドフレイアはどうなったか……と探ってみるが、死骸もドロツプアイテムらしきものもないため、おそらく奴らが倒し切ったアイテムも持ち去ったのだろう。

「っかーもったいねえな！」

リッチであれだけ儲けたから、欲が出ちまっぜ！」

「ぎゃんぎゃん騒ぎたてるな。」

お前はいいかも知れんが、俺は隻腕だぞ。雑魚魔物相手でも面倒だ」

普通に生きていては、彼らに関わらなければ滅多に遭遇できない儲け話に、テンションが上がりっぱなしのオクラ。

リターンはでかいが、リスクもでかいからな……。

「お、ステイルあつたぞ」

魔除けの粉を振り撒きパラライバッドを追い払って落ち着いて探索し、一通りユージー一行の荷物と、ユージの切り飛ばされた左腕を見つけた。

「しかし、くつつくのか？」

他人の腕だろ？」

「俺の腕はぐちゃぐちゃになって踏みしだかれてしまっているから、仕方がないだろう。」

「この腕でだめなら次はあっちの、ユージの仲間の腕。それでだめなら荷物持ちのおっさんかお前の腕だからな」

にやり、とオクラを見やると、ぶるりと背筋を震わせ青い顔をしている。

奴隷は『命令』されれば断ることができないのだから、仕方があるまい。

眼を瞑り、融合を発動する。

「まあそうならないよう祈っている……」。

融合……発動」

「融合」発動。

”人間／ヒューマン”の”左腕”を取り込みました。

左肩の付け根が歪に変形し、自分の腕に比べてややサイズの大きい腕の根元を包み込んだ。

「変異」発動。

取り込んだ器官をオリジナルの体に合わせて縮小。

器官に合わせて体内の骨、筋肉、神経を一部変異。

「体内操作」発動。

体内の細胞を取り込んだ器官に適合。

取り込んだ器官の保存状態 概ね良好。

クリア。

器官”人間/ヒューマン”の”左腕”を完全に取り込みました。

現在の融合体、『記号”マクロ”使用メモリ50%』、
”人間/ヒューマン”の”左腕”使用メモリ5%』

”人間/ヒューマン”の”左腕”は一時的にメモリを5%使用しますが、類似性が高いため、器官が完全に適合後使用メモリは0%になります。

左半身に引き攣るような痛みが走る。

眼を開ければ、間違いなく左手は繋がっていた。

多少違和感はあるものの、問題なく動かせる。

ぐー、ぱーを繰り返し、左手に槍を持ち構える。

『五段突き』

問題なく眼前に五つの線が生まれるが、左胸に鈍い痛みが走る。

「ど、どうだったんだ？ 成功か？」

オクラが恐る恐る質問してくる。

自分の腕が取られるかもしれないという恐怖があるのだろう。

「腕は問題ない……が」

「が？」

「吸収器官を繋いでいた左胸、心臓辺りに鈍い痛みがあるな。」

ソウルイーターとの融合で無理をしたせいか……なるべく早く地上に戻って、養生するでしょう」

「ほっ、ほんとに良かった……」

随分とほっとしているようだが、腕を奪うなら安い奴隷でも買って試せばいい話なので、オクラの腕を奪うというのは冗談だったんだが……。

本人も喜んでいようだし、黙っておこう。

瀕死状態で置いて行かれたユージの様子を見るに、もう助かりようがない。

おそらくソウルイーターとソウルシーカーの攻撃を受けたのだろう、体の至る所に穴があき、魂の力は俺が吸収したためこいつの下に戻ることはなかった。

体も魂もボロボロというやつだ。

こいつらの荷物に一つだけあった非常に高価なリターン（帰還）のマジックストーンを使い、非常に高価な治療費を払って高位な聖職者や治療師に頼めばまた別であるうが、いくら80レベルでレアスキル持ちとはいえ隻腕だ。

割に合うはずがない。

なによりここで起こった真実を　特に俺の介入を　知っている
ため、下手に売ることもできない。

（残念だが、ここで死んでもらうしかないな）

そう、これ以外の選択肢は無い。

なかなか悪知恵は働くようだし役に立ちそうだったので、少し惜しい……が仕方あるまい。

ふと思い立ち、右手の爪先にぐっと力を込め、

「体内操作」……」

案の定できた、鋭く硬く伸びた爪で、ユージの喉を切り裂こうと手を伸ばし……。

「……ん」

ユージの首筋の、刺青が眼に入る。

そうだ忘れていたが、こいつは現代人の奴隷を多数買っていたはずだ。

奴隷や財産の譲渡は、口頭と簡単な手順で可能だ。

刺青の細部を見るに、他の奴隷の解放はされていないようだ。

……このままだとユージの奴隷は国が所有することになってしまう。所有権を譲らせたいが、今からしゃべれる程度まで回復させられるか？

物は試しと、元に戻した右手をユージの首筋の刺青に這わせ、念じる。

「融合……発動」

「融合」発動。

”人間／ヒューマン”の”刺青”を取り込みます。

ユージの刺青が歪み、こちらの右手の指先に集まるように動きを見せる。

エラー。

個人識別魔法がかけられています。

「変異」発動。

名称”ユージ”の細胞とオリジナルの細胞の類似させます。

エラー。

個人識別魔法がかけられています。

ちっ、エラーが減らない……ならば。

「適合」発動。

”ユージ”の情報に”ステイル”の情報を適合させます。

クリア。

”人間／ヒューマン”の”刺青”を取り込むことができます。

「よっ」

ユージの刺青を良く見て、戸籍などの余計な情報を取り込まないよ

うに注意して、奴隷の所有権と倉庫に預けたアイテムなどの所有権のみを綺麗に取り込んだ。

「なっ、おいまさか、刺青……取り込んだのか!？」

「まさかほんとにできるとは……くっくく……」。

昔、殺した冒険者の刺青の移植ができないかと試行錯誤して、刺青についても勉強したのが役に立ったな。

譲渡を行った形で綺麗に取り込んだから、ばれることはないだろう
「う」

「くっ……ぐっはは、がっはっはっは!

ほんとになんでもできる野郎だなお前は! 最ッ高のご主人様だ
ぜ!

今なら、こいつの不細工な愉悦に染まった顔も、愛嬌があるように見える。

「ああ……気分がいい。最高の気分だ。

とつとと帰って、こいつらの財産を御拝見させて頂く」

獲得品

魔道師の首飾り? 「魔力++++」「知力++++」

ヒートクリース(熱の刺突短剣)

リッチの巨大な魔石

半壊した水属性の槍 銘不明 銀+少量のミスリル銀製 要修理

恐らく上位水属性 高い技量が必要な玄人好みの水属性がメイン
ウェポンだったことから、ユージはなかなかの技量の持ち主だとい
うことが伺える。

アースマインゴーシュ 上位地属性 銀製 盾短剣 防御に優れた
地属性で、防御に優れたマインゴーシュという短剣。拳を守るよう
にカップが付いており、槍を持ちながらも装着できる手甲のよう
に改造されている。

ゲイルレイピア 上位風属性 銀製 素早さと汎用性に優れ
た風属性。刺突に特化した武器で、片手で扱うことができる。

ライトニングシミター 上位雷属性 銀製 素早さ、威力、汎用性
に優れているが扱いが難しい雷属性。1m程の片刃の曲刀。断ち切
る剣術に優れ、三日月刀とも呼ばれる。

こちらも扱いが難しいため、このシミター
の持ち主のプレイヤースキルはかなり高かったようだ。

アースバトルアクス 上位地属性 銀+黒鉄製 防御に優れ、あ
る程度重さを変えることができる地属性。180cm程はある巨大

なアクス。

マジックストーン：デイメンションウォール×1、リターン×1
各種薬
32万G

武器は各種80万〜100万G程度。

特殊覚醒称号で稼ぎ、レベルの低い”補正持ち”にちよっかいをか
けたりして、80レベル台にしてはかなりの稼ぎを得ていたよう
です。

半壊したユージの武器はミスリルを使っているので一番高そうだが、
主軸からいかれているので材料に戻すほうがましかもってレベルで
す。

デイメンションウォールは10万G程度。

リターンは登録したところに最大六人でワープできる貴重な石なの
で、なんとその額100万G超。

これは”補正持ち”にちよっかいをかけて手に入れたものです。

奴隷にはなかなかできませんでしたが、ストーキングを続ければ成
果を奪うだけなら割とできるのです。

”補正持ち”がどの程度の力を持っているのかは、後々明らかにな
るのでお楽しみに。

30話 整理+獲得品、基本装備まとめ

30話

整理

ユージー一行は五年の歳月をかけて貯めた金を一気に消費してでも、乾坤一擲と”補正持ち”との戦闘のために金をつぎ込んだのだろう。

とてもじゃないが80レベル台では考えられない、豪華な装備に潤沢な消費アイテムが取り揃えられていた。

おそらく羽鋼の剣を手に入れた俺のように、”補正持ち”をストーキングするなりして手堅く財を貯めこんでいたのだろう。

「やはりキルエはオリシユが解放させていたか」

ユージが統括して管理していた奴隷の刺青タトゥーだが、やはりエルフ奴隷のキルエの所有権は消えていた。

俺の思惑通り、ここは予想通りといったほうがいいだろうか、オリシュー一行がユージに所有権を放棄させたのだろう。

「惜しいな。惜しいが欲を出しすぎれば破滅する……正直あれ以上のイレギュラーが起きるのは許容範囲を逸脱しすぎる」

「あのベツピンなエルフ、持って行かれちゃったのか。」

まあ最初にユージを殺してたら他の奴隷も手に入らなかったんだろ？

死体になると刺青が変質しちゃうんだか……よくわからんが」

「ああ、死体の刺青も昔よく観察したことがあるが明らかに変質していた」

オクラは納得したような顔から、ぎょっとした表情に変わる。

「お前、今年で十五だったよな？」

昔冒険者狩りをしてたとか、刺青をどうこうしたりとか……いくつからそんなことしてんだよお前」

確かに、話だけ聞くと未恐ろしい子供だな。

そんな修羅場をくぐりぬけたということではない。

周りの人間からしてみれば、幼少の頃にそれだけ陰湿な発想に至るのが異常なのだ……。

「……………さあね。」

おっ、このタワーシールド下位地属性の魔法装備だ。こいつはお前が使うといい」

場を濁した俺は死体から引っ剥がした装備品をオクラに放ってやる。

「本当かやった！

っくう、お前の奴隷になって早数日、あっという間に俺が現役の頃の装備より遥かにいい装備になったぞ！」

思い返してみれば本当にあっという間だった。

信じられない話だが、まだこの街サウスタウンに来て一月も経っていないのだ。

剥ぎ取った獲得品

力の指輪？ x 4

魔力の指輪？ x 1

敏捷の指輪？ x 4

術者の指輪？ x 1

力の腕輪？ x 4

魔力の腕輪？ x 2

敏捷の腕輪？ x 4

回復の腕輪？「時間回復微上昇」「重傷回復 x 5」

力のアンクレット？ x 4

魔力のアンクレット？ x 2

敏捷のアンクレット？ x 3

毒耐性のアンクレット？「毒耐性 ++」

怪力の首飾り「力 ++」

各種良質鋼鉄、黒鉄、銀の防具 壊れた部分を廃棄して合わせて4
人分

「いらっしゃいませ」

「とりあえず一週間。今空いてる広くて一番いい部屋に案内しろ」

板金貨 金貨十枚分の価値、つまり10万G（1000〜2000万円相当） を二枚カウンターに置いた。

地上に帰り、いつも使っている宿ではなく迷宮地区から近い位置にある高級宿にそのまま入った。

いつも使っている宿は、値段からすればかなりいい待遇なのだが、いかんせん警備体制が万全とはいえない。

今の俺は大きな外傷や身体の欠損はないが、体調は万全とはいえない……それでもとも高級装備を持っているのだ。

100レベルを超えた今、木端のような冒険者に後れを取るとは思えないが、正直身に余る財を身につけすぎた。

これから数多い奴隷と、おそらく売りに出しているアイテムに、倉庫に預けてある財産までチェックするのだ。

当分落ち着くまではこの高い安全性がウリの宿に引き籠り、外出は控えた方がいいだろう。

「かしこまりました。万全の守りと最高のサービスをお約束いたします。

なにかご要望がありましたらいつでも」

「奴隷が今から何人が来るから、この刻印がある奴は部屋に通せ」

正規の値段の二倍以上の金を支払い、これで色々と融通が効くだろう。

首にある刻印を見せ、さっさと部屋に入ってしまった。

レベルが30台である筈の新米が、一泊1万Gはする部屋に泊まったという情報は防ぎようがないが……引き籠れば無問題だ。

「へ、へへ………こんない部屋泊まったことないぜ」

オクラはきよろきよろと落ち着きなく目線を動かし、この街にしては煌びやかな家具を恐る恐る触っている。

元の世界で、超はつかないまでもそこそこいいホテルに泊まる機会もあった俺は特に感慨を抱くことはなかったが、ベッドとソファ―

の柔らかい生地はたまらないものがあつた。

「きちんと働くなら、これからももつといい目を見せてやるよ」

「ほんとお前は最高だぜ！」

「今から隷属の首輪の効果で奴隷を呼ぶ。

奴隷の一部命令権を与えておくから、その対応をしとけ。

……武器を取り上げ、奴隷の人数や資産の量、在り処、危害を加えないやらなんやらの命令くらいか。

やかましそうなのがいたら、適当に教育していいからな。

ああただし、顔に大きな傷はつけるなよ」

奴隷の命令権を条件付きで与える機能がある。

これは、国が奴隷を使って魔物領に侵攻する際円滑に軍勢を動かすために、研究の末できた成果だ。

国に仕える奴隷の命令権を最も預かるのは、この国で一番安全、というより安全でなくてはならない国王であり。

国王が早々前線に出るわけにはいかないのだ。

「おう、しつかりするさ任せとけ！ だからよお……」

「わかってるわかってる。」

それが終わったら、これでホテルの従業員にいい酒、肉、女を持つてこさせる。

……ああ、肉は今からでもだな。腹が減って仕方ない」

じゃらじゃらと金貨を机の上に置く。

これで持ち金はわずかになってしまったが、もしかすればユージの予備金が手に入るし、例えなくても余った装備を売ればいい話だ。

魔法武器は、最も頻繁に使われる銀は鋼鉄より脆く壊れやすいが、使い手が優れていれば普通の武器より遥かに破損しにくい。

それが予備分まで手に入ったのだ。

念のために大量に貯めこんでいる、良質な鋼鉄製の業物の武器もこの際売り払ってもいいかもしれない。

特殊覚醒称号。

覚醒称号：「特殊」” 人工生命体／ホムンクルス” 造られし人外。
物質を取り込み適合する

：「特殊」” 融合生命体／キメラ” 混ざりし者。他者を
取り込み融合する

体質「早熟」「吸収」「適合」 能力「都合の良い半身：意識を記
号の半身に移すことで、都合の悪い精神異常のみを軽減させること
ができる」

体質「融合」「変異」 能力「体内操作：自分の体内
の、血流や臓器、細胞の動きを任意で操作することができる」

オクラに対応を全て投げ出し、ベッドで横になりながらステータス画面を眺める。

腕が一本もげる怪我を負ったのだし、安静に仮眠でもとるべきだろう。

俺の下につく価値は十分すぎるほど見せてやったし、オクラがこの状況で裏切れることはメリットとデメリットを考えればまずありえない……が。

心配性なので念のため命令権を行使し、変な命令をしないように事細かに支持を出したので万が一もありえない。

本来なら50レベルになって初めて発現する覚醒称号だが、自分はLv30台で発現した。

「*****素質項目「早熟」クリア。前提条件「称号」基礎の塊」
「クリア。特異状況29による素質項目「吸収」クリア。特殊プロセス発生*****」

「*****体質項目「早熟」「適合」クリア。前提条件「称号」
「超回復」
「クリア。特異状況274による素質項目「融合」クリア。特殊プロセス発生*****」

おそらくだが、人工生命体/ホムンクルスの「早熟」がキーになったのだろう。

これが特殊プロセスにより出た俺オリジナルの特殊な称号なのか。

それとも特殊プロセスで、50レベルになれば発現した筈のものが普通より早く発現しただけなのか。

キメラは心当たりがある。

言うまでもなくマクロだ。

システムメッセージでもあったため間違いないだろう……俺は人間とマクロのキメラと判別されたのだろう。

ホムンクルスは……作られし人外。人造人間的な扱いでもされているのだろうか。

ゲームというフラスコの中で作られた、人間と記号マクロの人造人間……随分と洒落た世界じゃないか、ここは。

普通は一つしかない覚醒称号が二つある時点で充分特殊なのだが……。

特殊覚醒称号自体が非常に珍しいが、覚醒称号の複数持ちはもったい稀だ。

歴代でもほんの僅かしか存在しておらず、この国を建国した初代国王もその一人だったらしい。

初代国王の特殊覚醒称号の『創造主』に『英雄』、変わり種の俺も流石にここまで特殊なケースではないだろう。

……正直俺の場合マクロが無ければ、精々本をたくさん読むと成る賢者くらいにしかなれた気がしないのだが。

例えば、俺がユージ達とは違いかなり初期の頃 50レベル到達前から”補正持ち”を判別し、憎しみを抱いたのは

人工生命体／ホムンクルスの「早熟」か「適合」か……ホムンクルスの素質があつたからなのだろう。

魔法書の真贋を判別できたのは、「吸収」で魔法書からほんの少しだけ滲みだす魔力を取り込み、その魔力を感じ取れたから。

魔法書を読むスピードが速くなったのも、「吸収」か「適合」効果があつたのかもしれない。

覚醒称号は50レベルになる前でも特徴が出るらしいし、特殊覚醒称号の特徴がわかれば、現代人の奴隷の育成計画も立てやすいな。

そういえば100レベルになる時に特に何もなかったな。

いや、なにもないのが普通なのだが……”補正持ち”一行ならきつとなにかしらあるんじゃないかな。

そんな他愛もないことを考えながら、眠りの海に沈んでいった。

「素材1」「素材2」

左から順番に素材が多い順。一番左がベースの素材。

(上地)(下地)など

上級土属性、下級土属性(ロック、アース)

「刻印」

刻印魔法が使える。

スタイルLv103

覚醒称号：「特殊」” 人工生命体/ホムンクルス” 造られし人外。
物質を取り込み適合する

：「特殊」” 融合生命体/キメラ” 混ざりし者。他者を
取り込み融合する

体質「早熟」「吸収」「適合」 能力「都合の良い半身：意識を記
号の半身に移すことで、都合の悪い精神異常のみを軽減させること
ができる」

体質「融合」「変異」 能力「体内操作：自分の体内
の、血流や臓器、細胞の動きを任意で操作することができる」

ライトニングシミター「良銀」（上雷）
ヒートクリース「ミスリル銀」「刻印」（熱の刺突短剣）
銀のナイフ

右腕：アースマイニングシユ「良銀」（上地） 手甲装着型短刀
左腕：ゲイルラウンドシールド「良鋼鉄」「銀」（上風）

胸：プレートメイル「良鋼鉄」「銀」
手：ガントレット「良鋼鉄」「黒鉄」
足：グリーブ「良鋼鉄」「銀」
頭：チェインフード「良鋼鉄」

指：術者の指輪？「魔力++」「知力+」
：魔力の指輪？「魔力++」
手：魔力の腕輪？「魔力++」
：魔力の腕輪？「魔力++」
足：術者のアンクレット？「魔力++」「知力+」

：魔力のアンクレット？「魔力++」
首：魔道師の首飾り？「魔力++++」「知力++++」
耳：

2万1000 + 32万 = 341000G

オクラLv67

アースバトルアクス「銀」「黒鉄」（上地）

火・風のナイフ

右腕：

左腕：ロツクタワーシールド「良鋼鉄」（下地）

胴：ロツクフルプレートメイル「良鋼鉄」（下地）

手：同上

足：同上

頭：グレートヘルム「良鋼鉄」「黒鉄」

指：力の指輪？「力++」

：力の指輪？「力++」

手：力の腕輪？「力++」

：力の腕輪？「力++」

足：力のアンクレット？「力++」

：毒耐性のアンクレット？「毒耐性++」

首：怪力の首飾り「力++」

耳：

所持品

魔力の指輪「魔力＋」

火のガードリング 「守備力微＋」「器用微＋」「火耐性＋」

毒耐性のリング「毒耐性＋」

回復のリング 「時間回復微上昇」「軽傷回復×5」

敏捷の指輪「敏捷＋」

敏捷の指輪？「敏捷＋＋」×4

術者の指輪？「魔力＋＋」「知力＋」

力の指輪？「力＋＋」×5

魔力の指輪？「魔力＋＋」×3

敏捷の腕輪「敏捷＋」

力の腕輪「力＋」

敏捷の腕輪？「敏捷＋＋」×5

魔力の腕輪？×3

力の腕輪？×4

回復の腕輪？「時間回復微上昇」「重傷回復×5」

術者のアンクレット？「魔力＋＋」「知力＋」

敏捷のアンクレット*「敏捷＋」「防御微増」

隠密のアンクレット「敏捷＋」「足音隠蔽＋」

力のアンクレット「力＋」

力のアンクレット？「力＋＋」×4

敏捷のアンクレット？「敏捷＋＋」×3

魔力のアンクレット？「魔力＋＋」×3

毒耐性のアンクレット？「毒耐性＋＋」

魔道師の首飾り？「魔力＋＋＋」「知力＋＋＋」

怪力の首飾り「力＋＋」

ヒートクリース（熱の刺突短剣） 上位火・特殊 ミスリル銀

魔力伝導性、強度、重量全てに優れたミスリル銀製。上位火属性を熱に特化した力を持っており、ヒートレイ（熱光線）の魔刻印が施されている。魔力を込めるとヒートレイを無詠唱で放つことができる。

刃に通せば刀身は一瞬で白熱し、優れた魔力を持つ術者なら、刃から炎として拡散させることすら可能な汎用性に優れたかなり良質な品。

500万G超と見立てていたが、後の見立てで純粋なミスリル銀と宝玉を使用していることがわかり、1000万G（1〜2億）を超える。

火・風のナイフ

リッチの巨大な魔石

半壊した水属性の槍

アースマイニングゴーシュ 上位地属性 銀製 盾短剣 防御に優れた地属性で、防御に優れたマイニングゴーシュという短剣。拳を守るようにカップが付いており、槍を持ちながらも装着できる手甲のように改造されている。

ゲイルレイピア 上位風属性 銀製 素早さと汎用性に優れた風属性。刺突に特化した武器で、片手で扱うことができる。

ライトニングシミター 上位雷属性 銀製 素早さ、威力、汎用性に優れているが扱いが難しい雷属性。1m程の片刃の曲刀。断ち切る剣術に優れ、三日月刀とも呼ばれる。

こちらも扱いが難しいため、このシミターの持ち主のプレイヤースキルはかなり高かったようだ。

アイズバトルアクス 上位地属性 銀 + 黒鉄製 防御に優れ、ある程度重さを変えることができる地属性。180cm程はある巨大なアクス。

各種良質鋼鉄、黒鉄、銀の防具 壊れた部分を廃棄して合わせて4人分。

良質な鋼鉄でできた武器、鋼鉄製の防具約10人分。

31話 教育

31話
教育

「おいオクラお前食い過ぎだぞ。追加の肉注文してこいよ」

「そう固いこと言っなって！」

おいおっさん、受付行って肉と追加の酒をさっさと持ってくるように言ってこい」

オクラと取り合うかのように肉を貪り、麦酒を煽るように飲む。

さり気無く追加の酒まで頼むとは、相変わらず抜け目のない野郎だ。

幼少期……といっても10歳からだ、マクロを利用して極限にま

で身体を鍛え上げているため、俺は15歳にしてはなかなか体格が良い。

オクラのようにゴリラのような体格なわけではなくあくまで年齢相応だが、はち切れんばかりに凝縮された筋肉が詰まっている。

つまりその分食うということだが、既にいつも食う量の優に二倍は胃に収めている。

原因は十中八九、触手や欠損した腕を取り込んだことだろう。

思考を巡らせながら肉を咀嚼していると、今まさに俺が食おうと手を伸ばした、レア気味に焼き上げた肉汁が滴る骨付き肉が目の前からかつ攫われる。

「あつてめ、それ俺が食おうと……」 『手を止める』 「

もう我慢ならないと隷属の首輪の『命令』でオクラの手を止めることにした。

「おっ、大人気ないぞお前！

飯食うのに命令権使わなくなつて……」

「黙れ。『10分したら動いてよし』」

にやつきながら、わざとゆっくりオクラの手から骨付き肉を取り上げた。

まったく。

だいたい、御主人様と同じテーブルで同じ飯が食えるだけありがたいと思ってもらわないとな。

恨めしそうな目でこちらを見つめる、総勢16人の奴隷の視線を一顧だにせず……。

おっと、目の前の筋肉ダルマを忘れていた。

総勢17人の奴隷の視線を一顧だにせず食事を進めた。

満足するまで食って飲んで満足した俺は、そのままベッドで寝たいという欲望を抑え、恨めしそうな視線をこちらにむける16人に向き直る。

「さて、ひと通りの説明はこっちの筋肉ダルマに受けていると思う

が……。

俺が今日から、お前達の御主人様だ」

まっすぐ整列し、不安気な目線をお互いに送りあい、困惑した表情をしている16人。

しかし彼らの口から言葉が発せられることはなく、防音の魔法がかけられた部屋に響く音は俺の声とオクラの未だ続く食事の音だけだ。

「突然のことに大いに混乱していることだろう。」

しかし、疑問に答えるつもりも懇切丁寧に説明してやるつもりも無い。

お前達は俺の質問に馬鹿みたいに答えていればいい」

整列、直立した16人の傍らには、無造作に金品や装備品、アイテムが積みまれている。

それらは隷属の首輪の機能でこの場所に呼び出した際、彼らが任されていた市場でのアイテム販売の売上や在庫が主なものだ。

その他に、レベルの低い奴隷達でパーティを組ませ、ビッグ1の低い階層で金稼ぎをさせていた成果もあるが……。

所詮はレベル50以下の稼ぎだ、その額はたかが知れている。

「お前等の元主人のユージ達が、別に保管していた金品やアイテムが保存してある場所がわかる、もしくは心あたりがあるものは自動的に発言しろ。」

……ああ、黙る命令をしていたんだっとな。

『発言を許可する』」

奴隷たちが集まった当初は、どういうことだこれからどうなるんだ云々と喧しかつたため、オクラが喋った順に「教育」をして、黙るように命令していたのだ。

命令は意識的に首輪を発動させないと効果がないのだ。

「ちょっと、どういうことなのよ！ 急に御主人様だって……」

「よくわからんがユージはどうなったんだ！？ 死んだのか!？」

なら解放してくれよ!」

発言を許可されたため、数人が堰を切ったように叫び始める。

細かい命令……情報以外は発言禁止などはしていないので、このようにこちらの意に反する行動が取れるのだ。

奴隷の管理がずばらな者が奴隷に殺されることが稀にあるが、このような命令の穴をついた行動をとられた故のことだ。

まあ、普通は最重要の命令として、管理者　御主人様　に害をなすことの禁止など、テンプレートに沿った基本命令をするため滅多に起きうることはないのだが。

「『今発言した二人は黙れ。動くな。呼吸を止める』」

ユージは奴隷の教育がなっていなかったらしい。

俺はそこに手を抜くつもりはない。

首輪がなくても命令を聞くように仕込まねばなるまい。

じろりと残りの人間を睨みつけてやると、我に返ったように数人が発言をする。

「あの、予備の装備を預けていた倉庫ならわかります」

「使わない魔法武器は、高価だから分散して預けていました！

一箇所ですがわかります」

「お金は倉庫に預けるには不安があるので、殆ど自分たちで所持していたみたいで。」

でも、いざという時のお金を荷物に潜ませて預けていたみたいで
す」

ふむ、現金はあまり残っていなさそうだ。

オリシユを嵌める際に高価なアイテムを使っていたし、エルフのキ
ル工を買うのに500万G使っていたようだからそれは仕方ないか。

「あたし、そのお金を預けていたところ、心当たりがあるよ！

あたしが店番してる時に魔法書買って行ったでしょ、じゃない、
いきましたよね？」

あのお金を渡すとき、連れて行かれた倉庫があるんだ……です！」

こちらの顔をじっと見つめていた女が、はっとしたようにこちらに
呼びかけてくる。

見れば、今はフードをかぶっていないがその服装には見覚えがあっ
た。

「お前、俺が軽傷治癒の魔法書を買ったときの、口の悪い店番の女
か」

「あ、ああ。ホント、偶然だ……ですね。」

あの、知ってることは自発的に全部話すし、協力的な態度で動くからさっ。

話が一通り終わったら、何があつたか聞かせてくれると嬉しいな、いや嬉しいです！」

その表情には余裕が無いが、精一杯の流し目……のつもりか？ を送ってきている。

口調が荒いが頭はまわるようだし、さすがにこの世界で五年過ごしただけあつて、自分を危険にさらしてまで他人の心配をすることは無いようだ。

当たり前と思わないでもないが、元日本人は性根の根本がどす甘いので暴力に敏感なのだ。

奴隷達の様子を見るに、どうせユージ達もその感性を捨てきれず、奴隷に随分と甘い対応をしていたのだろう。

きつめな目付きだが、なかなか整った顔をしている。

身長は普通か少し高め、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでおり、褐色で柔らかかそうな肌、黒髪を肩甲骨（肩の下）まで伸ばし、その髪はなかなか手入れが行き届いているようで、さらさらとなびいている。

なるほど、これで奴隷ならセクハラを試みる男がいても不思議はあ

るまい。

だからフードをかぶって顔を隠していたのだろう。

「今『自発的に』話をした人間は一步前が出る。

お前達は、暫定的に奴隷を仕切るリーダーになってもらう。

機を読めず、阿呆みたいにぼけっとしていた残りの人間は『隣り合った者同士、渾身の力で腹を殴り合え』」

ぎよつとした顔をしながらも命令に逆らえず、ぎこちなく隣り合った物同士向き合い、交互に殴り合う10人。

「かつ」

「つつ……」

「がほっ、ぐっ……」

「ひっ、いや、やっえっ」

運悪くレベル40台に達している大男と当たった細い体躯の女は、可哀想に崩れるように倒れてしまった。

殴られるのもきついが、殴られた直後に渾身の力で相手を殴りつけ

るのもまた辛いことだろう。

大半が床に座り込み、腹を押さえて蹲っている。

「……ん、ああ忘れていた。呼吸を止めていた二人、『呼吸を許可する』」

「　　っ、ぜえっ、ぜはっ」

「ひゅ、こほっこほ、げほっ」

今まで息を止めていた2人は、動くなという命令が解かれていないため直立したまま、青い顔をしてヨダレを垂らしながら空気を大きく吸い込んだ。

その顔色の悪さは、呼吸が出来ないというものだけではなく、このまま忘れられて呼吸が出来ずに死んでしまうのではないかという不安からくるものもあっただろう。

まあ意識がなくなれば命令は遂行できず呼吸をしてしまうので、死ぬことはおそらく無い。

この国では奴隷でも殺すと罪にはなるが、戦乱や魔物など死ぬ原因は絶えず、隠そうと思えばいくらでも隠せるので特に問題はない。

奴隷殺害の罪を暴こうとするのは、立場のある人間を追い落としたいがため、もしくは大人数の奴隷が死んだ場合くらいだろう。

とはいっても、殺しても損をするだけなので殺すつもりなどこれっぽっちも無く、恐怖を与えるためにわざと忘れたふりをしていたのだが。

（これで、冷酷で無茶をする末恐ろしい御主人様と思ってくれらるうう。

自発的に言うことを聞いてくれるようになれば御の字だが……逆らうそぶりを見せなくなってもしばらくは、厳しい対応をしていくべきだな。

変態サディストじゃあるまいし、別にいじめて喜ぶような性癖は持っていないんだが、そう思われていたほうがなにかと都合がいい

「ぐっははは！　いつものこととはいえ、相変わらずスタイルはこええなあ」

天然か計算か、うまい具合にオクラものって来てくれている。

自分が手をあげなかったのも、わざと婉曲的に苦しい手段をとったのも、苦痛よりも恐怖を与えたかったからだ。

自分の身体が自由がきかず、相手の気まぐれやうっかりで死ぬことがあるかもしれない……。

なんて意味のない死。

どれほどの恐怖だろうか。

「クールだ。い、イカス……」

先程のフードの女がなにやらつぶやいている。

「なんだって？」

「あ、いやなんでもない！　じゃなくて、なんでもないです！」

頬を赤らめてぶんぶんと首を振る。

なんだ、マゾか変態かこいつ？

「怒らせたらまずいと思っているのだろうが、酷い言葉遣いだな」

「ごめ、すいません。育ちがよくないから……」

青い顔をしながら俯き、ぼそぼそと話している。

機嫌を損ねて罰を受けるかも知れないと怖がっているのだろう。

どつやらマゾではなく、ただのヤンキー女か。

「ふん、まあいい……」。

オクラ、こいつらにも飯を食わしてやれ。ケチるなよ。

その後は、この女以外を連れて心当たりの倉庫を片っ端からまわってアイテムの回収。

倉庫の認証は一時的にお前に委託しておく」

「あーよっこらせつ。腹ごなしには丁度いい運動か。

おらお前等、急いでカツ食らえ！好きなもん食っていいぞ！」

余程腹が減っていたのか、日頃こんな豪華な飯を食わされていなかったのか、群がるように食卓に飛びつく15人。

ムチの後にはアメ。

何をするかわからない得体のしれない怖さがあるが、気前はいい……
……こう思わせられれば成功だが、この様子なら大丈夫そうだな。

数人がヤンキー女を哀れみの籠った目で見て……お仕置きをされると思っっているのだろうか。

「おいヤンキー女、名前は」

「や、ヤンキー女……あ、いえ、リョーコだ……です」

「ほんとに敬語が使えないんだな……」。

お前はヤンキー女で十分だな。

とりあえず部屋に來い。酌をしろ」

そのまま相手の返事を待たず個室に入る。

恐る恐るといった様子で付いてくるが、その歩みは重い。

「ドアを閉める。……どうした、随分と浮かない表情だな」

「……いや、じゃない、いえ、あの」

「面倒くさい奴だな。普通の口調で喋ってみろ。許可する」

ベッドに座り、備え付けのテーブルに酒の瓶とツマミ替わりの骨付き肉を置きながらそう促すと、しばらく口ごもっていたが、意を決

したように顔を上げた。

「お、犯すのか」

あまりの予想通りの間に笑いが出そうになる。

「なんだ、犯して欲しいのか」

「っ、んなわけ」

「随分と初心つひだな。そんな口調の割に、お前処女か？」

「」

顔を真赤にしながら、何か叫ぼうと口をパクパクとしているが、やがて観念したように俯いた。

「なんだ、奴隷こだったのにユージ達は手を出さなかったのか？」

「……マキが、同郷の人間が汚されるのは見たくないと止めてくれていたんだ。」

それとさつきあんたが息を止めさせた女、あいつがユージ達の相手をして媚を売ってたから」

要は、寝て気に入られることで、飯やら仕事やらの面で可愛がってもらっていたということだろう。

「ほお、そつちの要領はいいみたいだな、あの女」

わざとにやつきながら言ってる。

「お、お前も一緒だろ！」

くそつ、男は皆そつなんだ……仕方ない、のか」

なにやら観念したように、身を投げ出すようにベッドに座り、仕方がない、しょうがないんだと呟いている。

ふわりと甘酸っぱい、若い少女特有の香りがする。

「……何を言ってるんだか。おいなにをしている。早くしろ」

「っ！ は、はじめてなのにアタシから……!!？」

大きく身じろぎをしながら身を引き、目を真ん丸にしながらこちらを伺ってくる。

身じろぎした拍子に上着がずれ、膝下までであったスカートもめくれ上がり際どいラインまであらわになる。

褐色で柔らかそうな肩と鎖骨、細めだが引き締まった太ももが大胆に晒される。

普段見えないような位置も綺麗な褐色であることから、日に焼けたというより色黒なのだろう。

はっとしたように勢い良く着衣を直し、防御でもするように自分の肩を抱いている。

なんだこいつ、めっちゃくちゃ面白いぞ。

「くっ……あっははは。

……俺は、酌をしるってるんだ」

「へっ?」

「なにをポカんと……」

さらに酌を促そうとすると、ゴンゴンとドアがノックされる。

「おいスタイル。来たぞー」

「ああ。入れてくれ」

ぼかんとして、状況がわからないのかきよるおきよると落ち着かないヤンキー女を、にやけながら観察する。

こいつは、なかなかどうして面白いじゃないか。

そこへ、すけすけのセクシーな服を着たグラマラスな女性が部屋へ入ってくる。

「あら？ その子は……複数人プレイってことかしら？」

「へ？ ……は？」

娼婦の言葉の意味が数秒遅れて頭に入ってきたのか、新たな来訪者に緊張した白い顔色が一気に赤く変わる。

こんなに血圧が変化して身体に害はないのだろうか、と心配に感じるほどだ。

「ふつくくく、なにをそんなにうぬぼれて考えていたのか知らんがな。

なんの技術もないマグロ……しかもガキを相手するより、サービ
ス豊富な成熟したいいい女を抱く方がいいに決まっているだろう。

まあ女がない状況か、どうしても頼むっていうなら抱いてやらんこともないぞ」

「あら酷い人。」

私を褒めてくれるのは嬉しいけど、あんまり年頃の女の子をいじめちゃだめよ？」

怪訝そうに伺っていた娼婦も状況がなんとなくつかめたのか、くすくすと笑いながら話に混ぜてくる。

フォローをしながらも余計辱めているのは、天然でなく恐らくわざと……俺にのっかってきてくれていたのだろう。

身体も好みだが、トークもなかなか上出来だ。

「ばっ、くそ、この……！」

顔を青赤白ところどころ変えながらこちらを睨みつけてきているが……。

「なんだ、出ていかないのか。」

見たいのか？ まあ俺は別に構わないが」

「なっ、なわけあるかあああ！」

ずぶわつと擬音が付くような勢いで立ち上がると、すごい勢いで部屋から出ていき……思い出したかのように戻ってきて扉を大きな音をたてながら閉めた。

「あらあら」

「結局一杯も酌をしないで出て行きやがった……」

「あら、私のお酌じゃご不満？」

呆れながら扉を見ていると、つんとした顔をしながらしなだれかかってくる。

先程の若い柑橘類の匂いとは違い、情欲を煽り立てるような甘い香り。

娼婦にありがちな濃い香水の香りはしない。

これだけいい香りがするなら、確かに香水など必要あるまい。

「不満なんかあるもんか……酒もいいが、先に一汗かいておこうか」

31話 教育（後書き）

30話の特殊覚醒称号の説明に

特殊覚醒称号自体が非常に珍しいが、覚醒称号の複数持ちはもつと稀だ。

歴代でもほんの僅かしか存在しておらず、この国を建国した初代国王もその一人だったらしい。

初代国王の特殊覚醒称号の『創造主』に『英雄』。

変わり種の俺も流石にここまで特殊なケースではないだろう。

を加筆しました。

32話 展望

32話

展望

心地よい人肌の温もりと、さらさらと流れるような金髪の感触を楽しみながらまどろみから覚醒する。

こちらが覚醒したことに気付いたのであるう、横で眠る娼婦も体を動かした。

訓練された高級娼婦は、客に不快な思いをさせることを極力避ける……間抜けな寝顔を見せて興醒めさせるなど、もつての外ということだ。

眼が飛び出るほどの高い金を出しただけあって、そのサービスは細部まで行き届いている。

「ん……起きたの？ おはよう」

くびれた腰を蠱惑的にひねりながらこちらへ向き直る。

その際肩を寄せ、豊満な乳房を強調することを忘れないのは流石と
いうしかあるまい。

「ああ……」

「凄く……良かった。壊れちゃうかと思ったもの。」

きっと私達凄く相性がいいと思うの。今日のこと忘れられなくな
りそう。

また、呼んで欲しいな」

台詞自体は陳腐だが、体の接触のタイミングや目線の動きなどの手
管は熟練のものだ。

昨晚の様子から、この女の言葉はまるっきり嘘というわけではある
まいが、鵜呑みにするのは馬鹿のすることである。

娯楽に溢れそのレベルが頭打ちになりつつある現実世界での、高級
風俗での経験。

また体の関係なしで客を呼ぶ、手練手管の持ち主のキャバクラ嬢に煮え湯を飲まされた経験もある自分には力不足だったようだ。

「最高だったよ。また呼ばせてもらおう」

「ふふ、うそついちゃだめだからね」

この女に寝物語に語った、真実を混ぜながら話した俺の武勇伝は、この街のお偉方の耳に入るなりする可能性が高い。

なにしろ一月もせぬ内に様々な成果　といってもほとんどは隠蔽しているが　を挙げているのだ。

状況が落ち着けば近日中に50階層まで行く予定であるし、探られることは避けようもない。

その際ほとんど情報が出てこないと先方を警戒させてしまう。

ならば、ある程度の真実を、肝心な部分以外を流しておいたほうが利口というものだ。

勿論これは全て杞憂で、たかが新人の50階層到達程度眼に留まらないということもありえるし、それならそれが一番いいのだが。

これは意図していなかったが、この世界の安全な精力剤や官能用品の信用できる入手先を知れたことも大きかった。

薬品系は安物を使うと副作用や不純物が怖い。

いい客になって、いずれ風俗業界の人間ともコネを作りたいものだ。

男も女も権力者といえど人間、快楽とは切っても切り離せないのだから。

つつ、と胸をなぞる娼婦の指の感触を楽しみながら、そんなことをつつらと考えていた。

「アランです。レベルは41で、前の主人には、30階層付近で堅実に稼ぐようお願い渡されていました。」

現実では大学病院で医者をして、外科医をしていました。

特技は、正直医者としての腕よりも、統率や組織を動かすことを得意としています。

腕にはそこそこ自信がありますが、正直自分の力量以上の役職についていましたので」

「ビル。レベル46。同じく主に迷宮での稼ぎを。」

前世……のほうがつくりくるが、土方の現場監督をしていた。

学歴もなんもなかったしな……多少怪我させていいなら、若い奴を引き締めるのは得意だ」

「……セリア、です。25レベルで……店番と10階層から20階層の低レベル組の交互組でした。」

現実では大学生でした。三年で就職も決まって、余った時間でゲームしてたんですけど、こんなことになるなんて……。

特技はピアノとヴァイオリンに、チェロ。

習字と、チェスや将棋などのボードゲーム、それと4ヶ国語話せましたけど、この世界では意味がないものばかりですね。すいませ

ん。

……そういえば、どうして言葉が通じているんでしょうね。不思議です」

「リョーコよ。18レベルで店番をしてた。

奴隷になった中では一番の新顔で、最近買われたばかりだったんだけど……。

現実？ 前世？ では高校行って……っってもほぼさぼり。

特技っていうとあれなんだけど、一応上京して読モしてて、結構売れてたんだよ！ ピン表紙もらったり？

ヤンキーヤンキー言うけどさ、元だから！ 今はギャル！ あーでもヤンキー入ってたかもだけど」

リョーコの荒い言葉遣いに、他の三人がぎょっとした顔で身を引いている。

外科医だったアランなど、こっちを巻き込むなとばかりに苦々しい顔で数歩引いている。

暫定的にリーダーとした四人を部屋に呼び、大まかに話を聞いている。

遠まわしに会話を進めようとしたが、アランが初めに

「私達は全員現代人です」

と胡散臭い笑顔で告げてきたため手間が省けたのだ。

少し驚いたが、まあ少し賢い人間ならわかることか。

正直こころ辺はどつでもいい。

「……話しやすい言葉では言ったが、そこまではっちゃんける奴があるか。」

それに、今はギャルじゃなくて奴隷だろう？

まあ、喋りながら訂正されても鬱陶しいから、最低限は言葉に気を使う程度でとりあえずはいい。

外で舐めた口聞いたら調教だからな」

「あ、あーやつぱだめか……ご、ゴメンナサイ。」

ってかセリア超エリート！？ お嬢！？」

「ひゃっ、あ、はい！」

えっと。まあ、普通の家庭じゃなかったかも……」

セリアは急に話を振られ、肩まで伸ばし少々ウェーブしている亜麻色の髪を揺らし、びくりと体を跳ねさせている。

ずば抜けて美人というわけではない。

むしろ顔立ちだけなら元モデル　自称だし読者モデルだが　の
売れっ子　こちらにも自称　であったリョーコの方が上ではある
だが、そのややアンバランスなパーツがある、一般人の域を出てい
るものの美貌という感じではないリアルな整い方。

この世界の女性の平均からすれば少し小柄な体躯に、こちらも”爆
”がつくほどではないが豊満な胸に、なにより魅力なのは熟れた桃
尻。

作法が整っており、歩くだけでも染みついた知性や育ちが感じられ、
その顔立ちと体型と合わさり何とも言えぬエロスが漂っている。

気配りのきく性格で、愛らしい振る舞いも無意識の計算で行うこと
ができる割に、その反面どこか抜けたところがあり、程良く隙があ
る。

結構な高望みではあるものの、もしかすれば背伸びをすれば手の届
くかもしれない……そう思わせるような高嶺のちよつと下にある花
のような感じか。

元の世界ではさぞモテたことだろう。

「お嬢様か。出身高校、大学は？」

「はい、小中高エスカレーター式で女子校だったんですけど」

「ぎゃあ！ エスカレーター式の奴初めて見た！ しかも女子校！」

その学校の名前は、余程の田舎者でなければ大抵の者が知っている超有名お嬢様学校。

大学に至っては日本で最も偏差値の高い学校の、最も偏差値の高い学部……完全無欠たるエリートだったということか。

さらにその中で次席だったという筋金入りだ。

就職先は、親が大手企業を経営しているのでそこに内定が出ており、有望な若手と見合い話まで持ち上がっていたという金持ちのエリート
トの鏡である。

これならば、特殊覚醒称号も期待できるな。

思った以上にいい人材がいるようだ。

その証拠にほら、話を聞いてほしいとばかりに熱心な視線を向けている男が。

「アラン、俺が言いたいことが分かるか？」

この質問の答えは無数にあるし、ある意味一つしかないとも言える。

「……私は御主人様の最も求めている人材として、自信があります」

俺がどういう人間を求めている、どういう役割を求めている、自分たちをどう動かしたいか。

理解できない人間は理解できている人間が動かせばいい。

理解できている人間がいなければ、手間ではあるが俺が動かすし、理解していなくても動く仕組みを作る。

しかし理解できている人間が代わりにそれをしてくれるならば、優遇措置を惜しむことはない。

だがまあ、しかし……。

「下手に有能すぎる部下は警戒されるぞ？」

「御主人様ならば御し得るだけの力量がお有りかと。」

それに隷属の首輪も御座います……そもそも、奴隷に堕ちたよう

な愚かな人間ですのぞ」

にこやかに笑み、あえて表情までは謙へりくだらず有能な雰囲気醸し出すことぞよりこちらの優越感を擽たたくつてくる。

不安にさせるような切れ者の表情ではなく、”有能な自分があなたの下につきたがつているんですよ”というそのアピールは、あからさまな世辞でも聞いていて悪い気はしない。

明らかに誰かの下に付き慣れた話のペースに、表情の動かし方。

No2志望です、と態度だけで示してくるとは、呆あはれてしまう。

「どうせ、死ぬよりはマシと奴隷になつたんだらう？」

お前が騙だまされて奴隷になるとは思えんよ」

「はは、手近な人間で最も強い者の下についていたら、外のもっと強い者に下された。

情けないことに、鞍替えする暇すらありませんでしたので……それだけの話ですよ」

（思ったよりいい人材がいたもんだ。

ユーヅは現代人ばかり集めた奴隷の、特殊覚醒称号しか見ていな

かったということかな。

贅沢にも、この逸材を遊ばせていたとはね。奴隷の運用に無駄が多過ぎる)

いい人材など本人には言ってもやらないが、恐らく漠然と感じ取ってはいるだろう。

土方のおっさんのビルに、元ヤン読モのリョーコは訳がわからないという表情で、しかし僅かに流れた不穏な空気を敏感に感じ取り不安げにこちらを窺っている。

セリアはある程度はわかっているようだが、ぼやぼやしていて今いち解り辛い。

敵を作りにくそうな感じだが、これが天然でなく意図的にやっているなら、アランを超えた鬼才だな。

「お前達四人は他の奴隷のリーダー格として、命令権の一部を渡しておく。

……立場はとりあえず同格としておく。

これからの活躍次第ではわからないがな。

同格といっても、名目上仕切り役がいるだろう？ アラン、お前

「がやれ」

「了解しました」

ほっとした様子で返事をする。

営業が成功したサラリーマンのようだとふと思った。

「ビルは奴隷へ教育。多少怪我させてもいいが、骨は折らないようにな。」

お前は適度に痛めつけて、奴隷が円滑に動くようにしろ」

「ああ、任せてくれ。頭使うのは苦手だからよお」

がりがりと頭を掻きながらいう。

年取ったらオクラみたいになりそう……いや、この小さいおっさんはそこまで金にがめつくさないか。

「リョーコとセリアは、まあ普通に仕切れればいい。ビルがいるからといって下の奴隷への指導に手を抜くなよ。」

俺の一声でお前らも他の奴隷と同じ扱いになることを忘れるな」

「はい、わかりました」

「プレッシャー……だけど、しっかりやるよ。」

「できるだけいいモン食いたいしね!」

俺が話すときはしゃきつとしているところから、セリアも真面目ではあるのだろう。

相変わらず何も考えてなさげなりヨコだが、それでいい。彼女に求めている役割はそれだからだ。

人間はより裕福になることよりも、身近な人間関係の中で上位に立つことに喜びを感じる者が多いという奇特な生物だと俺は考える。

それが日本人という民族では顕著である。

理不尽な理由で 今回の場合、最初にユージの資産の心当たりを言っただけの四人 奴隷内部に上下関係を作ってやれば、内部で勝手に妬み僻み合い、一致団結してサボタージュをしたり、口裏を合わせて事実を誤魔化し命令の手を抜く可能性が自ずと下がる。

……故にコントロールしやすい。

隷属の首輪があるためそこまでする必要はないかもしれないが、現代から来た人間は奴隷として不必要な知識が多すぎるのだ。

贅沢に、人権に、歴史……そしてなによりこの世界とは大きく異なつた常識。

奴隷は従うものだ、という常識が欠如しており、奴隷の改革などの妄想に囚われても困る。

あの手この手でサボられても厄介だし、恐怖だけで従えて、ここの番という肝心な時に一致団結して反抗されては眼もあてられない。

下手に知識をつけた現代人の奴隷は、他の奴隷より扱い辛いのだ。

信賞必罰の賞、つまりご褒美は、形ある物ばかりではなく娯楽の提供であったり、休憩時間であったりを重視するつもりだ。

食べ物や財貨でご褒美を与えた場合、可能性は低いがその褒美を奴隷内で平等に配り合い結束を高める場合もあり得る。

しかし、娯楽や風俗利用、休憩時間などは譲ることができない……つまり不満や反感を零にすることは不可能となる。

その状態まで持っていけば、一致団結しようにも、その旗頭、指揮を取るものは？

その人間がリーダーとして優遇され恩恵を受けていたら、皆はその人間に従うだろうか？

それ以外の人間が指揮を取ろうとして、リーダーとして優遇されることに慣れた人間がその人物に従うだろうか？

あくまで俺の命令であるのだが、元々同じ立場であった奴隷仲間から急に高圧的な態度を取られれば当然不満に思う。

信賞必罰の罰も奴隷のリーダーにさせ、直接命令し動かすのもリーダーにさせる。

この不満や憎悪は誰に向かう？

原因は勿論俺のだが、その行為を行った人間にも少なからずその悪意は向くだろう。

大元の原因である俺は、気まぐれに奴隷全員に平等に気前よくあくまで奴隷達の日常食べている物からすれば 豪華な食事やこ褒美を配る。

例え今の境遇は俺が原因だとしても、一時的にでも善の感情が生まれるだろう。

飴は俺が配り、鞭は他人に打たせる。

どちらも俺がしていることに変わりはないが、印象は随分変わる。

まともに敬語も使えず頭も悪い女に、リーダーとして命令を下されれば当然苛立つだろう。

その、都合良く憎しみを集めてくれるスケープゴートとしての役割をリョーコに期待しているのだ。

そして直接的な暴力で、原始的な恐怖で縛って動かす役割をビルに。

どこか憎めない魅力で、奴隷達の不満を和らげる役割をセリアに。

そして、それらの役割の人間を利用し奴隷を円滑に動かし、かつ先程のプランで俺への不満を逸らす役割をアランに。

正直、奴隷同士で一致団結して庇い合うのが防げれば良かったため、リョーコ以外の役割は期待していなかったのだが、思わぬ拾い物だった。

「そういえば、恐らくユージが聞いているかも知れんが。」

自分には人とは違う特技が……この世界でな、ある奴がいるだろう？

奴隷全員から『虚言禁止』の命令をした上で聞いて、まとめて俺のところに持って来い。

不明瞭なことでもいい。

それと、”目を引く異質な人間”を、判別できる者もだな」

俺の様に、早期から”補正持ち”の判別ができる人間がいるかもしれない。

「私はそのどちらも心当たりがないですね。」

ユージも同じ様なことを言っていましたね。”主人公”がわかるかとかいう不明瞭な聞き方でしたが。

了解しました、後ほど聞いておきます」

「わからんな、なんだそれ？」

「あたしもわかんないな」

「あの……たぶんですけど、わかります」

「ほんとかつ!？」

アラン、ビル、リョーコはわからないようだが、セリアがわかったようだ。

しかしおかしい、ユージは49レベル以下でわかるやつは知らないと言っていた。

誤魔化されていたということか？

「いつからだ？」

「ユージには聞かれなかったのか？」

「聞かれた時はわかりませんでした。

なんていうか、小説の主人公みたいな人間ですよね？

奴隷になって、22レベルになった頃だったと思うんですけど、

迷宮内で大きめの怪我をしたとき以来、なんとなくわかるようになりました。

「たまに眼を引く人がいるなと思ったら、凄いトラブルメーカーだったりしますね」

「他に変わったことは？」

「たぶん、ですけど。」

同じように戦っていた他の奴隷の人よりレベルが少し高くておかしいなと思ったことが……。

あと似た訓練しかしてないのに、熟練度も高かったような」

俺の勘が正しければ、恐らくこいつは”早熟”持ちだろう。

俺は誰ともつるまず一人で訓練やレベル上げをしていたことで、気付くことができなかったのか。

「アラン、奴隷たち全員レベルをある程度合わせてレベル上げをさせる。」

「下つ端奴隷が一番レベルが高い二人と、ここにいるリーダー組四人でパーティを組め。」

俺とオクラが手伝ってパワーレベリング（強引なレベル上げ）す

るぞ。

レベル差があると経験値がお前らに流れないからな……俺が敵を弱らせて追い込み、お前らが殲滅だ。

兎に角50レベルまでさっさと上げる。

残りの奴隷は適当にレベル上げをさせておけ。

……ああそれから、『俺が現代人という情報を、他人に伝えることを禁止する』。

無駄に吹聴することはないだろうし、見る人間から見ればすぐわかるが……一応な」

特殊覚醒称号を十人以上使えば軍で名を売るなり、冒険者として名を売るなり思うがまま……。

この争いばかりで快適とは程遠い文明世界でも、金をつぎ込めばまともな生活ができるだろう。

庶民の飲み食いする温い酒も、薄い味付けの飯も、固いベッドも、暑さも寒さも……現代で過ごした経験のある俺には足りないものが

多すぎる。

しかしこのファンタジーな世界、高い金さえ出せば現代のものよりうまい、涎の出るような魔物の肉。

魅惑的な味わいの、貴重な材料を使った酒。

魔物の素材を加工した信じられないほど快適なベッド。

魔法の刻印で動く温度調節のマジックアイテムも……金さえあれば、地位さえあれば！

不安要素も多々ある。

まず”補正持ち”。

”迷宮”という不可解現象。

なにかのきっかけで人間が滅ぶ可能性も零ではない、危険なこの大陸。

こういうことを言い出したらきりがない……ここに俺達が存在していることが不安要素の塊なんだから。

その日生きることだけに一所懸命な時期は終わり、生活にゆとりが出てきた。

ゲームの中に自分がいるということと、自分の意思をいじられて
いる可能性すらあるということをお忘れず、心に留めておかなばなる
まい。

危険に対抗するために力を蓄えなければならない。

理不尽な”補正持ち”に対抗、回避のために力を蓄えなければなら
ない。

未知に備えるために力を蓄えねばならない。

せっかく奴隷という素晴らしいシステムがあるのだ、大いに利用さ
せてもらおう。

33話 二月後

33話

二月後

「おおおおツ、『パワースラッシュ』！」

リョーコ攪乱、アラン壁、セリア遊撃！」

土方親方のビルが、柄から刀身合わせて己の身長程はありそうな大剣を低空で豪快に振り、ヘビーウルフを三体吹き飛ばす。

吹き飛んだヘビーウルフの残骸の間から、鋼鉄の装備品で武装したナイトゴブリンが四体が飛び出してくる。

ゴブリンだからと侮ってはいけない。

様々な武器のスキルを磨き武装したゴブリンは、下手な人間より余程上手く武器や道具を使いこなす。

ナイトゴブリンの展開に対し、意外なことに素早く的確な指示を飛ばしているのは、特殊覚醒称号の「指揮」で状況把握能力が底上げされたビルだ。

その後ろには残り数体のヘビーウルフと、それを統率するヘビーウルフ・コマンド（指揮）が控え、じわじわと包囲網を広げこちらの隙を伺っていた。

「くらえっ」

後衛から全体の流れを見ていたリョーゴが、”異様に”絶妙なタイミングで麻痺毒を撒き散らす炸薬をナイトゴブリンの手段のど真ん中で炸裂させ、一時的に無力化する。

その隙を見計らい、アランが槍で突出していた二体のナイトゴブリンの喉や心臓を、”特殊覚醒称号：解体接合”の力で正確に射抜き

……

「……………はっ、あああっ」二段突き『ッ』

残り二体をスキルで蹴散らす。

「『スナイプショット』」

それに合わせるように、今まで数を重視して矢を放ちまくっていたセリアが、アランの背中越しに必殺の一撃を放つ。

まだ弓を持って二月しか経っていないにも関わらず、その射手としての腕は既に一人前の兵士と比べても遜色なかった。

その余りの殲滅速度に硬直していたヘビーウルフ達は、慌てて行動しようと動き出すが、その指令を出すはずのヘビーウルフ・コマンドは既にこと切れている。

コマンドウルフの瞳には矢が突き立ち、刺さった深さから矢尻は明らかに脳に到達している。

その矢尻にもたっぷりと毒が塗られているのだが、一撃必殺となつたので毒は無駄になってしまったが……それは喜ぶべきことだろう。

統率された動きが、ウルフ族の最も厄介なところと言ってもよい。

有象無象になり果て、指揮権の委譲すら為されない状況では、本来の力を発揮できない。

今までヘビーウルフをけん制したり後衛の壁になっていた、名も知らぬ男奴隷二人が、残ったウルフを勇猛果敢に攻めたてている。

この優れた連携と大盤振る舞いされる消費アイテムの前には、魔物が殲滅されるのは時間の問題だった。

「連携も随分と良くなってきたな」

55階層、適正レベル65の場所でリーダーとなったアラン、ビル、リョーコ、セリア、そして名も知らぬ二人の男奴隷のレベル上げをしていた。

孤立した行き止まりの部屋の中で入念に畏を解除し。

俺が身軽な装備で魔物にちょっかいを出し、傷を与えながら引き連れ、彼ら六人にぶつける。

オクラはいざというとき手を貸すため、彼らの後ろに控えていた。

「あ、下剋上の称号手に入りました！」

「私もです」

奴隷二人がそう告げる。

下剋上が手に入るまで、リーダーを除く二人はローテーションで入れ替えているのだ。

リーダー四人をを含まない奴隷の平均レベルは30〜40、ここに出現する魔物のレベルはおおよそ階層通りの55±5レベル程だ。

自分の倍近い魔物との連戦を繰り返し称号をさっさと手に入れさせようという魂胆だ。

勿論普通はこんなレベル差で勝つのは至難の業だが、全員に良質な装備を渡し、前もって魔物を負傷させ、毒に薬に――特に毒を大量に消費して戦えているのだ。

「そうか、お前ら掃除人スイーパーの称号はもうとってるな？」

「はい、奴隷の中で掃除人が取れてないのは、もうここにいるリーダー四人だけなんで」

蔑みとも、侮蔑ともとれる負の感情を滲ませリーダー達を見やる二人。

連日この危険な階層で戦っているなんて……と同情されても困るので、ローテーションで入る二人には危険な囹役をやらせることが多

い。

ここにいるリーダー四人は、格差感情が確立するまでは特別扱いし、レベルでも差をつけることにしていたのだ。

しかしこの様子なら、そろそろ目標は達成したと見ていいかもしれないな。

掃除人と下剋上の称号は便利なため、奴隷全員が取るようにしている。

そのために、わざわざ低レベル階層のスーパーと話をつけて掃除作業に加えて貰っていたのだ。

掃除作業をする奴隷には魔法武器や、とっておきのヒートクリースを渡し、精神力がつきるまで撃たせて交代……としていればそれほど時間がかからず取得できる。

こんなに取得難易度が低いのは、人間サイドが大規模迷宮ビッグ1を包囲できているからであり、かつスーパー達と交渉ができるだけのスキルがあるからということ忘れてはいけない。

「良く頑張ったな。しかし称号が増えたなら、飯ももっと食べるようになるんだろう？」

そこら辺の配分はリーダーに一任しているが」

「……はい」

「ええ、前よりは」

背後から黒いオーラでも出ていそうな不機嫌っぷりだな。

かつての同郷に、しかも待遇は同じはずの奴隷に、自分たちが食う飯の配分まで決められるのだ、ストレスが貯まって仕方ないだろう。

レベルや持っている称号によって、飯の質や休憩時間、娯楽を差別化している……そしてその配分はリーダー達にあえて任せているのだ。

しかしリーダーが食う分は一定以上と俺が決めているので、周りからみれば奴隷リーダーが自分達だけうまい汁を吸っているように見えるのだろう。

有能な者は自然と待遇が良くなることから、人を率いるような者は恨まれ、結束は生まれ辛い。

そして自分は有能であると思っっている者は、納得できない理由でリーダーになっているものに反感を持つ。

「ほら、頑張った御褒美だ……これでうまいものでも食べ。」

「そうだ、お前ら溜まってるだろう。性処理用の奴隷を一人増やそうと思っていたんだが、お前らが選んで、ついでに今日一日は好きにしていいぞ。」

「ほ、ほんとですか！ やった！」

「ありがとうございます！」

銀貨（10000G＝1〜2万）を数枚ずつ渡し、さらに女奴隷の独占権までもらえるとあって、飛び上がらんばかりにはしゃいでいる。連日レベル上げをさせているため、飯の量自体は満足いくであろう量を食わせているが、その質は悪い。

思うがままに屋台で買い食いなど、今の待遇からすれば狂喜するに値することだ。

もし金が手に入っても、奴隷に抱かれたがる娼婦なぞいない。

性処理用の女奴隷は買っているが、自分の番まではなかなか廻って来ず、悶々とした日々を過ごしているのだ。

戦闘で昂った人間は性欲も昂る。

彼らの喜びようもわかるだろう。

俺には生まれ持った圧倒的カリスマなぞ存在しないし、後光が差すような魅力も、アイドルのような容姿もない。

しかし、工夫次第では忠実な下僕を作ることは不可能ではないのだ。

ユージの奴隷を手に入れてからかれこれ二月が経っている。

現在特殊覚醒称号の取得者は四人。

元々レベル40台だった者は優先してレベルを上げたのだ。

アラン、ビル、男奴隷に一人、女奴隷一人。

アラン

” 救命師／ライフセーヴァー ” 数多の半死人を救いあげた者 「
治癒」「再生」 命を繋ぐ手：生命力を消費し、生命力を移動する
ことが出来る。

” 解体接合／サージアン ” 器官や部位パーツを別け繋ぐ者 「解体」「
接合」 臓器解析：分解ばっした生命体の構造を把握できる。

ビル

” 建城師／アーキテクト ” 拠点制作者の頂点の技巧を持つ者の中
で、それを率いる者 「建造」「分解」「指揮」 構造物解析：造
られた構造物の構造を解析できる。

男奴隷

” 賢者／セイジ ” 莫大な量の知を得た者 「聡明」「速記」 識
者：魔力の籠もった書籍すら速読できる。

女奴隷

” 回春整復師／エステティシャン ” 体の流れを整え、若返りさえ
起こす者 「治癒」「施術」 再春：細胞を活性化させ、元気にす
ることができる。

話を聞いてみれば、男奴隷はプログラマー、女奴隷は現世でエステティシャンだったらしい。

プログラマーで特に変わった称号が手に入るわけではなく、女奴隷でエステティシャンが手に入る。

外科医であったアランは”救命士/ライフセーヴァ ” ”解体接合/サージアン”。

詳しく聞いてみれば、相当の数の臓器を移植していたらしい……。

相当な数というところが引っ掛かり問い詰めてみれば、所謂違法臓器移植で一儲けしていたらしいが。

土方の現場の監督をしていたビルは”建城師/アーキテクト”。

ちなみに無いと思って聞いてみたが、城を建てたことはないそうだ。

また、バンドをしていたユージは吟遊詩人であつたらしいし、その点を考慮して推測すると。

『この世界を基準して特殊覚醒称号がついているのではないか』

特殊覚醒称号はこの世界の人間でも所持している人間がいる。

つまり、この世界には無い技術、希少な技術や経験が大きなポイントになるのではないかという推測だ。

例えば”賢者/セイジ”であれば、割とこの世界でも所持者がいるという。

金持ちで本を読む機会が多い、教会で魔法書を会得する機会の多い人間が多いらしい……。

そもそもこの世界には、本自体が非常に少ないのだ。

それに比べて現世では本など溢れるほどあるため、比較的簡単になれるのだろう。

アランの”救命士/ライフセーヴァ”は純粹に、傷を癒す”治療師”とは違い、こちらでは『致命傷』である人間を何百人救ったからであるという。

解体接合は……言わずもがな。

ビルの”建城師/アーキテクト”は、こちらの技術では考えられない建物を建設していたからだろう。

女奴隷の”回春整復師／エステティシャン”も、エステの技術など、この戦闘、戦争、力至上主義の世界で磨かれるはずがあるまい。

もしかすれば、この世界のシステムは可能性に満ち溢れているのではないだろうか。

34話 早熟

34話

早熟

50階層に戻り、ゲートを利用し1階層に出る。

「おう、ステイルじゃねえか、お疲れ」

筋骨隆々なラグビー選手のような一階層担当のスイーパーが声をかけてきた。

「おう。聞いてみれば、奴隷12人の”掃除人”取得終わったみたいだな」

「ああ、あのヒートクリースだっけか？ すっげえなあありゃあ！

魔力なんぞそこまでなさそうな奴が使ってもあの威力だからな。

熱線だからずばずば焼き払っちゃうし……あれがあれば超効率だ
！」

筋肉から汗を迸らせながら熱く語る筋肉に、会話を切り上げて帰らなくなった。

気持ちはわからないでもない。

あの武器、1000万G（1〜2億円相当）……出すところに出せばもっとするらしいのだ。

戦闘要員は金を稼げるこの世界でも、ありえないがまったく大きな怪我をせず連日戦争やら迷宮やらに行っても、真っ当に稼げば諸経費を計算すれば10年がかりでも買えるかどうか。

それこそ一発逆転の博打でも打たなければ。

……まあその博打に溢れかえっていると言ってもいいのがこの世界なのだが。

スーパー達は、危険度に比べれば実入りが大きいのでとてもいい仕事をしていると思えるのだが、その反面、真っ当な稼ぎしかない

ので逆転なぞないのだ。

「お陰で助かってるよ。」

俺とオクラは最初に取りらせてもらったし、この四人の奴隷の取得で最後だ」

「こつちとしてはずっとやって欲しいところだがな。」

なにしろ、狩って稼いだ金の七割はくれるっていうんだ。

まあ仕方ねえか……それだけの武器があれば他にいくらでも稼ぎ方があるからな」

そう、超効率で狩りをして、その七割はスーパー達にくれてやっているのだ。

儲けはばら撒かねば疎まれるし、ばら撒けばその分、別の道で帰ってくるものと割り切っている。

「それじゃあ、明日からでも頼む……それじゃあな」

「おっと、ちょっと待ちな」

振り返れば、ずいど首をこちらに寄せてきており、汗臭い顔が眼前に迫っていた。

「あゝあつ」

「あ、いやすまん思わず……余りにオクラっぽくてつい。大丈夫か？」

筋肉に、条件反射で攻撃してしまう癖はなんとかしなければ……。オクラが物申したげな洪面でこちらを睨んでいるが、元々汚い顔をより歪ませていて目の毒だった。

「て、てめ……」

「すまん、本当に申し訳ない。今度一杯どころか、酔い潰れるまで奢ってやるから勘弁してくれ」

スリーパーのおっさんのあげた顔は赤く腫れており、どこかオクラを彷彿とさせた。

睨みつけてくるオクラ……想像しただけで手が出そうになったのをぐっと堪える。

「ちっ、オクラのせいで酷い目にあつたぜ！」

「おい待て、今まで我慢して黙ってたけどそりゃねえだろ……」

スーパーのおっさんの恨みの籠もった視線に、オクラは頂垂れていた。

それにしてもノリのいいおっさんである。

暴力がありふれた迷宮区では、あの暴力もぎりぎりギャグになるから助かった。

「本題だがな、最近鎖鎌のディツケルの野郎がきな臭い動きをしているらしい。

誰かを狙っているという話だが、十中八九お前さんも無関係じゃないだろう」

声を潜め顔を寄せてきた……先程より少しばかり距離がある気がするが。

鎖鎌のディツケルと言えば、レベル90台で冒険者にしては細身の腕はいいが性根が悪いあまり好かれないタイプの人間だ。

「ディツケルねえ……確かに急に金を手に入れたのは認めるけど、その分根回しもしているつもりなんだけど」

思わず文句が出てしまう。

それでも気を使って、なるべく反感を買わないようにしているのだが。

その甲斐もあってか、幾度かヒートクリースを狙われたが小規模の攻撃しかなかった。

「ああ、その点お前は非常に上手くやってる。

本当に15かよって思うことはあるが、それ以外なんの問題もねえ」

「……………」

「お前さんも、奴隷達も装備は万全。

正直狙っても割に合わねえってのが俺達共通の意見だが……………ディツケルの野郎随分と羽振りがいい。

正直あそこまではら撒いて、元が取れるのかってくらいな。

馬鹿が釣られて結構な人数集まってるみたいだ」

眉を顰めながら話を続けるスーパーのおっさん。

スーパーをしている時点で、基本的に安定思考の人間だ。

厄介事が起こりそうで嫌なのだろう。

「ありがとよ、酒を奢る時は浴びるほど飲ませるから覚悟しておけ
」
「よ」

「へっへ、楽しみにしてくぜ」

これは探りを入れる必要があるな。

帰り際、セリアがそっと寄ってきてやんわりと袖を引いてきた。

異例の才能を見せ、どの武器を持たせても習熟の早い彼女は最近の俺のお気に入りだ。

さっそく全ての武器を使わせて、全ての武器の熟練度をとりあえず1まで上げてしまっている。

俺が入手した直後はレベル25で、あれから二月、二倍のレベル差の敵を倒し続け現在レベル45。

圧倒的格上を下し続けたにしても余りに早い速度で強くなっている。

まったく同じ状況でレベル上げを続けてきたリョーコの入手直後のレベルが18で、現在39。

このレベルになってもレベル差が元々のものから1しか変化してないと言え、その異常さがわかってもらえるだろうか。

「あの一、御主人さま」

「なんだ、人前では話せないことか？」

「あんな話の後に言うのもどうかと思ったのですが……特殊覚醒称号が、取得できました」

思わず眼を見開く。

やはり「早熟」持ちか、これは詳しく聞かねばなるまい。

「詳しく……いや、宿に戻ってからでいい。俺の部屋に來い」

「はい！」

こちらの身に寄り添い、跳ねるようにはしゃぐセリア。

リョーコがやや剣呑な目付きでこちらを伺っている。

どちらも大分懐いてきているようだな。

（色々と対策を練った甲斐もあったというものだ）

かつての奴隷仲間に睨まれ疎まれる中、同じ待遇であるビルは手が早く暴力的で恐怖が先行する。

アランは俺の意思をくみ取り行動しているため、女二人に一定以上近寄ろうとしない。

その上で奴隷の扱いが悪いことで有名な労働施設に奴隷数名を連れて挨拶に行ったり。

変態的な欲望を奴隷にぶつけ、壊れてしまえば死体を子飼いの冒険者に迷宮で魔物に食わせる落ちぶれた貴族とコネクションを作ったり……。

つまるところ奴隷に、自分達はいい主人に出会ったと思わせているのだ。

リョーコはともかく、セリアは頭がいい。

俺が意図的に、好意を持たれるように誘導していることは薄々感じ取っているだろう。

男女の情、好意というものは、最も簡単に受けられる最も強い忠誠の一種なのだから。

571

それでも結局、誰に懐くのが一番得か　　言うまでもなく俺である。

女というのはここぞというとき現実主義者の生き物であり、本能で強者を感じ取る者だ。

そう考えれば、歴代に名を残す猛者のほとんどが精力的で、かつ何もせずとも女が寄ってきた……これは当然の帰結なのではないだろうか。

とはいっても、下手に誰か一人抱いて内輪で睨みあうことになっても困る。

風俗関係の人間とのコネクションの為にもいい顧客になっているが……そろそろ次の展開を考えてもいい頃合いかもしれない。

ああ、そうだ。

「オクラ、情報屋を呼んで鎖鎌のディッケルについて調べさせる。

……そろそろ情報屋との長期契約を、いや流石に規模と出資が釣り合わないか……」

「おう、じゃあ酒場に……」

嬉々として酒場に駆けだそうとする馬鹿の頭をはたき止める。

「待て、一人で出歩くな。」

今出払っている奴隷達は今まで通りの時間に戻した後、外出させるな。

どこまで厄介かわからんからな」

「ほつ……」

俺の自室で小さめなテーブルを間に挟み、詳しい話を聞いていたところだ。

『^{エリート}選抜者 才能に愛され、優れた環境でその才を遺憾なく伸ばした
「早熟」「習熟」「万能」 器用富豪：あらゆることを短期間で
高水準で身につけられる。』

これがセリアが身に付けた特殊覚醒称号（通称職業）だった。

「早熟」「習熟」は文字通り、技能を身につける才能があるということ。

「万能」について聞いてみれば、苦手分野がなくなる……物らしい。

この職業を身に付けたセリアなら、『基礎の塊』や『才能を覆す者』を身につけるのは容易いだろう。

「それで、特殊プロセスの発生時はどんな感じだった？」

思わず身を乗り出しながら、ずいと顔を近づけながら詰問する。

「は、はい、えっと確か……素質で「早熟」、前提条件で称号の武芸多芸、特異状況で連日の上位存在との戦闘、だったと思います」

この感じだと、前提条件や特異状況は一パターンだけではないのかもしれないな。

『連日の上位存在との戦闘』は心当たりがあった。

格上との戦闘であるため怪我をする者が絶えず、休日を含みながらのレベル上げだったのだが、最近は慣れ連携も上手く取れるようになって、連日のように戦闘をしていたのだ。

特異状況次第で職業の能力が強化されるのか、それともより早く職業を身につけられるのか……。

この世界の人間での特殊職業の前例が少ないため資料が足りない。

今はこれで良しとすべきだろう。

「それで、あの一」

気付けば思考の海に沈み、身を乗り出したままセリアのことをほったらかしにしていた。

顔の距離が近い。

セリアはその色白な頬をほんのりと赤らめながら俯き、魔法道具で良く冷えた水の入ったコップを落ちつかなさげに弄繰り回している。

迷宮から帰還後、風呂に入ることとも体を拭くこともなく自室に直行したため汗ばみ汚れているが、汗と同時にフェロモンを振り撒いているかのような魅力がそこにはあった。

鎧を下し、解放感故にはだけ気味な着衣から豊満な谷間が見え隠れする。

もじもじと落ち着きなく擦りあわされている太ももは程良い肉付きで、椅子に隠されて見えない丸みがあり魅力的な尻は、男の原始的な欲求を擽る。

その身から醸し出す、齡十五とは思えぬ色気に思わず唾を飲み込んだ。

これが天然物の怖さか。

娼婦の熟練された手管とはまた一風変わった初々しい様子は、男の芯の部分に背徳感という薪をくべ轟々と燃やしているかのようだった。

「すまん、新しい事実に興奮し過ぎた」

すつと席に座りなおし、少し温くなった水を捨て魔法道具である冷却の水差しから冷水を注ぎなおす。

劣情に燃えた体が水の通った内側から冷やされ、快感と共にやや残念な気持ちに陥った。

あのまま欲望に身を任せていれば。

「ひゃ、はいっ！ あ、えっと」

一瞬拍子抜けした表情から、一気に顔を赤面させ取り乱すセリアを尻目に。

「とりあえず汗を流すか。」

特殊覚醒称号について何かほかに思い当たること、また新たにわかったことがあったら報告しろ」

しかし経験上、勢いに任せた行動というのは後を引きやすい。

難儀なものだ……自分の性格にやや辟易としながら、風呂場へと向かった。

34話 早熟（後書き）

ちなみに出てくる女キャラは全てヒロイン候補です。
ギルドの妙齢の人もです。

本筋とは今のところ誰でも絡ませられる余地が残されているので、
感想で様子を伺いつつにしていきたいですね。

セリア登場多くね？ですって？

リアルエロスって書きやすくてつい……。

35話 孤児狩り

35話

「狙われているのは新人ばかり？」

「ああ、それも孤児が多いらしい。」

しかもだ、奴ら迷宮内でのみならずまだしも、街中でも幅あ利かせ
てるらしい。

狙われているっていつても、殺すわけでも強引に拉致するわ
けじゃあねえんだ。

いくら小競り合いが多い街っていても、警備自体はそんなに甘くねえ」

鎖鎌のディツケルの話を聞いて四日が経ち、情報屋から入ってくる情報を整理しているところだ。

俺は安全のために宿に引き籠り、レベルの低い者も出歩かせないようにしていたため、情報を収集していたのはオクラとレベル50以上の数名のみだ。

「つまり、別に俺だけが狙われているわけではない……と」

「そついうことだな」

オクラは今まで数組の情報屋をはしごして喉が渴いたのだろう、テーブルの上に置いてあった果実水をあおった。

「手口はこうだ。」

ディツケルの手下が、お前が来た時の世代の孤児に因縁をつけてぼこぼこにする。

そこに図ったかのようなタイミングで兵士が来て連行。

ディツケルやその取り巻きは結局釈放されて、ぼこられた孤児をその後見た者はいない……なんて話だ」

「兵士の格好だけ真似ているとかそういうことではないのか？」

「いや、見た奴は何人もいるが、正規の兵士だったらしい。ただ、軍所属ってわけじゃなくただの警備兵で、下っ端ばかりって話だ」

「……」

兵士を買収すること自体はそう難しいことではない。

ちよつとした騒動に目を瞑って貰うこと自体は、コネさえあればちよつと高い酒代程度もあれば十分だ。

しかし兵士に片棒を担がせるのは……並大抵のことでできることではない。

罪人を拘束、投獄しておく施設を利用すること自体は、規模の小さい警備兵の詰所なら簡単であろう。

しかしそういった施設の全ては国有であり、申請が必須な事項も多く……一兵士だけを買収すればいいという問題を逸脱している。

どの階級、地区まで買収されているかはわからないが、金だけで解決する問題ではない。

「ということとはだ、奴隷市の方でも動きがあるだろう?。」

「ああ、案の定お前の年代の孤児を買っている。

といつても、その特殊な称号を得られる奴はほとんど抑えちまってるんだろ?。」

「ああ、センタータウンからこっちに来た特殊覚醒称号を持つ可能性が最も高い人間は、奴隷達にリストアップさせているからな」

この特殊覚醒称号を持つ可能性が高い者というのは勿論、現代人のことだ。

「がっははは、それなら問題ねえな！」

続きだが、あいつらでかいクランに所属している奴らはしつかり避けて、中堅クラン程度の連中までを普通に襲ってやがる。

戦力を揃えたのはその為だろうな……。中堅クラスのクランが挑むにはしんどい戦力だ。

ディッケルやその取り巻き達はあまり動きまわらず、揉め事になった時や高レベル相手にしか出張らねえって話だ。

つつても孤児で高レベルなんてほとんどいねえがな」

昨日入ってきた、ディッケルとその取り巻き達の資料を捲る。

この場合の中規模クランとは、レベル100を超える人間がいない、もしくは極少数、人数も30人程までのクランのことだ。

「ドイツケルが90レベル台、80台が三人に、50〜70台が十人……主に動いているのはこの位か。」

「こんなヤバそうな山に、よくもまあこれだけ集まったな」

「明らかにばれたらやべえし、他のクランに喧嘩まで売ってるんだぜ？」

「余程金払いがいいんだろうな」

「俺達は奴らから見ればいいカモだろうな。」

オクラ以外見事に孤児ばかり……レベルも、俺の正確なレベルは漏れちゃいないだろうが、俺以外は中堅以下ってのはわかってることだ。

「極めつけは急に名を上げた俺。なにか特別な物でもないと不自然だからな。俺が特殊職業（覚醒称号）持ちだったのは確信してるだろっ」

「ああ、情報屋に会つてるときに嫌あな視線を感じたぜ。」

「宿の周りにも何人が嗅ぎまわっているのがいるみたいだし、狙われてるってのも、間違いじゃねえだろうな」

相槌を打ちつつ、干し肉に苛立ち気にかじりつくオクラ。

最近外出は必要最小限、出ても情報収集とストレスが貯まっているのだろう。

「しかし上手い手ではある。

これだけ戦力があれば、余程でかいクランじゃない限り、新人にちよっかい出されたくらいで争うには辛い。

ディツケルは悪い噂も多いからな、余計手が出しづらだろう」

元々ディツケルは気性が荒く、よく争いを起こしている。

一度冒険者間で干されて軍隊に行ったが、そこでも問題を起こして逃げるように抜けたという話だ。

馬鹿が力を持つと厄介な典型的な例だな。

「兵士の動きも怪しいとなっちゃあ、下手すりゃ巻き込まれて奴隷化、なんて洒落になってない。

……しかしだ、ディツケルとその取り巻き達が本格的に動き出したのが、俺たちが話を聞いた日の翌日……つまり既に三日経ってる。

いくらコネがあろうと、こんな好き勝手いつまでもできることじ

「やあない」

なんとも奇怪な話である。

そもそも大前提として、恐らく狙われているのは俺達現実からの来訪者ではば間違いないだろう。

俺は勿論、オクラも特殊覚醒称号持ちが異常にいるということを知っているからこそ今こうして自然に会話しているが……。

「正直採算が合わねえんだよな。」

「こんだけ金ばら撒いて好き勝手やらかして、得られるのはレベルも低い孤児ばかりだ。」

「ということだ」

「ああ、間違いなく気付いているんだろうな。」

どの程度知られているかはわからんが、少なくともこの年代の孤児に特殊覚醒称号持ちが多いってことには気付いてそつだ。

「……根回しは上手いことやってるが、実行の手口もずさんすぎる。実行犯と計画犯は別だな。」

「短期間で大量に拉致してさっさとケリをつけるつもりか」

もしこの仮定が正しいのなら、裏にでかいバツクがいるのは間違いないだろう。

そもそも複数の国がないこの大陸で、大々的な犯罪を犯した者が人間領にいる限り逃げ切れるはずがないのだ。

ということはだ、裏に犯罪を犯罪にしないしなない者……もしくは実行犯を捨てゴマに、上手く成果（孤児）を回収することができる人間がいるということ。

たったの三日ではあるが、連行されて戻ってきていない孤児は既に二十人を超えている。

これで国が動かないはずがない。

だがまあ、今まであまりお世話になることが無かったコネを頼ってみるいい機会かもしれない。

オクラから受け取った、実際孤児達が襲われた場所をマーキングした地図を見れば、地区に偏りがある。

さすがに迷宮地区全ての兵士を取り込んでいるわけではなさそうだし、とりあえずは四方に手を伸ばしてみよう。

「オクラ、北区の警備兵の中隊長ナタイカに連絡を取れ。」

それと目ぼしいコネのある兵士の名前を書きだしておくから、そ
うちにもあたれ。

街の情報よりもっと上の、でかいところの動きが知りたい」

「それはいいがよお……いつまでこうして引き籠ってるんだよ？」

「ああ、このまま放っておけばその内この騒ぎも終わるだろうが……
そろそろ動くぞ。」

放置するには少しまずそうな要素が多すぎる」

翌日の夕方、いつもよりギスギスとした空気が流れる街道を通行人は足早に通り過ぎていく。

ここ数日、毎日ディッケルに雇われたごろつきが孤児に手を出しているので、皆気が立っているのだろう。

オクラが、アラン、ビル、リョーコ、セリアを連れて歩いており、俺は気配を消し一般人に成り済まし、距離を置いてその後が続いている。

ちらちらとオクラ達を窺う視線が目立つ。

多少顔が広い者なら、大抵が鎖鎌のディッケルの動向に気付いているだろうし、最近引き籠っていた俺の奴隷達が一斉に外に出れば目立つのだろう。

視線の先をさりげなくチェックしながら人ごみにまぎれていると、オクラ達を窺っていた二人連れの男の片方が、足早にその場を立ち去るのが見えた。

（案外早かったな。それだけ協力者が多いつてことか）

その後姿を見送り、別のルートを使って今の男が行くであろう場所へ向かった。

そう、ディツケルの根城にしている場所は既にわかっているのだ。

この狭い街で、隠しきれることなど多くない。

プライバシーも糞もないこの世界では、コネと金さえあれば調べられないことは多くないのだ。

……だからこそ今回のディツケルの手口も短期勝負なのだろう。

力をつけるスピードが速すぎて、力量に会っただけの知り合いが少ない俺だが、スイーパーの面々と深い繋がりを持てたのはでかつた。

そこ経由で、『街で噂されている程度の』話をごまんと入ってくるのだ。

ディツケルがごろつきばかりに声をかけ、謳っている言葉も当然その中に入る。

『この時期入ってきた孤児を痛めつけて動けなくするだけで、人数分の金が入る。』

指定した地区での行為なら兵士に捕まってもすぐに釈放される。

痛めつけた人間が持っていた金品はくれてやる』

最近俺の滞在している宿を探る人間が多かったのは、孤児が多いということもあるが、俺やその奴隷が大金と高価な装備を身につけているからだろう。

…といっても、動かなければいずれこの動きは収束するであろうが…
…そのままではおけない理由があるのだ。

…（どこから、どの程度の精度で情報を得ているかはわからないが…

何も知らずに放置しておける問題ではない。

俺達現代人の特異性、調べても出てこない特殊覚醒称号が多すぎる。

立場の高い人間に気付かれればどうなることか、身を守る力も地位も足りない現状、不安要素をそのままにしておける筈が無い）

やがてディッケルの根城の前に着く。

街外れにある、レンガ造りのなかなかでかい建物だ。

窓の数は少なく、あっても木戸が下ろされていて中の様子は窺えない。

入り口の前には、強面な門番が二人立っており、裏口らしきところにも一人立っている。

（ただのゴロツキが、随分と金をかけているな。）

数分も経たない内に、武装を整えたディツケルとその取り巻き達が慌ただしく戸口から出ていく。

（俺自らが危険なことをするのは避けたかったところだが。）

潜入に最も向いていて、かつ単体戦闘力が高いのが俺だからな、仕方あるまい）

集団の中でレベルが最も高いであろう、ディツケルとその取り巻きの姿を確認し、しっかりとその体温を覚えた。

35話 孤児狩り（後書き）

本当は兵士とかちょっと偉い人とかとコンタクトとって、政治的な云々や、下っ端から探りを入れたりとかしようと思ってたんですよ。すごい回りくどい調査のシーンを、2話分くらいの分量書いたのですが、正直自分で読んで面白くないし、書いてても面白くないのでざっくりカットしました。

先は長いので、とりあえずさくさく進めたいです。

改訂はいつでもできますし、完結しないと意味無いですしね！

36話 潜入

36話

潜入

ドイツケル達の後ろ姿をしつかり見送って数分後、奴らのアジトから数建離れた建物の前で辺りの様子を窺う。

動き出したのが夕方であったため、既に日は沈みかかり、かがり火や魔灯（魔力を動力とした電灯のようなもの）が必要になってくる頃だ。

誰もいないのを確認し、目の前の建物を見つめる。

大量生産のレンガで造られた三階建てのこの建物、というよりこちら辺一体の建物には、窓の手すりなどの余計な物が少ない。

町の外れにあり治安もよくないため、泥棒に親切な無駄な装飾物は付けないのだ。

先端が曲がり尖ったL字の、攻撃性よりも隠密性、機動や武器の取り回しの邪魔にならない機能性に特化した鉤爪を装備し、一度しゃがみ反動をつけて跳躍。

壁を一度蹴り勢いを殺し、屋根部分に爪を食い込ませ、ゆっくりと屋根上を確認しながら登る。

今日身に付けている隠密用の装備は、いずれもコンパクトに変形、収納させることができる優れものばかりだ。

(値は張ったが買うだけの価値はあったな)

殆ど音も立てていない、高度な隠密。

「変異」「体内操作」で爪の伸縮や形状操作、ある程度の硬度の操作も可能であるし、その程度の操作なら造作もないため、この鉤爪を使わずとも勿論今の挙動は可能である。

だが、正直それ専用には造られた器具があるのにわざわざ自分の肉体を行使する必要はない。

勿論いざという時のために慣れておくことは必要だが、そんなことは実践を想定した練習しておけばいいことである。

準備する時間があるときに万全の準備をせず、使える物を使わない

なんて愚の骨頂だ。

不意を打たれたときに爪が変形していて武器を構えるのが遅くなりました、なんて可能性はほんの僅かでも潰すべきなのだ。

物騒な建物の場合、人間が移動できる場所に罠が仕掛けられている場合があるが、今回は特に何もなかったようだ。

生物単体の身体能力が高いこの世界では、元の世界の常識は通用しない。

屋根から屋根に、不意の罠や不慮の事故が起きないように慎重に進む。

（ん、ここだな。周囲に人影無し、暗さも……いい感じだな）

問題のディツケルのアジトは四階建てであり、情報屋に聞いた話だと地下室もあるそうだ。

前日にチェックしておいた、正面入口と裏口の門番から見えない位置、尚且つ日が沈めば周りの建物からも死角になる三階部分に飛び移る。

飛び移ると行っても、勿論余計な取っ掛かりなどなく、そこは壁……だが、細い鉄杭が出るように細工した靴に、鋭い鉤爪で壁にしが

みついた。

(元の世界のような形状なら侵入し放題なんだけどな)

取っ掛かりになるような手すりのような物が無いとはいえ、真平らな壁ということはない。

レンガとレンガの繋ぎ目もあれば、くぼんでいる部分もあるのだ。

そもそもこの世界では建造物など壊れる前提であり、戦略によっては街や村を囲に魔物ごと吹き飛ばしたりすることさえある。占領した土地に急ピッチで防壁や街を作るこの世界の建造技術は、防御力と建造スピードに特化されている。

じりじりと音を消しつつ窓の前まで移動する。

窓枠には木の板が乱雑に打ち付けられており、隙間にも布を詰め中の様子は窺えない。

布をほんの少しだけずらし、中の様子を蛇の眼、元の世界で言う所の『ピット器官』で探知する。

蛇の眼、と言っても眼球というわけではない。
夜行性の種が多い蛇は、闇の中でも獲物を終えるように熱で獲物を
探知することができるのだ。

異世界版サーモグラフィといったところか。

この器官は眼球付近に存在するが、あくまで眼球ではない。

サウスタウンは魔物領侵攻最前線であり、街の外で出会える敵
の種類も数も他の地域に比べとても多い。

これ幸いと、特殊職業の”融合生命体/キメラ”の能力を最大限に
活かすために、街の外で出来る限りの種類の魔物の狩り、捕獲にい
っていたのだ。

この”蛇の眼/ピット器官”も、バインドアナコンダ（縛りあげる
蛇）から得たものだ。

異能に近い能力を得ようとした際、色んな良い誤算や悪い誤算が
あった。

密林、ジャングル、とでも言い表せばいいのだろうか。

物言わぬ木々に紛れ、時たま生物のような動きを見せる木。不可思議な触手や、原色が目に痛い色やまだら模様の植物。見通しの悪い茂みに身を隠すように移動する、異様に刺々しい骨格を持つ蟲。

時折争うような音や、甲高い悲鳴のような鳴き声が響き、静寂になる瞬間など、こちら辺一帯が焼き払われた後以外想像がつかない。

ちなみにだが、当然魔物も魔物同士争う。

魔物を魔物たらしめているのは、その身から出る魔石の存在だ。人間の害になる生物がほとんどなので勘違いしているものも多いが、本来は魔石が抽出できる生物として魔物と呼ばれているのだ。

この魔石というものの、非常に謎が多いが……魔の力を取り込んだ者は魔物になるというのが通説である。

”魔が濃い地”が存在し、その周辺の魔物の力は群を抜いているのだから、とりあえずは納得せざるを得ないというのが正しいのだが。

「アラン、解体接合はどんな具合だ？」

眼前で、野菜をぶつ切りにするような速度でこの辺にいた数体の魔物の死骸をバラすアラン。

辺りの地面にはかなりの量の血液が広がっているが、アランは服に付着させていない。どころか、手首より上に赤く染まっている部分がなかった。

「驚きです。これは、すごい」

今日の前で自分がした行為に実感が湧かないのか、今だ自分の手を見つめている。

「ああ、驚くべき手際だった。

鱗や骨もなんなく切断していたが、切れ味も強化……と思ったが、その様子だと違うようだな」

「ええ、そんなチャチなものではありません。

どこの部位を切ればいいのか、構造上の欠陥に、器官の特性。まるで自然の流れのように、数式を読み解いているかのように意味が伝わってくる」

なにやら興奮しているようだが、元が外科医のアランだ、その凄さとやらは本職じゃないとわからないのだろう。

「ああ、お前の能力の凄さはわかった。できることと気付いたことを後でレポートにまとめて報告するように。」

それで、地球の生物と比べてどうだった？」

宥めるように促がされ、ご主人様をほっぽっていたことに今さら気付いたのだろう。

はっとしたように緩んでいた表情を引き締め、咳をして引き締めなおした。

「はい。重力や環境の違いからかはわかりませんが、根本的に違う個所が多々ありました……。。」

同じ種であるうことを推測される魔物は、元の世界の生物と共通点があります。

しかし、死骸から魔石なるものがでるのです、一緒に考えるのは危険でしょう」

「同一視するのはよくないが、手がかりになることもある、か。まったく違う進化をしたと考えるのがよさそうだな。」

ざっくり調べた感じ、似た種の生物は似たような特性がある傾向があるし」

「まあ、今考えても仕方のないことだが……。利用出来るものは利用している。」

「使えそうな素材はあったか？」

俺の身を強化する、他者の進化の成果を丸々横取りする。

まさに俺の生き様のような気がして、嬉しいような悲しいような、複雑な気分になった。

記号/マクロと一体化してからというもの、感情を隠すのに苦労することがなくなったため、かつての表情の消し方、感情の殺し方を忘れそうになってしまう。

身に付けたスキルを劣化させるなんてとんでもない、と考えるべきか。

進化の過程には取捨選択が必要だ、と考えるべきか。

自分で勝ち取った実感の湧かないこの特殊覚醒称号の存在を持て余してしまう。

「そうですね、とりあえずは鱗、骨、尻尾、羽毛の羽、薄皮の羽、鉤爪、くちばし、犬歯、毒牙、毒の生成器官に……。」

「そうだ、ピット器官というものをご存知ですか？」

(人間とかけ離れすぎた器官を常時取り込むのはとても負担がかかるが、俺の”半身”がとても役たってくれた)

そう、有用な器官を取り込めるとはいえ、本来人体には存在しない新たな器官を取り込むなど本来有り得ない行為だ。

数代かけて進化する生物の常識を根本から覆し、たった一代で進化するなど、発狂必至である。

悪い誤算は、一時的にはなく恒久的に器官を取り込もうとした場合、”融合生命体/キメラ”の能力ではその手間、苦痛、かかる期間が予想以上になるということだった。

しかしここで良い誤算もあった。

(”マクロ/記号”の半身がいてくれなければどうにかなるところだったな。

身体に順応する間切り替えれば、精神的に生物を超越……超える

というより、ずれるか。痛みや違和感を感じないと言ったほうがいいのか。

”人工生命体／ホムンクルス”の能力の、「適合」のお陰で取り込む時間も短縮できているし、最高の組み合わせだな

”人工生命体／ホムンクルス”が予想以上にプラスに働いたのだ。これがなければ俺の計画は大幅にずれ込むことになっていただろう。

そしてもう一つのいい意味での誤算は、アランの”解体接合／サージアン”だ。

一度解体した生命体の構造を把握できるという能力があつたのだが、従来の医者としての能力や幅広く深い知識と合わさり、その応用力は底が知れなかった。

正直、バインドアナコンダのピット器官など普通に解体しても気づくはずもない。

気付かなければ取り込むこともできない。

例えば気づいても、その器官についての知識がなければ上手く運用することもできないし、どの部位がその器官かもわからない。

時間をかければできたことかもしれないが、数多くの可能性を潰していた可能性も同時にあつた。

アランと俺の相性はとても良い。

俺はもっと強くなれる。

もつと力を手に入れることができる。

上に昇る感覚。見下したその下に蠢く有象無象。

そんな人間染みた汚らわしい感情こそ、この世界で生き抜く上で最も優れた原動力であるということは、生まれ持つスペック（機能）が劣る人間が他種族を圧倒している事実を見れば明らかである。

聖人君子は勝ち取らない。

統治者（保つ者）には成りえても

支配者（勝ち取る者）には成り得ないのだ。

保つにはまず勝ち取る者が必要であり、少なくともこの大陸は今、勝ち取る者を求めている。

（俺は勝ち取り、支配する。

そのための一歩の、踏み台になってもらうぞ）

塞がれた窓、その補強された必要最小限の部分を熱したヒートクリ
ースで焼き切り、残りは専用の工具で手際よく解体する。

「こういう現場での実働をしなくてもいい身分に、さっさとなりた
いものだ」

アジト内に無事降り立ち、当分先になるであろう願望を一人呟いた。

36話 潜入（後書き）

あれ？もうちょっと進む予定だったのに潜入して終わってしまった。

改行とか少し変えてみたんですけど、どうでしょう？

あと地の文多いですよね。

そこらへん違和感とか読みにくいところとかあったら忌憚のない意見をお聞かせください。

重要なお知らせ 作品練り直しまで凍結します

初期の頃から読んでいる方や、最近だと結構な人が気付いていると思いますが、この暗黒大陸はとある作品に多大に影響を受けて書き出すことになりました。

補正持ちのことですね！

ちょっと騒ぎになった頃、その作者様から「これは自分の書いている物とは別物だ」（意識）と感想を頂いたのですが。

勿論本質的にも違う、オリジナルな物として書いていたのですが

……今読み返すと展開の相似が過ぎる……と愕然としまして。

やっぱり頭の中でごっちゃになってしまっただけでしょうね。

私が小説を書くきっかけであり、こんな小説が書きたいという思いが強かったため、どうか四苦八苦して書いていたのですが、やはり色濃く影響を受けている部分が多かったので自分で納得できませんでした。

私もアルファポリスに登録しておりまして、なるう以外でのランキングが見たかった（正直に言いますと、優越感に浸りたかったわけです！作者TRUEEですね！）というのと、もしかしたら奇跡が起きて書籍化印税あぶく銭wwとか頭が花畑だった面もありました。

いやまあ今はばたばたしてるので、ぶっちゃけとりあえず貯められるポイントは貯めるところというせこい考えだったんですけどね。軽率だったなーと思います。

大分脱線してしまいましたが、その作者様がその作品を加筆修正をして投稿されていまして、私としましては是非書籍化して貰いたいわけです。

紙媒体！挿絵！表紙！楽しみ！買うわ！

そんな時、まかり間違つて本作が原因で迷惑をかける可能性が0ではないのではないか、と思いました。

クオリティが天元突破に違いすぎるので大丈夫だと思つのですが、どうしたつて気持ちがいいものではないと思いますし、私もどうしても気にしてしまいますので、この際すっぱりと！

本作を一時凍結します！

読んでくださっている方には申し訳ありません。本当にごめんなさい。
いやほんとに申し訳ない……。。

読んで下さった方、感想を書いて下さった方、ポイントを入れて下さった方、バナーをクリックしてくださった方、友人に紹介して下さった方。

本当にありがとうございました。ごめんなさい。

でもまあ、見て見ぬふりはできないと思ひまして。通す筋はしつかり通さないですね。

凍結が解けるのは、今まで進んだストーリーを矛盾なく訂正することができたらしめます。

補正持ちをただの幸運にしてただそれに嫉妬するだとか、そこら辺バツサリ切ってマクロ+カメラ/ホームンクルスでただの異世界物にするだとか、とりあえず最後までプロットがたったら解凍しようと思ひます。

どちらにしても、ストーリー大分変わっちゃう大手術になりそうですな。

一応今のところ有力なのは、補正持ちの主人公的な要素全排除で縁奇運に時の加護（確率変動）のみです。

それを感じするために呼ばれたっていうのは、ちょっと変えようがなさそうなので再利用して、それを利用して成り上がり……あれ意外と書けそうな気がしてきた。

……作者の残念な頭では時間がかかる可能性があるんで、気長にお待ちを！

没になった裏設定（もしかしたら、改訂版のネタばれになるかも）

ネタばれをしてしまうと、本作の『補正持ち』とは

この暗黒大陸の伝説となって信仰の対象になっている初代の王様が、本来『元』となった特殊覚醒称号がの持ち主だったんです。

その能力が「英雄」。能力が「英雄を英雄たらしめるもの」で、体質なんかは『時の加護（確率の変動）』『事件の渦中』やら『奇縁』やらがあつたわけです。伝説ということで記録はおぼろげという設定で。

ちなみに『時の加護』というのは「時が英雄を生むのか、英雄が時を作るのか」という言葉からとってます。

通常状態でナチュラルに試練を引きよせて、その生きるか死ぬかのギリギリの試練を毎回幸運（確率変動）で命からがら乗り越えて強くなる。

英雄を英雄たらしめるのは乗り越えるべき障害である、みたいなものを考えていたわけですよ。敵がいないと英雄はいりませんし。

初代王様は強くなって、カリスマもあつて人間を率いて暗黒大陸で戦うんですけど、物量には限りがあるし、なにより自分以外の人間が死んでしまう。このままではこの大陸の人類が滅びてしまう。

そこで彼は、二つ目の特殊覚醒称号で想い（生命力）を犠牲に奇跡を起こし、自らの力を数多の種にして大陸の子供達にばら撒いて死にました。戦争は数だよ兄貴！

自分の死骸が残っている限り、その種の持ち主が死んでも種が循環

すると祝福、という名の厄介事イベントを引き寄せる呪いを残して。その死骸を完璧に保存するため+丁度いいので偶像崇拜で宗教にしちゃったわけです。

この種の宿った人間こそ、今生きる『補正持ち』なわけですね。

性格がアレなのは、初代の想いの籠もった種ですから、引つ張られます。

劣化版初代量産、みたいな。死んでも他に宿るので絶対数は減りませんが、最初から成長しなおしなので時間がかかります。

宿り主の成長と共に『英雄の種』も成長します。

一方ステイル達はなんなのかというと、話すと凄く長くなるのでしよってしまおうと

補正持ちを成長させるための外部要因ですね。

人類の支配地が現在の形である程度長い期間足止めを食い、人類最高レベルの人間が老いで戦力下落、これいつ死ぬかわからんくね？死んだらやばくね？

王家と大猛家（大貴族みたいなもの）のみに伝わる、史実に残る英雄の種を育てねば！しかし私達には判別できない。育て方もわからない。

急に成り上がったものを優先的に前線に送り成長を早めようとするが、ぶっちゃけ成り上がるの早い人なんていくらでもいるので無駄死にさせることも多いわけです。

上手く補正持ちにあたって、下手に前線に送ると想定外の事件が起きて大事な軍隊がぼろぼろに。

何気に補正持ちも許容以上の場合や、力を出し切れない場合死んじ

やいますし。

仲間庇うと確率のソースが分散しますし。

元の英雄パワーを種として分割してるんですけど、補正の量も人によってまちまちなんですよね。

適正とかもあるのです。

まあこんな感じだったわけですよ。

大雑把過ぎてわかりにくかったかもしれませんが、とりあえずなんも考えてなかったわけじゃないよ！とだけ。

設定の一部流用もありえるので、これ以上はとりあえず伏せておきますね。

重要なお知らせ 作品練り直しまで凍結します（後書き）

暖かい感想で改訂の気力がごりごり湧いてきました。

みなさんありがとうございます！頑張るぞ！

とりあえず数日ごたごたしてるからその後頑張るぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9597t/>

暗黒大陸-成り上がり系VRMMOトリップ物

2011年8月10日06時18分発行